千葉県八千代市

川崎山遺跡

―― 埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

平成11年3月

川崎製鐵株式会社
八千代市川崎山遺跡調査会

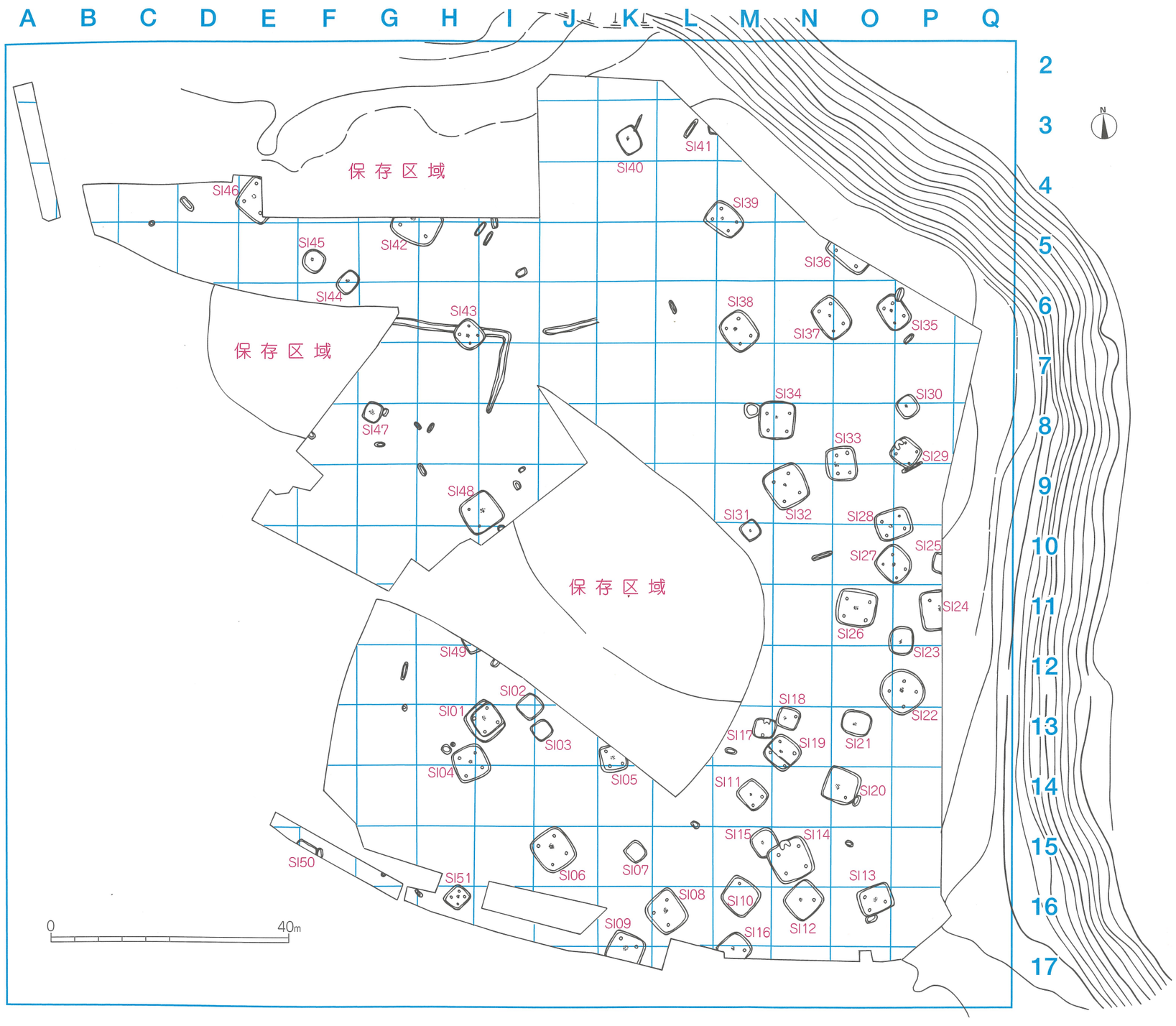


Fig.8　グリッド配置図および遺構分布図

３G，Ｐ４G，Ｐ５G，Ｐ６Gのセクション実測。

10／20　Ⅱ期遺構調査の継続。SI48・50住居跡精査、拡張調査を行なう。旧石器時代確認グリット調査の継続。Ｐ１G拡張区調査の継続。旧石器文化確認グリットＰ７Gのセクション実測

10／21　Ⅱ期遺構調査の継続。SI48・50住居跡精査、拡張調査を行なう。旧石器時代確認グリット調査の継続。Ｐ１G拡張区調査の継続。旧石器文化確認グリットＰ２Gのセクション実測。

10／22　図面整理作業。

10／24　Ⅱ期遺構調査の継続。SI48住居跡出土遺物分布実測。SI51住居跡セクション実測。SK28・29・30土坑セクション実測。旧石器時代確認グリット調査の継続。Ｐ１G拡張区調査の継続。全体遺構配置図の作成。

10／25　Ⅱ期遺構調査の継続。SI48・51住居跡写真撮影。SK31・32土坑セクション実測。SK28・29・30土坑平面実測、写真撮影。旧石器時代確認グリット調査の継続。Ｐ１G拡張区調査の継続。全体遺構配置図の作成。

10／26　Ⅱ期遺構調査の継続。SI48・51住居跡平面実測。SK31・32土坑平面実測、写真撮影。旧石器時代確認グリット調査の継続。Ｐ１G拡張区調査の継続。

10／27　Ⅱ期遺構調査の継続。SI48・51住居跡貼床部除去、セクション実測、貼床除去平面実測。旧石器時代確認グリット調査の継続。Ｐ１G拡張区セクション実測。

10／28　Ⅱ期遺構調査の継続。SI51住居跡貼床部除去、セクション実測、貼床除去平面実測。旧石器時代確認グリット調査の継続。Ｐ１G拡張区写真撮影。

本日で調査を終了し、器材の撤収を行なう。

Fig. 9　発　掘　風　景

第16号土坑（SK16）（Fig.21）

位置　本跡は、調査区東端部10－N区に位置する。

形態　平面形は長楕円形Bタイプである。上面長軸330cm、短軸51cm、下面長軸310cm、短軸33cm、深さ156cmを測る。長軸方向はN－77°－Eを指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は６層に分けることができる。

１層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
２層	7.5YR3/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
３層	7.5YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
４層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
５層	7.5YR2/3	極暗褐色土	多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
６層	7.5YR5/8	明褐色土	多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第17号土坑（SK17）（Fig.22）

位置　本跡は、調査区東端部9－P区に位置する。

形態　平面形は長楕円形Bタイプである。上面長軸358cm、短軸（196cm）、下面長軸305cm、短軸17cm、深さ179cmを測る。長軸方向はN－73°－Eを指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、長軸東西方向が大きくオーバーハングする。なお、第29号住居跡（SI29）によって切られている。

覆土は古墳時代の住居跡によって切られていたため、観察が不可能であった。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第24号土坑（SK24）（Fig.22）

位置　本跡は、調査区南西端部12－G区に位置する。

形態　平面形は長楕円形Bタイプである。上面長軸284cm、短軸62cm、下面長軸278cm、短軸30cm、深さ66cmを測る。長軸方向はN－16°－Eを指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は4層に分けることができる。

１層	7.5YR3/1	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
２層	7.5YR2/3	極暗褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
３層	7.5YR3/3	暗褐色土	微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
４層	7.5YR2/2	褐色土	多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第25号土坑（SK25）（Fig.23）

位置　本跡は、調査区南西部13－H区に位置する。

形態　平面形は隅丸長方形A－１タイプである。上面長軸183cm、短軸70cm、下面長軸140cm、短軸29cm、深さ308cmを測る。長軸方向はN－72°－Wを指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。なお、北側に新期の土坑が重複している。SK25－bは楕円形を呈し、120×140cm、深さ50cmを測る。

覆土は深度が深いため、底面まで調査ができず、上面から約2.1mまで分層し８層に分けた。したがって下層については観察していない。なお、１～４層までは新期土坑SK25－bであり、５層以下がSK25－a土

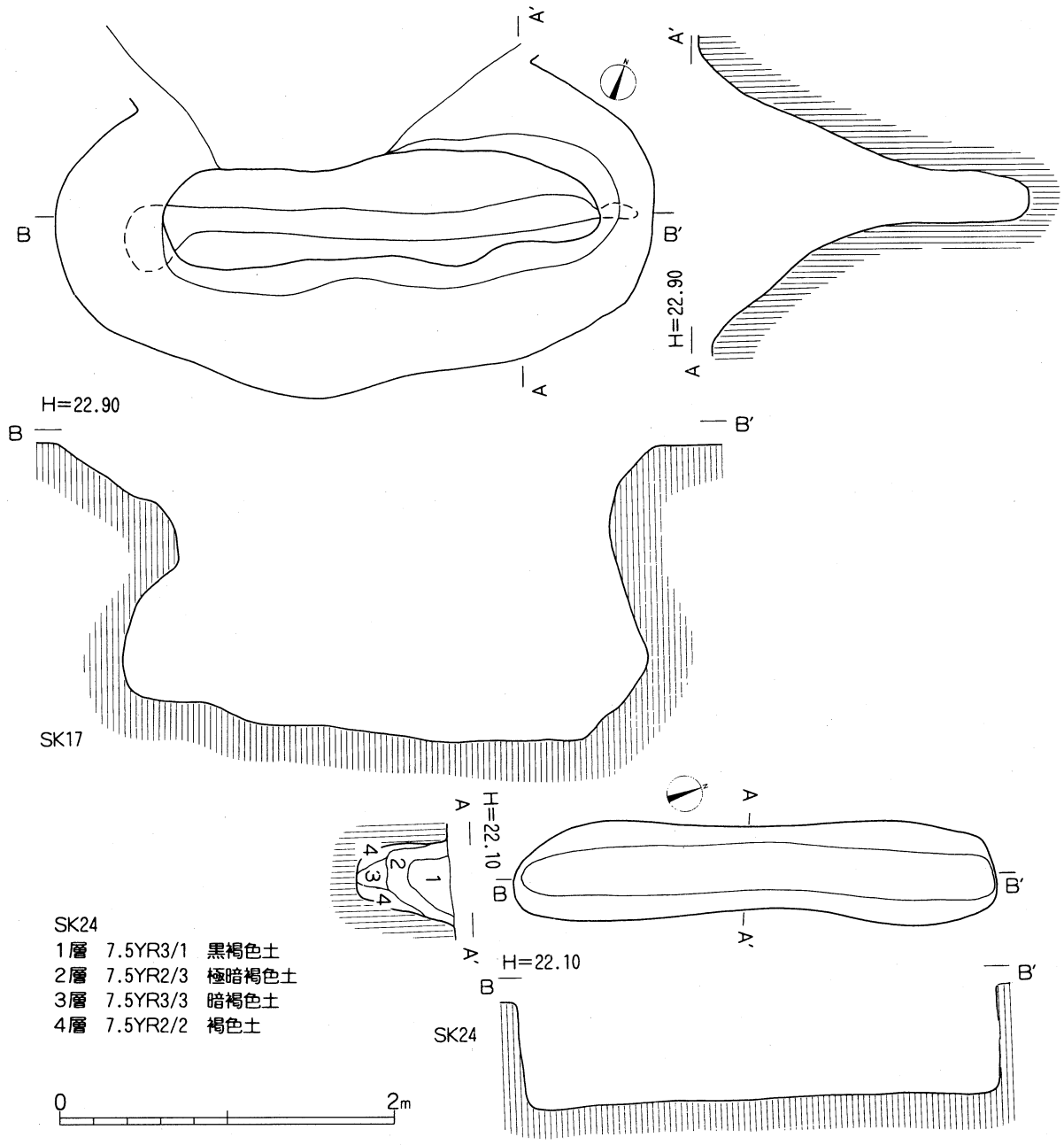


Fig.22　縄紋土坑(5)（SK17,24）

坑である。

SK25- b（新期）

1層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
2層	7.5YR3/3	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
3層	7.5YR2/3	極暗褐色土	微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
4層	7.5YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

SK25- a（古期）

5層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

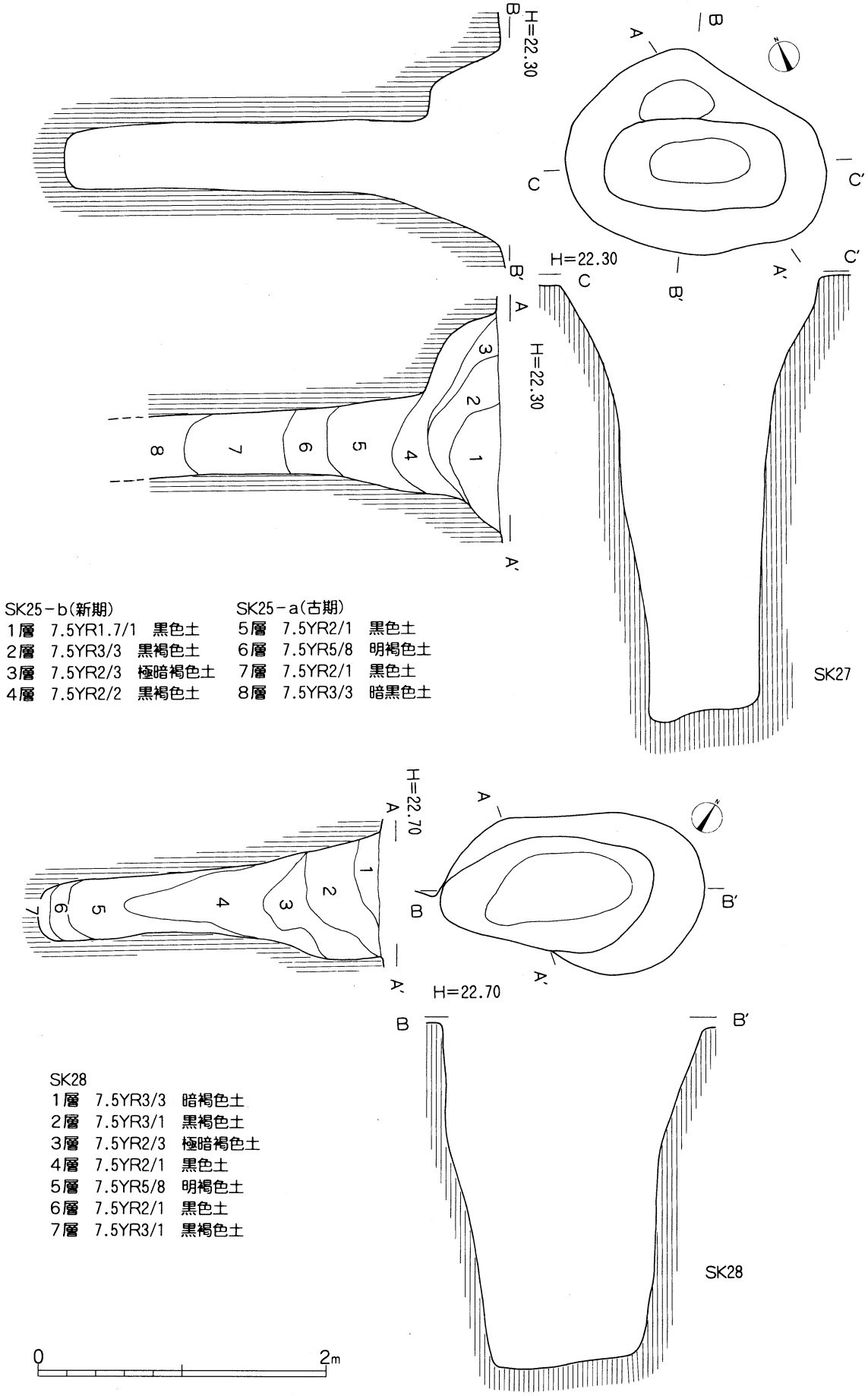


Fig.23　縄紋土坑(6)（SK25,28）

6層　7.5YR5/8　明褐色土　多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。
7層　7.5YR2/1　黒色土　微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
8層　7.5YR3/3　暗黒色土　微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
覆土中より遺物の出土はなかった。

第28号土坑（SK28）（Fig.23）

位置　本跡は、調査区北東部6-P区に位置する。

形態　平面形は隅丸長方形A-1タイプである。上面長軸184cm、短軸110cm、下面長軸105cm、短軸50cm、深さ240cmを測る。長軸方向はN-34°-Wを指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。
覆土は7層に分けることができる。

1層　7.5YR3/3　暗褐色土　やや多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
2層　7.5YR3/1　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
3層　7.5YR2/3　極暗褐色土　多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
4層　7.5YR2/1　黒色土　少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
5層　7.5YR5/8　明褐色土　多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。
6層　7.5YR2/1　黒色土　少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
7層　7.5YR3/1　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
覆土中より遺物の出土はなかった。

第2節　遺　　物

縄紋時代の遺物としては、土器と石器がある。土器は早期前半、早期後半、前期後半、中期後半、後期後半に属するもので、総数でわずかに34点である。その内訳は早期前半7点、早期後半1点、前期後半23点、中期後半4点、後期後半1点である。これらはいずれも他時期の竪穴住居跡内の覆土中か表採資料であり、先の縄紋土坑には伴わない。また石器として石鏃と石皿がある。やはり石鏃は表採資料であり、石皿は古墳時代の住居跡覆土中から出土したものである。

1．土器（Fig.24・25）

早期前半の土器（Fig.24- No 1～7）

1～7は撚糸紋系土器である。1は口唇部がわずかに外反し肥厚する。施文は縄紋で、口唇部外側から体部にかけて施されている。口唇部及び体部は単節ＬＲ縄紋である。口唇部及び体部上半部は横走縄紋、以下縦走縄紋の施文である。内面は横位のナデ整形。2も口唇部が肥厚して外反する。施文は縄紋で、口唇部下位にナデ整形による無文帯を配する。口唇部と体部縄紋は単節ＲＬで、体部は斜行する。内面は器面の粗れが目立つ。3も口唇部が肥厚して外反する。やはり施文は縄紋で、口唇部上端部と口唇部下から単節ＬＲ縄紋を施し、口唇部下位部は無文である。内面はナデ整形による。4も口唇部は肥厚して外反する。施文は口唇部と口唇部直下から施され、いずれも単節LR縄紋である。5も小破片であるが、口唇部が肥厚し外反する。施文は1に酷似する。単節LR縄紋を施する。6の口唇部の形態は丸頭状で外面に肥厚し、口唇部下に凹帯が巡り、口唇部と凹帯下に縄紋の施文を施す。口唇部の原体は器面の摩耗が著しく詳細に観察できないが、体部は撚糸Rを施している。なお、施文工程は縄紋を施文し、ヘラ状工具による凹帯文の作出である。7は胴部破片である。単節ＲＬ縄紋に加えて1条の撚糸原体を圧着させる。1～5は井草Ⅱ式、6は稲荷原式、7は花輪台Ⅰ式である。

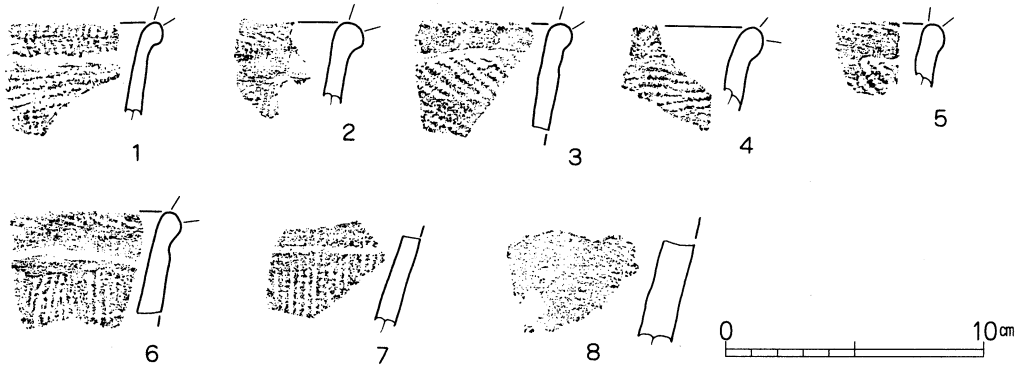


Fig.24　縄紋時代早期前半・後半の土器

早期後半の土器（Fig.24－No 8）

8は条痕文系土器である。胴部破片で、内外面とも無紋である。胎土に多量の繊維を含有する。茅山式である。

前期後半の土器（Fig.25－No 9～31）

9～24は浮島・興津式系土器である。うち9～17は浮島式系で、9は口縁部が大きく外反し、口唇部下位が肥厚する。口唇部および口縁部はアナダラ属の貝殻腹縁による刺突、押し引きおよび波状貝殻腹縁文が施されている。10～17は胴部破片であるが、やはりアナダラ属の貝殻腹縁による波状貝殻腹縁文で、12・16・17は波状の間隔を密に施している。浮島Ⅱ式である。18～24は興津式系である。18は口唇部の形状が外削状を呈し、ヘラ状工具による縦位の沈線文を巡らし、さらに細沈線を横走させる。19・20は同一個体の土器で、口唇部の形状は内削状を呈し肥厚する。口唇部はヘラ状工具による縦位の刻目が密に施され、以下同じ工具による平行沈線文を横走させる。なお地文にはアナダラ属の貝殻腹縁文による波状紋を施文している。21～23は胴部破片で、櫛歯状工具による横位の条線文を施文する。24は沈線による三角形区画文と貝殻腹縁文を施している。25～30は縄紋施文の土器である。25と26は同一個体の土器である。内湾気味に立ち上がる口縁部破片で、口唇部上に縄紋原体の側面圧痕をもち、とくに25は側面圧痕による区画文が施され、小突起を有する。口縁部は無節Ｌにより施文されている。27は胴部破片。無節Ｌが施文されている。28～30は同一個体である。28は口唇部の形状が外削状、口唇部はナデによって無文化され、縄紋施文後、沈線文を横走させる。31は無文の土器である。口唇部下と口縁部回りに粘土帯の積上痕が残置している。器面は比較的凹凸が著しい。

中期後半の土器（Fig.25－No32～35）

加曽利Ｅ３式土器を一括する。32～35は口縁部破片で、隆帯と沈線による渦巻、楕円区画文を有する。文様区画内は単節LR縄紋が施文され、また32・33は口縁部文様帯から磨消懸垂文が施され、単節LRが施文されている。35は波状口縁をもつ深鉢で、口唇部直下から単節RL縄紋が施文される。

後期後半の土器（Fig.25－No36）

安行１式の粗製土器である。胴部下半部の破片で、横走する条線文を施す。

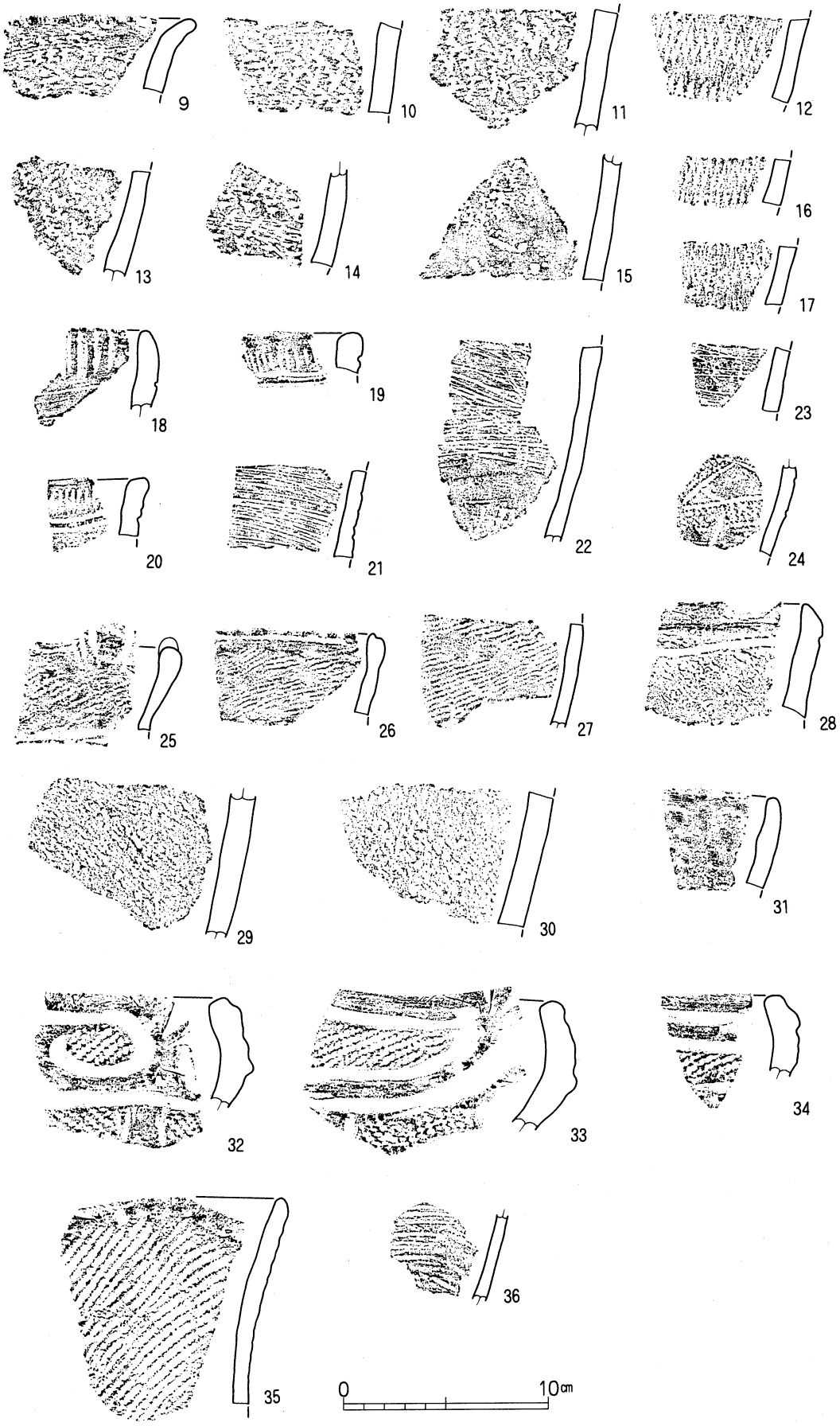


Fig.25　縄紋時代前・中・後期の土器

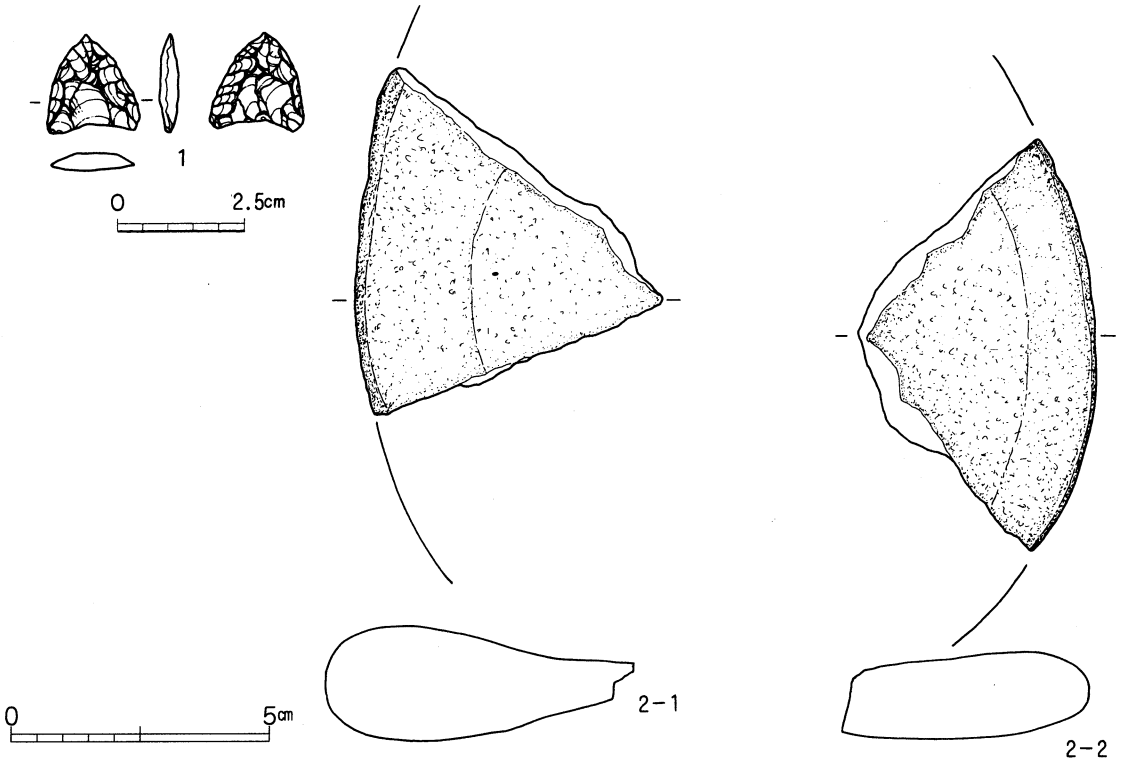


Fig.26　縄紋時代の石器

2. 石器（Fig.26－1・2）

1はチャート製の石鏃である。素材の面を残さず全面細部加工を施す。無茎で、平面形は丸みを帯びた正三角形を呈するもので、抉りはそれほど深くはない。断面はレンズ状をなす。長さ1.83cm、幅1.85cm、厚さ0.35cm、重さ1.25gを測る。表採。2は円礫を素材とした石皿の破片。表裏面とも研磨が施されている。砂岩製である。第10号住居跡(SI10)より出土。

（小川　和博）

第Ⅴ章　弥生･古墳時代の調査

第１節　川崎山Ⅰ期集落の遺構と遺物

１．第Ⅰ期の概要

本遺跡の集落形成第Ⅰ期とされるのは、弥生時代後期からでいわゆる「臼井南様式」の土器を伴う段階で、第15・23・27・30・35・36・37・38・39・42・43・45・47号住居跡13棟が検出されている。いずれも重複することなく単独住居で構築されており、調査区の北辺から東辺にかけて、つまり台地の縁辺部に沿って偏るように分布している。ここはまた既述したとおり、本調査区の北西側が都市計画街路建設工事に先立ち発掘調査され、全部で７棟検出された住居跡の内２棟が弥生時代後期の本遺跡でいう第Ⅰ期に相当するもので、当台地上の北西側の限界が確認されている。したがって、住居跡群は南方から西方へどう展開されるか、今後の調査に譲りたい。

この第Ⅰ期住居跡群の特徴として、まず出土する土器群が附加条縄紋を主施文とする臼井南式土器を主体に、わずかながら南関東系とされる弥生町系の土器が混在している点が注目される。また住居跡の形態が、楕円形を呈することである。しかもこの楕円形でも大きく小型と中型が存在し、共通する炉址の形状はともかくとして、小型と中型の大きさによって柱穴の状況に相違があることである。すでに当遺跡の北方に位置する萱田遺跡群では多数の弥生時代の遺構を検出しているが、ここでいう第Ⅰ期よりも新期に属する第Ⅱ期の遺構が多いものの、その中で権現後遺跡や井戸向遺跡で確認された第Ⅰ期住居跡群を考え合わせた時、集団内の居住範囲のみならず、当時の行動利用空間がより拡大していたことを物語る。ただし、萱田遺跡群の中でも相違点がいくつも指摘されていることから、この川崎山遺跡を含めた地域集団の土地利用状況の検討は十分意義あるものと考える。

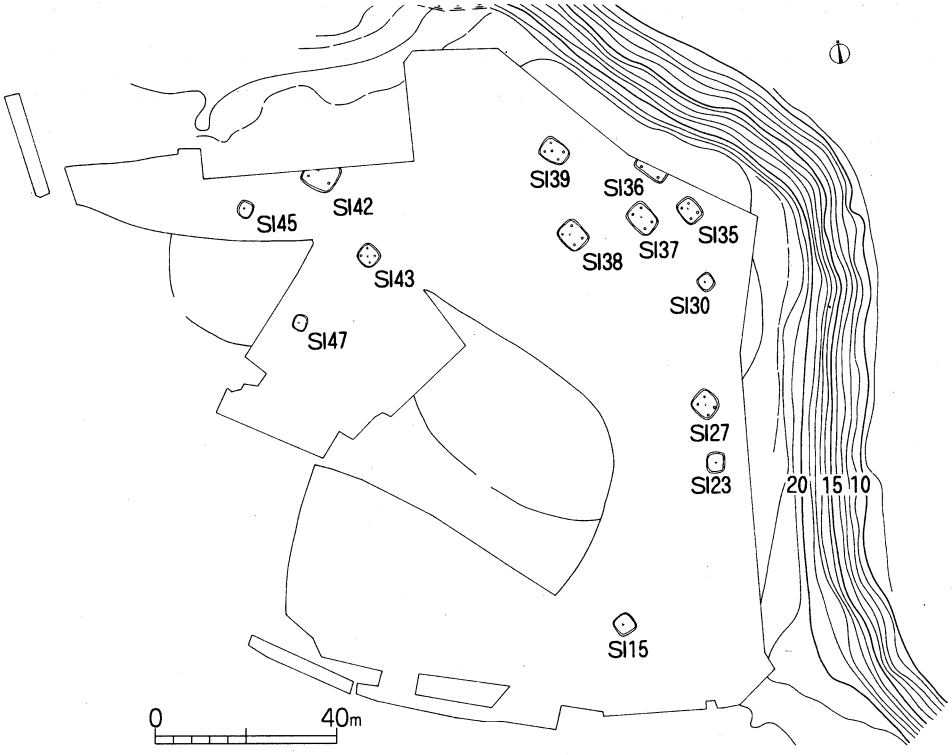


Fig.27　川崎山Ⅰ期集落

２．第Ⅰ期の住居跡

第15号住居跡（SI15）（Fig.28～32）

位置　本跡は、調査区南東部、15-M、15-N区の標高21.68m～21.78mに位置する。南東部で第14号住居跡（SI14）によって切られ、北側に第11号住居跡（SI11）が隣接する。

形態　平面形は、楕円形を呈する。推定長軸４.40m、短軸４.46mを測り、長軸方位はN-38°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は東南辺、北辺ともほぼ垂直に、西辺にて緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	10YR3/4	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
２層	10YR3/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
３層	10YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層	10YR5/6	黄褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層	10YR6/8	明黄褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。

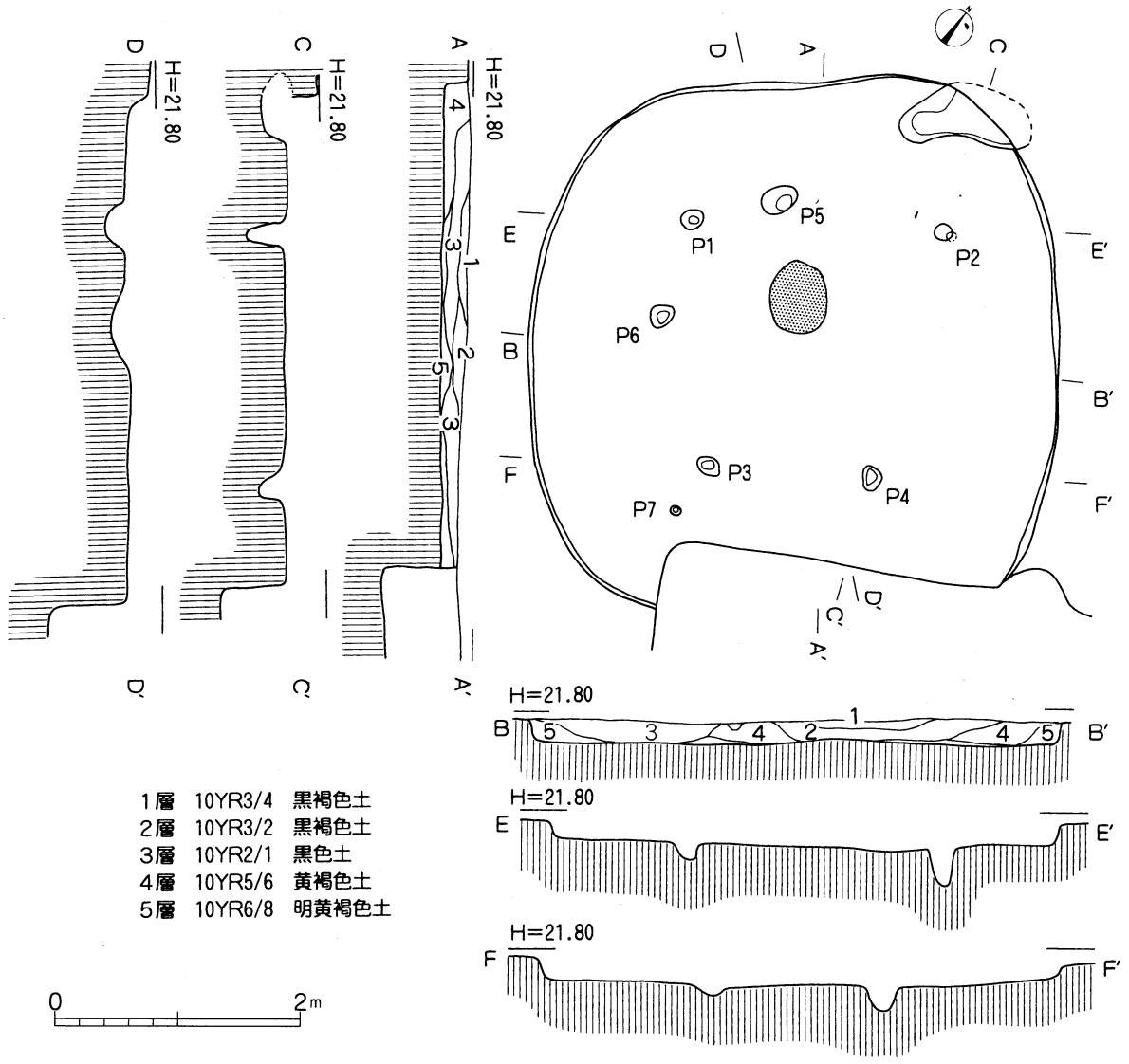


Fig.28　第15号住居跡

住居施設　住居内部の施設として柱穴４本および支柱穴３本と地床炉１基が確認された。

柱穴はP１～P４で、P１は北西部に位置し、上面が18×18cmのほぼ円形、深さ17cm。P２は北東部で14×14cmの円形で、深さ34cm。P３は南西部に位置し、上面が22×16cmの楕円形で、深さ７cm。P４は南東部で、22×16cmの楕円形、深さ19cmを測る。また炉跡やや北寄りに径約32cm×22cm、深さ18cmの楕円形ピットであるP５とやはり炉跡西寄りに上面が22×20cmの円形で、深さ７cmと浅い深度のピットであるP６を、P３の南寄りには上面が12×８cm、深さ６cmの小ピットであるP７を設ける。

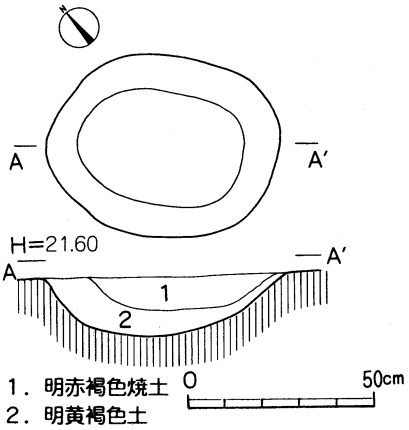


Fig.29　第15号住居跡炉

炉は地床炉で、住居中央から北西寄りに長径60cm、短径48cm、深さ12cmを測る楕円形に掘り窪め、断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は２層に分層でき、第１層が焼土層で、多量の焼土粒とローム粒子を含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに南端から南東部にかけて集中する。いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物　出土した遺物は土器のみで、いずれも破片である。破片は底部、口縁部と胴部破片があり、壺形土器である。１は小型の壺形土器の底部破片である。底径は５.7cmを測る。底部周辺に粗いヘラナデが、また底面にも比較的粗いヘラナデが施されている。２は中型壺形土器の口縁部破片である。複合口縁を呈し、口縁部、口唇部とも単節RLを施文し、口縁部下端にササラ状工具による刺突文が周回し、下端から赤彩が認められ、内面にも赤彩が施されている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。３も中型

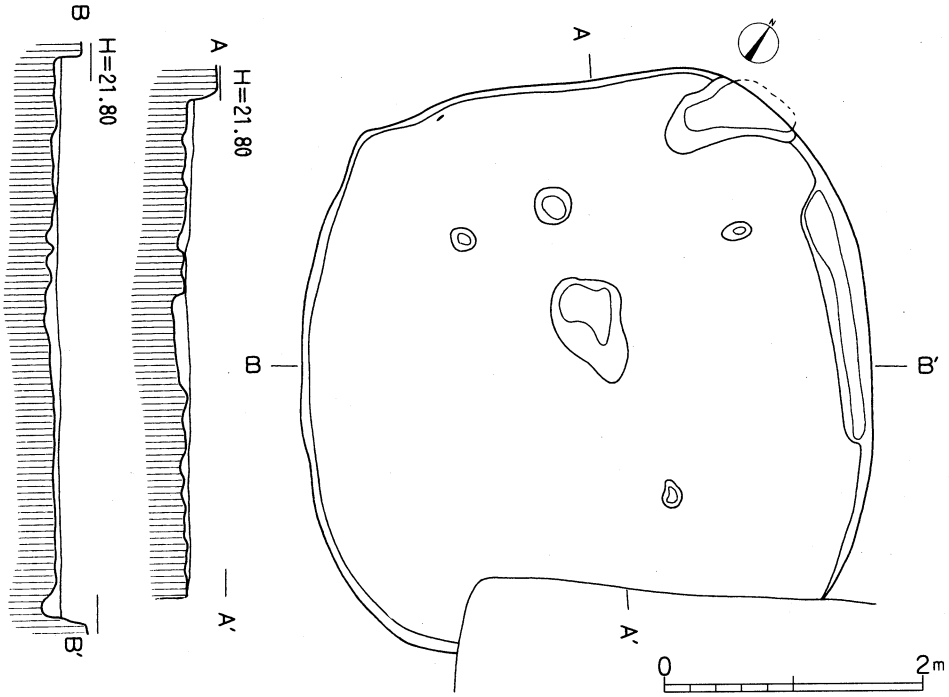


Fig30　第15号住居跡掘り方

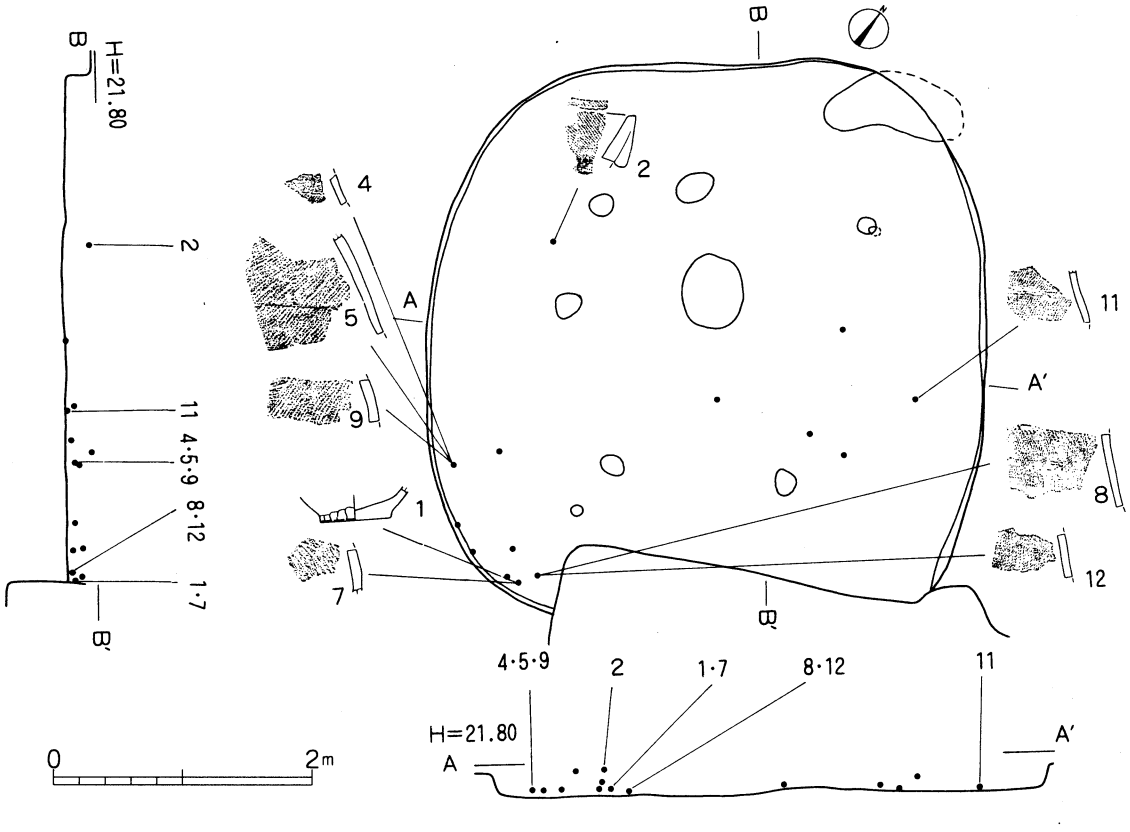


Fig.31　第15号住居跡遺物分布図

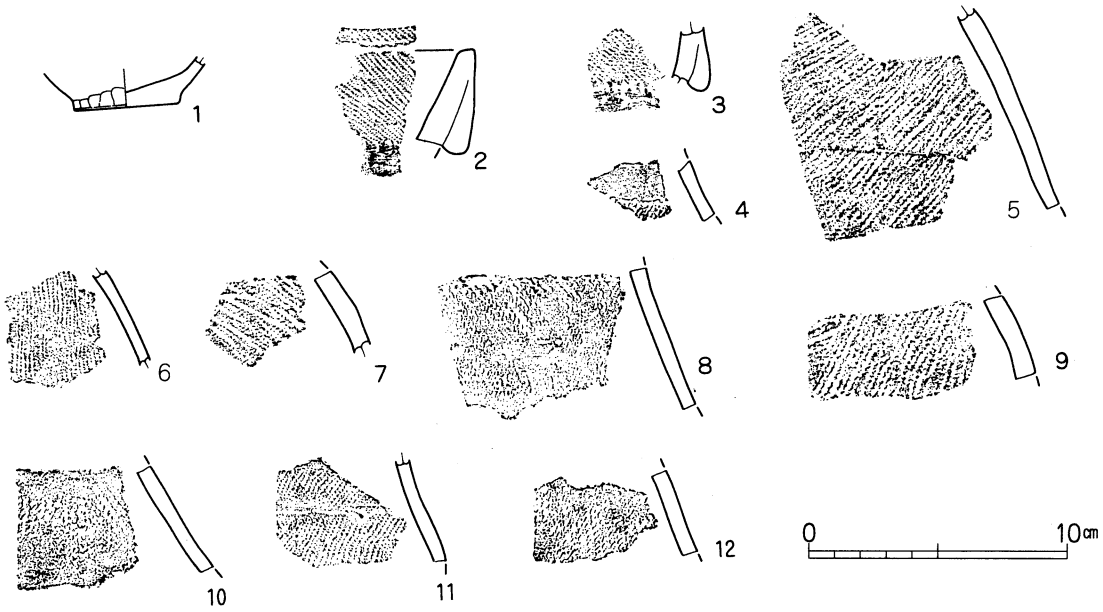


Fig.32　第15号住居跡出土遺物

の壺形土器の口縁部破片。複合口縁で、口縁部には単節RLが施文され、口縁部下端に棒状工具による刺突文が周回する。やはり口縁下端に赤彩が施され、内面にも赤彩が認められる。焼成は良好。色調は明赤褐色を呈する。４～12は壺形土器の胴上半部の破片である。５・８・９はやや大型、他は小型もしくは中型の壺で、いずれも附加条縄紋で、附加条第１種が施文されている。４は頸部破片で、原体の末端がみられ、橙色を呈する。５・９は浅黄橙色、６・７は明赤褐色、他は黒褐色を呈する。

第23号住居跡（SI23）(Fig.33～37)

位置　本跡は、調査区東部、11-O、11-P、12-O、12-P区の標高22.48m～22.50mに位置する。南側で第22号住居跡（SI22）、北西側で第26号住居跡（SI26）が隣接する。

形態　平面形は、楕円形を呈する。長軸4.12m、短軸3.98mを測り、長軸方位はN-20°-Eを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　６層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	10YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
２層	10YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
３層	10YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層	10YR3/4	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層	10YR6/8	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
６層	10YR4/4	褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴２本と地床炉１基が確認された。

柱穴はP1～P2で、P1は北側に位置し、上面が14×16cmのほぼ円形、深さ40cm。P2は西側で上面30×32cmのほぼ円形で、深さ51cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに長径32cm、短径20cm、深さ９cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。

周溝は構築されていない。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況　遺物は、住居の東側から南側にかけて散在するが、いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物　出土した遺物は土器のみで、大型と中型の壺形土器の胴部破片である。

１～５は同一個体である。大型の壺形土器で、胴上半部の破片である。附加条第１種の縄紋を施文している。内面は丁寧なナデ調整が施され、焼成は良好である。色調は黒褐色と明赤褐色である。６～12も壺形土器の胴部破片で、個体１（１～５）よりも中型である。６・８・９・11は胴上半部、他は胴下半部である。６は原体の末端がみられる。色調は黒褐色を呈する。また８～11は焼成も良好で、色調は黒褐色を呈する。12は底部に近い破片で、明赤褐色を呈し、焼成は良好である。13・14は頸部付近の破片で、横位の擦痕による器面調整が施されている。15は甕形土器の胴下半部の破片である。ナデ調整が施されている。いずれも焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。

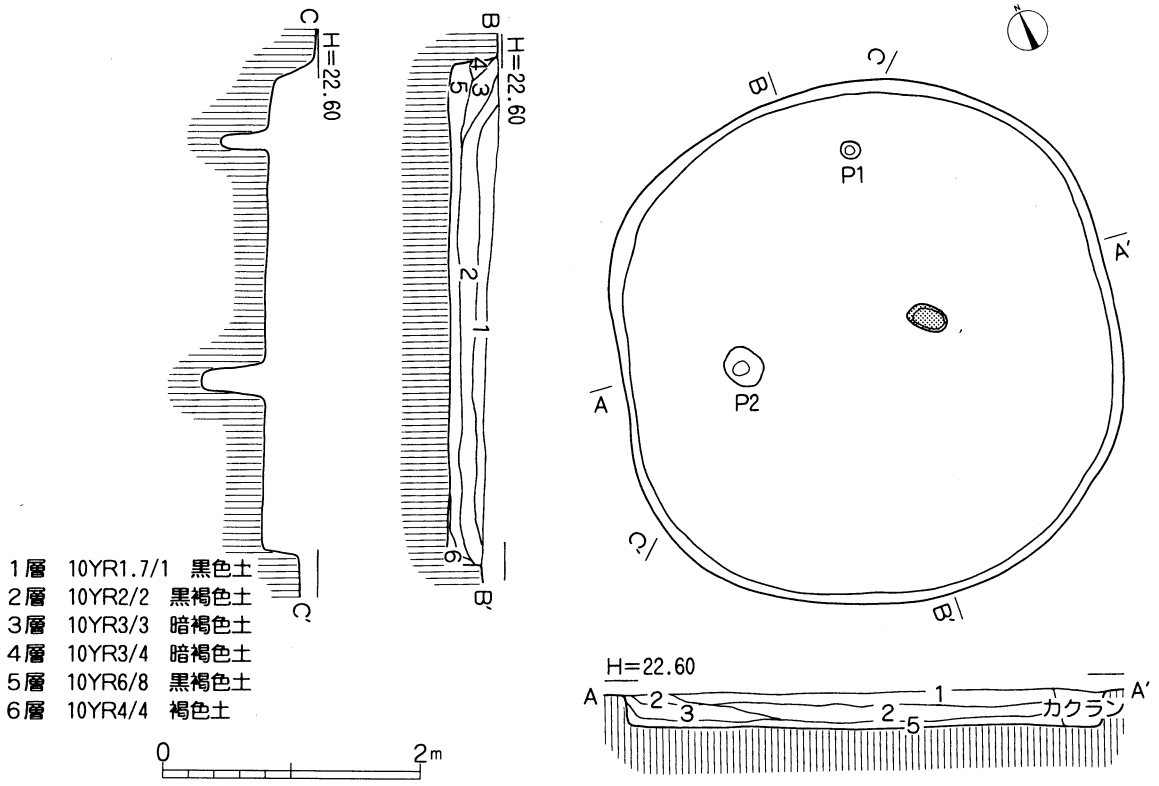


Fig.33　第23号住居跡

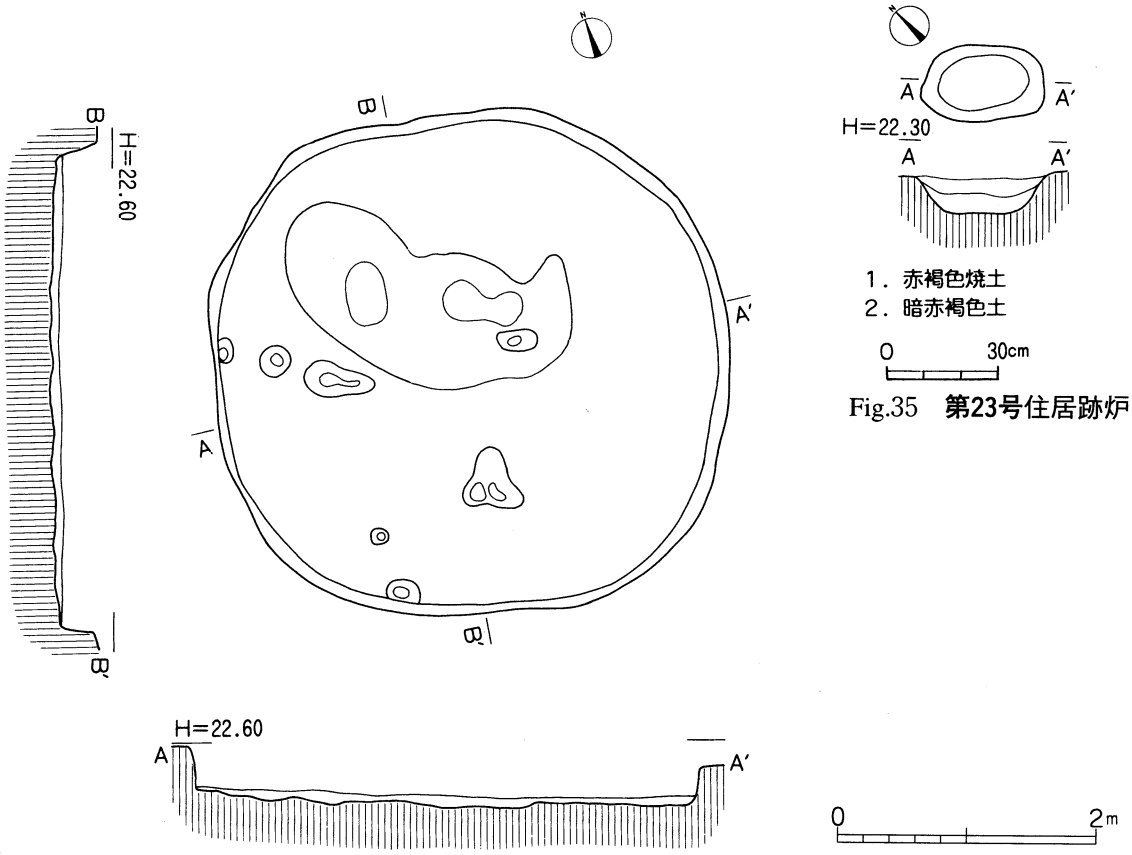


Fig.35　第23号住居跡炉

Fig.34　第23号住居跡掘り方

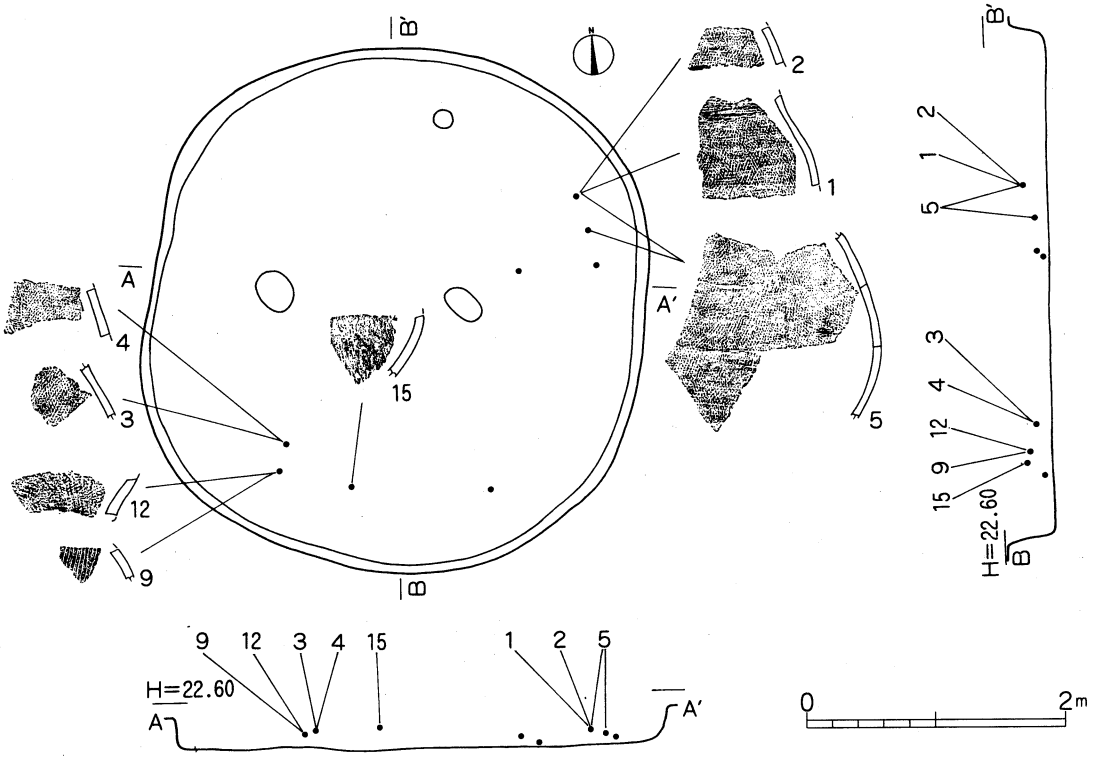


Fig.36　第23号住居跡遺物分布図

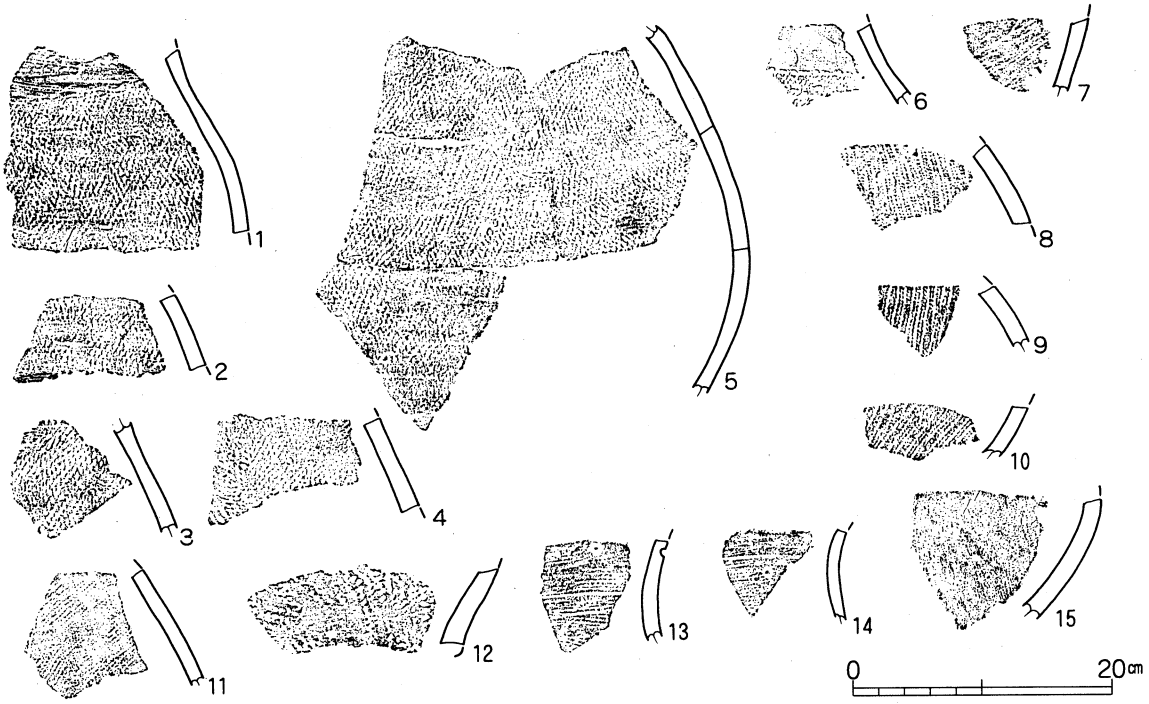


Fig.37　第23号住居跡出土遺物

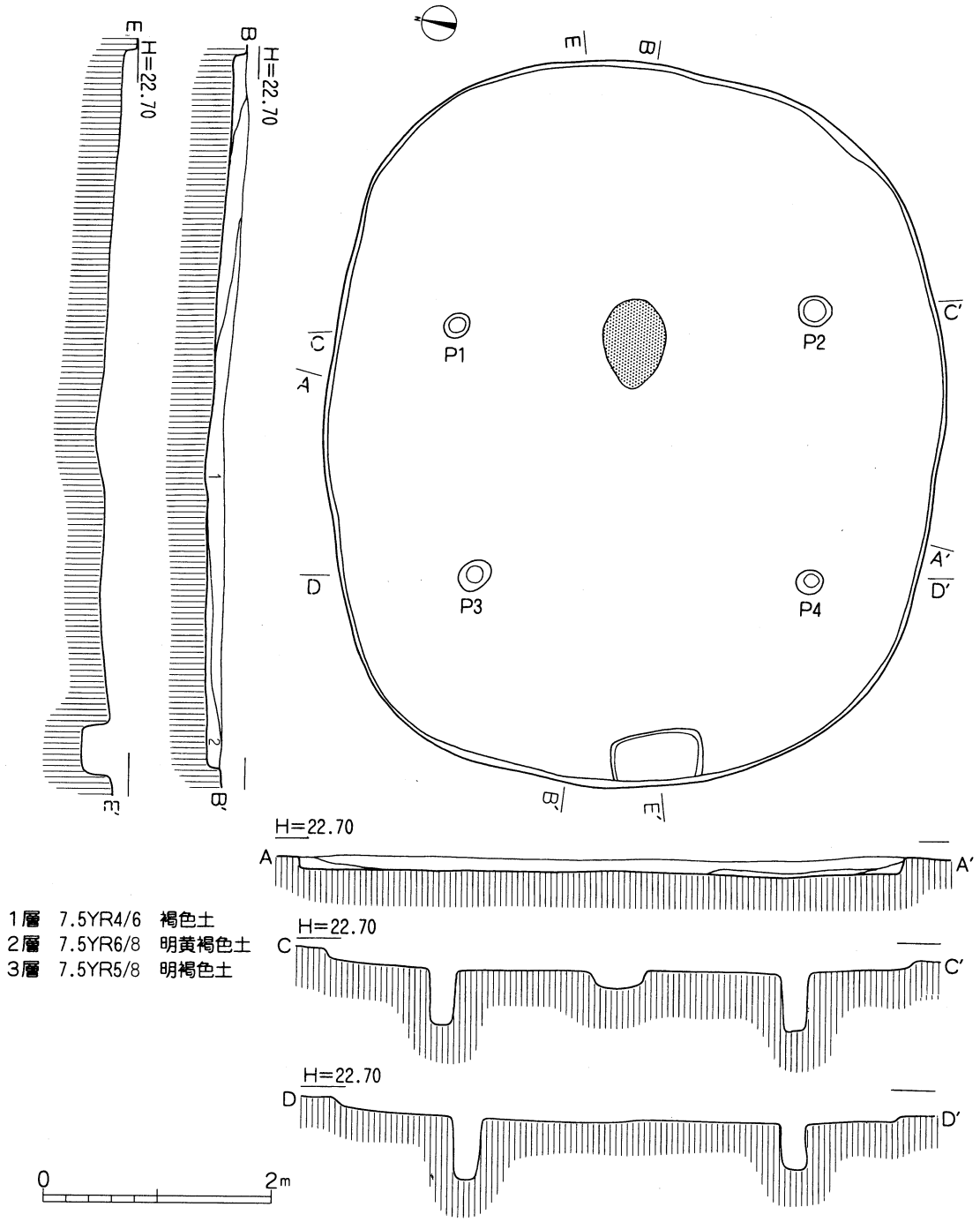


Fig.38　第27号住居跡

第27号住居跡（SI27）（Fig.38～42）

位置　本跡は、調査区東端10-O、10-P区の標高22.24m～22.60mに位置する。北側は第28号住居跡（SI28）が、南西側は第26号住居跡（SI26）、南東側に第24号住居跡（SI24）が隣接する。

形態　平面形は、楕円形を呈する。長軸6.52m、短軸5.60mを測り、長軸方位はN-80°-Eを指し、大型の住居跡である。壁は全体的に浅いが東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

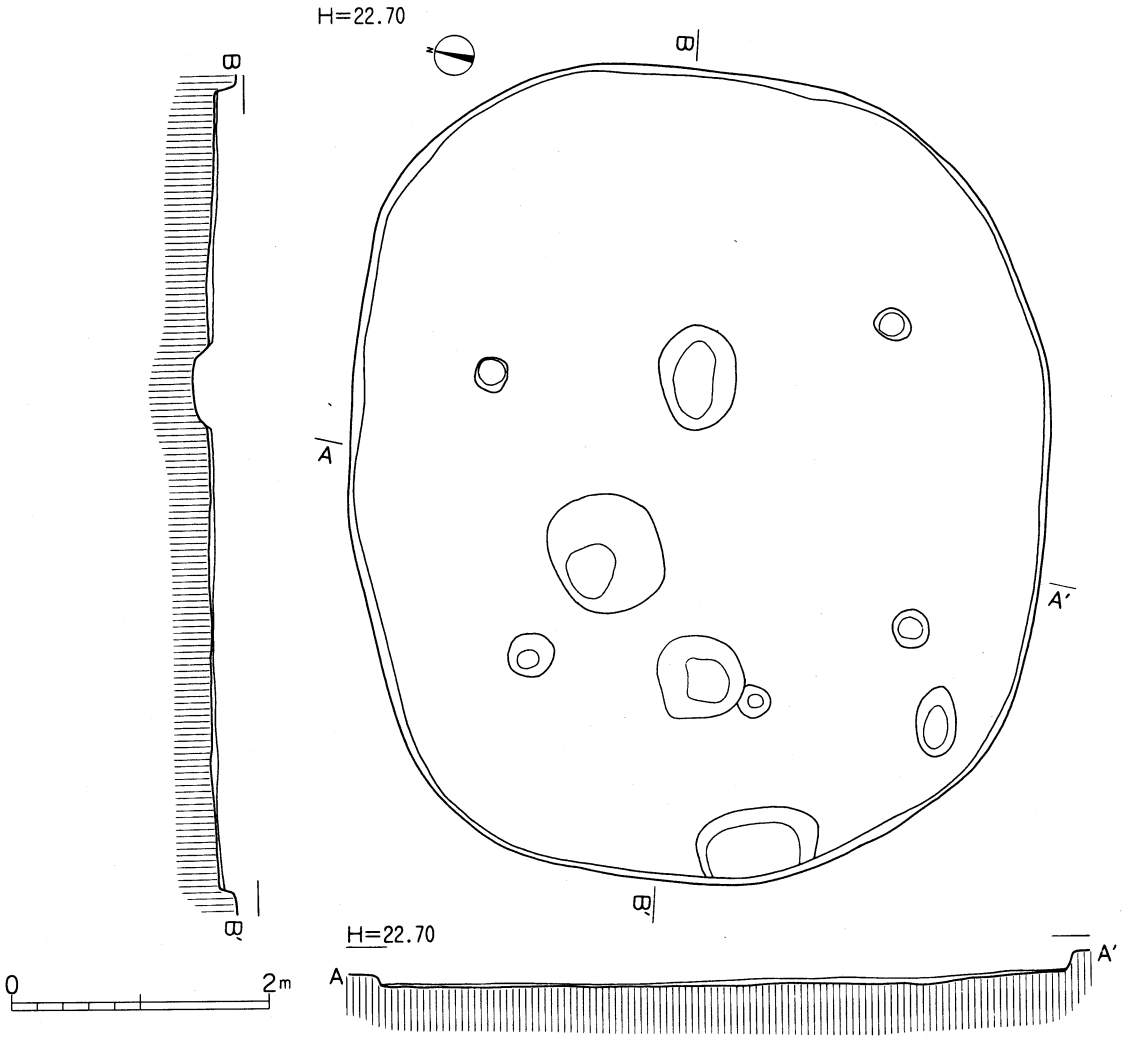


Fig.39　第27号住居跡掘り方

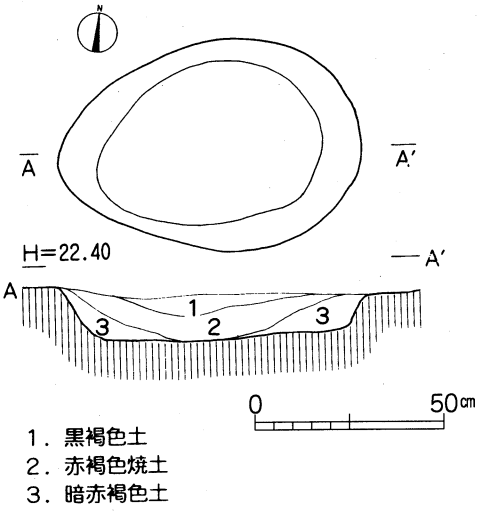


Fig.40　第27号住居跡炉

覆土　3層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層　7.5YR4/6　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層　7.5YR6/8　明黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

3層　7.5YR5/8　明褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として柱穴4本および入口施設と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P4で、P1は北東部に位置し、上面が22×24cmのほぼ円形、深さ50cm。P2は南東部で26×30cmの楕円形で、深さ54cm。P3は北西部に位置し、上面が28×30cmの円形で、深さ58cm。P4は南西部で、上面が22×24cmの円形深さ41cmを測る。また入口部は西壁中央部に位置し、規模は長軸84cm、短軸48cmの長方形を呈し、深さは14cmを測る。なお、底面は平坦である。

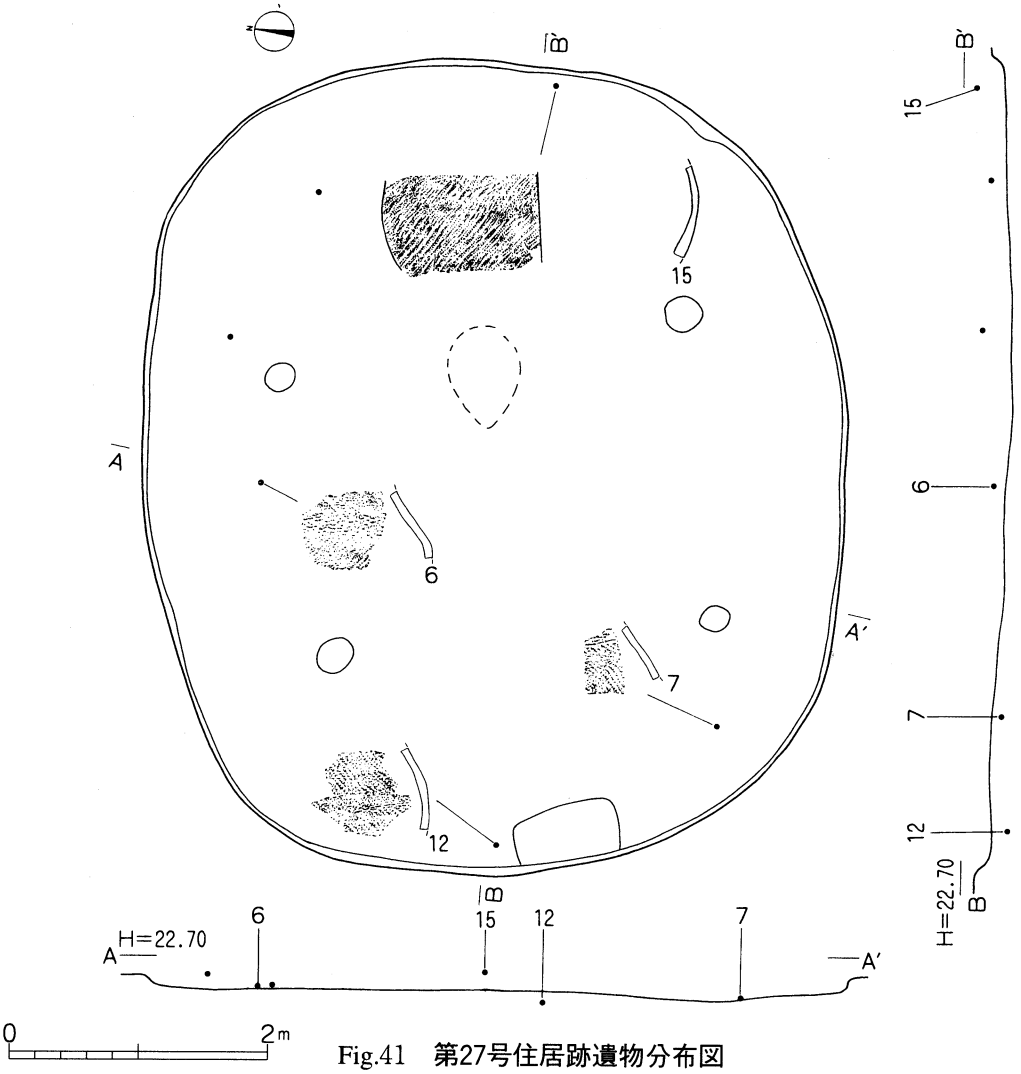


Fig.41　第27号住居跡遺物分布図

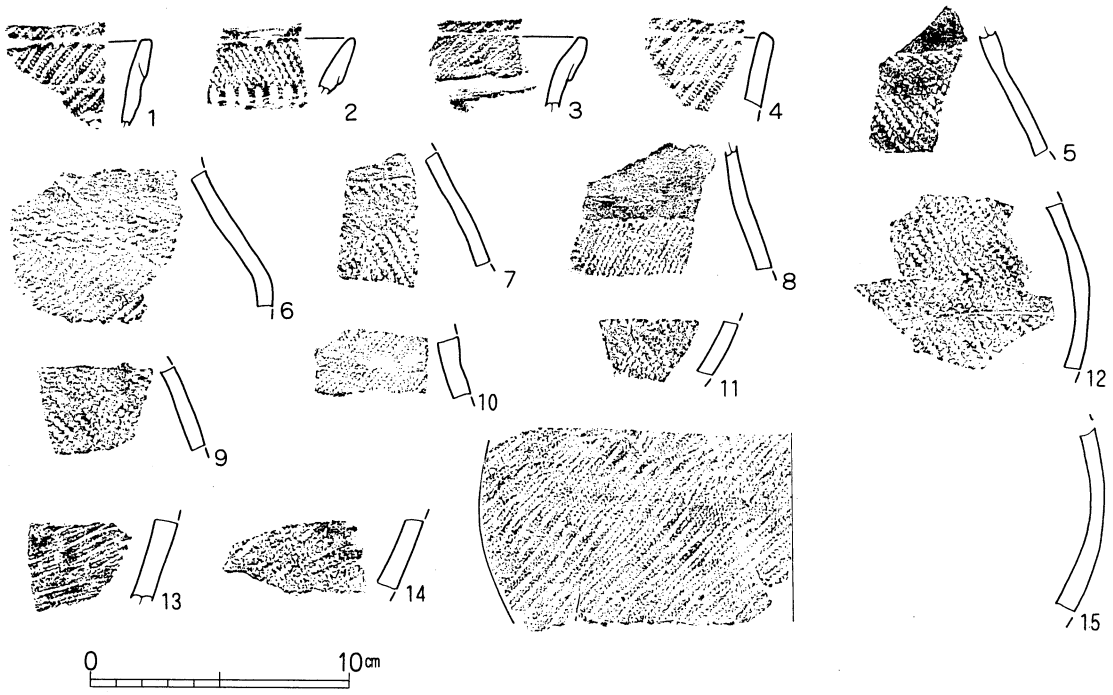


Fig.42　第27号住居跡出土遺物

炉は地床炉で、住居中央から北東寄りに楕円形に掘り窪め、長径80cm、短径60cm、深さ14cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝は構築されていない。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、西側には柱穴状の掘り込みがみられる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するものの、とくに集中することはない。なお、いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物　出土した遺物は土器のみであり、大型と中型の壺形土器である。

１～４は口縁部破片である。中型の壺形土器で、１～３は複合口縁をもつ土器で、１は口縁部および口唇部に附加条第１種の縄紋を施文する。内面は丁寧なナデ調整。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。２も同様に口縁部と口唇部に附加条第１種の縄紋を施文、また口縁部下端部に棒状工具による刺突文を周回させる。内面は丁寧なナデ調整。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。３もやはり口縁部と口唇部に附加条第１種の縄紋を施文し、内面はナデ整形。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。４も口縁部と口唇部に附加条第１種の縄紋を施文。焼成は良好。色調は褐色を呈する。５～15は胴部の破片である。５～８は頸部付近で、いずれも原体の末端を残す。とくに６は上端に３段の結節文がみられる。なお、５・６とも器面外面にスス状炭化物の付着が認められる。色調は５・６・８は黒褐色。７は暗褐色を呈する。９～15は胴部中位付近の破片である。いずれも附加条第１種の縄紋を施文する。また15は最大径24.7cmを測る中型の壺形土器である。色調は９～12は黒褐色。13～15は明赤褐色を呈する。

第30号住居跡（SI30）（Fig.43～46）

位置　本跡は、調査区北東部、7-P、8-P区の標高22.68m～22.80mに位置する。南側に第29号住居跡（SI29）が隣接する。

形態　平面形は、楕円形を呈する。長軸3.70m、短軸3.44mを測り、長軸方位はN-28°-Wを指し、やや小型の住居跡である。壁は南辺がほぼ垂直に、東辺、西辺、北辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR3/1　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
２層　7.5YR2/1　黒色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層　7.5YR2/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層　7.5YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
５層　7.5YR5/6　明褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴６本および入口施設と地床炉１基が確認された。

柱穴はP1～P6で、P1は西側に位置し、上面が22×22cmの円形、深さ19cm。P2は北側で20×22cmのほぼ円形で、深さ６cm。P3は南西側に位置し、上面が16×24cmの楕円形で、深さ７cm。P4は東側で、上面が24×24cmの円形、深さ９cmを測る。またP5とP6の２本は支柱穴にあたるものと考えるが、P5は炉跡の北側で、上面が18×22cmの楕円形で、深さは８cm。P6は反対の入口部の北側に位置し、上面が28×28cmの円形で、深さは９cmを測る。

入口部は南壁中央部に位置し、規模は長軸78cm、短軸34cmの楕円形を呈し、深さは11cmを測る。なお、

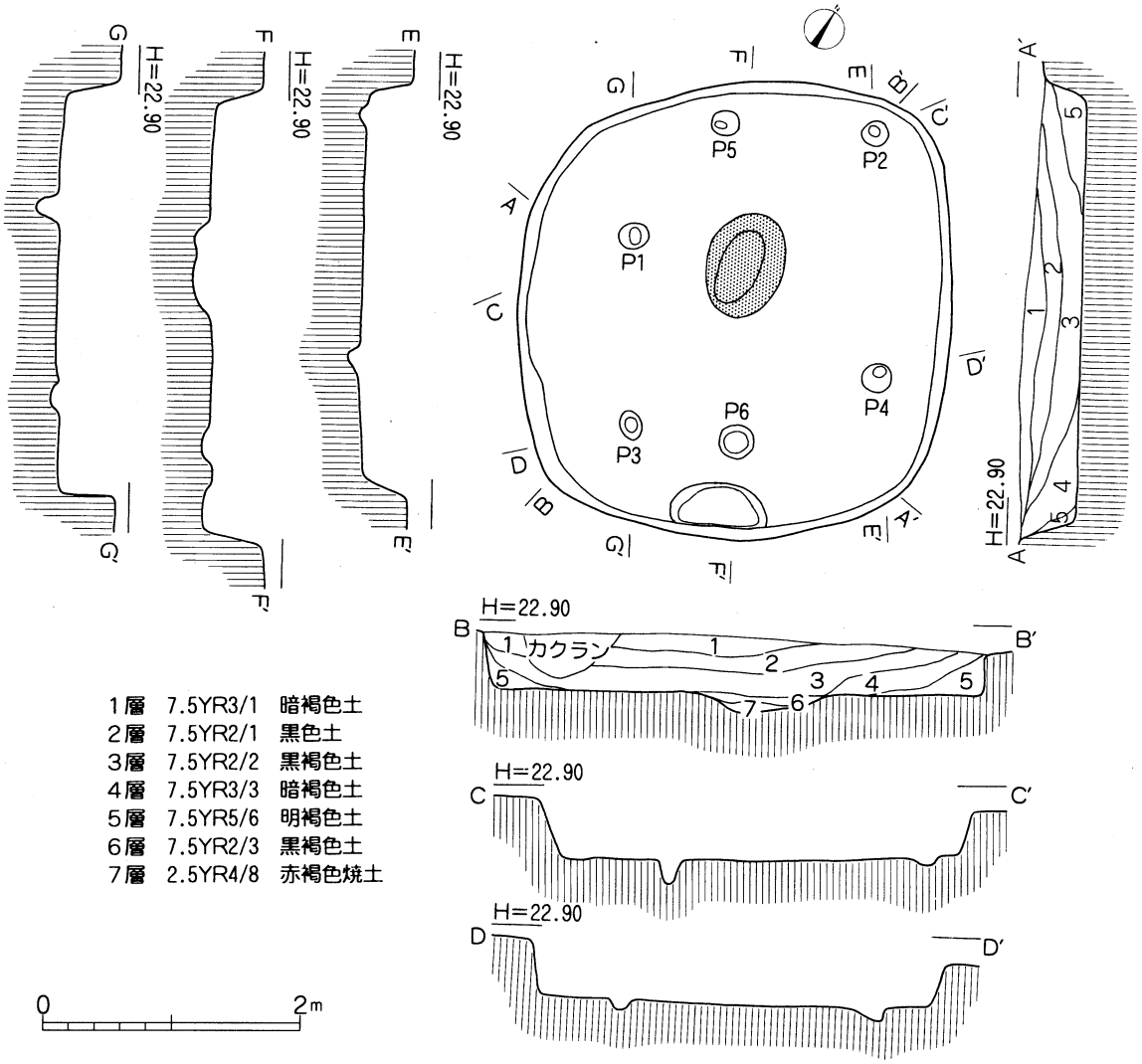


Fig.43　第30号住居跡

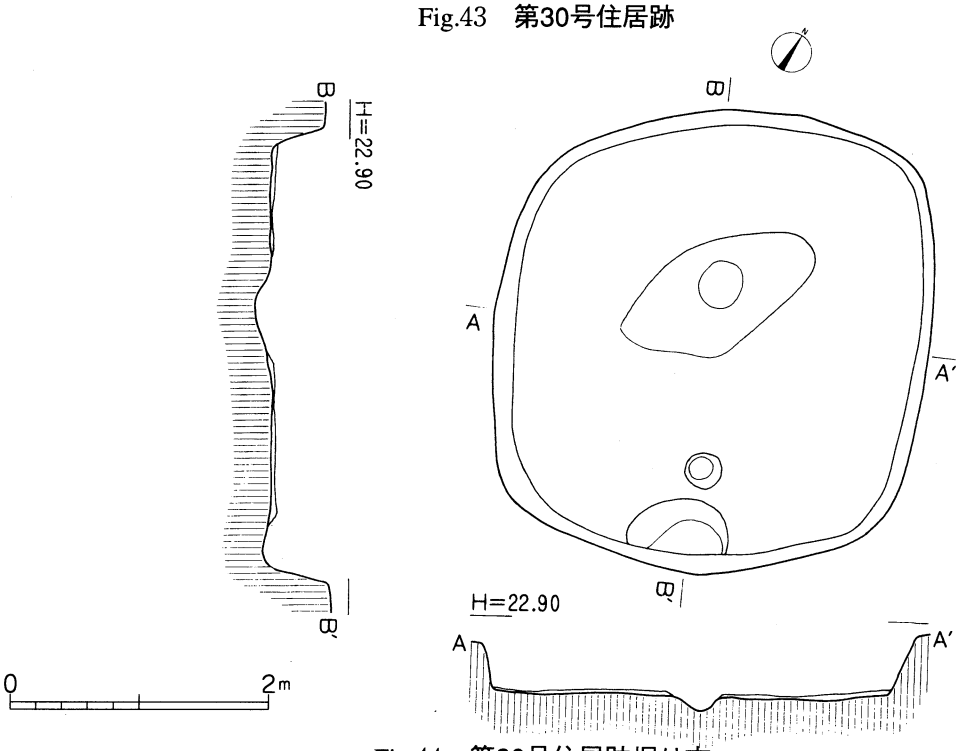


Fig.44　第30号住居跡堀り方

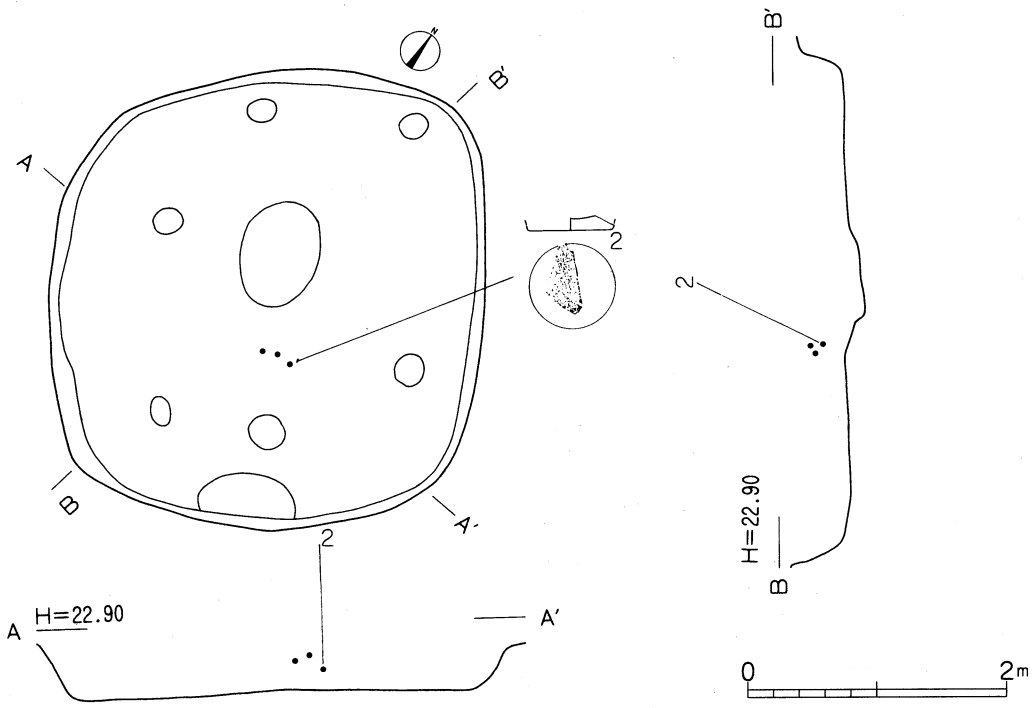


Fig.45　第30号住居跡遺物分布図

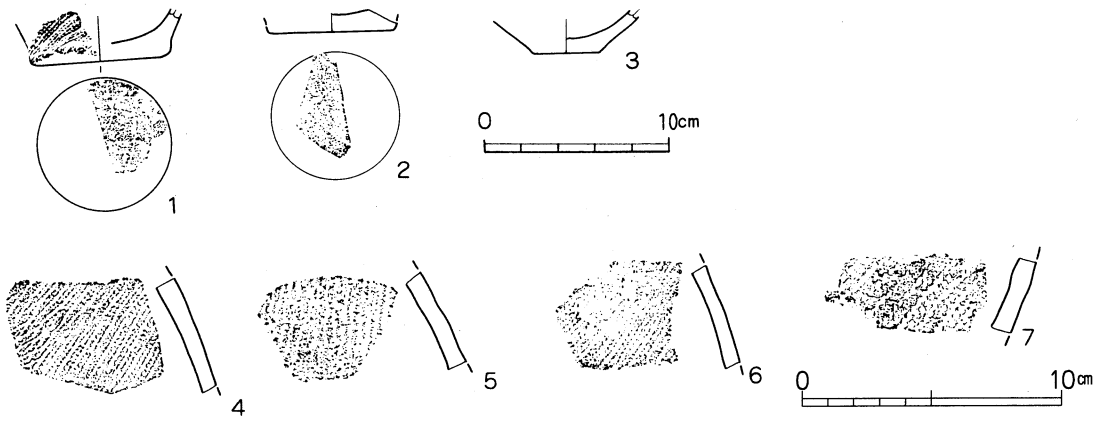


Fig.46　第30号住居跡出土遺物

壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北東寄りに長径84cm、短径64cm、深さ15cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は２層に分層でき、本跡では第７層に相当する最下層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝は構築しない。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、炉跡周辺の掘り込みが顕著にみられる。

遺物出土状況　遺物は、炉跡の南側に散在するのみで、とくに集中することはない。なお、いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物　出土した遺物はすべて土器で、壺形土器の底部と胴部破片が確認されている。なおSI29で出土した４の坏形土器（Fig.288-２）の半分は本住居跡の覆土精査の段階で出土したものである。１～３は底部破片である。１は底部周辺まで附加条第１種の縄紋を施文し、底部に木葉痕を残置させている。内面はナデ調整。焼成は良好。色調は橙色を呈する。２も底面に木葉痕を残置している。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。３は小型の壺形土器で、底部周辺はヘラ削り、底面も比較的粗いヘラ削り、内面はヘラナデ調整。焼成は良好。色調はにぶい褐色を呈する。４～７は壺形土器の胴部破片。いずれも附加条第１種の縄紋により施文されている。焼成は良好で、色調はいずれもにぶい褐色を呈する。

第35号住居跡（SI35）（Fig.47～51）

位置　本跡は、調査区北東部、6-O、6-P区の標高22.64～22.83mに位置する。北西側に第36号住居跡（SI36）が、西側に第37号住居跡（SI37）が隣接する。

形態　平面形は、長楕円形を呈する。長軸５.74m、短軸４.26mを測り、長軸方位はN-48°-Wを指す。中型の住居跡である。壁は東辺と南辺がほぼ垂直に、西辺と北辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。

覆土　６層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR3/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性　　ややあり、締まりがある。
２層　7.5YR2/1　黒色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層　7.5YR3/1　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
４層　7.5YR3/4　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
５層　7.5YR3/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
６層　7.5YR4/4　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴５本および入口施設と地床炉１基が確認された。

柱穴はP1～P5で、うちP1～P4は径は狭いが、深度のもつ主柱穴である。まずP1は西側に位置し、上面が16×18cmのほぼ円形、深さ59cm。P2は北側で12×18cmの楕円形で、深さ49cm、P3は南側に位置し、上面が20×24cmの楕円形で、深さ61cm。P4は東側で、上面が14×16cmの円形、深さ56cmを測る。またP5は入口部に付随する施設のものと考えられ、入口部施設の北側で、上面が30×36cmの楕円形で、深さは33cmを測る。

入口部施設は南東壁中央部に位置し、規模は長軸110cm、短軸44cmの長方形を呈し、深さは11cmを測る。なお、壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径72cm、短径56cm、深さ21cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第１層と第２層が焼土層で、とくに第２層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

なお、住居跡西隅、北隅、東隅の３ヵ所の床面上に径50cm前後の焼土塊が堆積していた。床面には炭化物の堆積はなく、焼失家屋ではない。したがって、この焼土塊は捨て焼土であろう。

周溝は構築しない。

掘り方　掘り方は、床下全面におよび、かなり粗雑なピット状の掘り込みが全体に認められるほか、とくに北側では複雑な掘り込みが施され、入念な貼床構築が行なわれている。この貼床の床面にあたる上面は黒褐色土とローム粒子の混合土からなる貼床面を呈しているものの、とくに北側では貼床面の下層にわずかな暗褐色土を混入するロームブロック粒を充填して基礎としている。

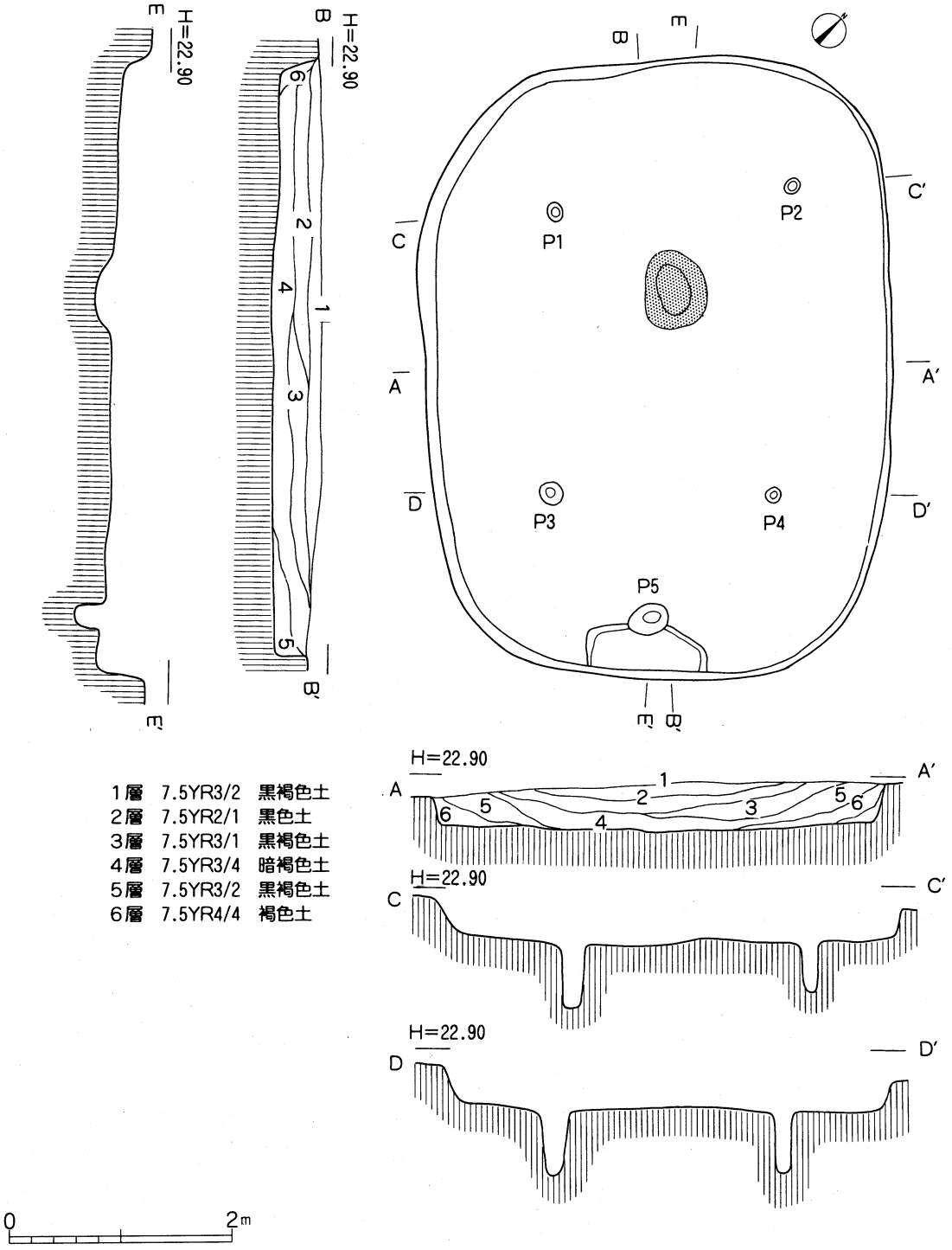


Fig.47　第35号住居跡

遺物出土状況　遺物は、炉跡の南から東側に散在し、とくに炉跡と入口部付近に集中する。遺物のうち底部の出土が目立つ。

遺物　出土した遺物は土器のみである。1は甕形土器の口縁部破片、推定口径16.5㎝のやや小型を呈する。口縁部は緩く外方へ開き、体部はやや膨らみながら移行する。器面外面は縦位のヘラナデ整形、内面は横位のヘラナデ整形。内外面に赤彩が認められる。焼成は良好。2は壺形土器の胴部下半部を残

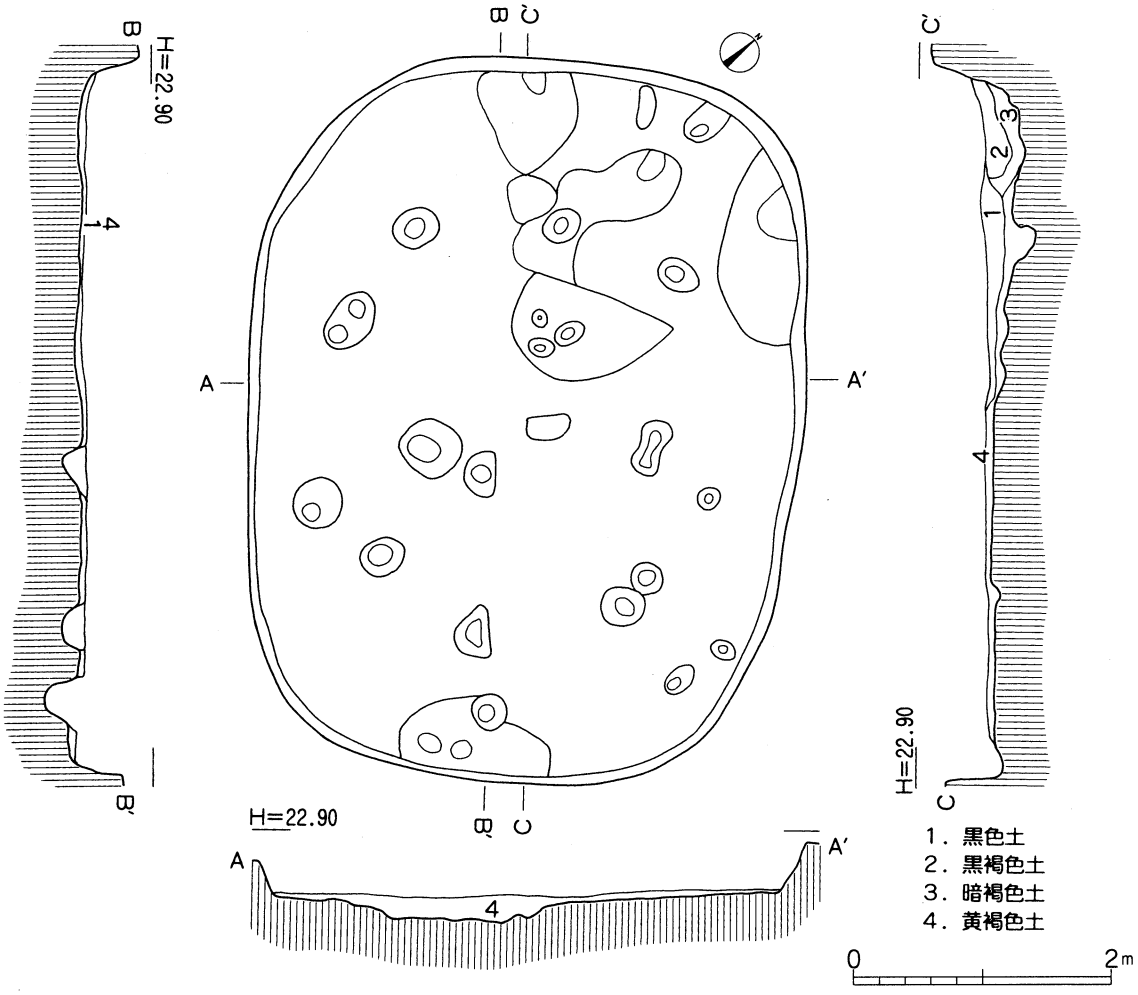


Fig.48　第35号住居跡掘り方

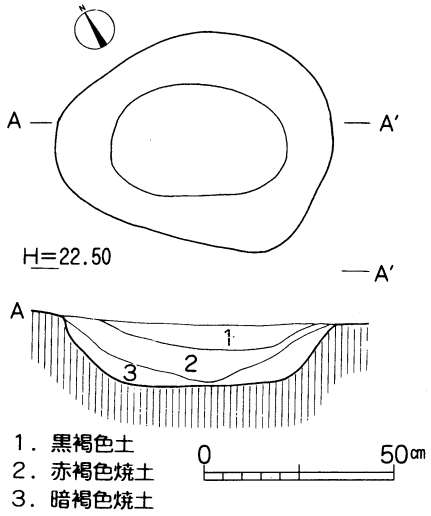


Fig.49　第35号住居跡炉

存している。底径は６.９㎝を測る。外面は附加条第１種の縄紋を施文し、底面に木葉痕を残置させている。内面は丁寧なヘラナデによって仕上げられている。焼成は良好。色調は橙色を呈する。３～８は底部破片。５を除き、木葉痕を残置させている。また５～７の底部周辺には附加条第１種の縄紋を施文している。いずれも焼成は良好。色調は３・４・８が灰褐色。５が橙色。６・７は褐色を呈する。９・10は胴部破片。附加条第１種の縄紋を施文し、焼成は良好。色調は９が灰褐色、10が橙色を呈する。

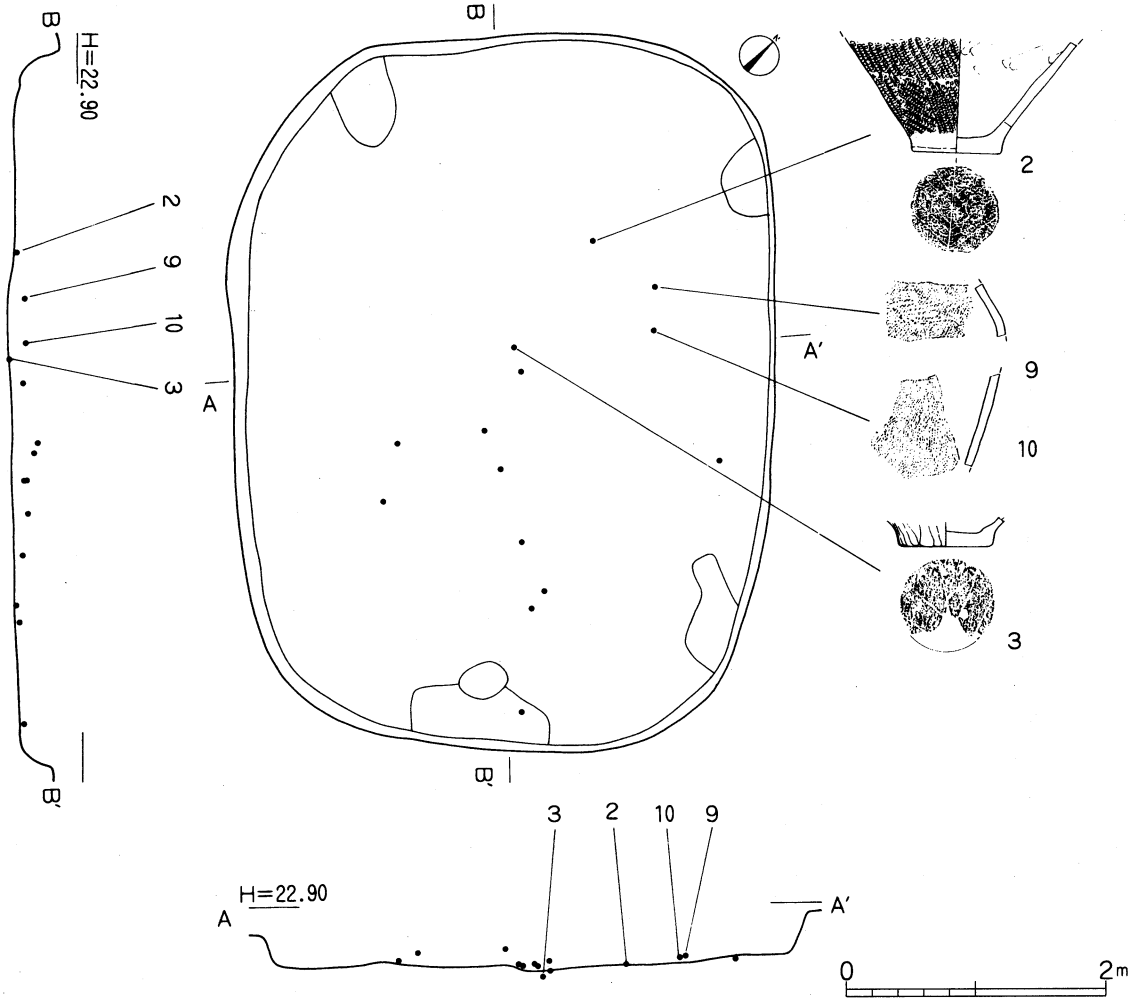


Fig.50　第35号住居跡遺物分布図

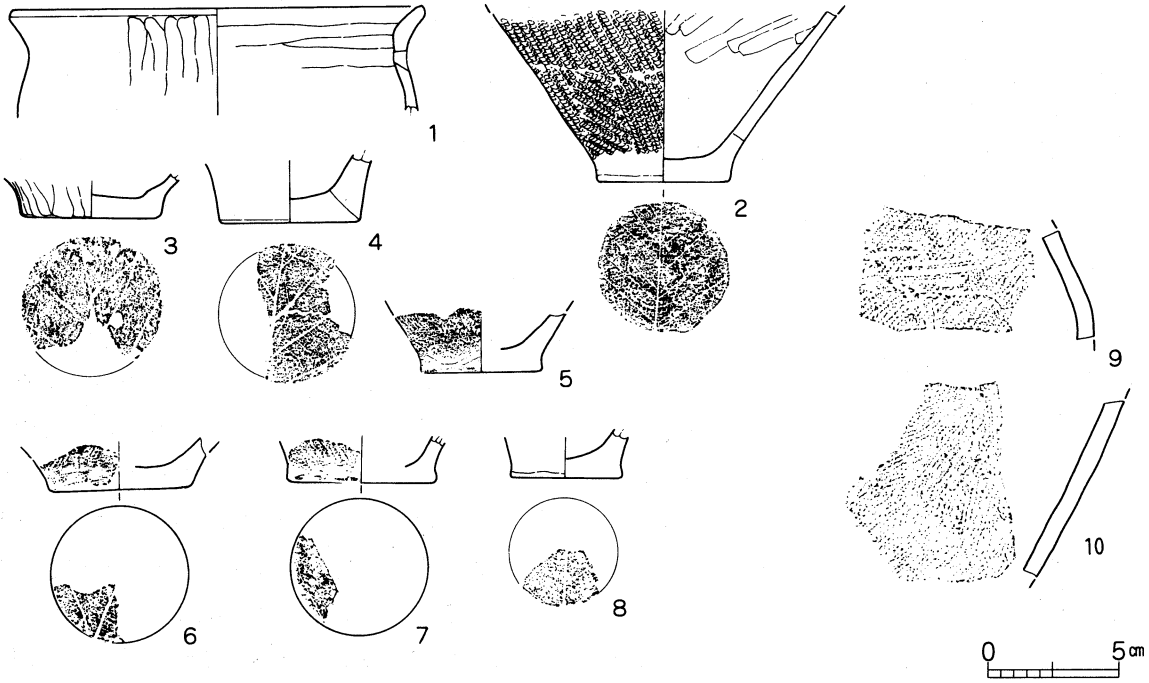


Fig.51　第35号住居跡出土遺物

第36号住居跡（SI36）（Fig.52～55）

位置　本跡は、調査区北東部、5-N、5-O区の標高22.38～23.20mに位置し、住居跡群の北東端にあたる。なお、北東側約2/3は保存地域にあたるため調査ができず、確認された南西側1/3を発掘した。また南東側に第35号住居跡（SI35）が、南側に第37号住居跡（SI37）が隣接する。

形態　平面形は、長楕円形を呈する。確認された長軸７.62m、短軸２.38mを測り、長軸方位はN-53°-Wで、大型の住居跡である。壁北東辺が確認できないものの、南西辺とわずかに検出された北西辺、南東辺とも、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦面が広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。

覆土　９層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR3/4	暗褐色土	表土層である。
２層	7.5YR2/1	黒色土	多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
３層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
４層	7.5YR2/3	極暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
５層	7.5YR3/1	黒褐色土	微量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
６層	7.5YR2/1	黒色土	微量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
７層	7.5YR2/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。
８層	7.5YR4/6	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。
９層	7.5YR4/4	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性に欠き、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴２本が確認された。

柱穴はP１～P２は主柱穴である。まずP１は西側に位置し、上面が20×20cmの円形、深さ45cm。P２は南側で上面24×26cmのほぼ円形で深さ58.６cmを測る。

柱穴以外の内部施設は確認できなかった。

掘り方　掘り方は、床下全面におよび、かなり粗雑なピット状の掘り込みが確認された２本の柱穴の周辺に集中している以外、全体に起伏の浅い掘り込みが観察できる。

遺物出土状況　遺物は、南西壁際にわずか３点の土器片のみ検出されている。

遺物　土器４点が出土している。いずれも破片で、底部と胴部破片があり、壺形土器である。１・２は底部破片である。１は底径17.２cmを測る。底部下端周辺はヘラナデ、底面に木葉痕を残置している。焼成は良好。色調は浅黄橙色を呈する。２も底部で、下端周辺は指頭によるナデ、底面は木葉痕を残置している。焼成は良好。色調は橙色を呈する。３・４は胴部破片で、３は頸部付近の破片である。胴部に単節LR縄紋を施文し、頸部は横ナデ。焼成は良好。器面外面はスス状の炭化物が付着している。色調は赤褐色を呈する。４も胴部破片で、最大径部分に位置する。附加条第１種の縄紋を施文している。焼成は良好。色調は明褐色を呈する。

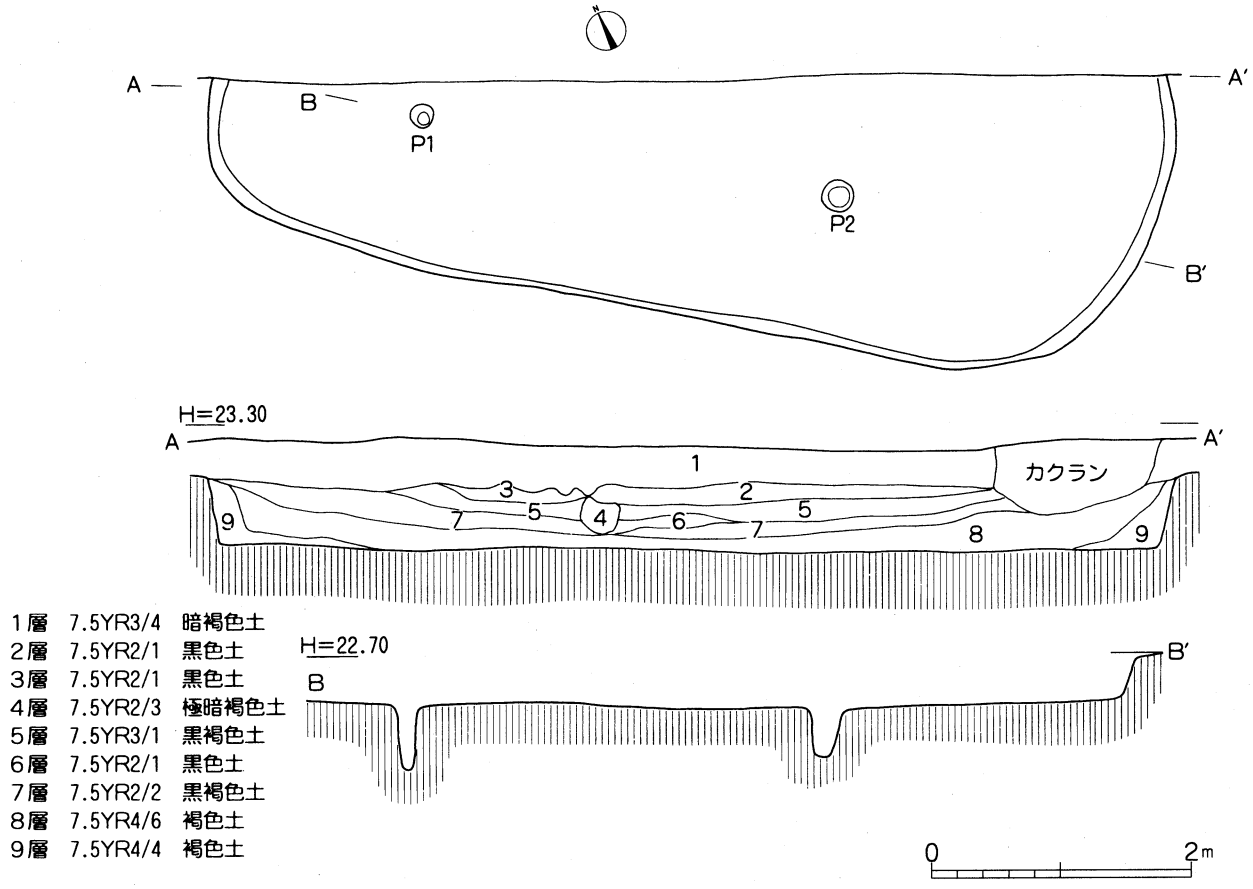


Fig.52　第36号住居跡

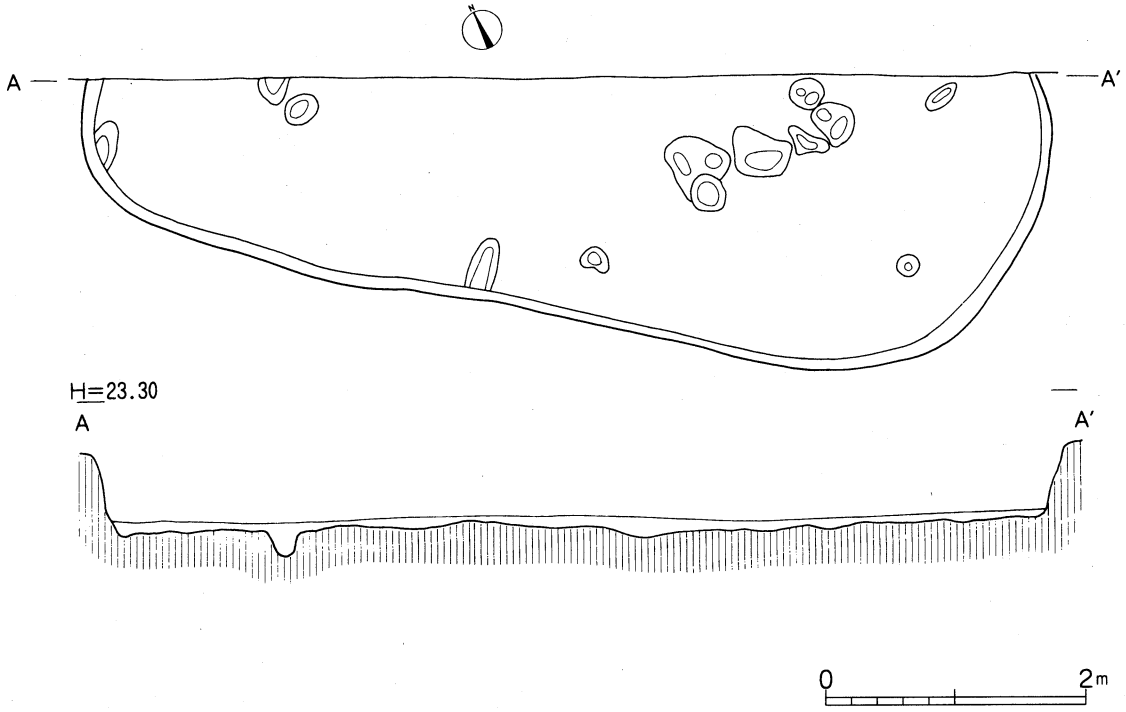


Fig.53　第36号住居跡掘り方

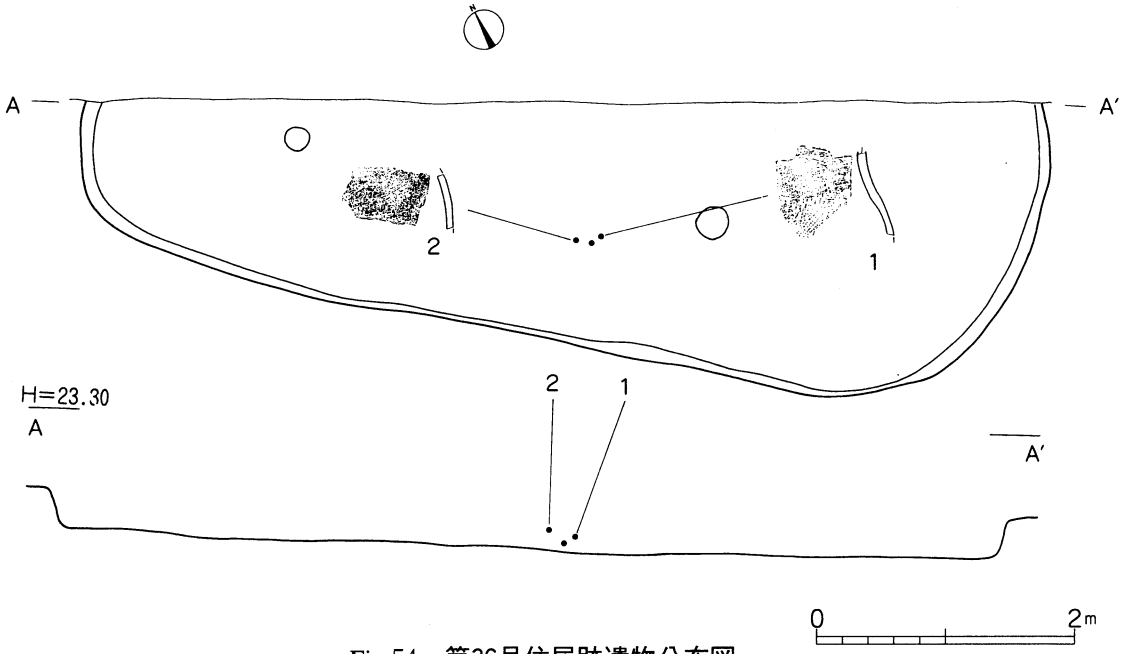


Fig.54　第36号住居跡遺物分布図

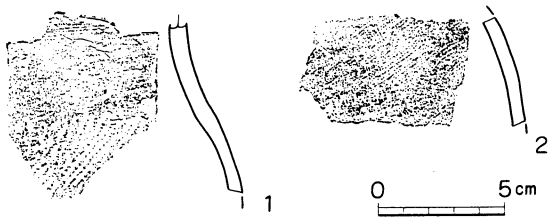


Fig.55　第36号住居跡出土遺物

第37号住居跡（SI37）（Fig.56～60）

位置　本跡は、調査区北東部、6-N、6-O区の標高22.78～22.90mに位置する。北側に第36号住居跡（SI36）が、東側に第35号住居跡（SI35）が、西側に第38号住居跡（SI38）が隣接する。

形態　平面形は、長楕円形を呈する。長軸７.06m、短軸５.18mを測り、長軸方位はN-31°-Wを指す。大型の住居跡である。壁は深く、東辺・西辺・南辺・北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。

覆土　６層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR2/2　黒褐色土　　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
２層　7.5YR2/3　極暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層　7.5YR2/1　黒色土　　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
４層　7.5YR3/2　黒褐色土　　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
５層　7.5YR3/4　暗褐色土　　少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
６層　7.5YR2/3　暗褐色土　　多量のロームブロックを含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴５本および入口施設が確認されたものの、炉跡の検出はできなかった。

柱穴はP１～P５で、うちP１～P４は径は狭いが、深度のもつ主柱穴である。まずP１は西側に位置し、

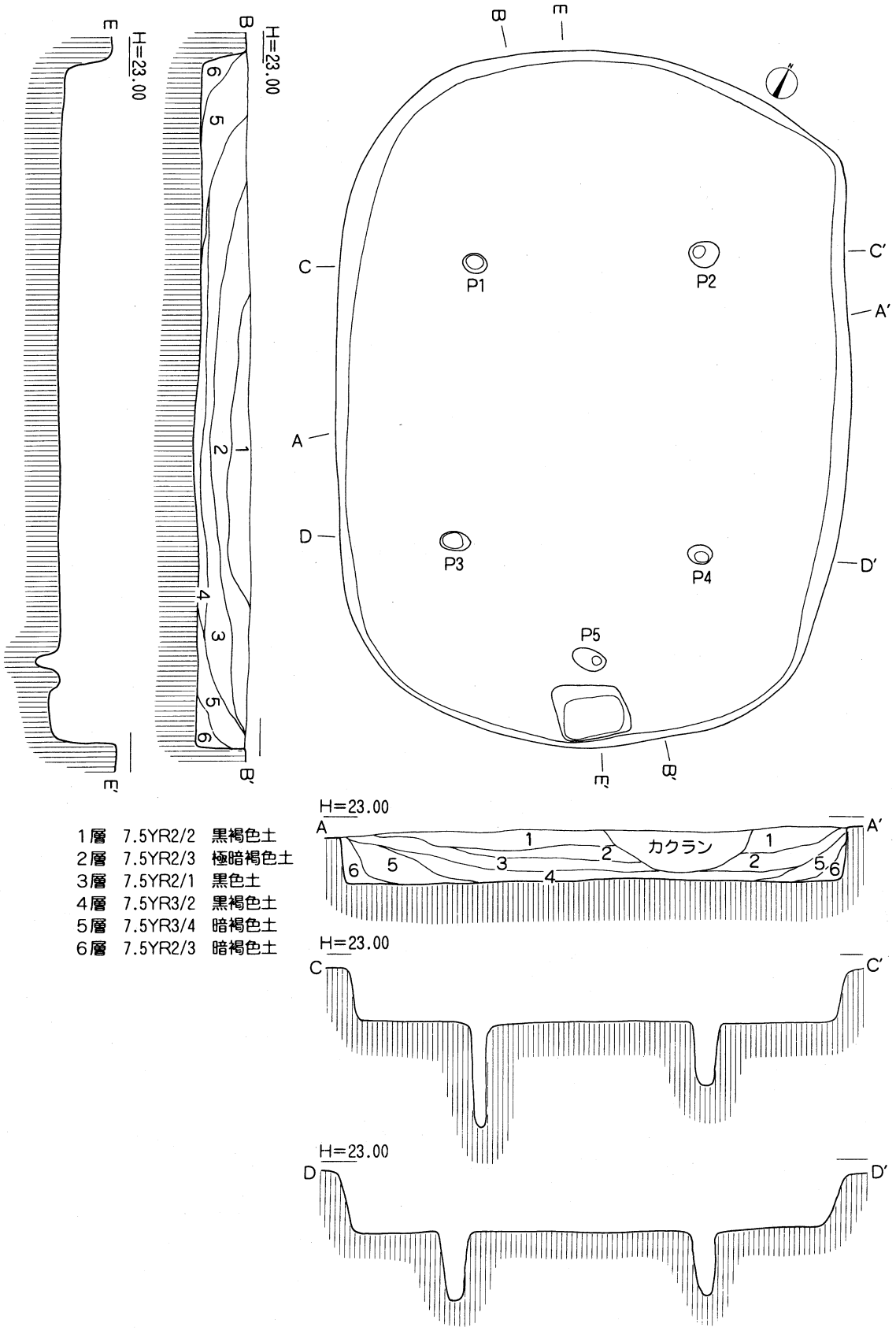


Fig.56　第37号住居跡

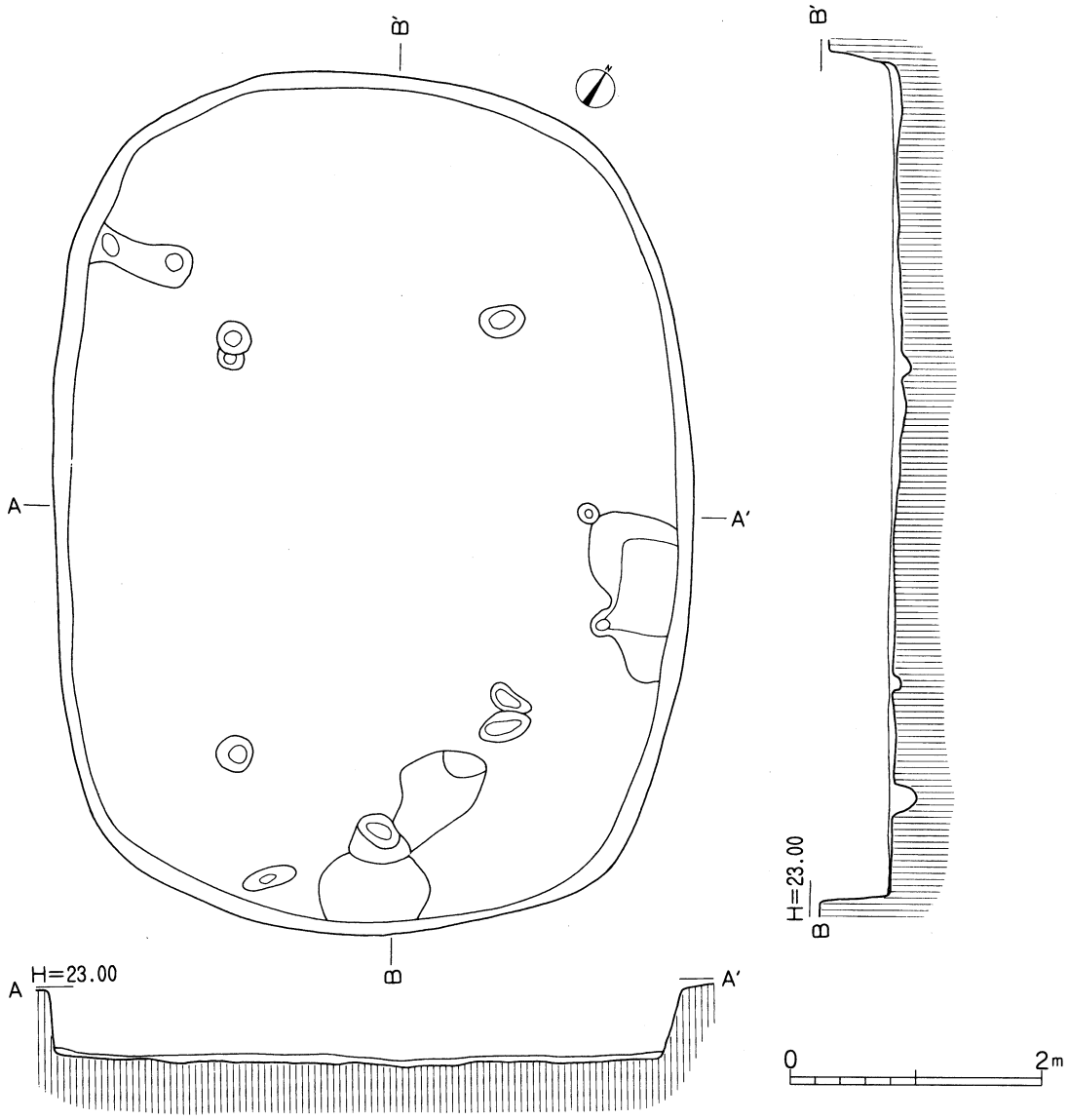


Fig.57　第37号住居跡掘り方

上面が22×22cmの円形、深さ68cm。P２は北側で28×28cmの円形で、深さ66cm。P３は南側に位置し、上面が20×32cmの楕円形で、深さ103cm。P４は東側で、上面が18×28cmの楕円形で、深さ70cmを測る。またP５は入口部に付随する施設のものと考えられ、入口部施設の北側に位置し、上面が22×36cmの楕円形で、深さは24cmを測る。

入口部施設は南東壁中央部に位置し、規模は長軸70cm、短軸54cmの長方形を呈し、深さ12cmを測る。なお、壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。

炉および周溝は構築されていない。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに南東側では粗雑で複雑なピット状の掘り込みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するものの、ややまとまりに欠けるが、壺形土器が北東壁際からまた土製紡錘車が北西壁際から、いずれも床面上から出土している。

遺物　１～４・８は口縁部破片、５～７は底部破片、９～25は胴部破片、26は土製紡錘車である。１は

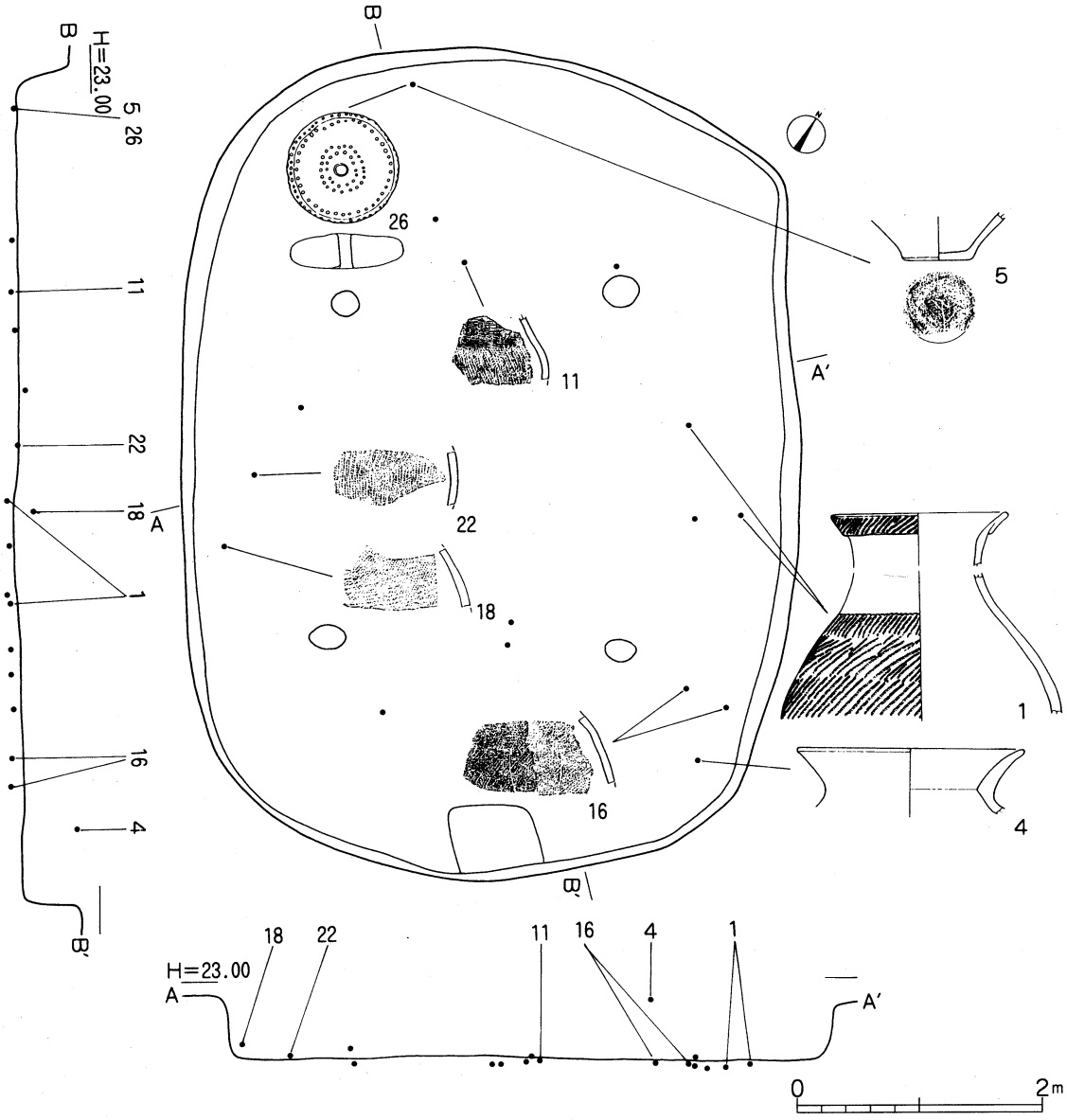


Fig.58　第37号住居跡遺物分布図

口縁部から胴部中位にかけての破片。口縁部は複合口縁で、胴部は内湾し、頸部から口縁部は小さく外反気味に立ち上がる。頸部を無文帯とし、口縁部と胴部に附加条第１種の縄紋を施文する。焼成は良好。色調は明黄褐色を呈する。２も口縁部破片で、複合口縁を呈する。口縁は小さく外反し、口唇部に附加条第１種の縄紋を施文する。焼成は良好。色調は黒褐色を呈する。３も口縁部破片。複合口縁で、外傾して開口する。口縁部に附加条第１種の縄紋を施文する。焼成は良好。色調は黒褐色を呈する。４は土師器甕形土器の口縁部破片。覆土上面の出土である。本跡には伴わないと考える。口縁は大きく外反し、焼成は良好。色調は浅黄褐色を呈する。５～７は底部破片である。５は胴部下位から底部にかけての破片である。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。底面は木葉圧痕ののち、周辺はナデを施す。焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。６・７も底面に木葉痕を残置している。いずれも焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。８は口縁部破片。口縁部および口唇部に附加条第１種の縄紋を施文する。９～25は胴部破片で、とくに９～15は頸部付近の破片。いずれも頸部は横ナデによる無文帯をもち、胴部は附加条第

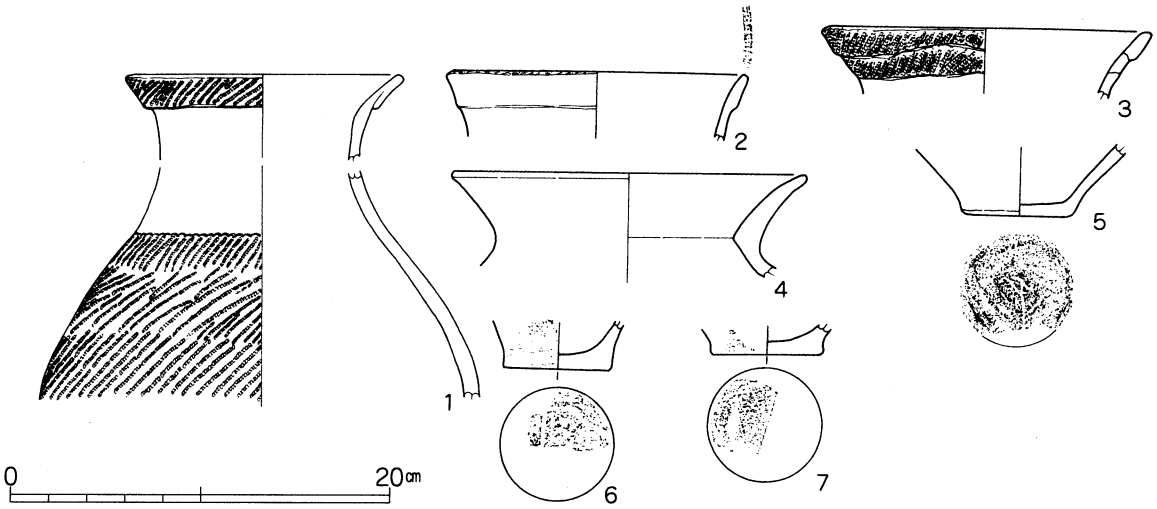


Fig.59　第37号住居跡出土遺物(1)

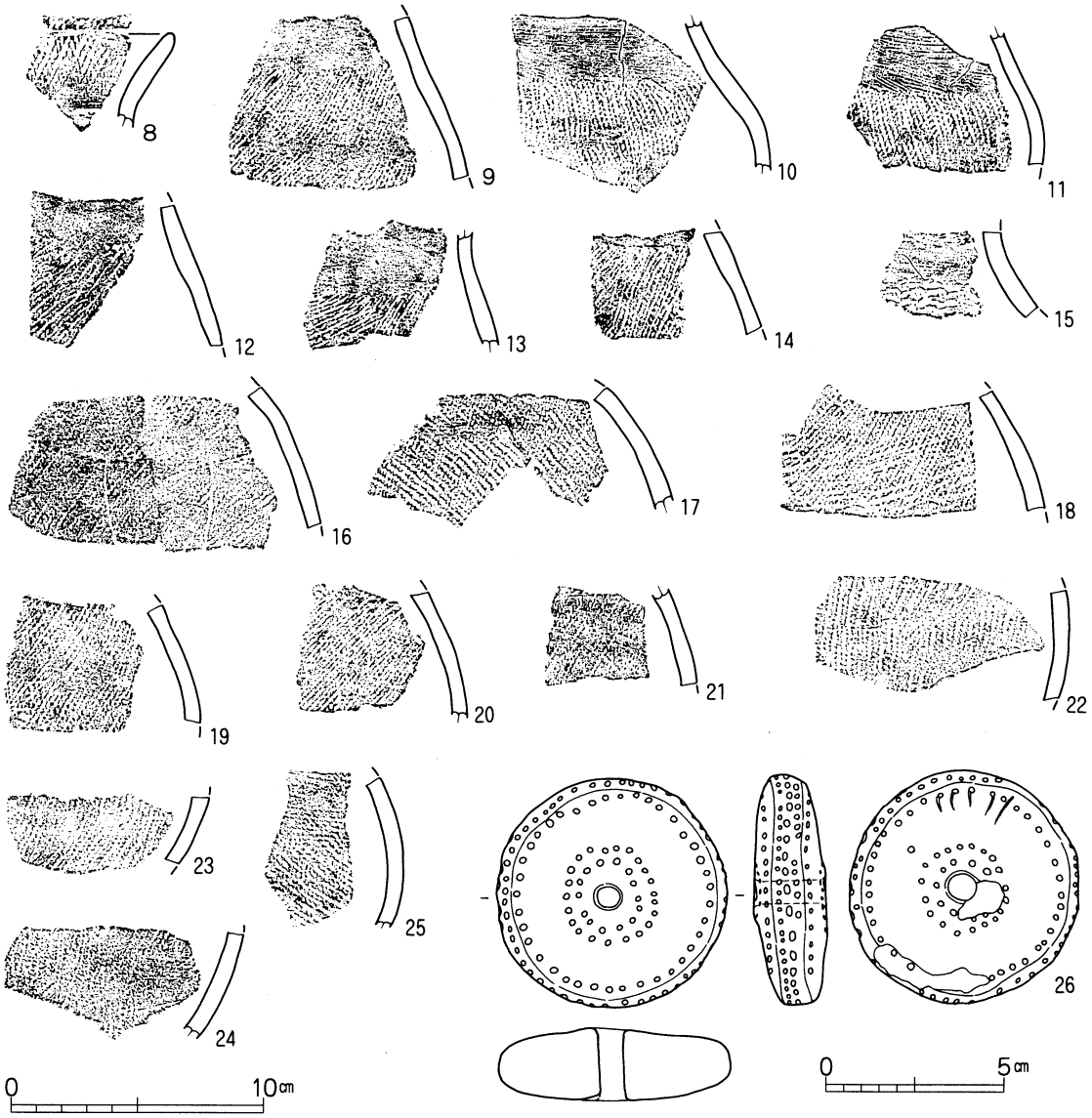


Fig.60　第37号住居跡出土遺物(2)

１種の縄紋を施文する。なお、15はS字状結節文が施文されている。16～25は胴部破片である。うち16～21は胴部上位の破片である。いずれも附加条第１種の縄紋を施文する。また22・25は胴部中位で、やはり附加条第１種の縄紋。23・24は胴部下位の破片。附加条第１種の縄紋を施文する。26は土製紡錘車である。完存品で、円盤状を呈し、最大長62.８㎜、最大幅62.１㎜、最大厚19.９㎜、重量186gを測り、ほぼ中央に直径７.１㎜の円孔を穿つ。表裏両面および側縁部に細い棒状工具による刺突文が巡る。まず中央の円孔を中心に二重に巡らし、さらに外縁部に１条、また側縁部にも３列の刺突紋が巡る。なお、側縁部の３列は中央がやや大きく、両側は細い刺突文列である。焼成は良好で、色調は浅黄褐色を呈する。

第38号住居跡（SI38）（Fig.61～66）

位置　本跡は、調査区北部、6-M、7-M区の標高22.76～22.88mに位置する。北側に第39号住居跡（SI39）が、東側に第37号住居跡（SI37）が隣接する。

形態　平面形は、長楕円形を呈する。長軸６.58m、短軸５.48mを測り、長軸方位はN-40°-Wを指す。中型の住居跡である。壁はやや浅いものの、東辺・西辺・南辺・北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。なお、本跡は焼失家屋で、とくに東側半分に比較的長くしかも太い炭化材が集中している。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR3/1　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
２層　7.5YR2/1　黒色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層　7.5YR3/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
４層　7.5YR3/4　暗褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
５層　7.5YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴５本と地床炉１基が確認された。

柱穴はP１～P５で、うちP１～P４は径は狭いが、深度のもつ主柱穴である。まずP１は西側に位置し、上面が24×28cmの楕円形で、深さ91cmと最も深い。P２は北側で28×28cmの円形で、深さ81cm。P３は南側で、上面が26×28cmのほぼ円形で、深さ84cm。P４は東側で、上面が24×24cmの円形、深さ87cmを測る。またP５は入口部施設に関連するものと考えられ、南壁際の東寄りに設置され、上面が30×54cmの楕円形で、深さは７cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径60cm、短径42cm、深さ10cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層と第３層が焼土層で、とくに第２層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築していない。

掘り方　掘り方は、北壁際は素掘り状態のまま床面とするものの、全体的に床下全面に貼床が認められとくに北側の素掘り部分を除き、北半分は粗雑で複雑な掘り窪みがみられる。

遺物出土状況　遺物は、炉跡の周辺および住居南側に散在し、とくに南西側に集中する傾向がみられる。

遺物　１は頸部から胴下半部にかけての破片で、1/6程度を遺存する。胴部最大径は胴部中部よりも上位に位置し、23.６cmを測る。胴部は胴長で、緩く内湾しながら脹り、頸部は垂直気味に立ち上がりながら外反する。頸部はナデ整形による無文帯をもち、以下附加条第１種の縄紋を施文する。なお、縄紋帯上端部に二条のS字条結節文を巡らしながら区画する。焼成は良好で、黒褐色を呈する。２～６は甕

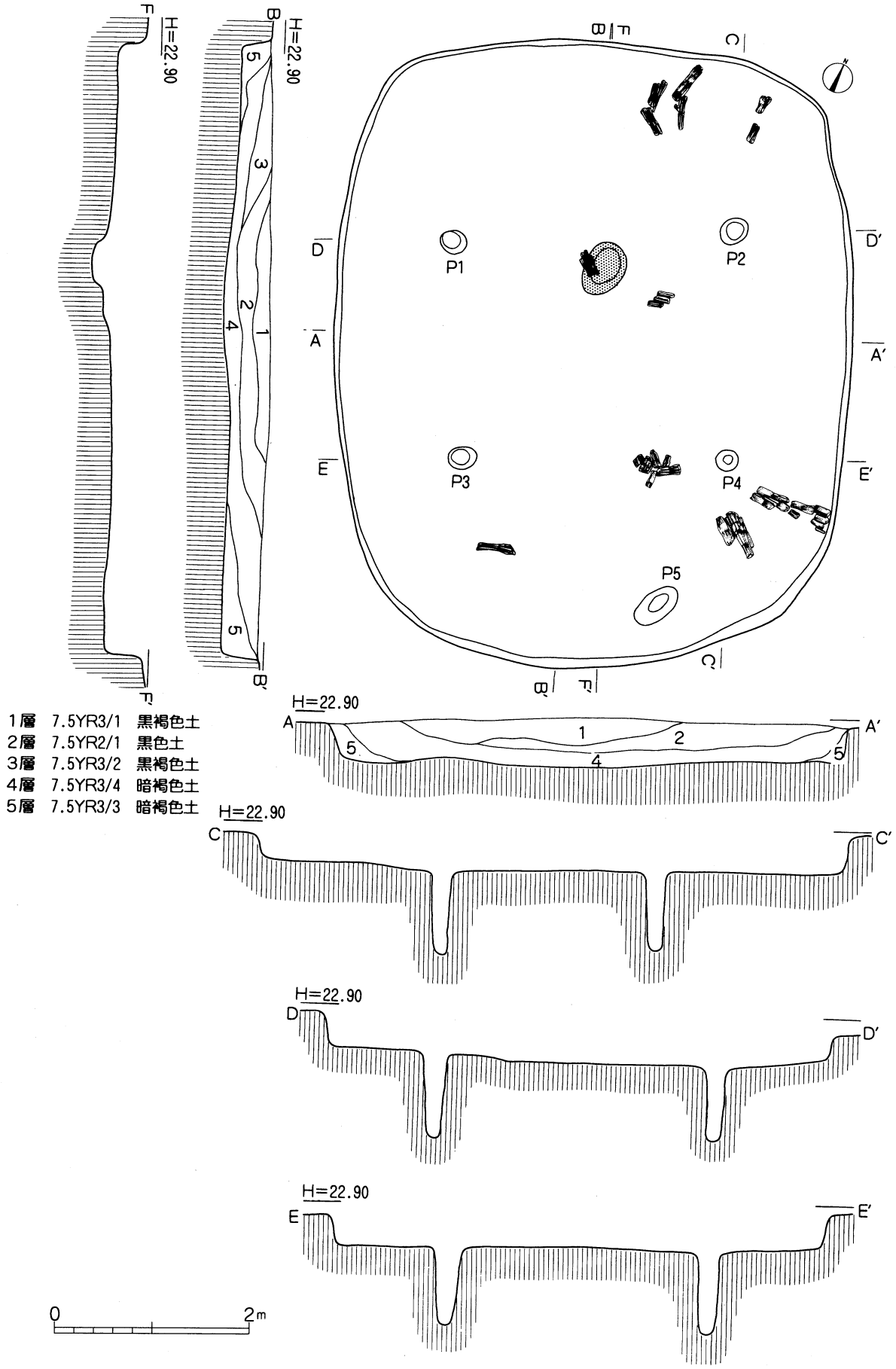


Fig.61　第38号住居跡

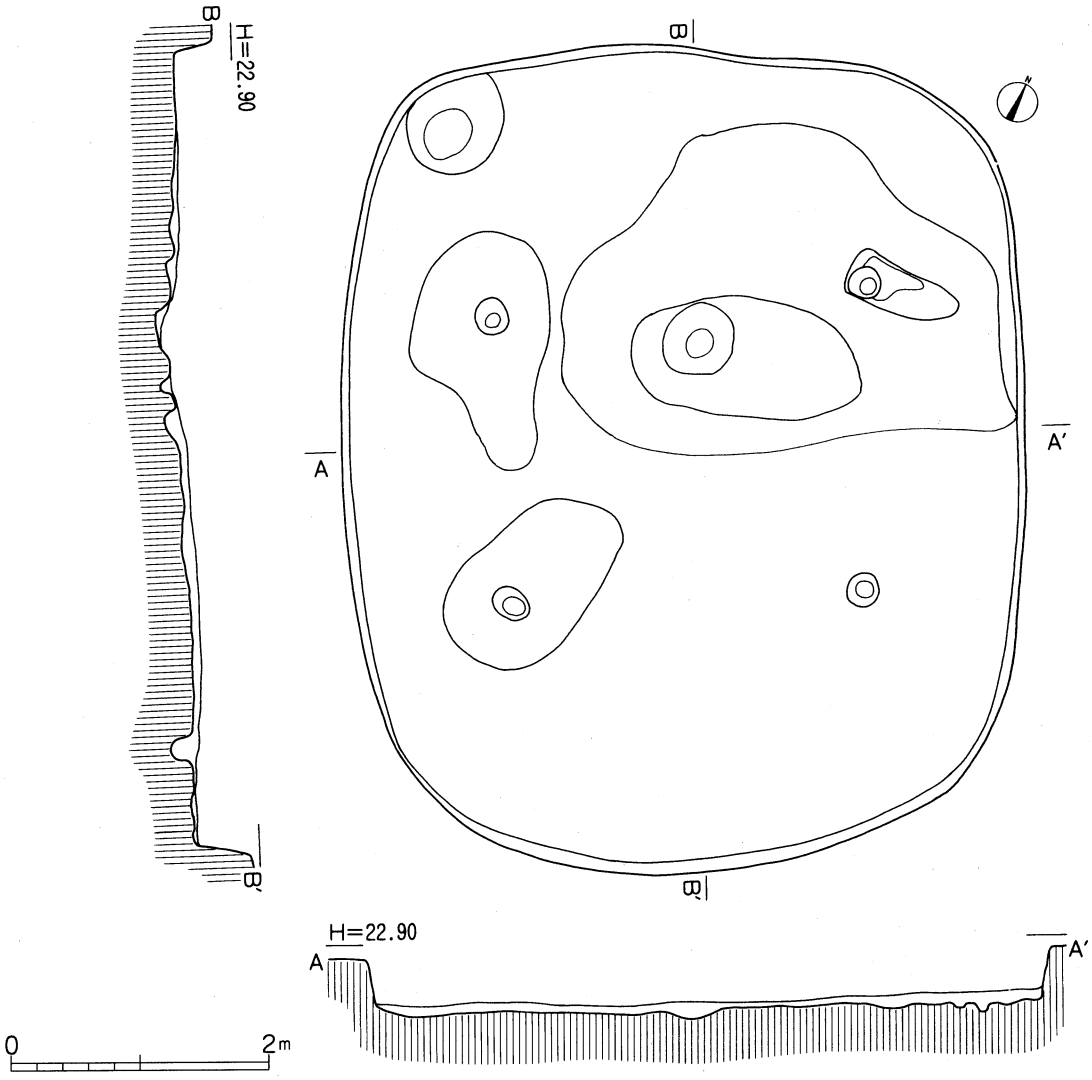
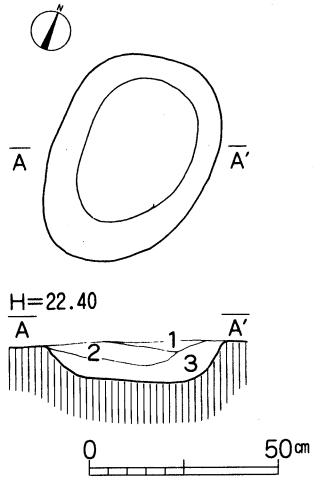


Fig.62　第38号住居跡掘り方



1．黒褐色土
2．赤褐色焼土
3．暗赤褐色焼土

Fig.63　第38号住居跡炉

底部破片である。いずれも平底で、胴下半部は底部からほぼ直線的に外傾しながら立ち上がる。6を除き底面には木葉痕を残置している。なお、2は底部の完存品である。底径8.4cmを測る。6～22は胴部破片である。7は壺の胴上半部の破片。単節RL縄紋を施文し、縄紋帯下端は三段のS字状結節紋を区画文として巡らす。無文帯は赤彩されている。8は附加条第1種の羽状縄紋が施文され、縄紋帯上端は結束端によって区切られている。9・11～19は附加条第1種の縄紋を施文する土器で、9・11～17までが胴部上半部破片。18・19は胴部下半部破片である。20～23はS字状結節文が施文されている一群。

20は三束一単位のS字状結節文が2段認められる。10・21はS字状結節文と附加条縄紋が施文されている。

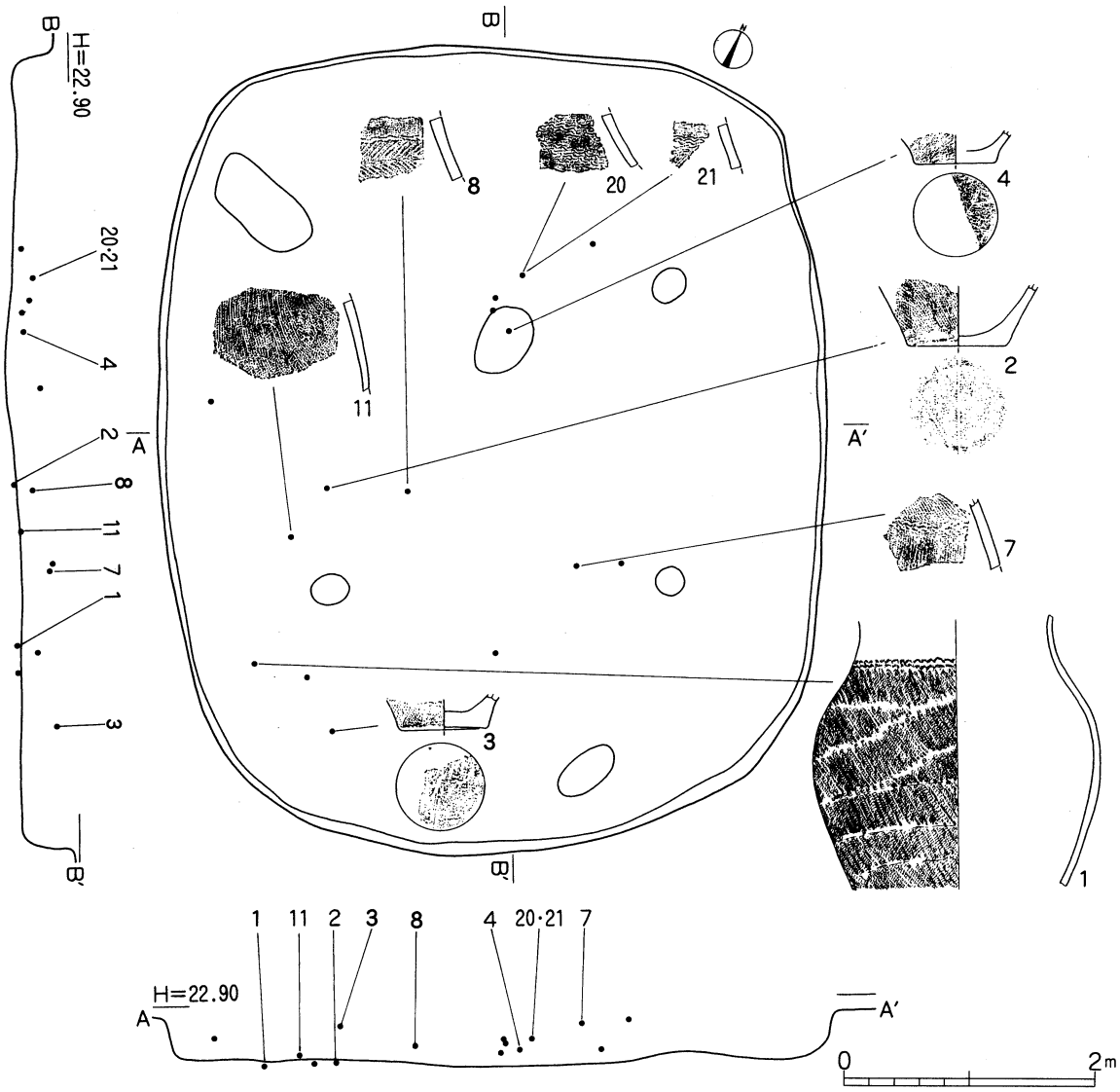


Fig.64　第38号住居跡遺物分布図

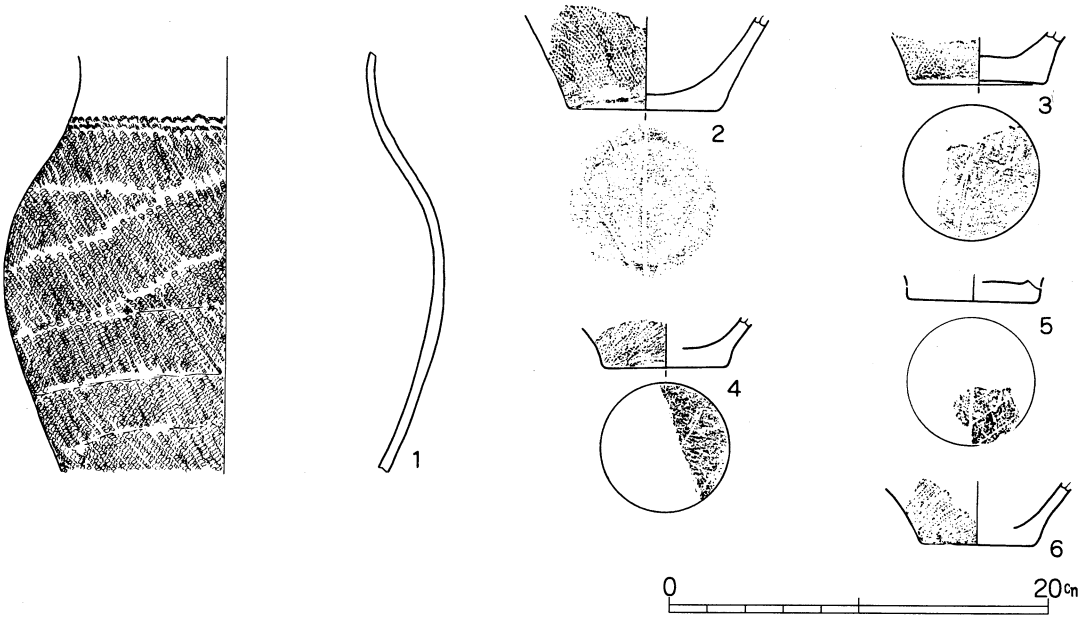


Fig.65　第38号住居跡出土遺物(1)

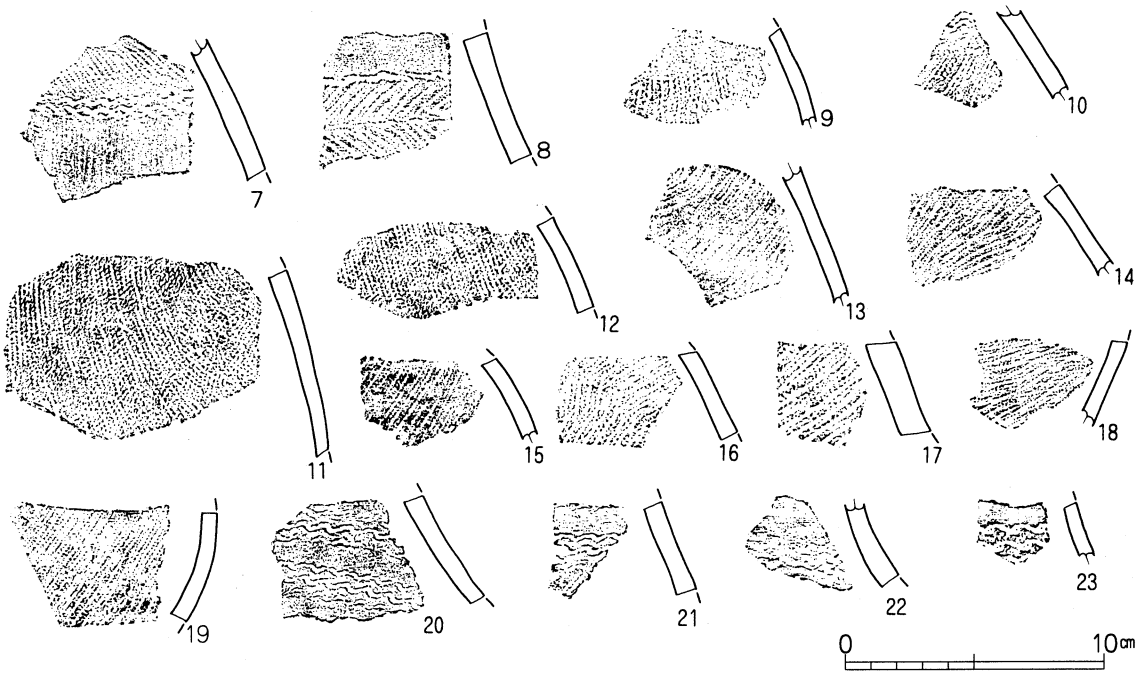


Fig.66　第38号住居跡出土遺物(2)

第39号住居跡（SI39）（Fig.67～71）

位置　本跡は、調査区南東部、4-L、4-M、5-L、5-M区の標高22.61m～22.72mに位置する。南側に第38号住居跡（SI38）が、南東側に第36号住居跡（SI36）と第37号住居跡（SI37）が隣接する。

形態　平面形は、長楕円形を呈する。長軸6.36m、短軸4.90mを測り、長軸方位はN-48°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は南東辺、南西辺がほぼ垂直に、北西辺と北東辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床である。

覆土　4層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層　7.5YR3/4　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層　7.5YR3/2　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

3層　7.5YR4/4　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

4層　7.5YR7/8　明褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基が確認された。

柱穴P1～P4は径は狭いが、やや深度のある主柱穴である。まずP1は西側に位置し、上面が18×18cmの円形で、深さ43cm。P2は北側で28×34cmの楕円形で、深さ60cm。P3は南側で、上面が22×22cmの円形で、深さ43cm。P4は東側で、上面が24×26cmのほぼ円形、深さ56cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径88cm、短径58cm、深さ16cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層～第3層まで焼土粒子を含むが、第2層と第3層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝および入り口施設は構築していない。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、炉周辺およびP3付近には柱穴状の掘り込みがみられる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体でわずかに散在するが、西隅には口縁部の欠けた壺形土器が出土している。

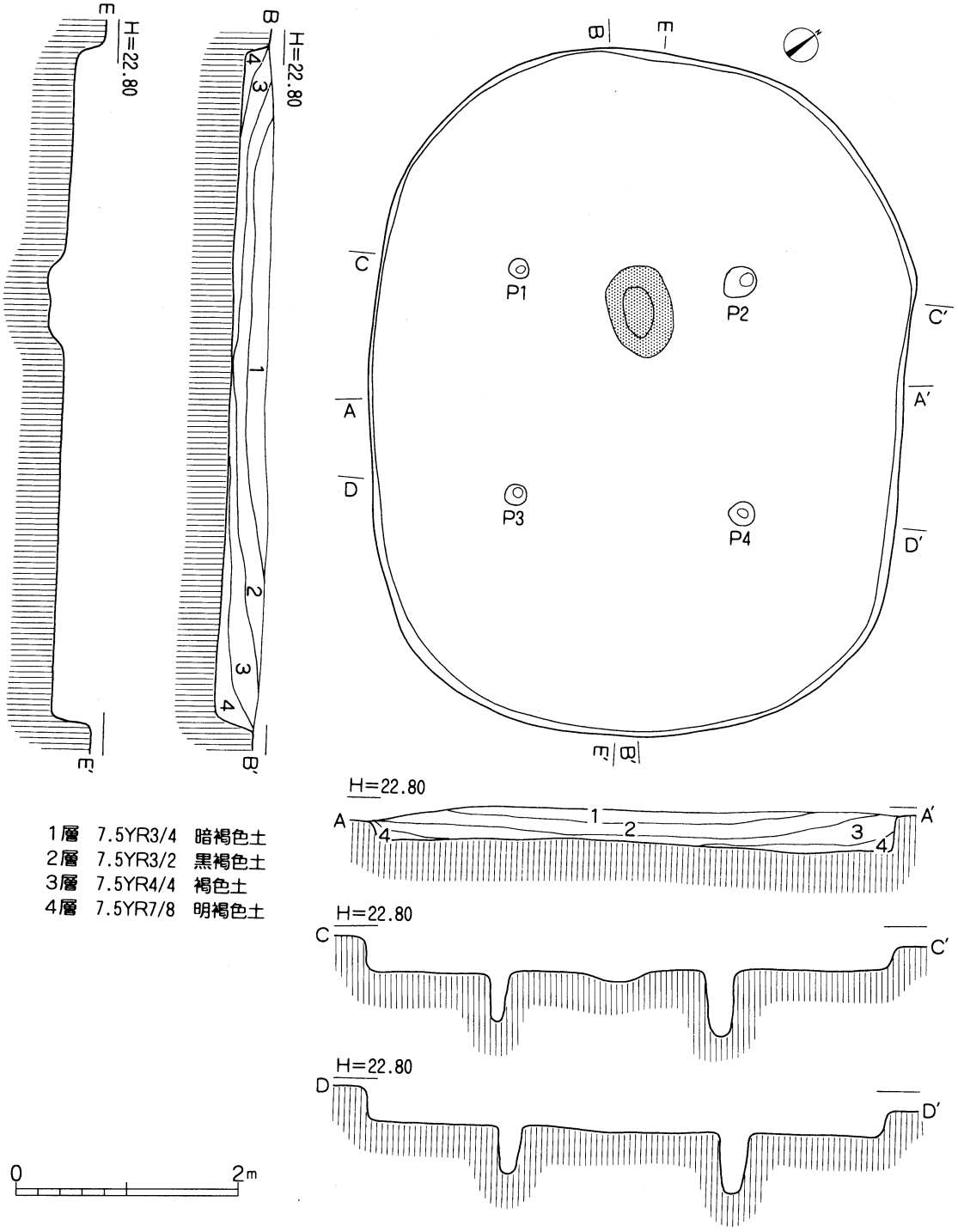


Fig.67　第39号住居跡

遺物　出土した遺物はいずれも土器のみで、壺・器台である。１は口縁部を欠損する小型の壺形土器である。最大径は胴部中位にあり、平底から胴部中位で膨らみをもちながら頸部へ移行する。外面は縦位のハケメ調整を施したのち、胴中位にヘラ状工具による細い沈線を一条巡らす。内面はナデ整形で整える。底面に木葉痕を残置させている。焼成は良好。色調はにぶい赤褐色を呈する。２は器台形土器で、脚部下位を欠損する。口径12.0㎝を測る。坏部口縁は緩く外方へ開く。口縁部は横ナデ整形。体部接合部から脚部はナデ整形を施す。内面はナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。色調は橙色を呈

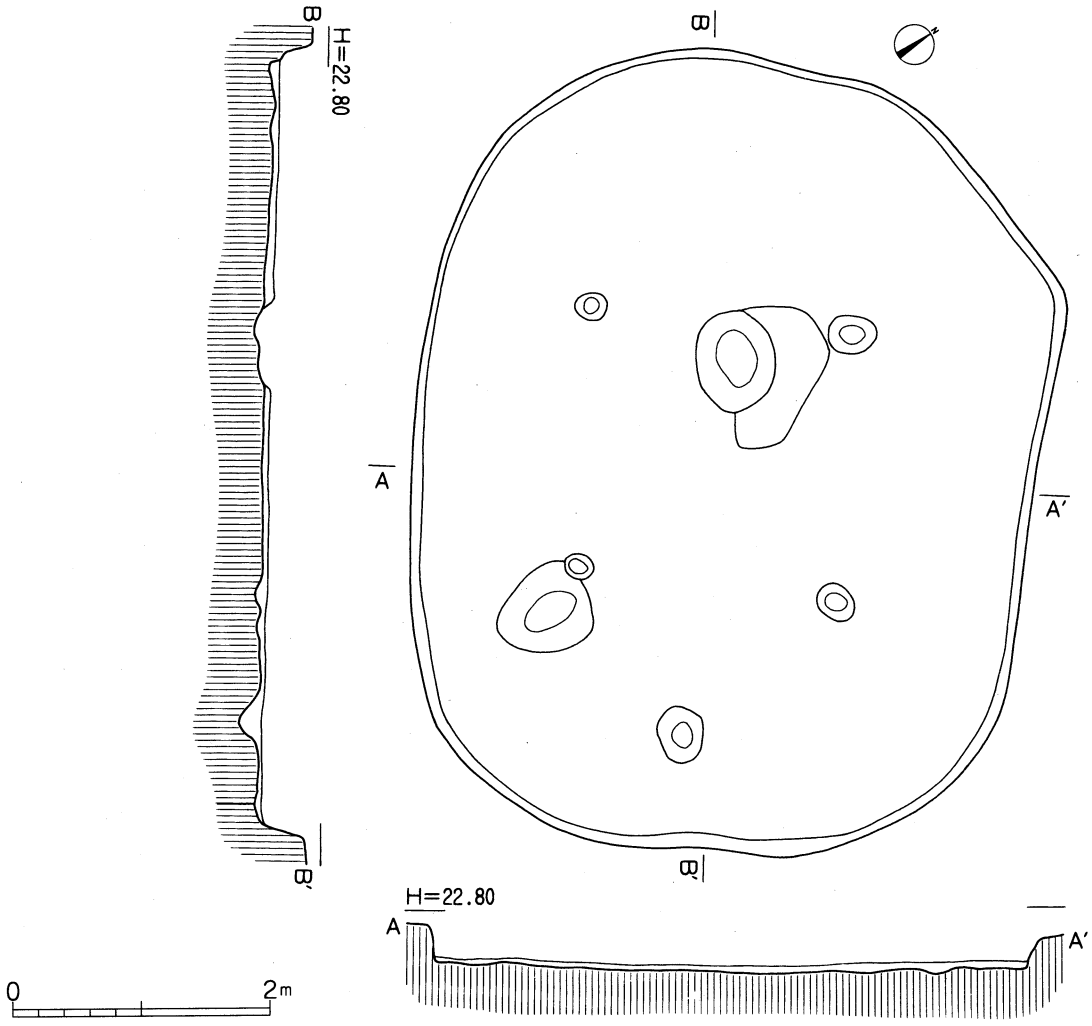


Fig.68　第39号住居跡掘り方

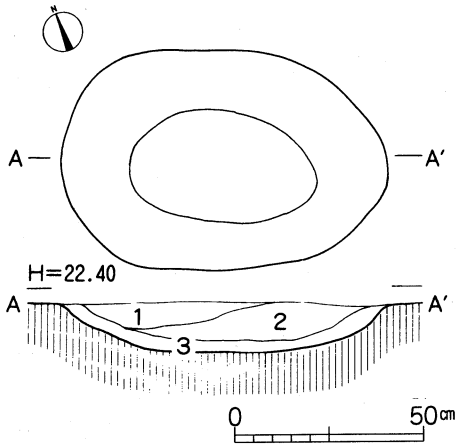


Fig.69　第39号住居跡炉

する。3～5は壺底部破片である。いずれも体部に附加条第1種の縄紋を施文し、底面には木葉痕を残置させている。焼成は良好である。色調は3が赤褐色、4は明赤褐色、5がにぶい褐色を呈する。

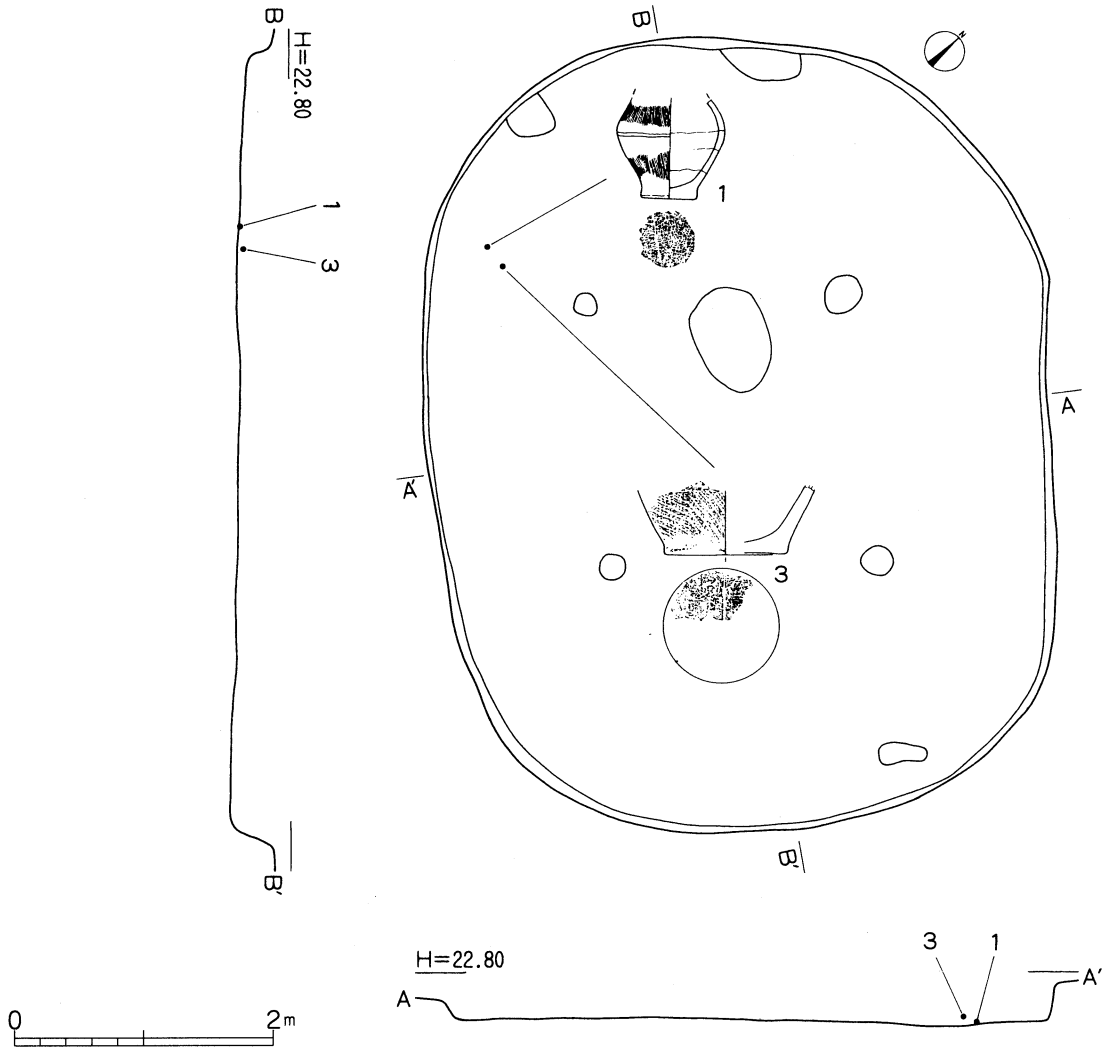


Fig.70　第39号住居跡遺物分布図

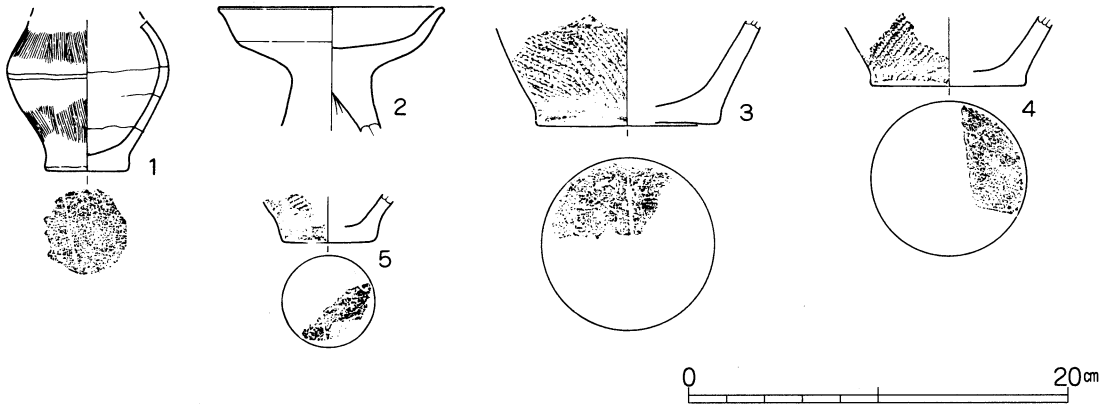


Fig.71　第39号住居跡出土遺物

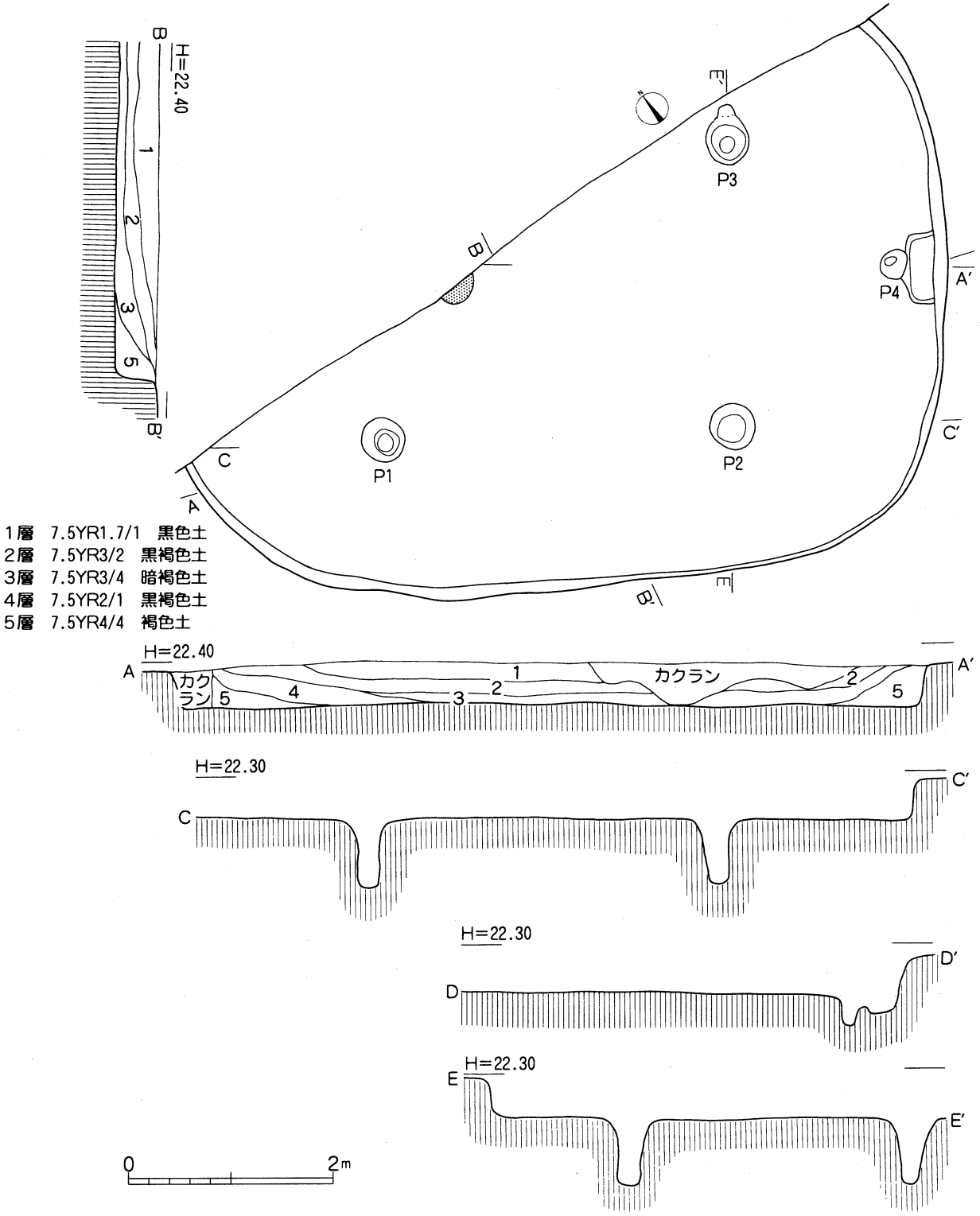


Fig.72　第42号住居跡

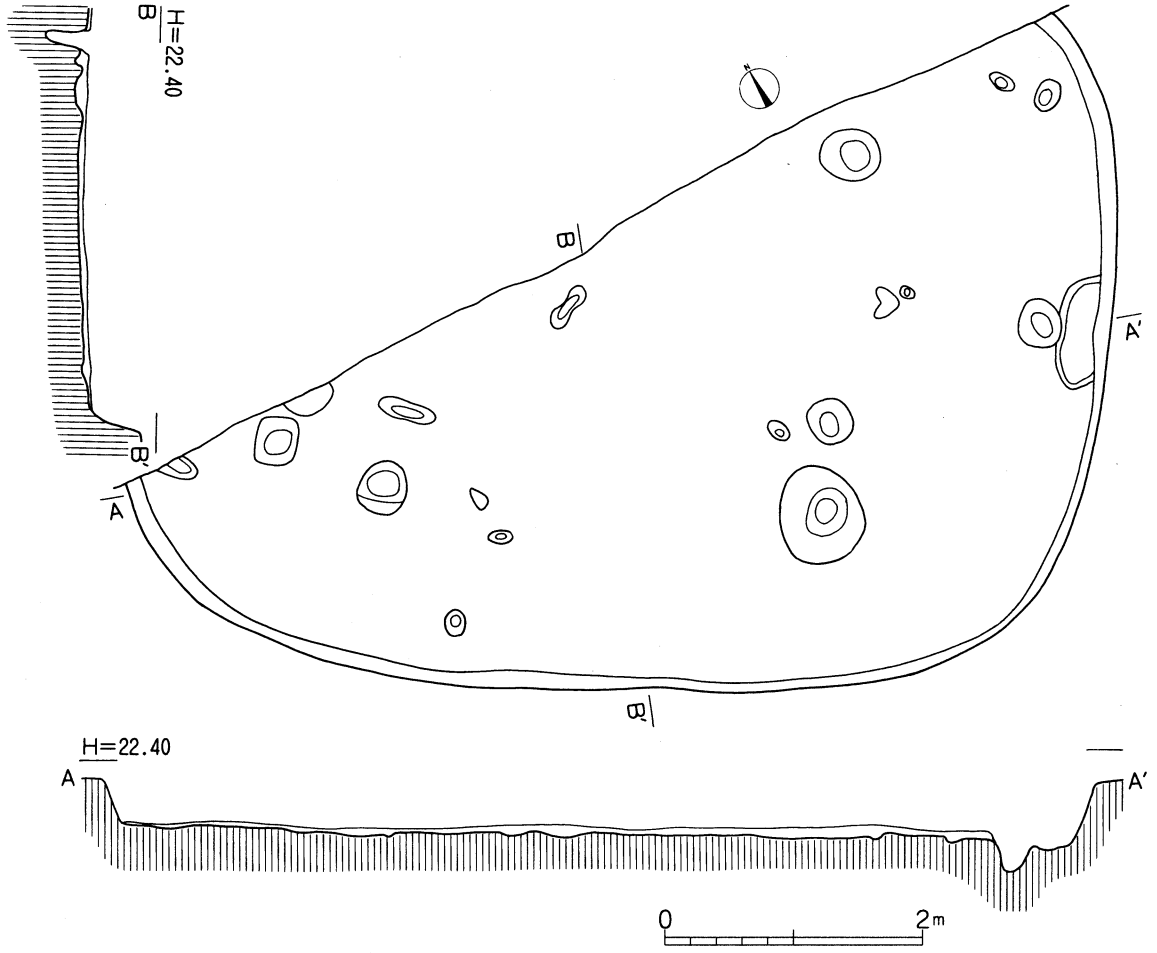


Fig.73　第42号住居跡掘り方

第42号住居跡（SI42）（Fig.72～76）

位置　本跡は、調査区北西部、4-G、4-H、5-G、5-Hの標高23.17m～23.27mに位置する。なお本跡北半分は保存地域にあたるため調査ができず、検出された南側半分のみ発掘した。また南西側で第44号住居跡（SI44）と第45号住居跡（SI45）が隣接する。

形態　平面形は、楕円形を呈する。確認された推定長軸７.58m、検出された短軸５.50mを測り、長軸方位はN-57°-Wを指す、大型の住居跡である。確認された壁の東辺、南辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR1.7/1 黒色土　　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

２層　7.5YR3/2　黒褐色土　微量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

３層　7.5YR3/4　暗褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

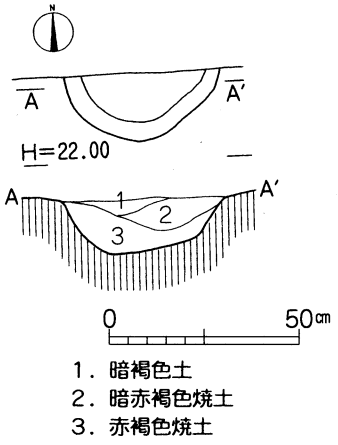


Fig.74　第42号住居跡炉

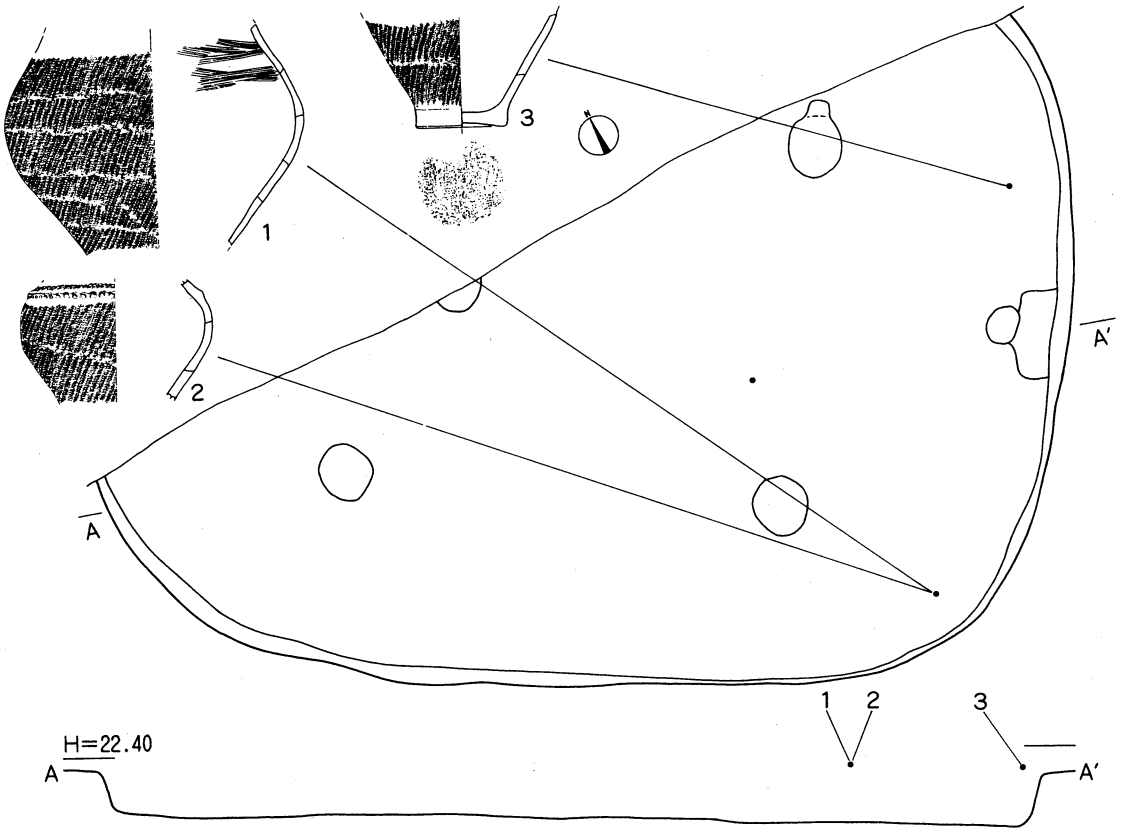


Fig.75　第42号住居跡遺物分布図

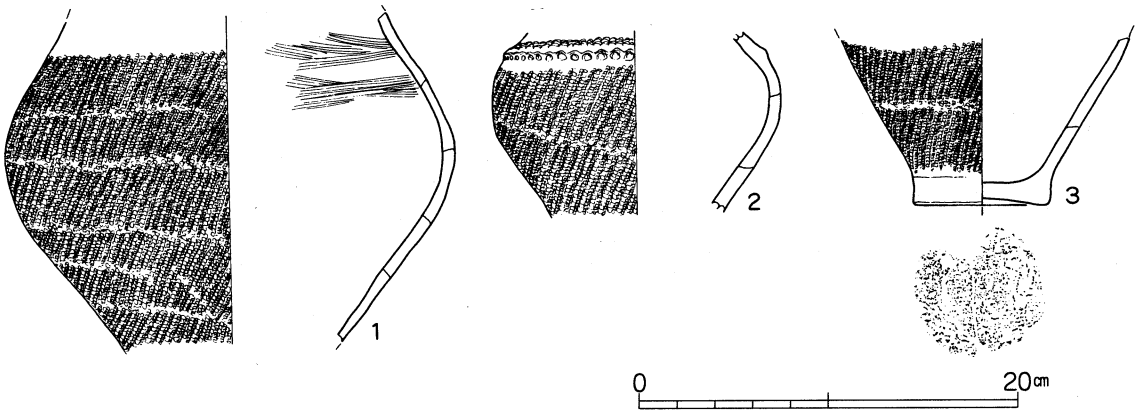


Fig.76　第42号住居跡出土遺物

4層　7.5YR2/1　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

5層　7.5YR4/4　褐色土　　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴3本と入口部施設および地床炉1基が確認された。

主柱穴はP1～P3で、P1は西側に位置し、上面が40×46cmの楕円形を呈し、ほぼ中段においてさらに細く円形に掘り込まている。深さ68cm。P2は南側でやはり2段に掘り込まれ、上面は44×48cmの楕

円形で、深さ65cmを測る。P３は東側にあたり、２段構築で、上面の規模は46×46cm、深さ64cmである。北側に位置する主柱穴は確認できない。またP４は入口部施設に付随するもので、入口部施設に接して掘り込まている。上面は24×30cmの楕円形で、深さは28cmを測る。入口部施設は南東壁際中央に設置され、長軸70cm、短軸30cmの長方形を呈し、深さ13cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈するものの、約半分は保存区域にかかっているため、一部発掘したのみである。位置は住居中央から北寄りに長径32cm、検出された短径16cm、深さ14cmを測る。断面はやや平底で、壁は急傾して立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第１層～第３層まで焼土粒子を含むが、第２層と第３層が焼土層で、とくに第３層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝は構築されていない。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもつが、小規模なピット状の掘り込みをいくつも観察できる。

遺物出土状況　遺物は、住居の南東側にわずかに散在するのみである。

遺物　壺形土器３点を図示した。１は口縁部と底部を欠損する胴部1/3程度の破片である。最大径は胴部中位にあり、24.0㎝を測る。胴部は大きく内湾しながら立ち上がる。外面は附加条第１種の縄紋を施文し、頸部に末端痕を残す。内面は胴上位に横位のハケメ整形、およびナデ整形を施す。焼成は良好。色調は明赤褐色を呈する。２も胴部1/6程度を遺存する壺形土器で、胴部最大径は15.6㎝を測る。胴部中位で大きく張り、内湾しながら立ち上がる。外面は附加条第１種の縄紋に頸部下には縄紋原体による刺突文を巡らし、さらに３条のS字状結節文を施文する。

第43号住居跡（SI43）（Fig.77～81）

位置　本跡は、調査区東端6-H、６-I、７-H、７-I区の標高22.34m～22.44mに位置する。北西側は第42号住居跡（SI42）が、南西側は第47号住居跡（SI47）が隣接し、ほぼ中央部の東西方向に近世以降の溝状遺構（SD01）が走っている。

形態　平面形は、楕円形を呈する。長軸４.94m、短軸４.40mを測り、長軸方位はN-65°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は全体的に浅いが東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR3/1	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
２層	7.5YR2/1	黒色土	微量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層	7.5YR2/3	極暗褐色土	微量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層	7.5YR3/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層	7.5YR4/4	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として柱穴４本と地床炉１基が確認された。

柱穴はP１～P４で、P１は西側に位置し、上面が22×26cmのほぼ円形、深さ53cm。P２は北側で上面は18×28cmの楕円形で、深さ55cm。P３は南側に位置し、上面が11×12cmの円形で、深さ25cm。P４は東側で、上面が12×14cmのほぼ円形、深さ55cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から北西寄りに楕円形に掘り窪め、長径60cm、短径42cm、深さ16cmを測る。断面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第１層から第３層まで焼土粒子を多く含むが、とくに第２

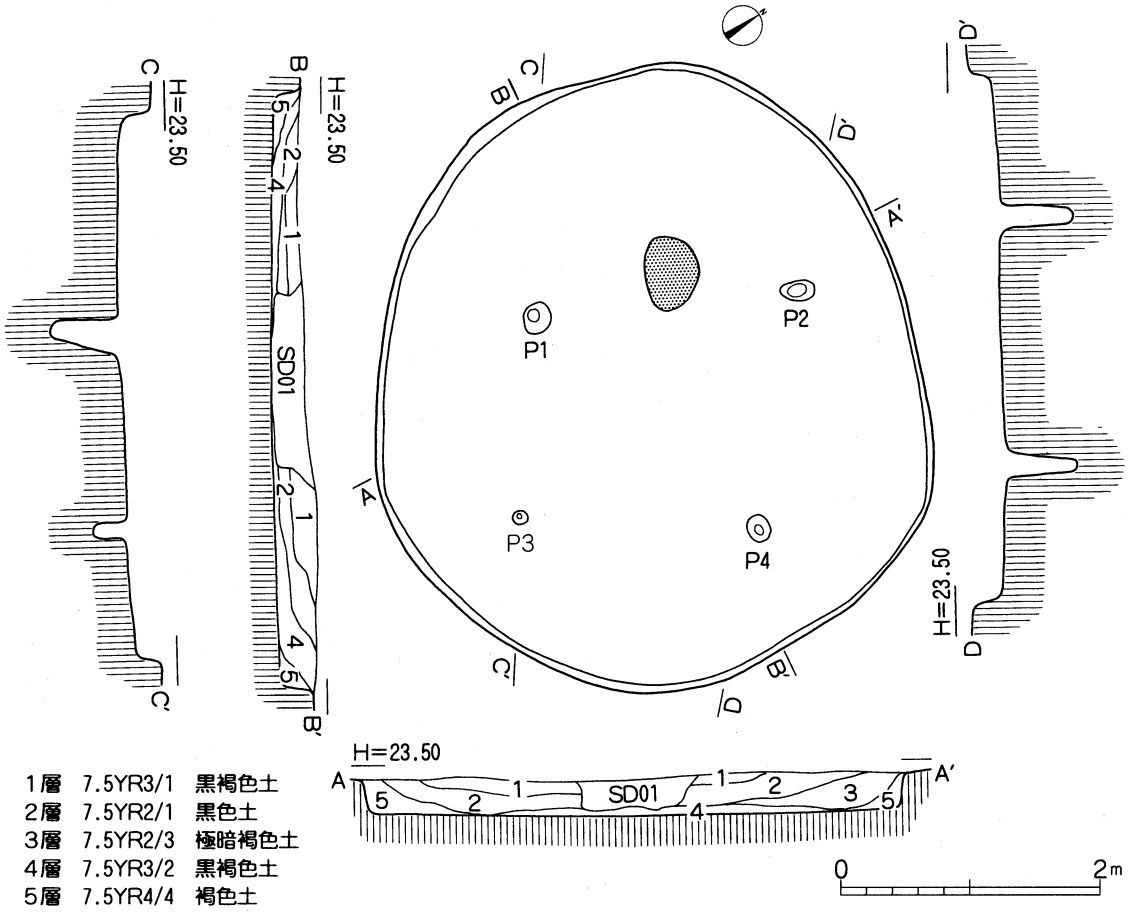


Fig.77　第43号住居跡

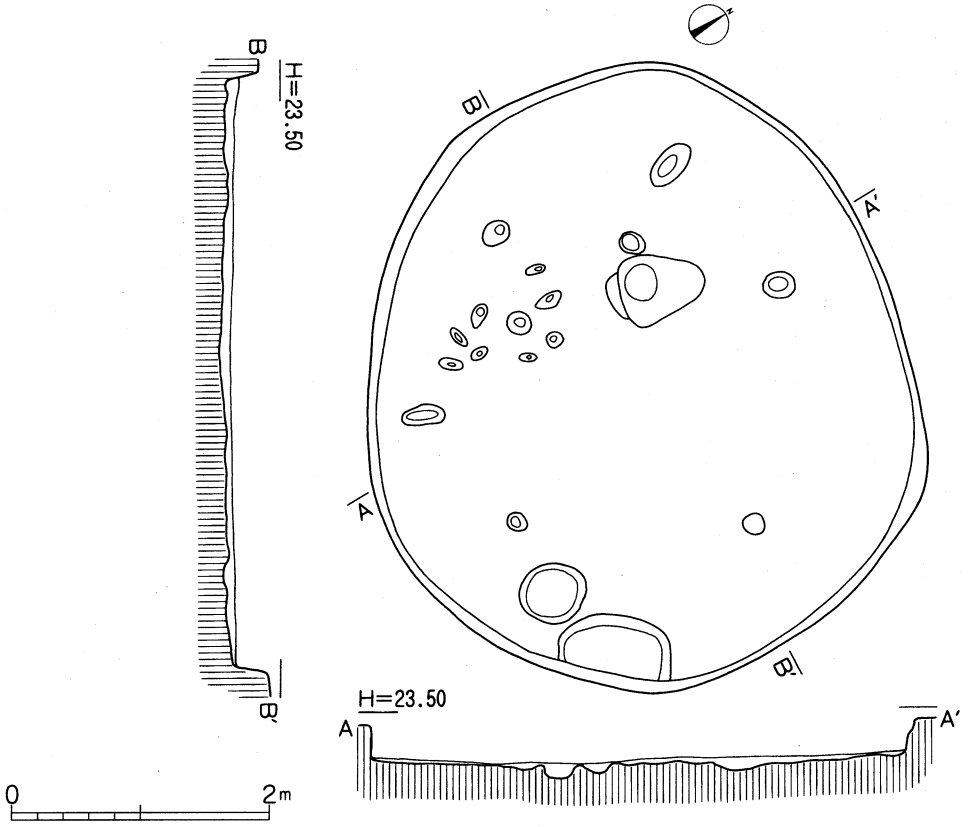


Fig.78　第43号住居跡掘り方

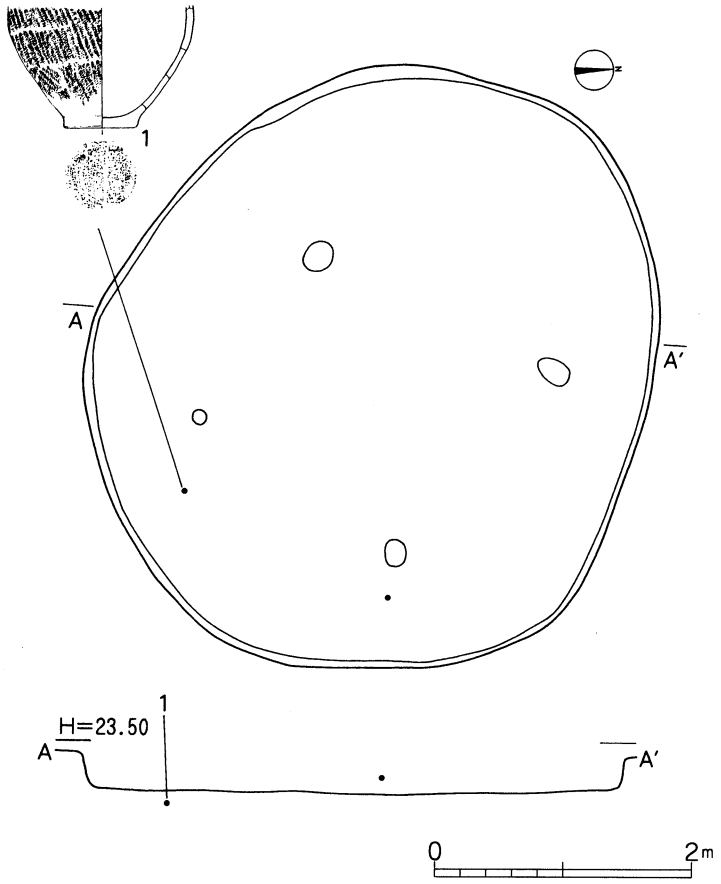
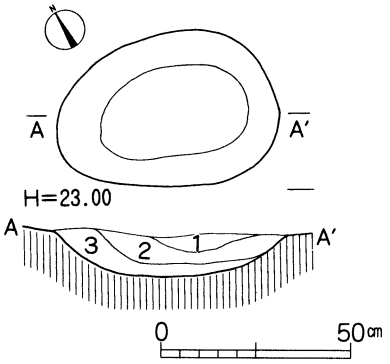


Fig.80　第43号住居跡遺物分布図



1．暗褐色土
2．赤褐色焼土
3．暗赤褐色焼土

Fig.79　第43号住居跡炉

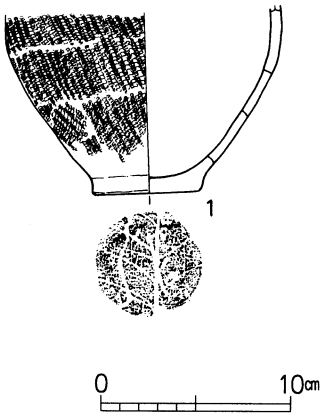


Fig.81　第43号住居跡出土遺物

層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝および入口部は構築されていない。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、西側には小規模な柱穴状の掘り込み数多くがみられる。

遺物出土状況　遺物は、わずかに２点のみで、住居南東側で出土している。

遺物　図示できた遺物は壺１点である。１の壺は底部から胴下半部にかけて1/2程度遺存する。底径５．８㎝、現器高９．２㎝を測る。底部側面はやや垂直に短く立ち上がり、さらに内湾気味の長胴胴部へ移行する。底部側面近くまで附加条第１種の縄紋を施文し、底面には木葉痕がある。内面はナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、色調は明黄褐色を呈する。

第45号住居跡（SI45）（Fig.82～86）

位置　本跡は、調査区北東部、5-F区の標高23.52m～23.60mに位置する。南東側に第44号住居跡（SI44）が、北西側に第46号住居跡（SI46）が隣接する

形態　平面形は、略円形を呈する。長軸３.72m、短軸３.60mを測り、長軸方位はN-５°-Eを指し、小型の住居跡である。壁は北壁がほぼ垂直に、東辺、西辺、北辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　２層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR3/1　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

２層　7.5YR3/4　暗褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴５本と地床炉１基が確認された。

柱穴はP１～P４で、P１は北西側に位置し、上面が16×18cmのほぼ円形、深さ26cm。P２は北東側で16×16cmの円形で、深さ48cm。P３は南西側に位置し、上面が16×16cmの円形で、深さ39cm。P４は南東側で、上面が16×16cmの円形、深さ25cmを測る。またP５はP４の北側に位置し、支柱穴である。炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに長径40cm、短径30cm、深さ５cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層と第３層が焼土粒子を含む土層で、とくに最下層の第３層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝および入口部施設は構築しない。

掘り方　掘り方は、床下全面に及ぶが、とくに住居中央部の南北方向に溝状の掘り窪みが認められるほか、南東壁際にも掘り込みが施されている。

遺物出土状況　遺物は、北東壁際に集中しているが、全体的には出土数はわずかである。

遺物　埦・壺・甕類が出土している。１は埦形土器の口縁部破片。口縁部約1/8程度遺存し、推定口径8.0cmを測る。口縁部は大きく内湾する。外面は横位のナデ整形。内面は横位のハケメ調整を施す。焼成は良好。赤褐色を呈する。２は壺底部破片で、1/8程度遺存する。推定底径 6.4 cmを測る。平底の底部から直線的に外方へ開く。胴部下位には附加条第１種の縄紋を施文し、底面には木葉痕を残置する。焼成は良好で、褐色を呈する。３も同じく壺底部破片である。1/4程遺存し、推定底径は6.6cmを測る。平底の底部から体部は直線的に外方へ開いて立ち上がる。胴部下位には附加条第１種の縄紋を施文し、底面には木葉痕を残置する。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。４は甕で、底部から胴下半部にかけて遺存する。底径 7.0 cm、現器高 8.8 cmを測る。平底の底部から胴長の胴部へ移行する。体部外面は横位のナデ整形。内面もナデ整形によって仕上げている。底面には木葉痕を残す。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

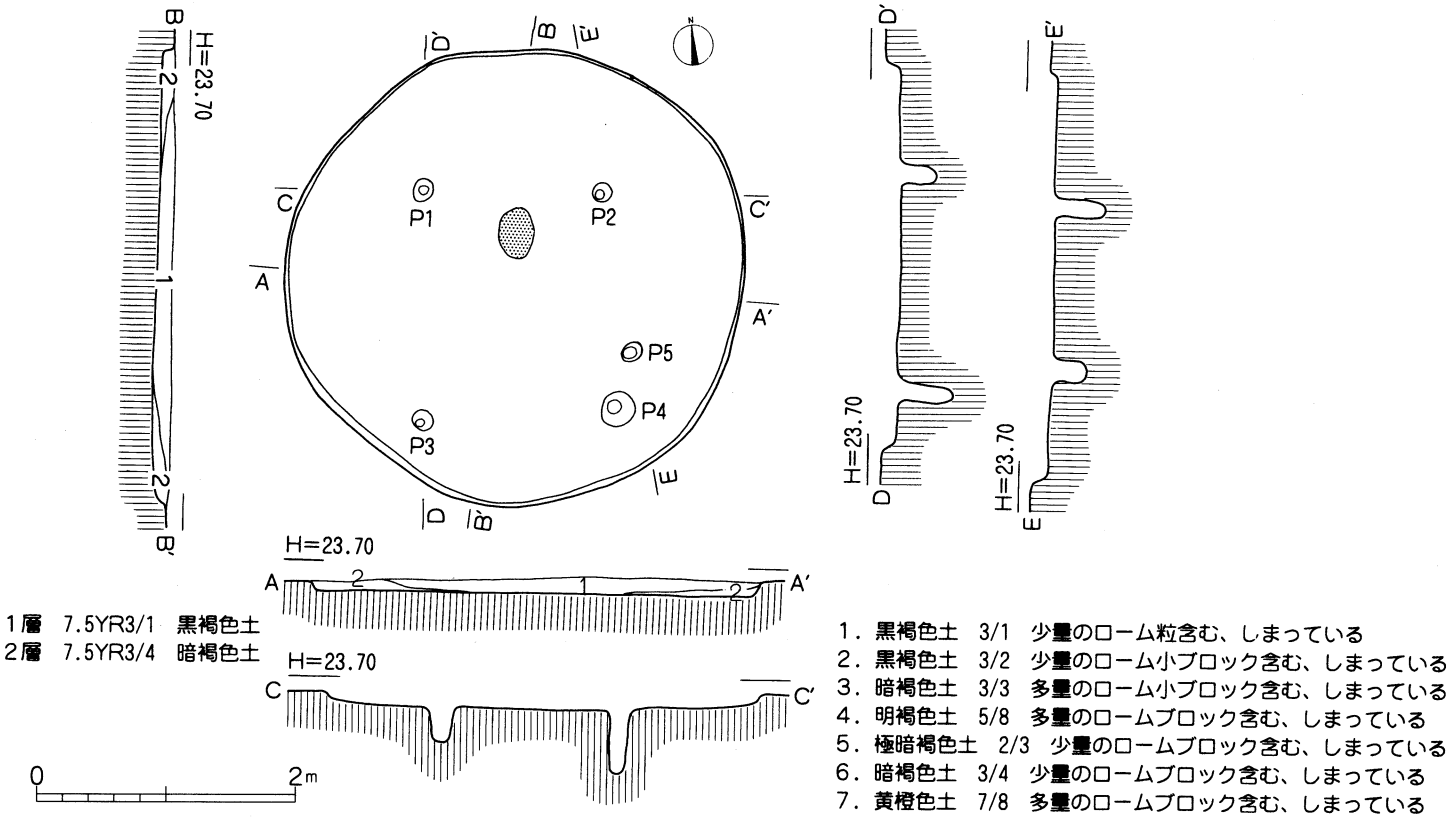


Fig.82　第45号住居跡

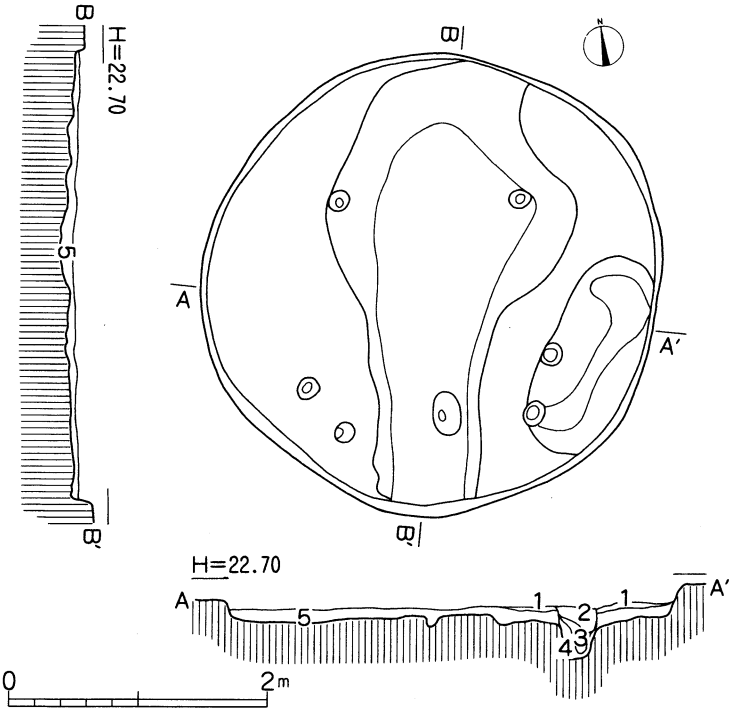


Fig.83　第45号住居跡掘り方

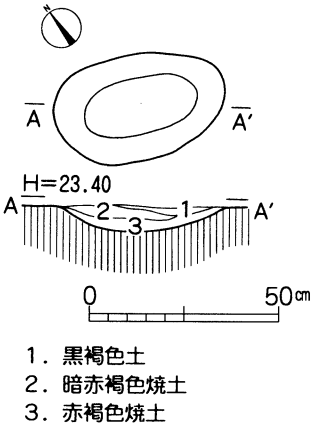


Fig.84　第45号住居跡炉

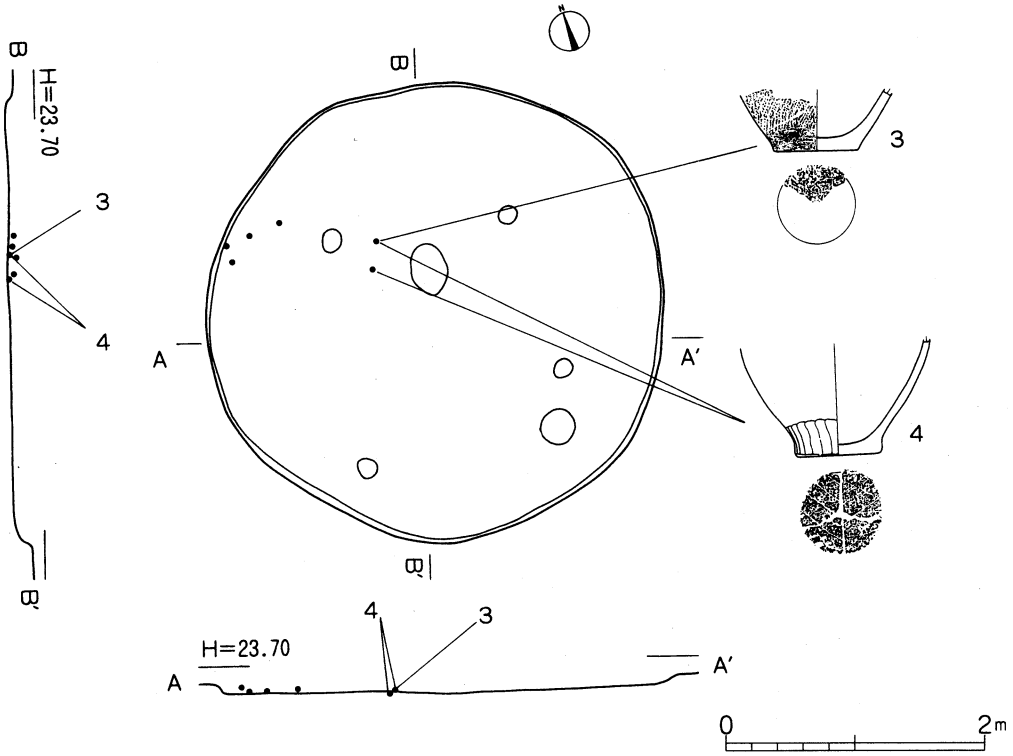


Fig.85　第45号住居跡遺物分布図

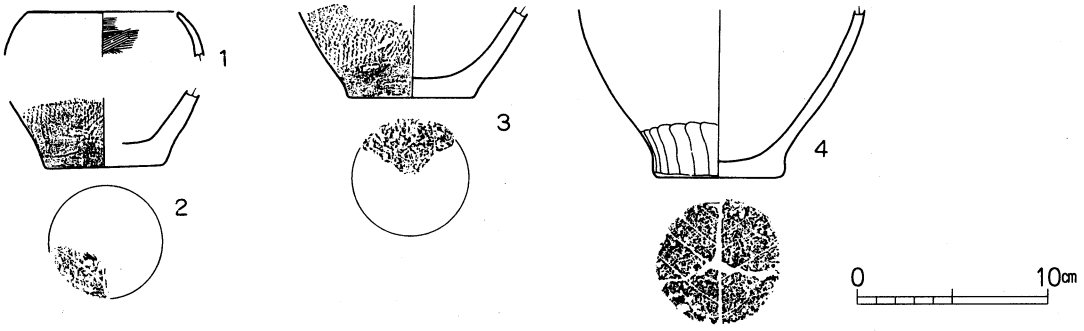


Fig.86　第45号住居跡出土遺物

第47号住居跡（SI47）（Fig.87～90）

位置　本跡は、調査区北西部、8-Gの標高22.36～22.40mに位置する。北東側に第43号住居跡（SI43）が、南東側に第48号住居跡（SI48）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸2.86m、短軸2.64mを測り、長軸方位はN-20°-Eを指す。小型の住居跡である。壁は北辺がほぼ垂直に、東辺、西辺、南辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。

覆土　4層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層　7.5YR2/1　黒色土　　少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層　7.5YR3/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

3層　7.5YR2/2　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

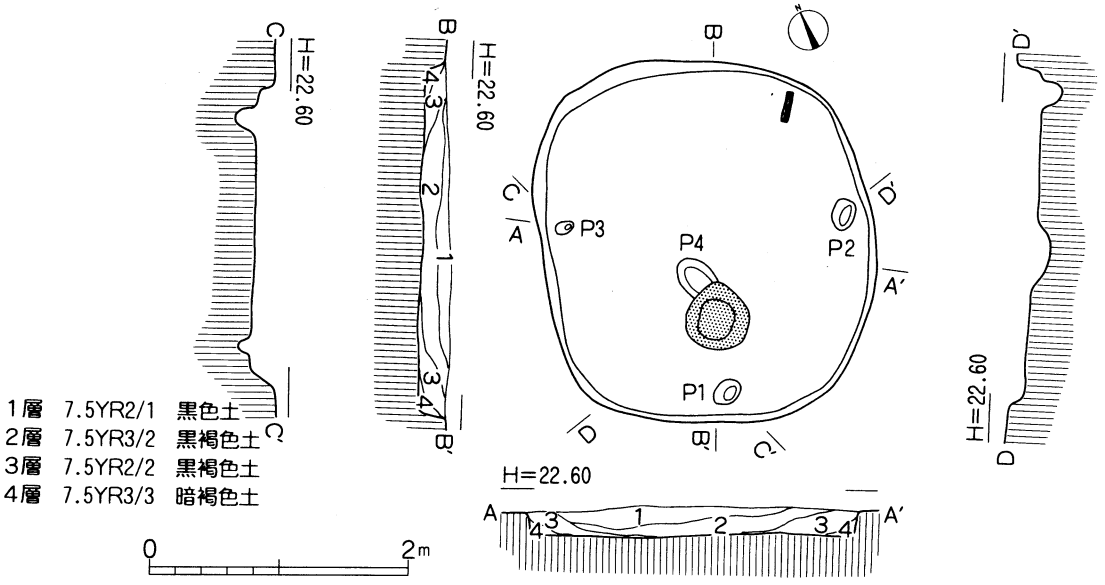


Fig.87　第47号住居跡

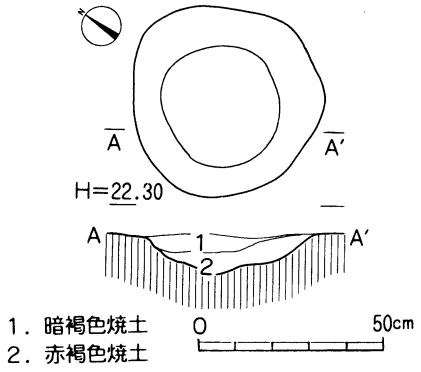


Fig.88　第47号住居跡炉

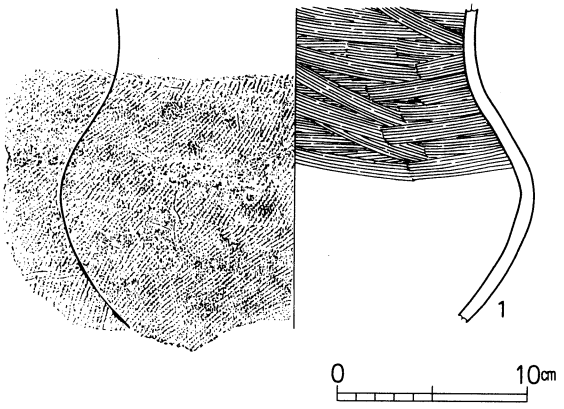


Fig.90　第47号住居跡出土遺物

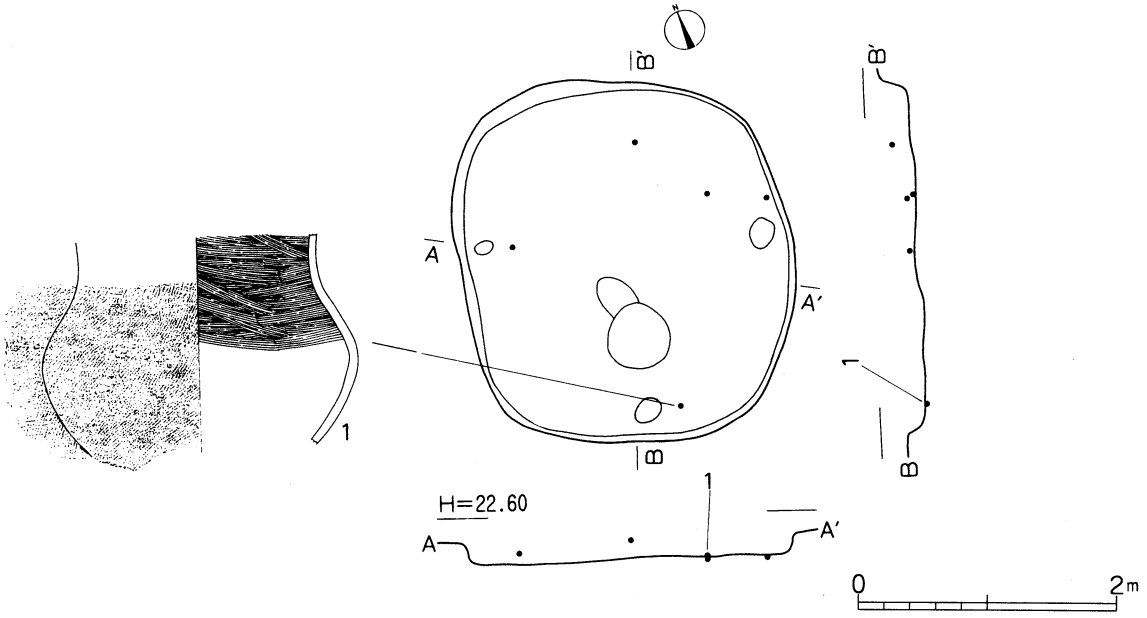


Fig.89　第47号住居跡遺物分布図

4層　7.5YR3/3　暗褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P3で、それぞれ南壁際、東壁際、西壁際に設置された主柱穴と考える。まずP1は南壁際に位置し、上面が18×24cmの楕円形、深さ15cm。P2は東壁際で上面が18×26cmの楕円形で、深さ17cm。P3は西壁際に位置し、上面が10×14cmの楕円形で、深さ11cm。またP4は炉址の北側に設置されており、炉に付随するピットと考えられ、上面が26×28cmの楕円形で、深さは7cmを測る。

炉は地床炉で、円形を呈し、住居中央から南東寄りに径52cm、深さ15cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層と第2層ともが焼土粒を含む土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

なお、住居跡北西側に焼土塊が堆積し、北東壁際の床面上には炭化物が検出されている。焼失家屋であった可能性が高いが、量的には少ないため炭化材や焼土塊等の場外処理が行なわれたのであろう。

周溝は構築しない。

掘り方　掘り方は、素掘り状態で床面構築されており、貼床等の床処理は認められなかった。

遺物出土状況　遺物は、壁際周囲にわずかに散在するのみである。

遺物　図示できたのは壺1のみである。1は頸部から胴下半部にかけて約1/4程度遺存する。最大径は胴部中位にもち、胴部は上下から押しつぶしたような偏球形を呈し、頸部は垂直気味に立ち上がる。胴部最大径は25.0cmを測る。文様は頸部を無文帯とし、胴部に附加条第1種の縄紋を施文し、文様帯上端が二条のS字状結節文によって区切られている。頸部無文帯はナデ整形。なお、外面には炭化状のススがほぼ全面に付着している。内面は頸部から肩部付近にかけて横位のハケメ調整を施し、以下ナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する

第２節　川崎山Ⅱ期集落の遺構と遺物

１．第Ⅱ期の概要

本遺跡の集落形成第Ⅱ期とされるのは、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかかるいわゆる「古墳時代出現期」に比定されるもので、先の萱田遺跡群で検出された権現後遺跡における「第Ⅳ群B」、ヲサル山遺跡における「Ⅱ群」に相当する。ここでは第04、05、06、08、11、22、32、40、48、51号住居跡の10軒が検出されている。この中で萱田遺跡群でもそうであったが、この時期弥生的様相と古墳的様相の住居跡に分けられているようであるが、本遺跡では住居跡の形態からみて第22号住居跡以外はとくに大きな差異はみられない。また住居群の展開は第40号を除いて調査区の南半分にまとまっている。これは当該期の集落がさらに南方もしくは南西方への広がりを示唆している。というのも、本遺跡の北端の調査において当段階の住居跡が検出されていないことからもそれを追認している。

なお、このⅡ期住居跡群の特徴として、まず出土する土器群が弥生的様相をもつ壷とともに口唇部に刻目をもつ台付甕を土器組成の基本としていることである。第04、06、22、48、51号住居跡がこうした土器組成をもち、とくに第04、06、22号住居跡は出土遺物も豊富で、注目されてもよい条件を備えている。また住居跡の形態は第22号住居跡のように大型の円形プランをもつものは皆無で、他はいずれも隅丸方形もしくは隅丸長方形である。概して方形は小さく、長方形は中型を呈する。

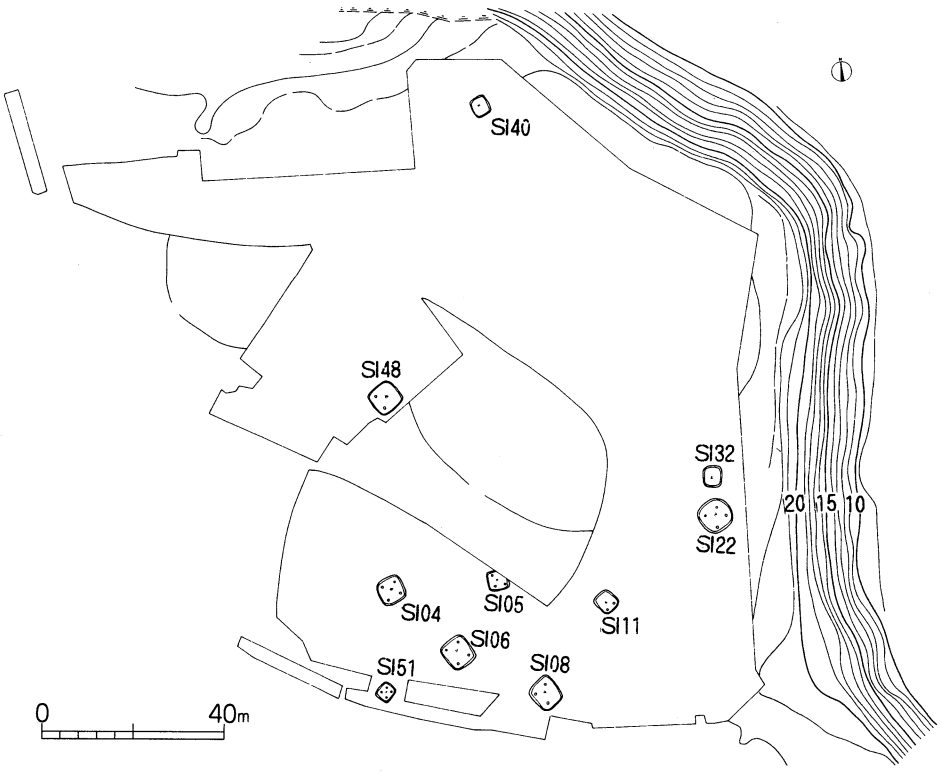


Fig.91　川崎山Ⅱ期集落

2．第Ⅱ期の住居址

第04号住居跡（SI04）（Fig.92～97）

位置　本跡は、調査区南東部にあたり、13-H、13-I、14-H、14-I区の標高22.26m～22.40mに位置し、住居跡群の南西端にあたる。北側に第01号住居跡（第01号）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸6.50m、短軸5.40mを測り、長軸方位はN-23°-Wを指し、やや大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　9層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層	10YR3/1	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
2層	10YR2/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
3層	10YR6/8	明黄褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
4層	10YR3/4	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
5層	10YR3/4	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
6層	10YR2/3	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
7層	10YR5/6	黄褐色土	少量のロームブロックを含み、締まりがある。
8層	10YR3/4	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
9層	10YR3/3	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりにやや欠ける。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉2基および入口施設の盛り土遺構とピット2本が確認された。

主柱穴はP1～P4で、P1は北西部に位置し、上面が20×18cmのほぼ円形、深さ48cm。P2は北東部で22×18cmの楕円形で、深さ59cm。P3は南西部に位置し、上面が22×18cmの楕円形で、深さ47cm。P4は南東部で、28×26cmの円形、深さ45cmを測る。また南壁やや東寄りに径約150cm、幅35cm、高さ8cmの土盛り遺構の入口部を設け、さらに2基のピットをもつ。P5は上面が24×18cmの楕円形で、深さ20cmと浅い深度。P6は上面が52×40cmとやや広い楕円形で、深さは60cmと深く掘り込まている。

周溝は全周し、幅8～22cm、深さ4～11cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。

地床炉は住居中央から北西寄りに東西2基設置され、西側炉（炉1）の平面形は楕円形を呈し、長径112cm、短径64cm、深さ12cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。また東側炉（炉2）の平面形も楕円形を呈し、長径74cm、短径50cm、深さ10cmを測る。断面はやや鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。焼土層が中央部に堆積し、円形の燃焼面を形づくっている。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに北壁際や南壁際周辺には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに住居北側から南東部の炉跡周辺に集中する。その内、個体として図示しうる資料は、壺1点、鉢1点、甕12点、坩1点である。

遺物　1は1／4程度遺存する壺頸胴部破片である。胴中位に最大径をもつもので、外面頸部から胴上位にかけてRLの単節縄紋が施文され、さらに縄紋帯の上下端には3条のS字状結節文によって区画している。外面無文部は丁寧なミガキが施され、赤彩が加えられている。内面頸部には横位のハケメが施され、無文部にはナデ整形が加えられている。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。2は口縁部のみ遺存する鉢である。推定口径14.0cmである。体部から外傾しながら開口する。外面には横・斜め、内面に

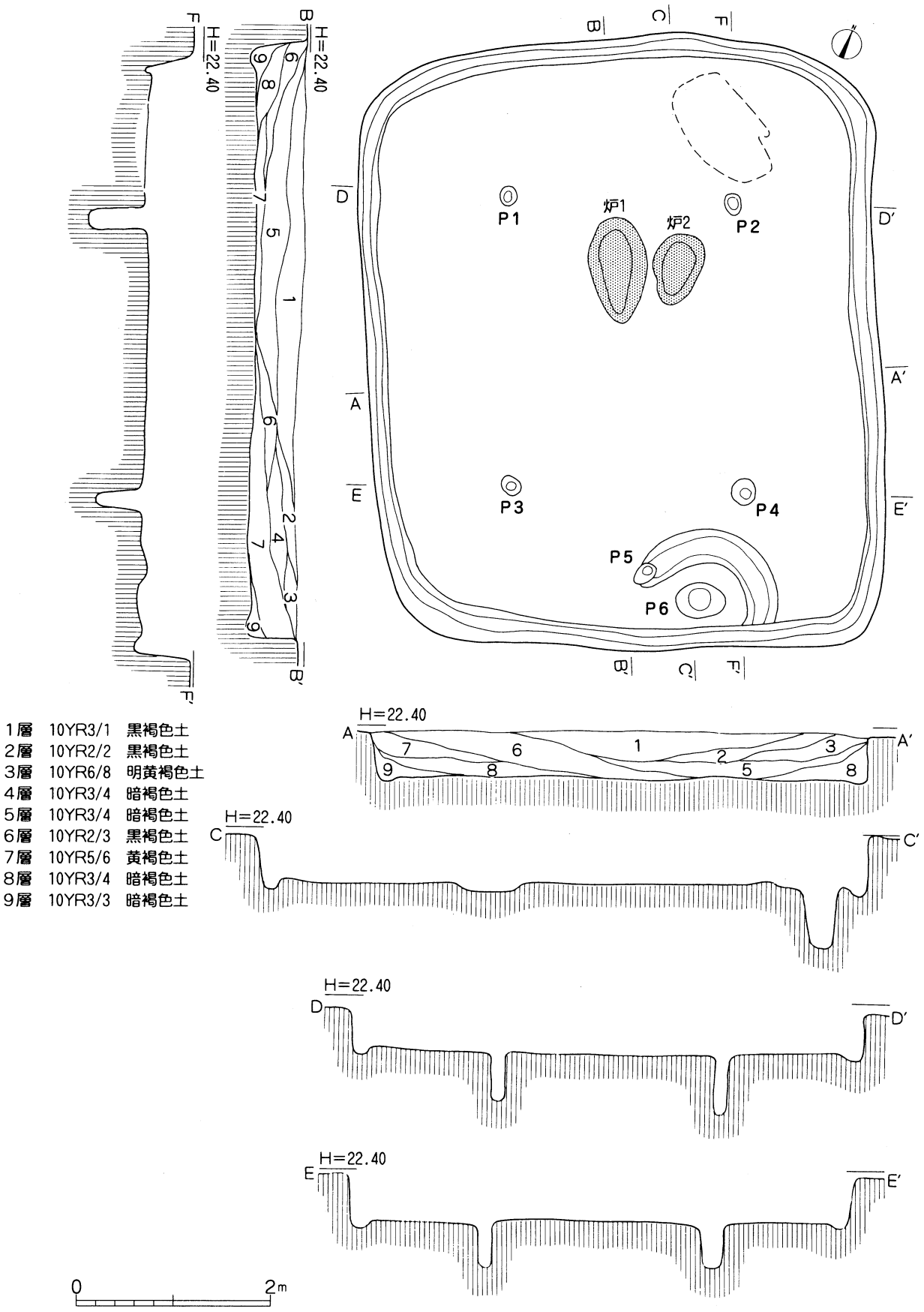


Fig.92　第04号住居跡

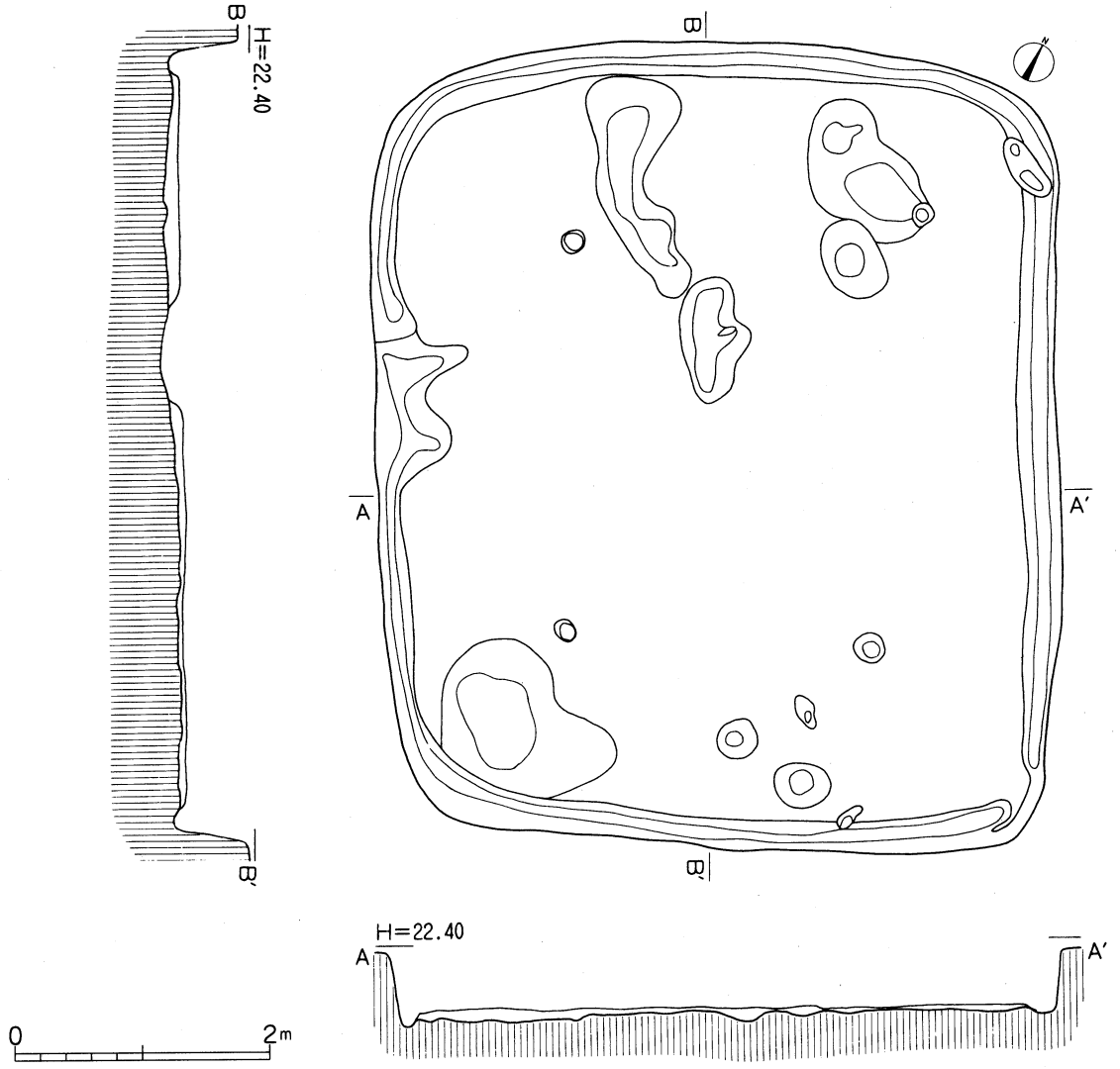


Fig.93　第04号住居跡掘り方

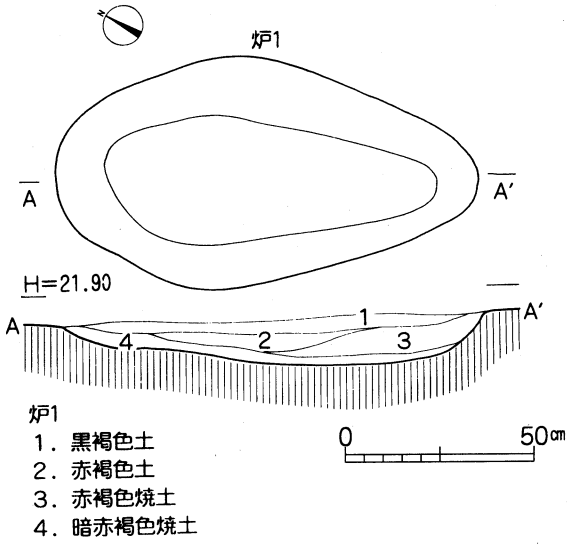


Fig.94　第04号住居跡炉（炉1）

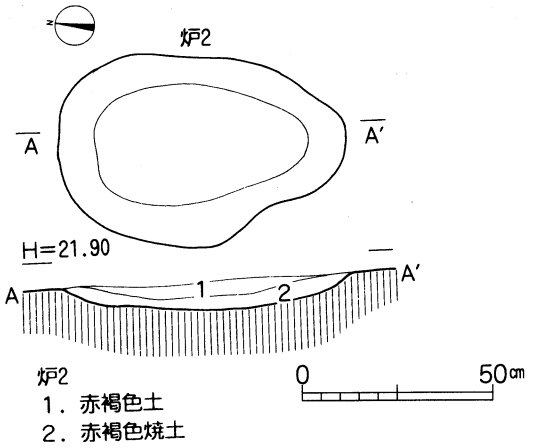


Fig.95　第04号住居跡炉（炉２）

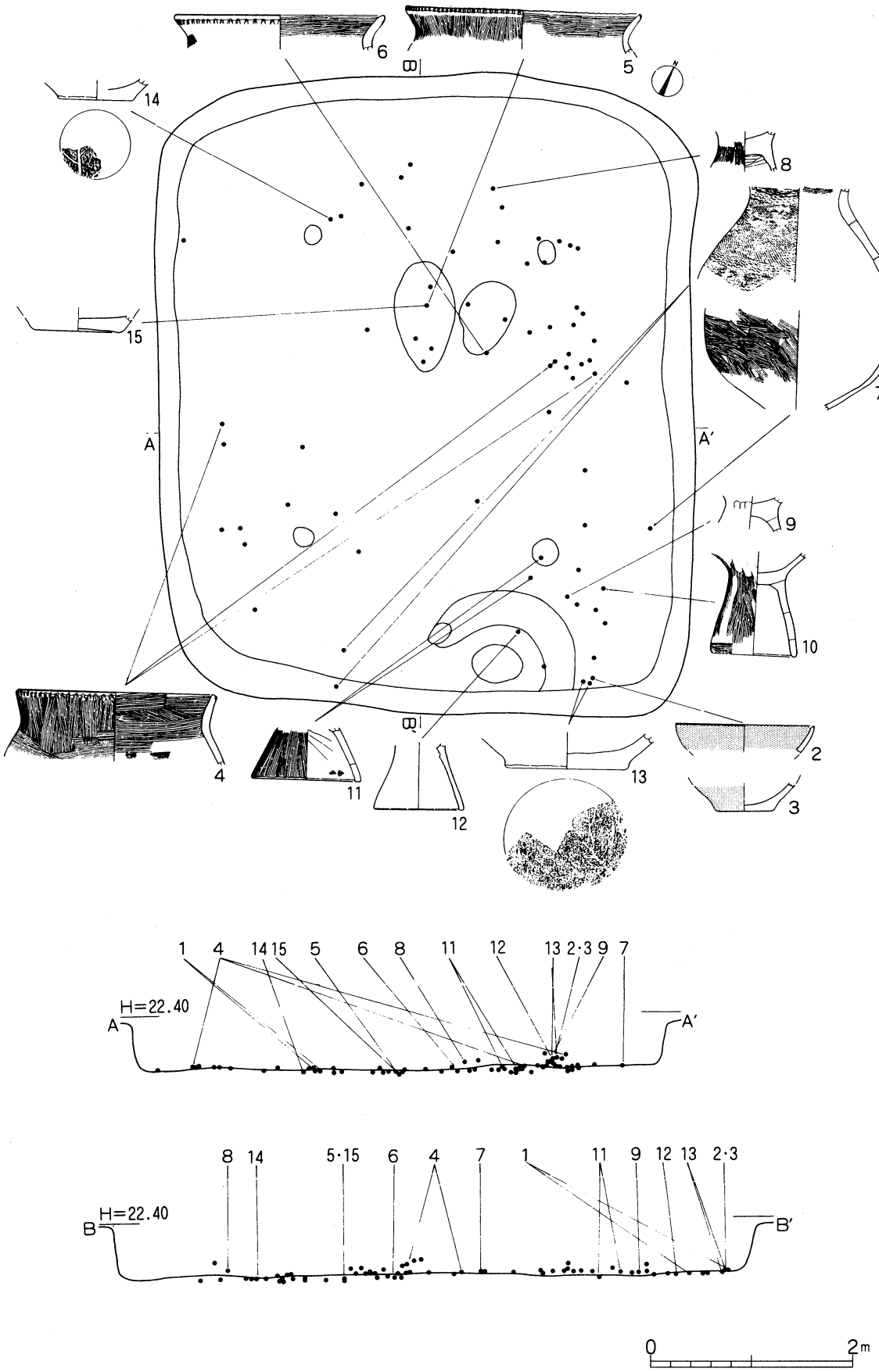


Fig.96　第04号住居跡遺物分布図

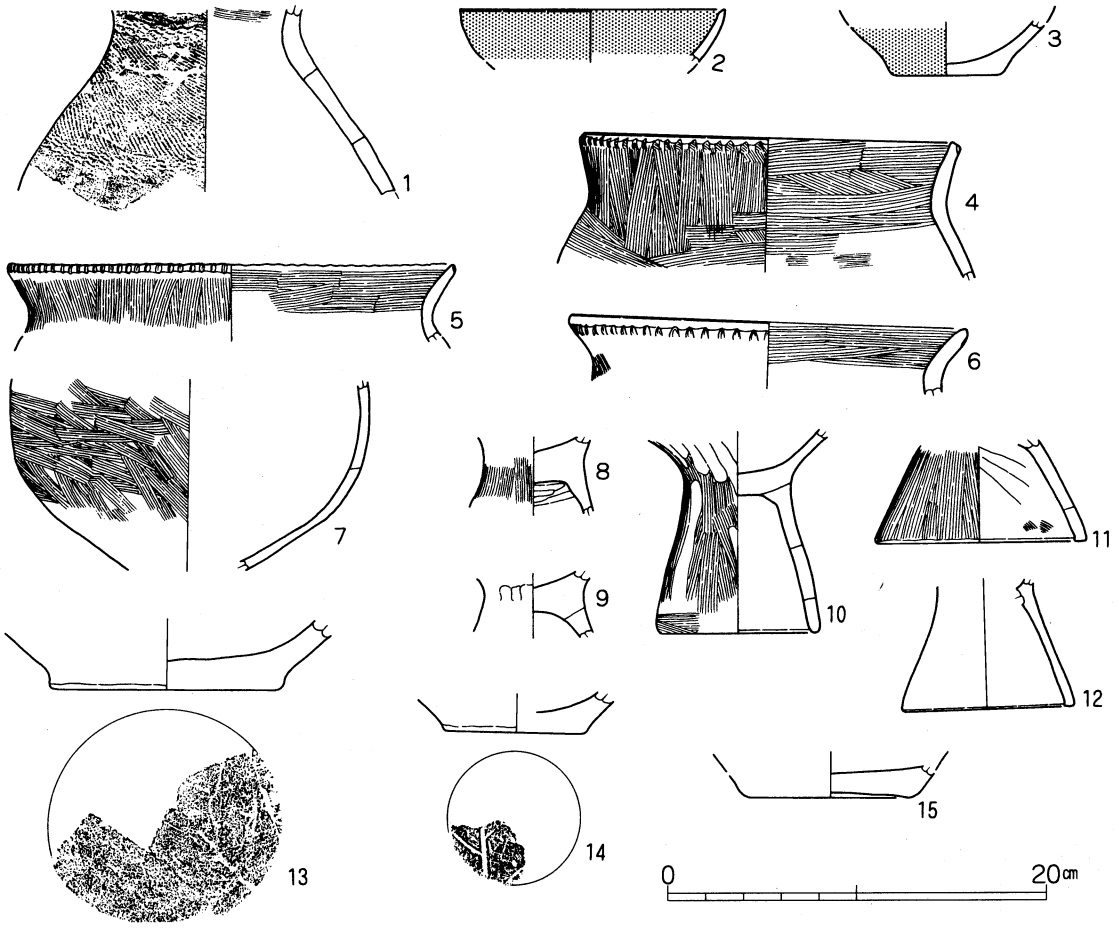


Fig.97　第04号住居跡出土遺物

は横位の入念なミガキが加えられ、内外面とも赤彩が施されている。焼成良好で、硬質の土器である。3は坩の底部破片と考える。底径5.8cmを測る。平底で、外傾して立ち上がる。外面はミガキ整形ののち、赤彩が施され、内面はナデ整形により仕上げられている。焼成は良好である。4～12は台付甕である。4～6は口縁部破片で、4は口縁部1／10程度の破片である。頸部以上が短い形態で、推定口径23.8cmを測る。外面には縦位のハケメ調整が施され、端部には押捺が加えられいる。内面も口縁部のみ横ハケが施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。5は口縁部1/3程度を欠損する。推定口径20.2cmで、口縁は垂直気味に立ち上がり、胴部は偏球形となる形態をもつ。端部にはハケ具の押捺による刻目が巡り、縦位および斜位のハケメが加えられている。内面も横ハケが施されている。焼成良好で、黒褐色を呈する。6は口縁部1/6程度を遺存する。口縁部はやや大きく外方へ開く。端部に押捺による刻目が施され、外面の頸部付近にハケメが残置する。内面口縁部は横ハケが加えられている。焼成は良好。色調はにぶい橙色を呈する。7は胴中位から下位にかけて約1/4を遺存する。胴部最大径が18.5cmを測り、胴部中位が球形を呈する形態の台付甕であろう。外面には横・斜めのハケメ、内面は擦痕を残す横ナデが施されている。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。8・9は台付甕の接合部。8の外面には縦位のハケメが施されている。10～12は甕脚部片である。10は脚部がほぼ垂直に近い立ち上りをもつ。外面には縦位のハケメを施されているが、部分的にナデで消されている。11は脚部が大きく広がる。外面に縦位のハケメを施す。12の外面はナデ整形が施されている。いずれも焼成は良好で、10・12はにぶい褐色、11は褐色を呈する。13～15は底部破片。13・14は木葉痕を残置している。

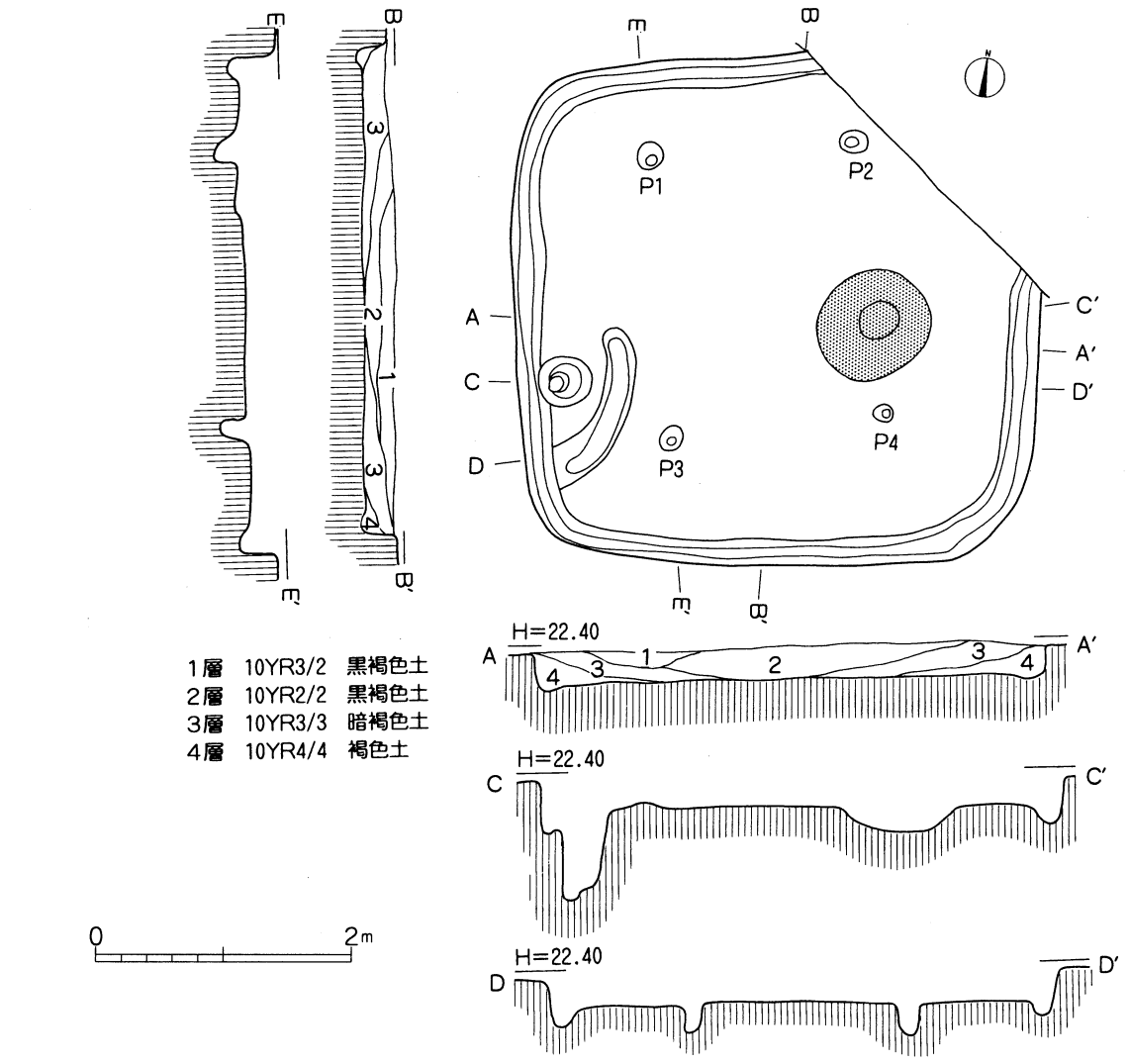


Fig.98　第05号住居跡

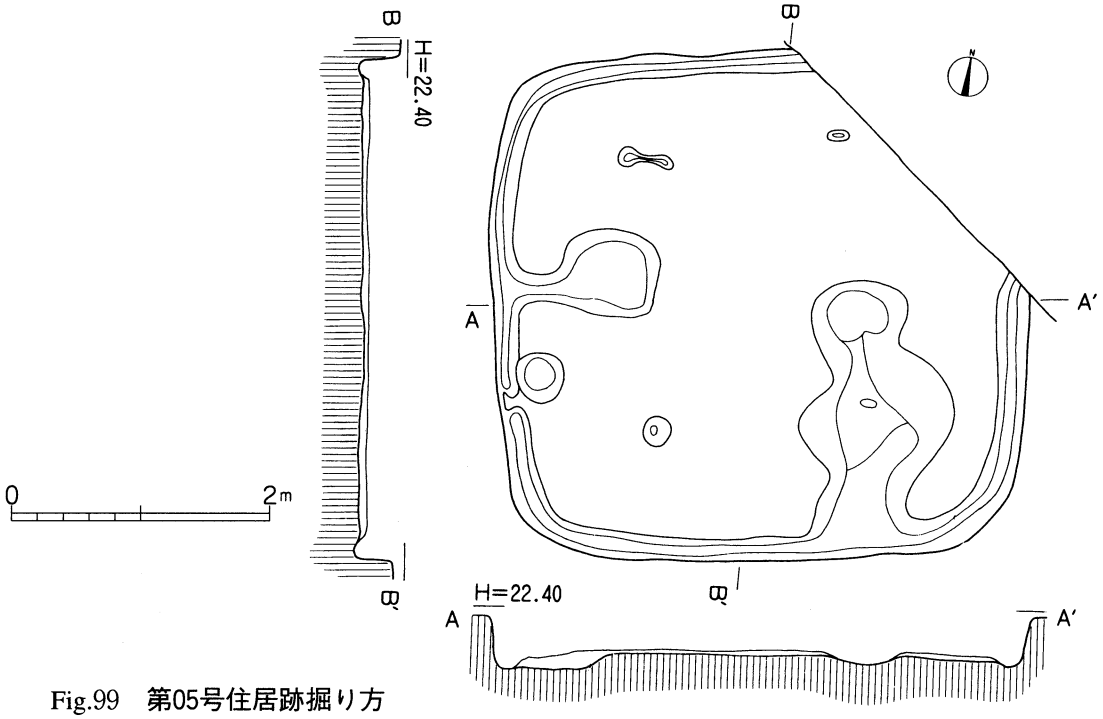


Fig.99　第05号住居跡掘り方

第05号住居跡（SI05）（Fig.98～102）

位置　本跡は、調査区の南部、13-K、14-K区の標高22.30m～22.36mに位置し、北東隅が中央保存区域にかかるため、調査不能であった。なお、北西側に第03号住居跡（SI03）、南西側に第06号住居跡（SI06）が隣接する。

形態　本跡は、北東隅が保存区域にかかっているため、調査不能であるが、平面形はほぼ隅丸方形を呈する。長軸4.24m、短軸4.08mを測り、長軸方位はN-84°-Eを指し、やや小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的で垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　4層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層　10YR3/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層　10YR2/3　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

3層　10YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含

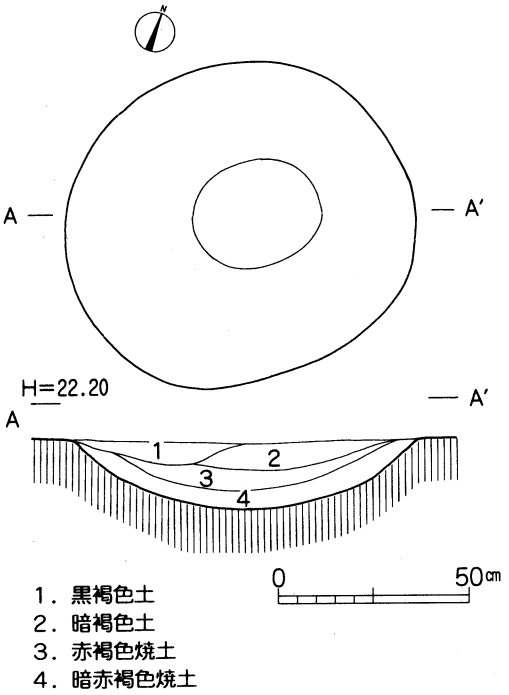


Fig.100　第05号住居跡炉

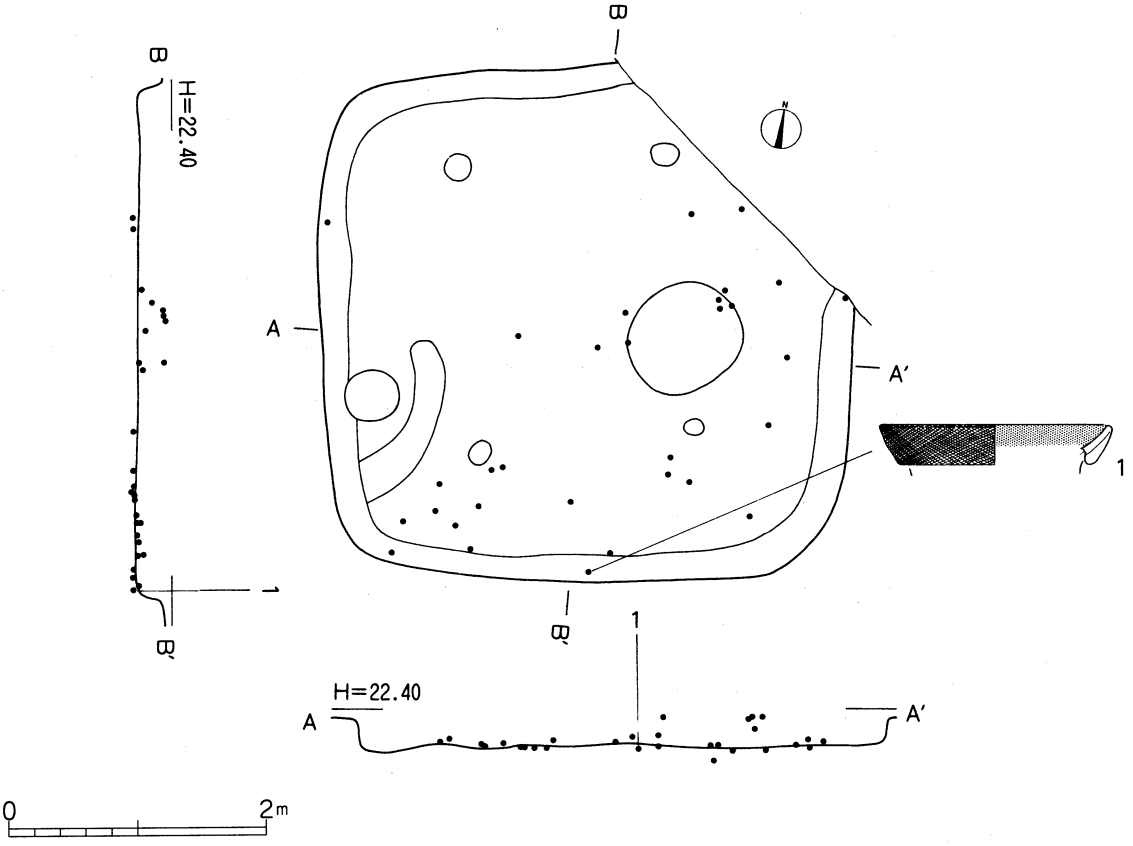


Fig.101　第05号住居跡遺物分布図

Fig.102　**第05号住居跡出土遺物**

み、粘性にやや欠け、締まりがある。

４層　10YR4/4　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本と地床炉１基および入り口施設の盛り土遺構とピット１本が確認された。

Ｐ１～Ｐ４が主柱穴で、Ｐ１は北西部に位置し、上面が22×18cmのほぼ円形、深さ19cm。Ｐ２は北東部で上面が16×14cmと小型の円形で、深さ26cm。Ｐ３は南西部に位置し、上面が22×22cmの円形で、深さ21cm。Ｐ４は南東部で上面が20×16cmの楕円形、深さ21cmを測る。また西壁やや南寄りに径約150cm、幅25cm、高さ６cmの土盛遺構と土盛遺構に囲まれるように二段掘り貯蔵穴を設置する。開口部が42×40cmの円形で、深さ47cmで、さらに上面が15×14cm、深さが60cmに掘り込まている。

周溝は全周し、幅16～24cm、深さ８～14cmを測り、幅、深さとも均一な周溝で底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。

地床炉は住居中央から東寄りに設置され、その平面形は楕円形を呈し、長径92cm、短径84cm、深さ20cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は４層に分層でき、第３層と第４層が焼土層で、とくに第３層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を多く含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、とくに炉跡の南側と入口部施設の周辺はさらに浅い掘り込みを呈している。

遺物出土状況　遺物は、住居南半分に散在するが、小破片が多く、実測可能な壺１点と壺破片１点のみ図示した。

遺物　１は壺形土器の口縁部破片である。推定口径８.２cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部および口唇部に網目状撚糸文が施文され、内面は横位のナデが施され、赤彩が認められる。焼成は良好。硬質の土器である。２は壺頸部の破片である。６本単位の櫛歯状工具による縦位と横位の櫛歯文を施文する。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。

第06号住居跡（SI06）（Fig.103～107）

位置　本跡は、調査区南部で、15-Gの標高22.02m～22.20mに位置する。東側に第07号住居跡（SI07）が、北東側に第05号住居跡（SI05）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸７.00m、短軸６.25mを測り、長軸方位はN-45°-Wで、やや大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的に延び、垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。なお、床面には焼土や炭化物が散々し、とくに西隅壁下に集中していた。火災住居であろう。

覆土　８層に分層可能である。自然埋没土層である。

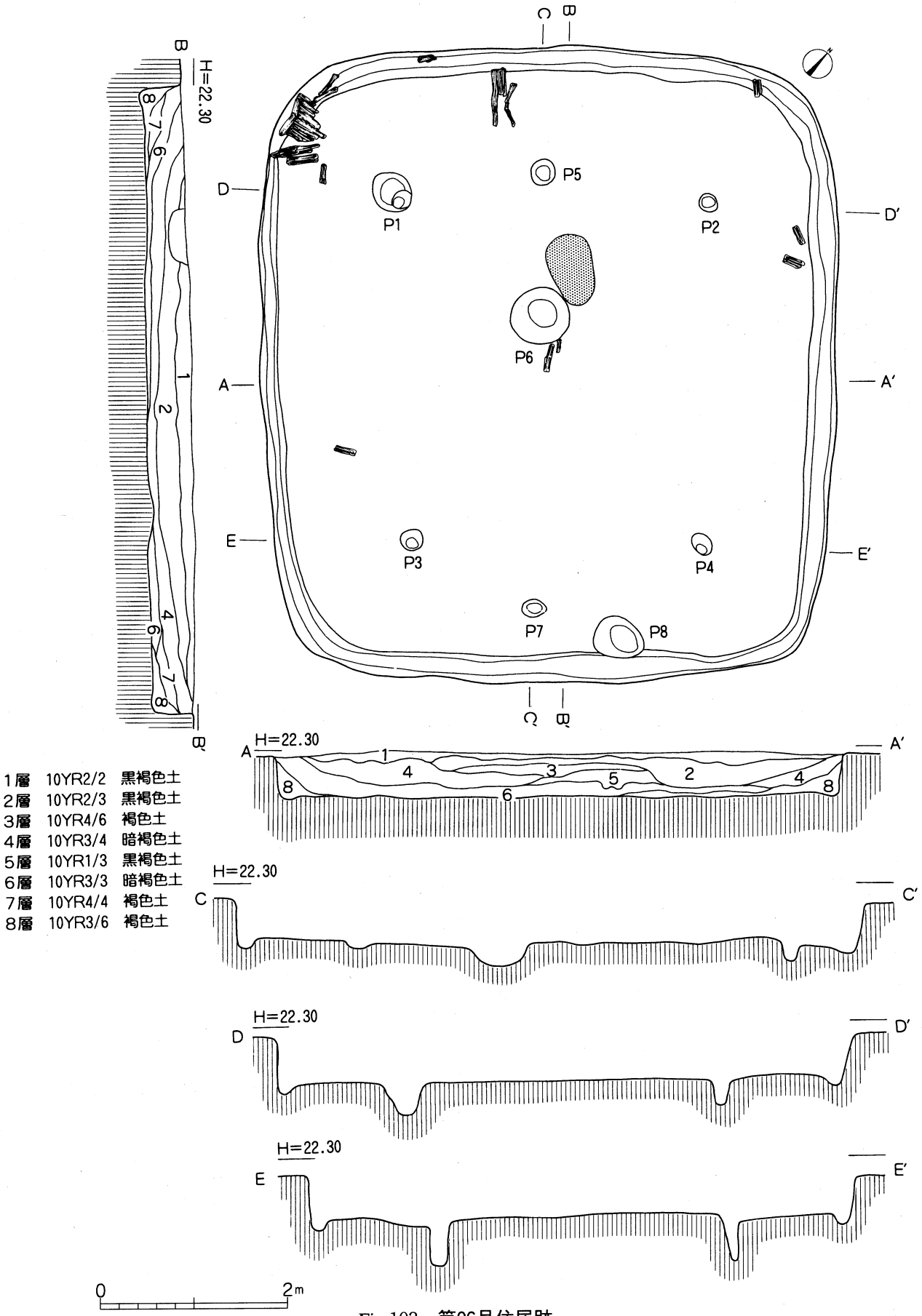


Fig.103　第06号住居跡

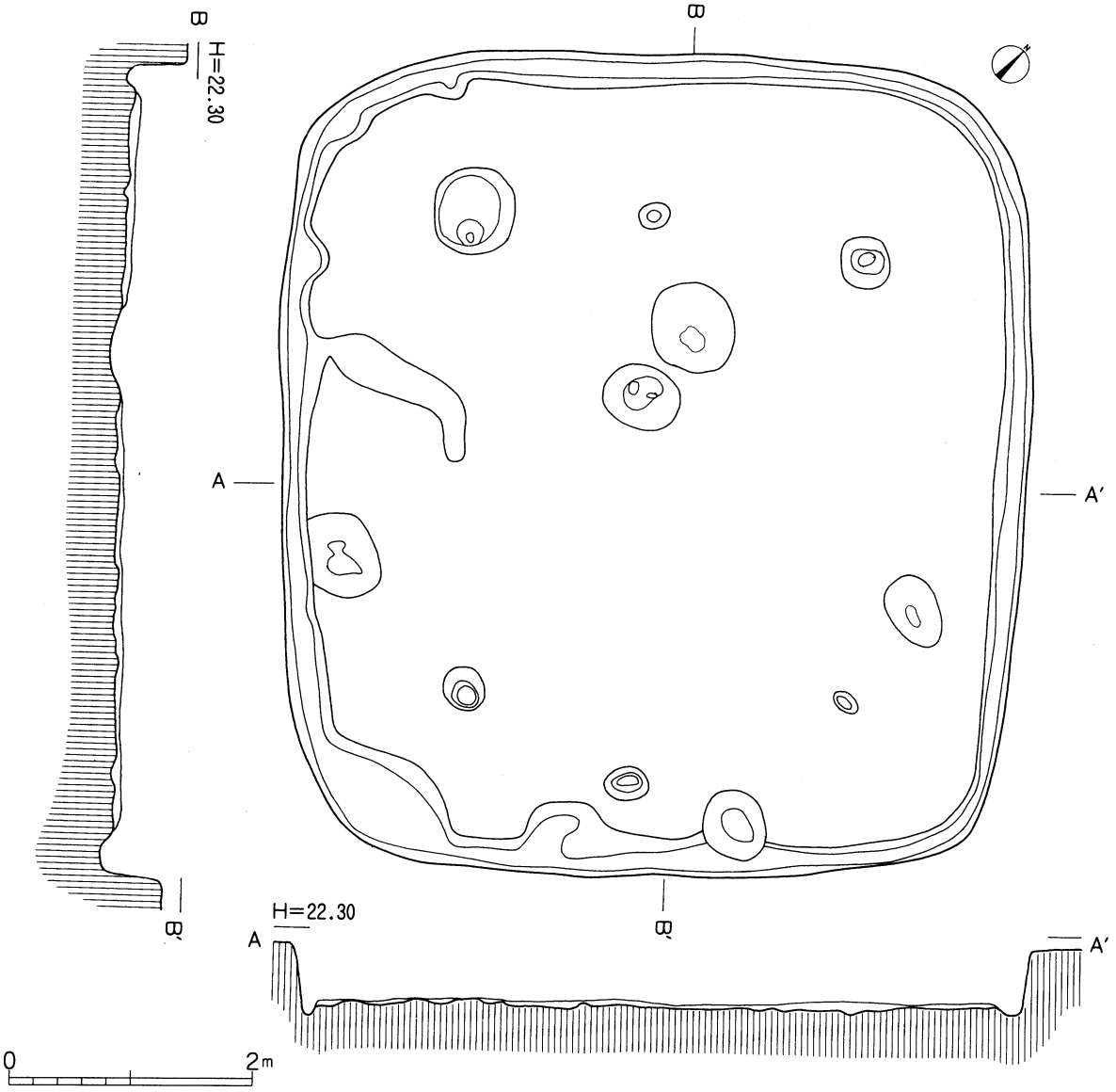


Fig.104　第06号住居跡掘り方

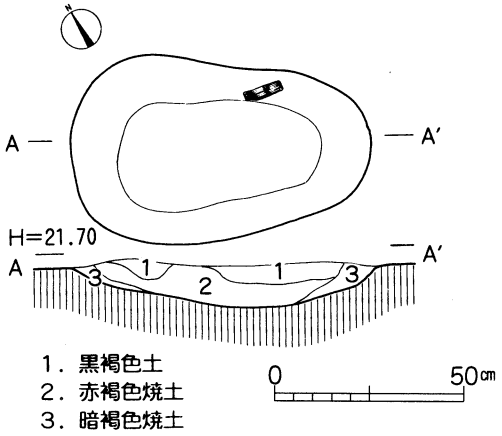


Fig.105　第06号住居跡炉

1層　10YR2/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

2層　10YR2/3　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

3層　10YR4/6　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

4層　10YR3/4　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

5層　10YR1/3　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。

6層　10YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

7層　10YR4/4　褐色土　少量のロームブロックを含み、締まりがある。

８層　10YR3/6　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本と支柱穴１本、および貯蔵穴１基、地床炉１基ならびに入り口施設として梯子穴１本と炉脇に円形ピット１基を確認された。

P１～P４は主柱穴で、P１は北側に位置し、上面が50×40cmと大きく楕円形を呈し、さらに住居中央に向かって、径25cmのほぼ円形のピットが穿ってあり、２段堀りがみられ、柱の移動もしくは移し替えピットと思われる。下位段での深さは12.１cmと円形を呈する。P２は北側で上面が22×20cmの円形で、深さ30cm。P３は南側に位置し上面が25×25cmの円形で、深さ48cm。P４は東側で、上面が26×18cmの楕円形、深さ48cmを測る。また支柱穴として住居中央北西寄り、P１とP２の中間に配置されP５とする。大きさは上面が30×28cm、深さ８cmの円形ピットである。梯子穴は南東壁中央に位置し、上面が28×20cmの楕円形で、深さは19cmを測る。炉南側に径65×62cm、深さ15cmの円形ピットP６が設けている。炉施設の一部と思われる。

貯蔵穴P８は、南東壁やや北東寄りに径54×44cm、深さ52cmの楕円形を呈し、底面は平坦である。

周溝は全周し、幅16～28cm、深さ８～14cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。

炉は地床炉で、住居中央から北寄り楕円形に浅く掘り込まている。規模は長径80cm、短径50cm、深さ３cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。なお、西隅壁際から北西壁および炉跡周辺には炭化材が出土し、またP４周辺には焼土塊が検出されている。焼失家屋である。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに北西側と南東側に集中する。貯蔵穴周辺は甕類がまとまって廃棄されていた。その内、個体として図示しうる資料は、壺６点、甕10点、埦１点、鉢２点、土製勾玉１点である。なお、この土製勾玉は炉跡脇より出土したものである。

遺物　１～４は壺形土器の口縁部破片である。１は1/2を遺存する壺で、口径30.０cmの大型の土器である。口縁部は粘土帯を重ね合わせた複合口縁で、下端には２段の段を有する。口縁端面にはヘラ状工具による刻目が加えられている。口縁部外面には網目状撚糸文が施され、８本単位の棒状貼付文が付けられている。棒状貼付文には浅い押捺が刻まれ、貼付文間には円形赤彩文が施されている。口縁部下位の頸部縦位のハケメ調整が加えられ、ミガキが施されている。内面はミガキ調整の後、赤彩が施されている。焼成は良好である。２は口縁部のみ1/2程度を遺存し、推定口径14.２cmの小型の壺である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、外面の口縁部は棒状貼付文が等間隔で付され、貼付文間には円形赤彩文が施文されている。また頸部には縦位のハケメ調整、内面は横位のミガキが施され、赤彩されている。焼成は良好である。３は1/8程度を遺存する口縁部破片である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部は磨耗が著しく整形および施文の判読は困難であるが、口唇部および口縁部は単節RL縄紋が施文されている。また内面は横位のハケメ調整が施され、内外面とも赤彩が認められる。焼成は良好である。４は1/8程度遺存する口縁部破片である。やや内湾する口縁部に粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、推定口径14.０cmを測る。口縁部外面は２本一単位の棒状貼付文を付し、網目状撚糸文が施文されている。口唇部にはRLの単節縄紋を施文し、円形赤彩文を施す。口縁部下端部にはハケメ工具による刻目が巡る。内面は丁寧なミガキ調整され、赤彩が施されている。焼成は良好で、かなり硬質の土器である。５は壺底部破片。底径9.７cmを測り、大きく外方へ開く。内外面ともナデ整形によって下調整のハケメ痕を消している。赤彩が認められる。内面にはやや器面の粗れが目立つ。焼成は良好。

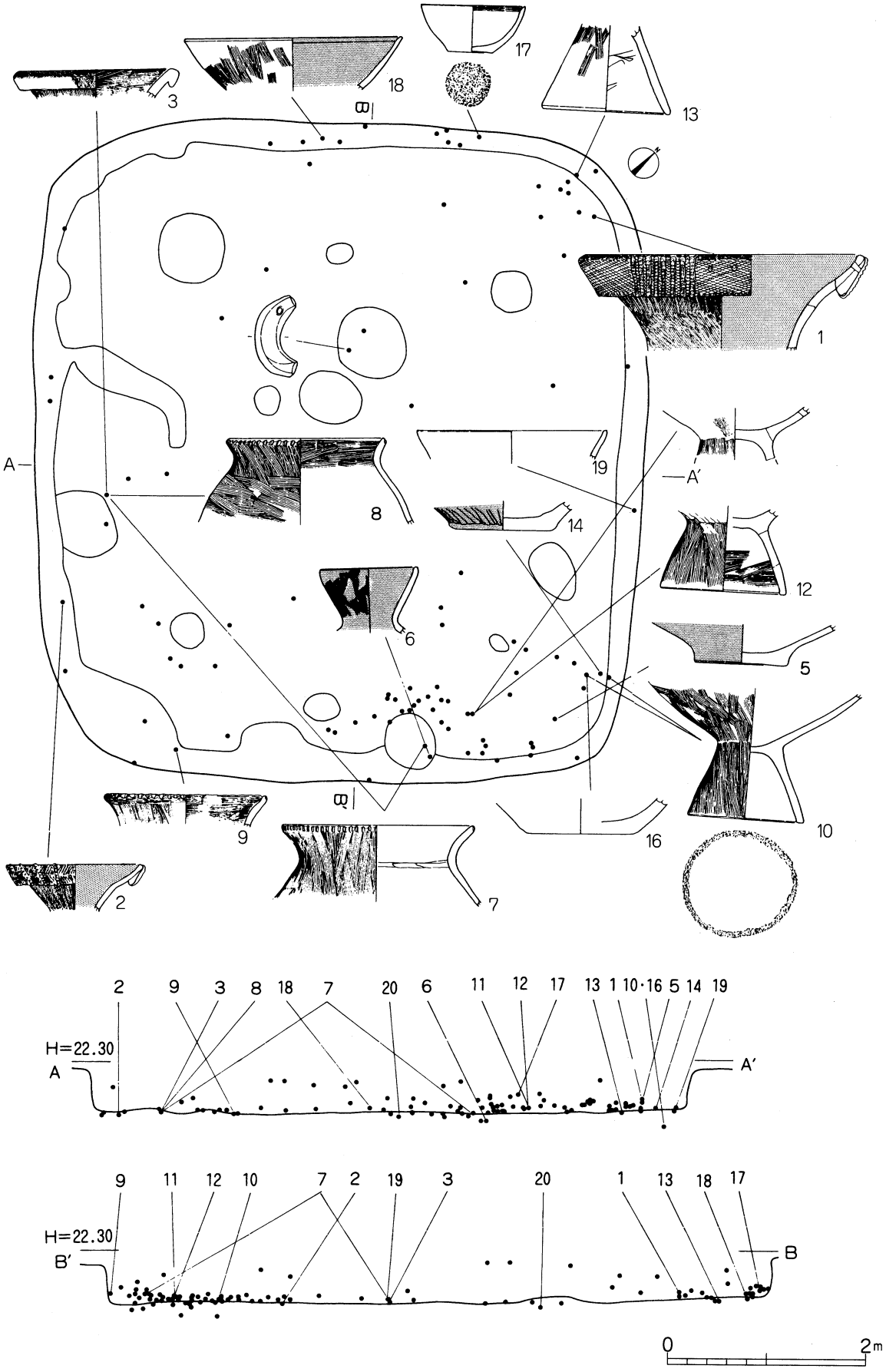


Fig.106　第06号住居跡遺物分布図

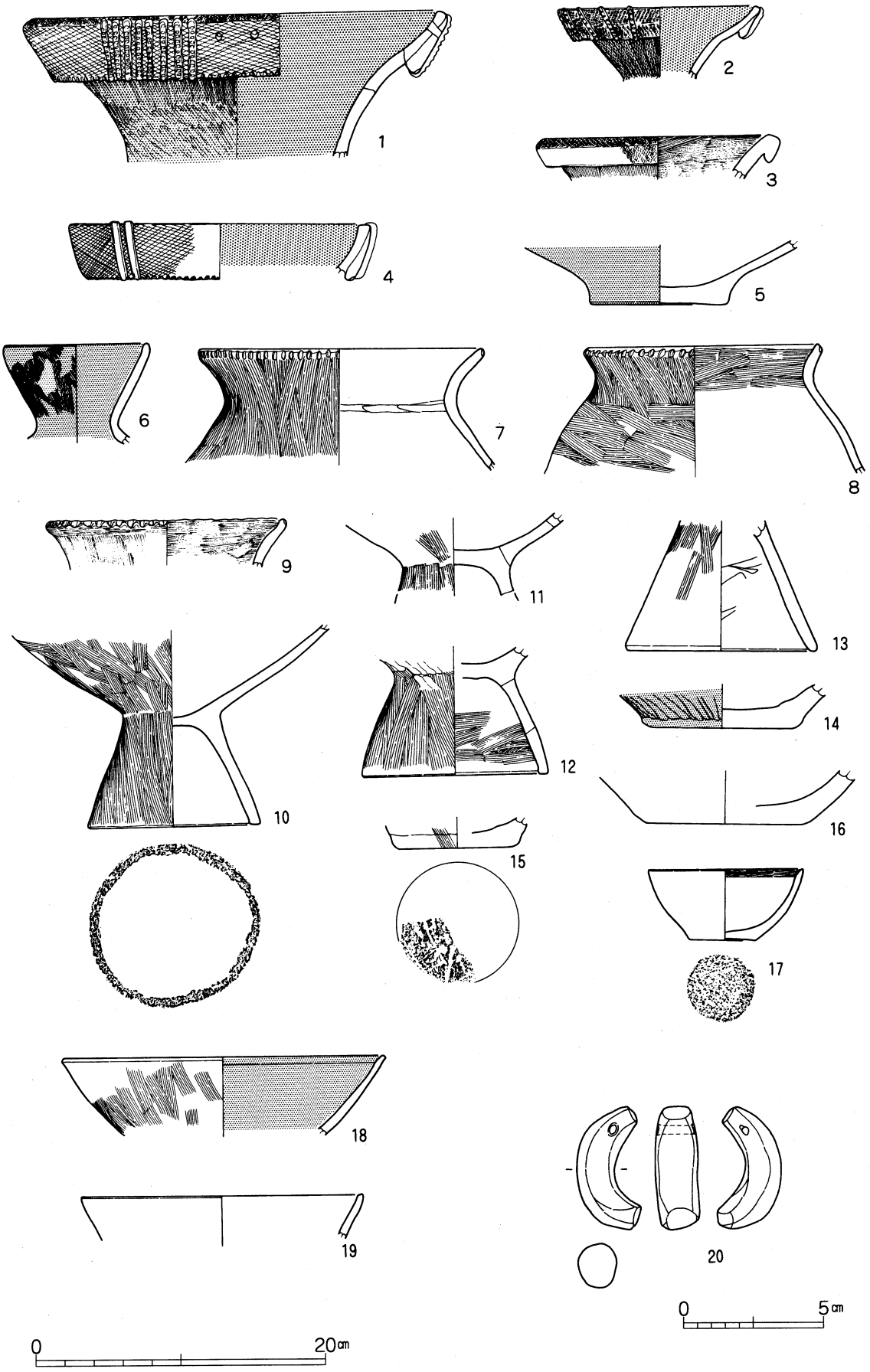


Fig.107　第06号住居跡出土遺物

色調は明赤褐色を呈する。14・16も壺の底部破片であろう。14は平底で、底径14.0㎝を測る。外面がミガキ調整の後、赤彩が施されている。16も平底で、底径11.0㎝を測る。底面の器面の粗れが目立つ。６は口縁部のみ遺存する。口径10.0㎝を測る。口縁部直口縁に近い形態をもつ。外面にはほぼ縦位のハケメ調整が施され、内面は丁寧なミガキが施されている。内外面とも赤彩が認められる。焼成は良好である。７～13は台付甕である。７は口縁部から胴部上位にかけての2/3程度遺存する。口径19.6㎝を測り、口縁部「く」の字状に大きく外反する。口唇部には外方からヘラ状工具による刻みが施されている。口縁部から胴部には縦位のハケメ調整が加えられ、内面丁寧なナデ整形が施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。８は口縁部から胴部中位にかけて2/3が遺存し、口径は16.5㎝を測る。頸部がかなり強く屈曲する形態で、口縁部は短く外方へ開く。口唇部はハケ具による刻みが施されている。外面は縦位のハケメ調整が加えられ、内面口縁部にも横位のハケメ調整が行なわれている。また内面胴部はナデ整形が施されている。焼成はやや良好で、橙色の色調を呈している。９は1/10以下の遺存する口縁部破片で、「く」の字状に外反する口縁部はかなり細かなハケメ調整が横位と縦位方向に施されている。また口唇部にはハケ具による刻みが巡る。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。11～13は甕接合部と脚部片である。11は接合部破片で1/2程度を遺存し、外面はハケメ調整が認められる。内面は脚部ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、橙色を呈する。10～13は脚部が遺存している。10は脚部が完存する。脚は直立気味に立ち上がり、体部は大きく外方へ開く。脚部径は12.0㎝を測る。外面は縦位および斜位のハケメ調整が加えられ、内面は脚部とも丁寧なナデ整形が施されている。焼成は良好で、灰褐色を呈する。12は脚部直立気味に立ち上がるが、脚部径が12.8㎝とやや広めで脚高が６.５㎝を測るのみである。外面は比較的粗いハケメ調整を縦位に調整し、内面はハケメ調整の後、ナデ整形が加えられている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。13は脚部1/4程度を遺存する。推定脚部底径13.2㎝を測る。外面には比較的粗いハケメ調整が加えられ、内面はナデ整形が施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。15は平底の甕底部破片である。約1/4程度を遺存し、底面には木葉痕を残置している。焼成は良好。色調は橙色を呈する。17は埦形土器で、口唇部の一部を欠損するものの、ほぼ完存品である。口径10.6cm、底径4.5cm、器高4.9cmを測る。底部から内湾気味に外方へ開く、口唇部の形態は内削状を呈し、内外器面とも表面の剥離が目立つ。底面は周縁が輪状に高まる。外面はナデ整形、内面は口唇部が横位のハケメが加えられ、体部はナデ整形である。焼成はやや良好。色調はにぶい褐色を呈する。18・19は鉢形土器の口縁部破片である。18は口縁部のみ1/8程度を遺存する。口縁はほぼ直線的に大きく外方へ開く鉢で、推定口径22.4㎝を測る。外面は縦位のハケメ調整、内面は口唇部下が横位のハケメ、体部はミガキが施されている。内面には赤彩が認められ、おそらく外面にも赤彩が施されているものと思われるが、剥離し確認できない。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。19はわずかに遺存する鉢口縁である。内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好。明褐色を呈する。20は土製勾玉の完存品である。Ｃ形を呈し、全長４.23cm、厚さ１.52cm、重さ13.77gを測る。孔は片側から穿たれたものである。調整は比較的丁寧で、ナデ調整で仕上げられている。焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。

第08号住居跡（SI08）（Fig.108～112）

位置　本跡は、調査区南部にあたり、16-K、16-L区の標高21.86m～22.00mに位置し、北西側に第07号住居跡（SI07）が、南西側に第09号住居跡（SI09）が、東側に第10号住居跡（SI10）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸５.64m、短軸５.44mを測り、長軸方位はN-40°-Wを指し、中形の住居跡である。壁は西辺、南辺、北辺はほぼ垂直に立ち上り、東辺はやや緩やかに立ち上がる。

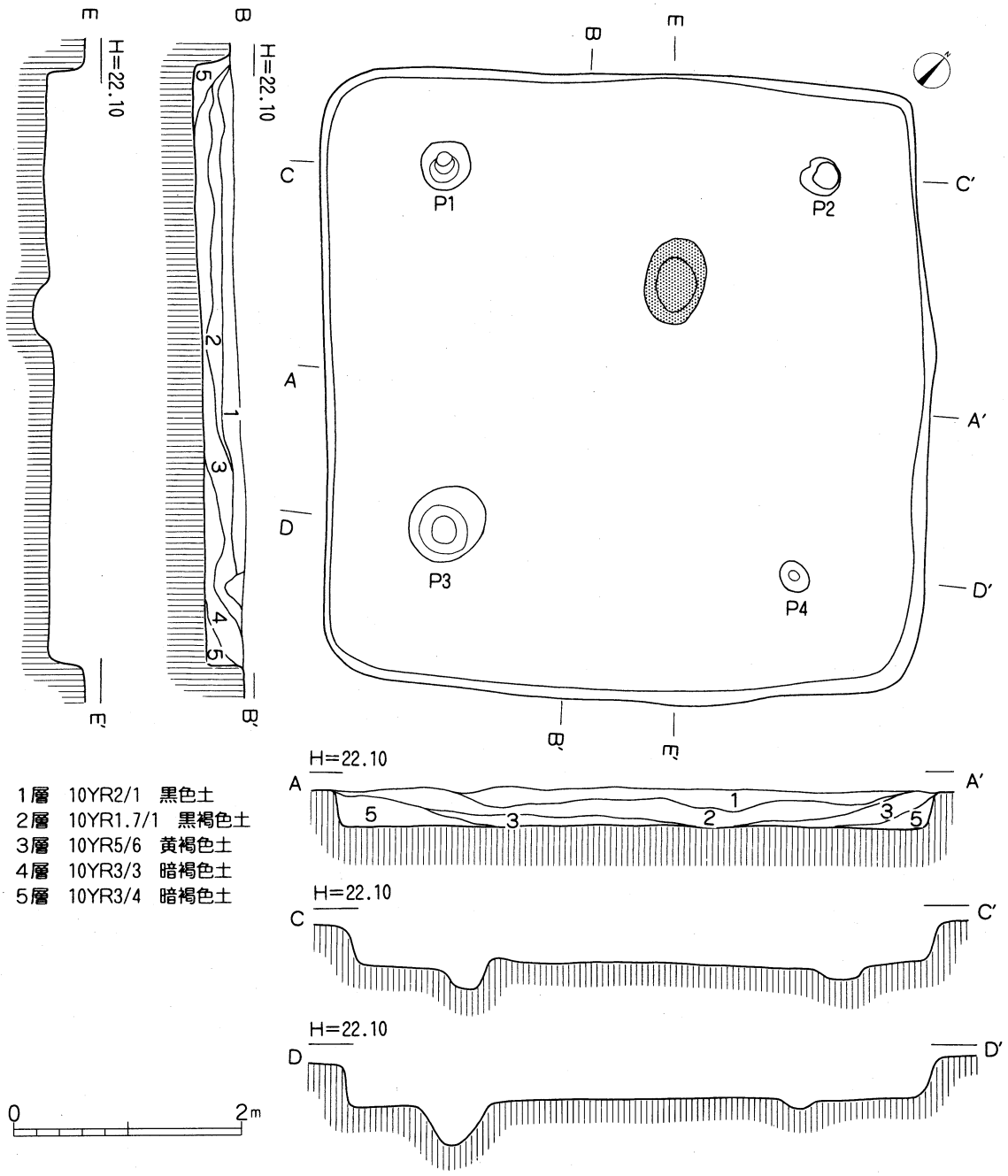


Fig.108　第08号住居跡

床面は若干の起伏を呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　5層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層	10YR2/1	黒色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
2層	10YR1.7/1	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
3層	10YR5/6	黄褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
4層	10YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
5層	10YR3/4	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基が確認された。

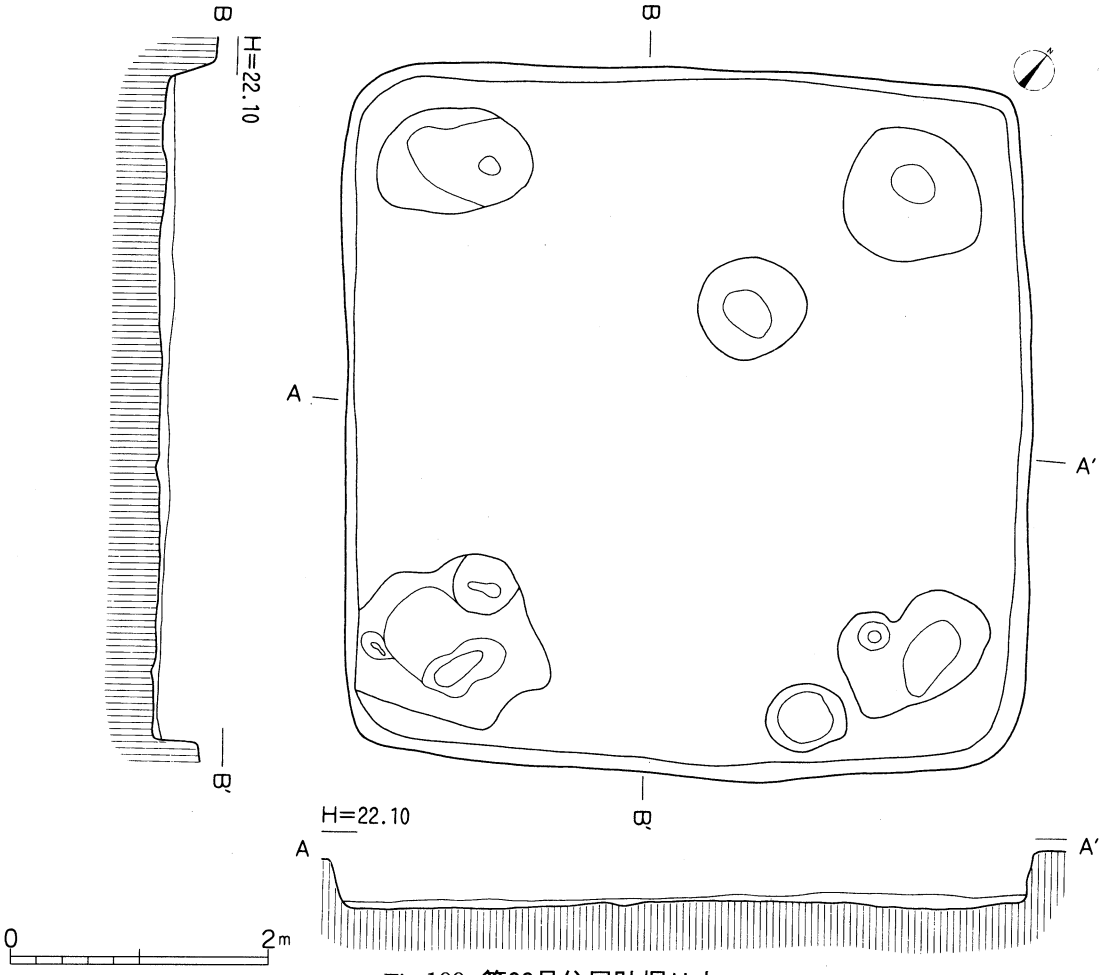


Fig.109 第08号住居跡掘り方

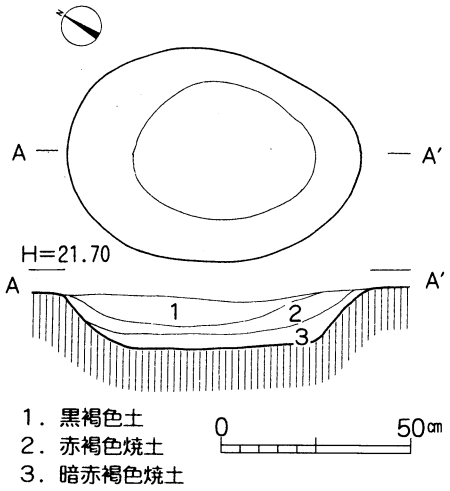


Fig.110　第08号住居跡炉

主柱穴はP１～P４で、P１は西側に位置し、上面が45×45cmのほぼ円形を呈し、さらに径20cmの掘り込みが施されている２段柱穴で、深さ22cmである。P２は北側で上面は36×35cmのほぼ円形で、深さ13cm。P３は南側に位置し、上面が64×74cmの楕円形と開口部が大きく、やはりP１と同様２段掘りの柱穴で、深さ42cm。P４は東側で、23×30cmの楕円形、深さ９cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに東西２基設置され、長径78cm、短径56cm、深さ16cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層と第３層が焼土層で、とくに第２層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに４本の主柱穴周辺には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに東側にやや集中する傾向が観察できる。その内、個体として図示

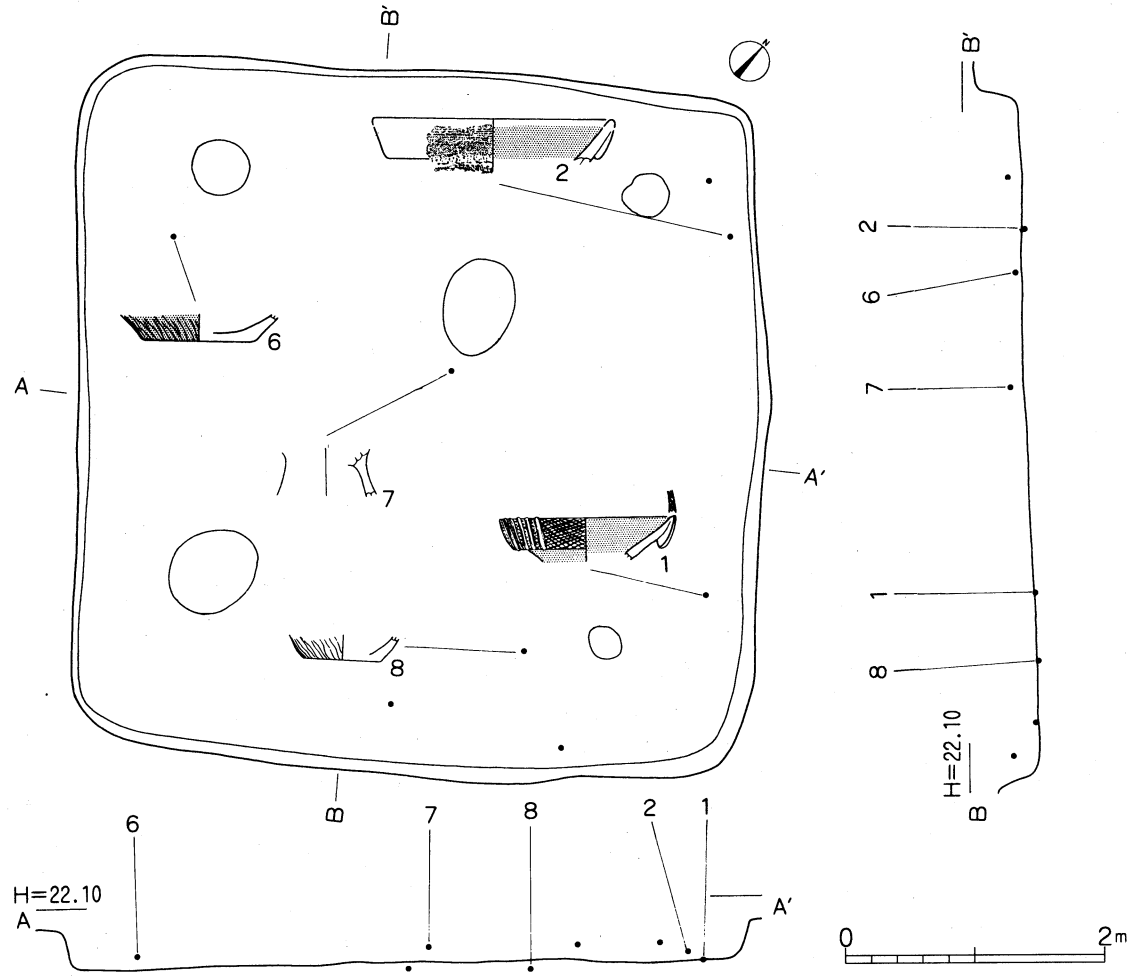


Fig.111　第08号住居跡遺物分布図

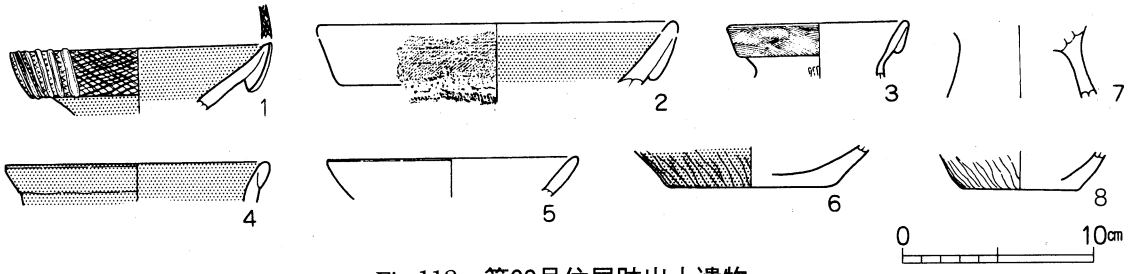


Fig.112　第08号住居跡出土遺物

しうる資料は、壺５点、甕２点、鉢１点である。

遺物　１～４は壺形土器である。１は口縁部が1/4前後遺存する。推定口径13.6㎝を測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、屈曲のやや強い、内湾気味に立ち上がる。口唇部および口縁部には網目状撚糸文が施文され、６本を一単位とする棒状貼付文が付されている。外面無文部には縦位、内面には横位のミガキが施され、赤彩されている。焼成は良好である。２は口縁部1/8程度遺存するが、口唇部は欠損する。推定口径17.0㎝を測る。粘土帯を貼り合わせて複合口縁としている。口縁部は横位のハケメ調整ののち、単節LR縄紋を施文するが、縄紋帯のほぼ中央にS字状結節文を加える。口縁部下端にはハケメ具による刻目が巡らされている。外面体部は縦位のハケメ調整、内面はミガキが施されている。口縁部を除き内外面とも赤彩されている。焼成はきわめて良好である。３は口縁部1/3程度遺存す

る。推定口径9.6cmを測る。口縁部がゆるやかに開く小型の壺である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部外面は横位のハケメ調整痕を残置させる。内面はナデ整形が施されている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。４は口縁部1/10前後のみ遺存する。折り返し口縁で推定口径14.０cmを測る。口縁部外内面ともミガキが施され、赤彩されている。焼成は良好である。５は鉢形土器の口縁部で1/8程度を遺存する。推定口径13.４cmを測る。口縁部外内面ともナデ整形が施されている。焼成はやや良で、にぶい褐色を呈する。６は壺の底部破片で、1/4程度を遺存する。平底で、体部は大きく開く。外面は縦位のミガキが施され、赤彩され、底面もナデ整形の後、赤彩されている。しかし、周縁は磨耗が著しい。内面はナデ整形が加えられている。焼成は良好である。７は台付甕の接合部破片で、約1/3程度が欠損している。内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。８は甕底部の小破片で、1/10程度が遺存する。内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。

第11号住居跡（SI11）（Fig.113～118）

位置　本跡は、調査区南東部にあたり、14-M区の標高20.78m～20.90mに位置し、南側に第15号住居跡（SI15）が、北東側に第19号住居跡（SI19）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸４.12m、短軸３.90mを測り、長軸方位はN-44°-Wを指し、やや中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏は呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　８層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　10YR5/6　黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
２層　10YR3/1　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
３層　10YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層　10YR4/6　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層　10YR5/6　黄褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
６層　10YR2/3　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
７層　10YR4/6　褐色土　少量のロームブロックを含み、締まりがある。
８層　10YR7/8　黄褐色土　多量のロームブロックを含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴６本と地床炉１基および貯蔵穴１基を確認した。

主柱穴はP１～P４で、P１は西側に位置し、上面が30×30cmの円形、深さ14cm。P２は北側で上面が30×36cmの楕円形で、深さ11cm。P３は東側に位置し、上面が34×34cmの円形で、深さ12cm。P４は南側で、22×22cmの円形、深さ13cmを測る。また北壁中央、炉跡の北西側にP５が、また対峙するように南東壁中央部にP６を設けている。P５は上面が22×26cmの楕円形で、深さ13cmと浅い深度。P６は上面が32×32cmの円形で深さは21cmを測る。P５は支柱穴。P６は入口部施設の梯子穴と思われる。

貯蔵穴は南東壁の東寄りに構築されており、平面形は楕円形を呈し、長径66cm、短径56cm、深さ36cmを測り、底面はほぼ丸底で、壁面は緩やかに掘り込まている。

炉は床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに設置され、長径78cm、短径50cm、深さ11cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の北側に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は４層に分層でき、第３層と第４層が焼土粒子を多量に含む焼土層で、とくに第４層の赤褐色焼土層内では多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

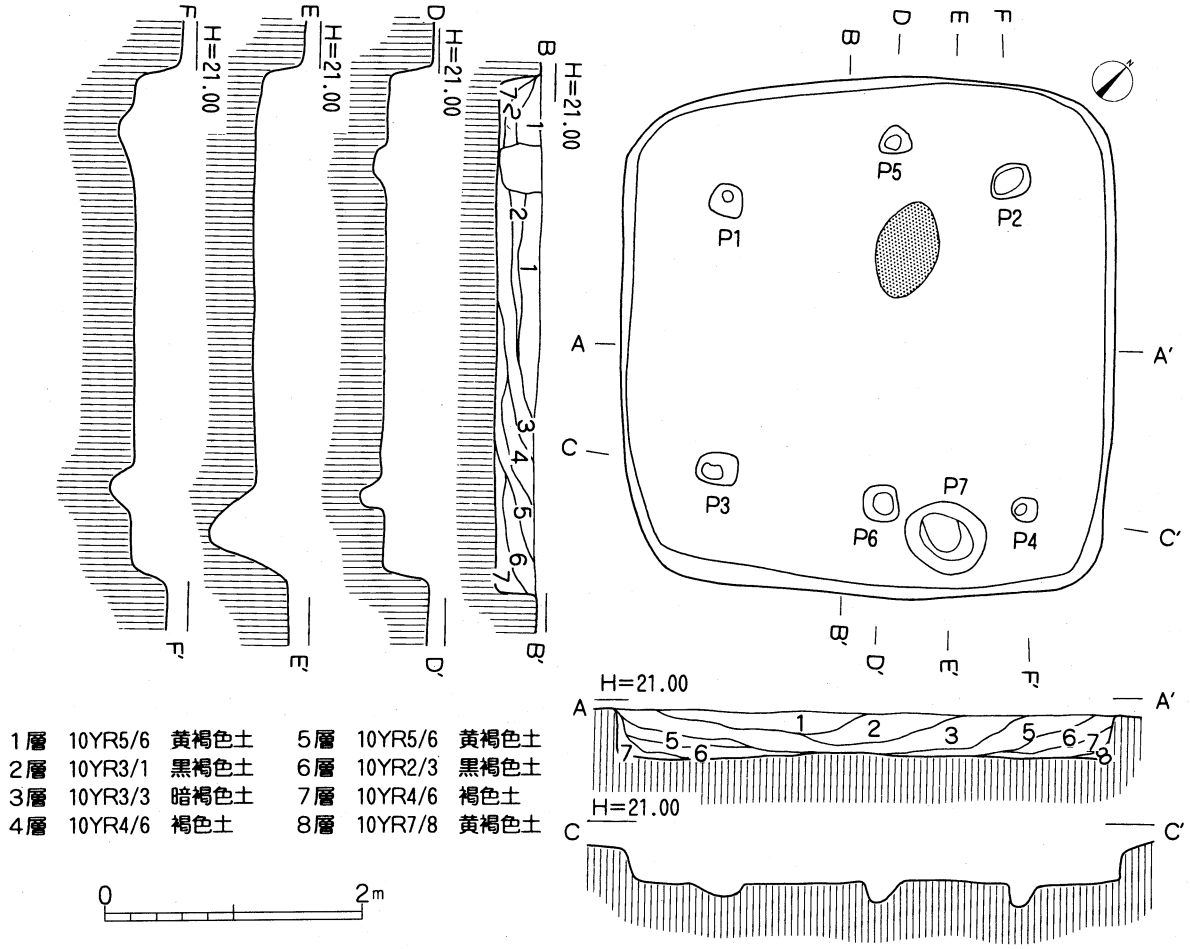


Fig.113　第11号住居跡

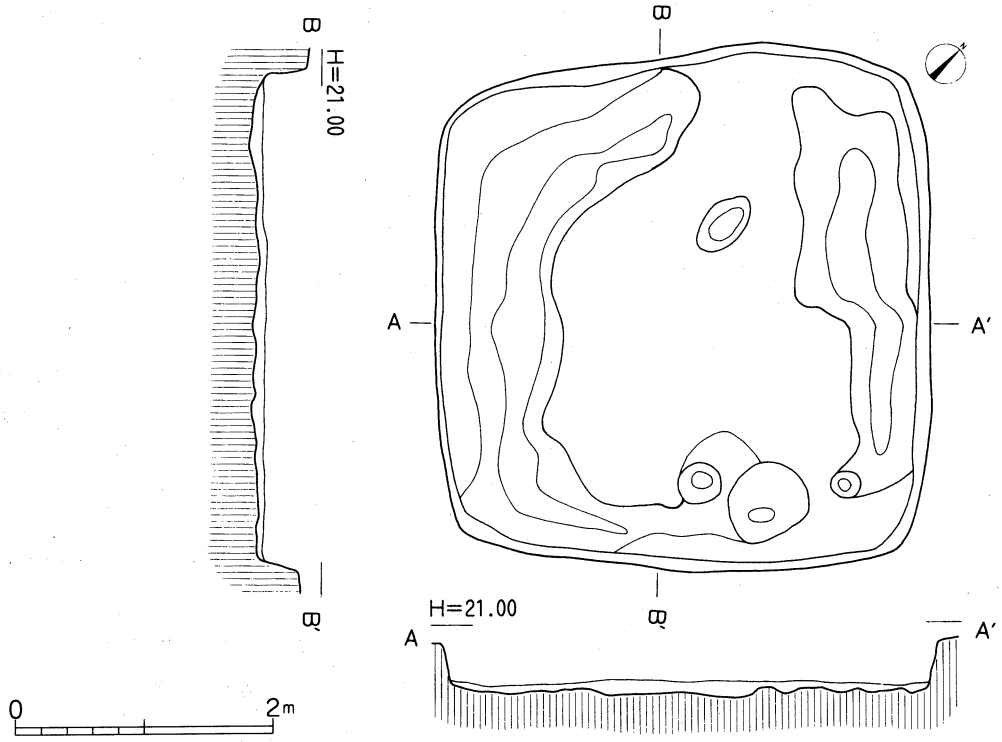


Fig.114　第11号住居跡掘り方

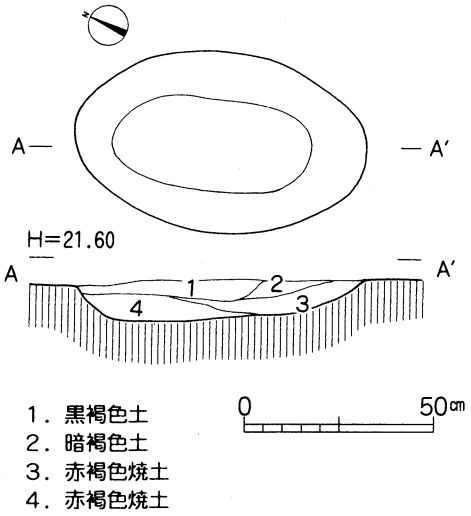


Fig.115　第11号住居跡炉

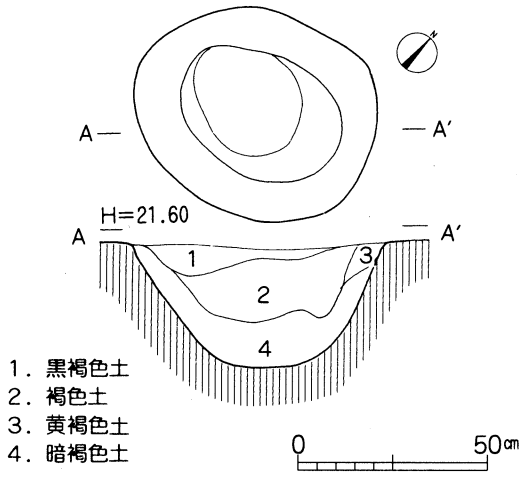


Fig.116　第11号住居跡貯蔵穴

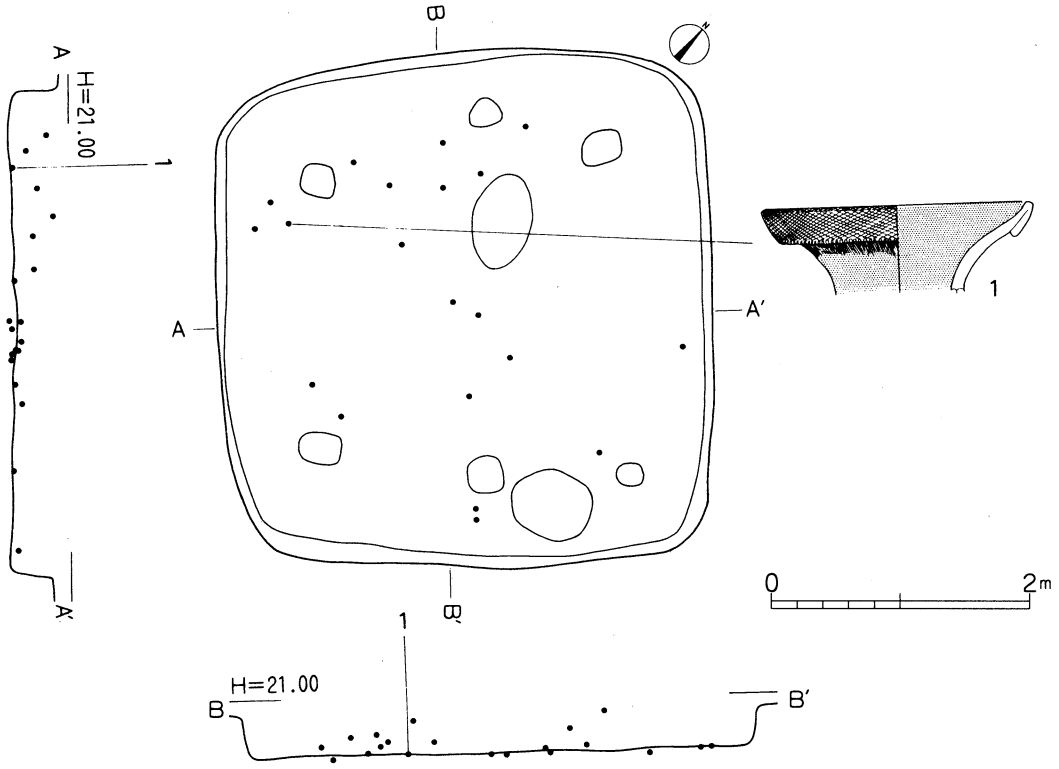


Fig.117　第11号住居跡遺物分布図

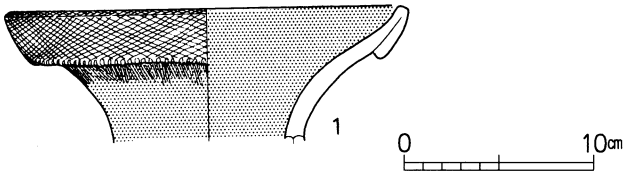


Fig.118　第11号住居跡出土遺物

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに東壁際や西壁際周辺には溝状を呈した掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに北側の炉跡周辺に集中する。しかし、土器の破片数に比べると図示しうる資料は、壺１点のみである。

遺物　口縁部から頸部にかけて1/4程度を遺存し、推定口径21.4㎝を測る。粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部外面および口唇部には網目状撚糸文が施文され、口縁部下端にはハケメ具による刻みが巡る。頸部は縦位のハケメ調整の後、縦位の細かなミガキが加えられている。内面もやや斜行するミガキが施されている。口縁部外面と口唇部を除く内外面に赤彩がみられる。焼成は良好である。

第22号住居跡（SI22）（Fig.119～124）

位置　本跡は、調査区南東部にあたり、12-O、12-P、13-O、13-P区の標高22.18m～22.50mに位置し、南西側に第21号住居跡（SI21）が、北側に第23号住居跡（SI23）が隣接する。

形態　平面形は、基本的には全体が丸味もつ隅丸方形である。長軸７.14m、短軸６.86mを測り、長軸方位はN-８°-Eを指し、大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかな傾斜をもち立ち上がる。床面は若干の起伏は呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　６層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
２層	7.5YR4/6	褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
３層	7.5YR2/1	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
４層	7.5YR4/6	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層	7.5YR4/4	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
６層	7.5YR5/6	明褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴５本と地床炉１基を確認した。

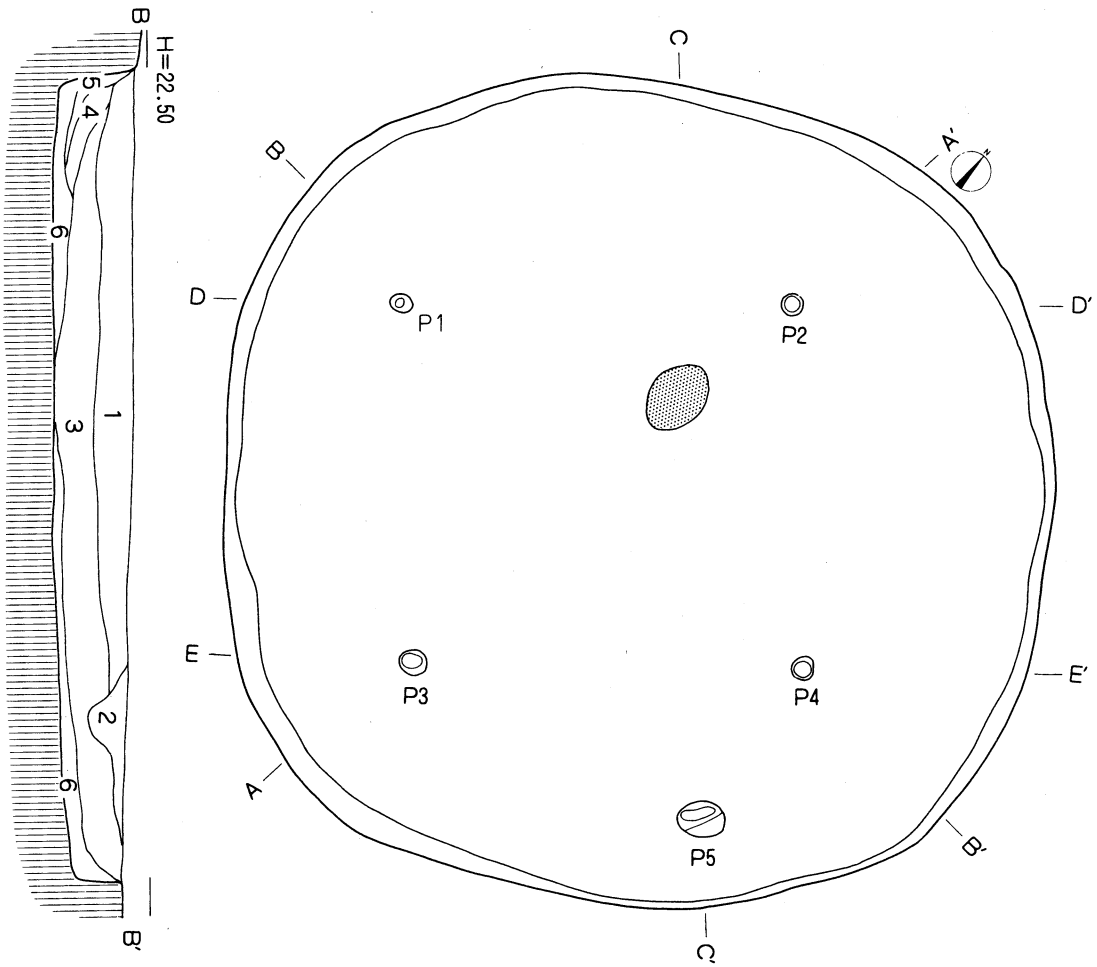
主柱穴はP１～P４で、P１は西側に位置し、上面が16×18㎝の楕円形、深さ14㎝。P２は北側で上面が18×18㎝の円形で、深さ14㎝。P３は南側に位置し、上面が20×22㎝の楕円形で、深さ26㎝。P４は東側で、18×20㎝の楕円形、深さ21㎝を測る。また南壁中央より東寄りにP5を穿っている。上面が30×38㎝の楕円形で、深さ42㎝と二段掘りのピットで、炉跡に対峙する位置に設置されていることから入口部施設の梯子穴と思われる。

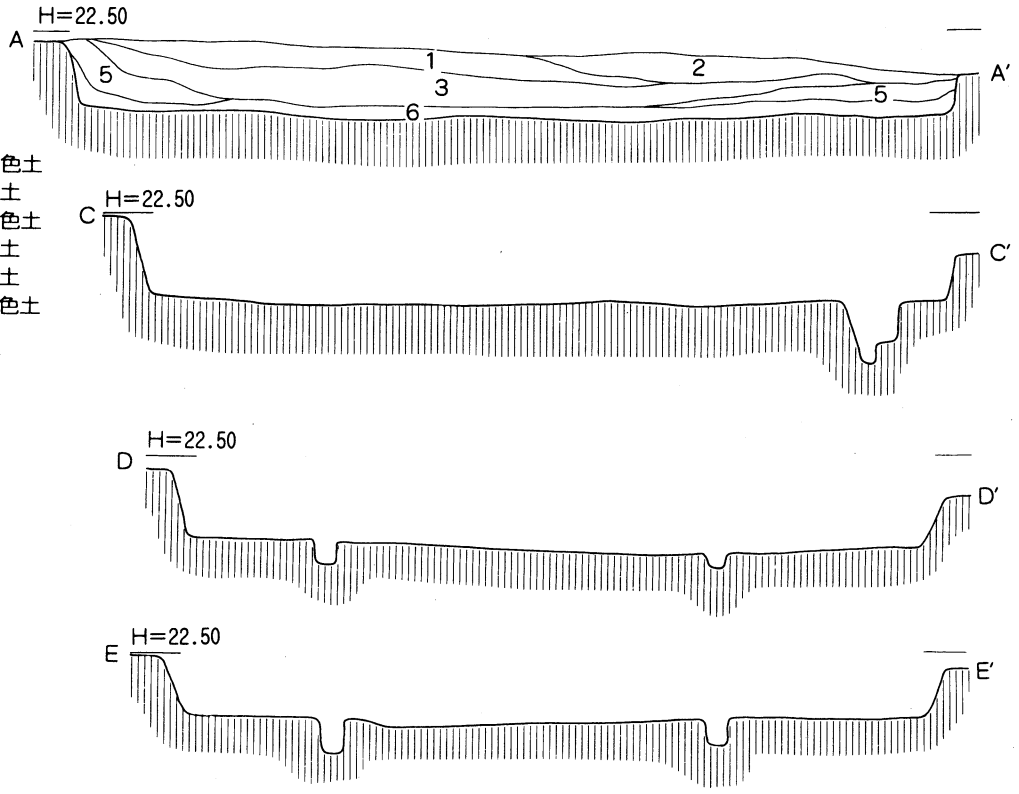
炉は床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに設置され、長径60㎝、短径46㎝、深さ11㎝を測る。断面は起伏はあるものの、ほぼ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の北側に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層と第３層が焼土粒子を多量に含む焼土層で、とくに第２層の赤褐色焼土層内では多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに炉周辺と壁際周辺に粗雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに東壁際には壺形土器を中心に比較的大型の土器片がまとまって出土していた。図示した資料は、壺11点、甕４点、高坏６点、鉢２点である。

遺物　１～７は壺形土器口縁部である。１は口縁部から頸部にかけて遺存し、口縁部のみ1/2程度欠損する。推定口径28.0㎝を測る大型の壺である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、緩く内湾気味に開く。口唇部には附加条第１種の縄紋が巡らされ、口縁部外面は横位のハケメ調整の後、上下二段縄紋帯が施文されている。上段は附加条第１種縄紋、下段にLRの単節縄紋を施し、これらを区画す





1層　7.5YR3/3　暗褐色土
2層　7.5YR4/6　褐色土
3層　7.5YR2/1　黒褐色土
4層　7.5YR4/6　褐色土
5層　7.5YR4/4　褐色土
6層　7.5YR5/6　明褐色土

Fig.119　第22号住居跡

0　2m

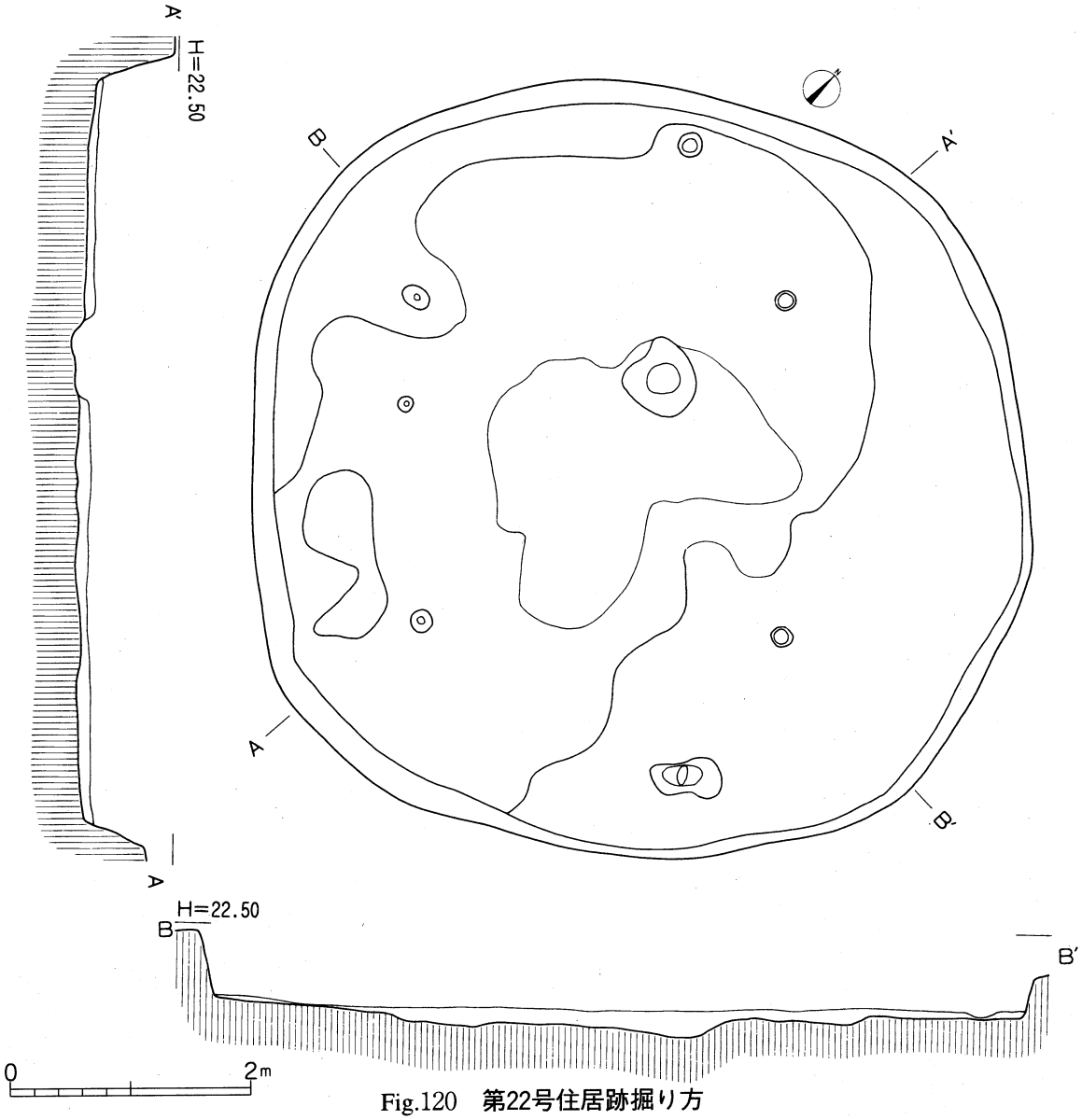


Fig.120　第22号住居跡掘り方

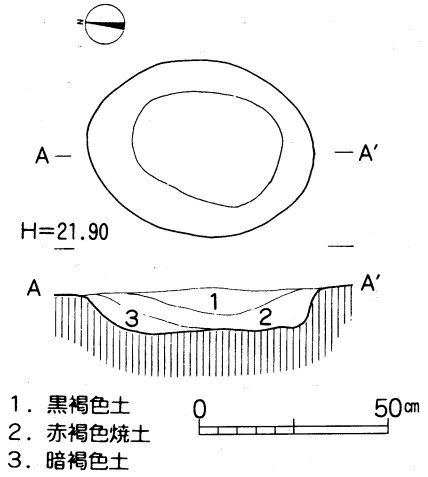


Fig.121　第22号住居跡炉

るようにほぼ中央に２条のS字状結節文が施文される。頸部は縦位方向の細かなミガキが加えられ、赤彩されている。肩部には単節LR縄紋を施文し、上端に２条のS字状結節文がみられる。なお、このS字状結節文の施文は頸部のミガキ工程より先行する。内面にはミガキが加えられており、口縁部から頸部にかけて赤彩が施されている。焼成は良好で、赤彩部分を除く色調はにぶい黄橙色を呈する。２も１と同様の壺形土器である。口縁部のみ1/6程度を遺存する。推定口径は27.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部に附加条第１種縄紋を施文し、外面はS字状結節文を区画文として附加条第１種縄紋と単節LR縄紋を施文する。頸部はミガキが加えられ、赤彩されている。内面もミガキの後、赤彩が施されている。焼成は良好である。３は口縁部のみの小破片で、広口壺の形態をもつ。口縁部は受口気味に開き、推定口径24.0cmを測る。口唇部

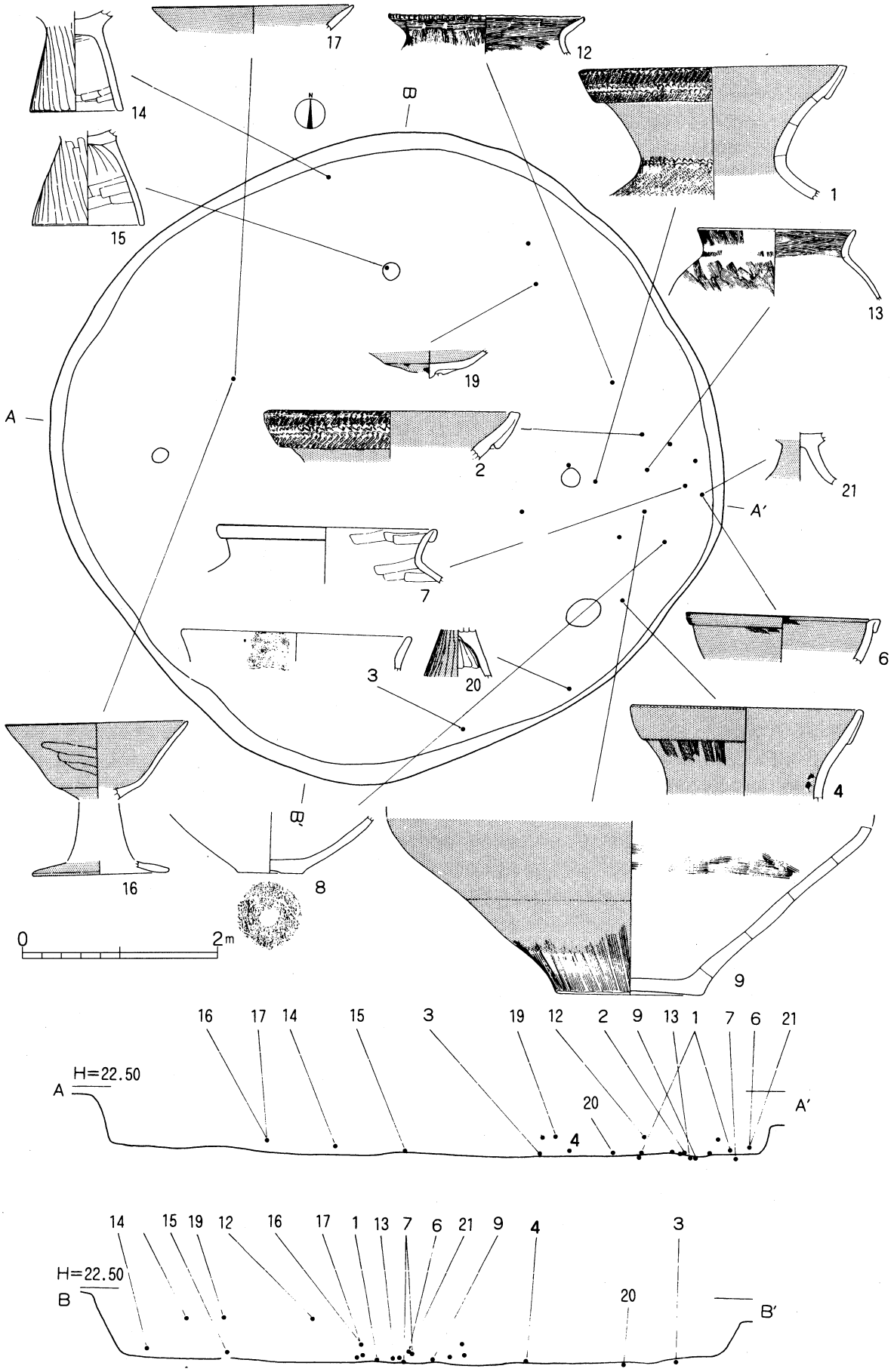


Fig.122　第22号住居跡遺物分布図

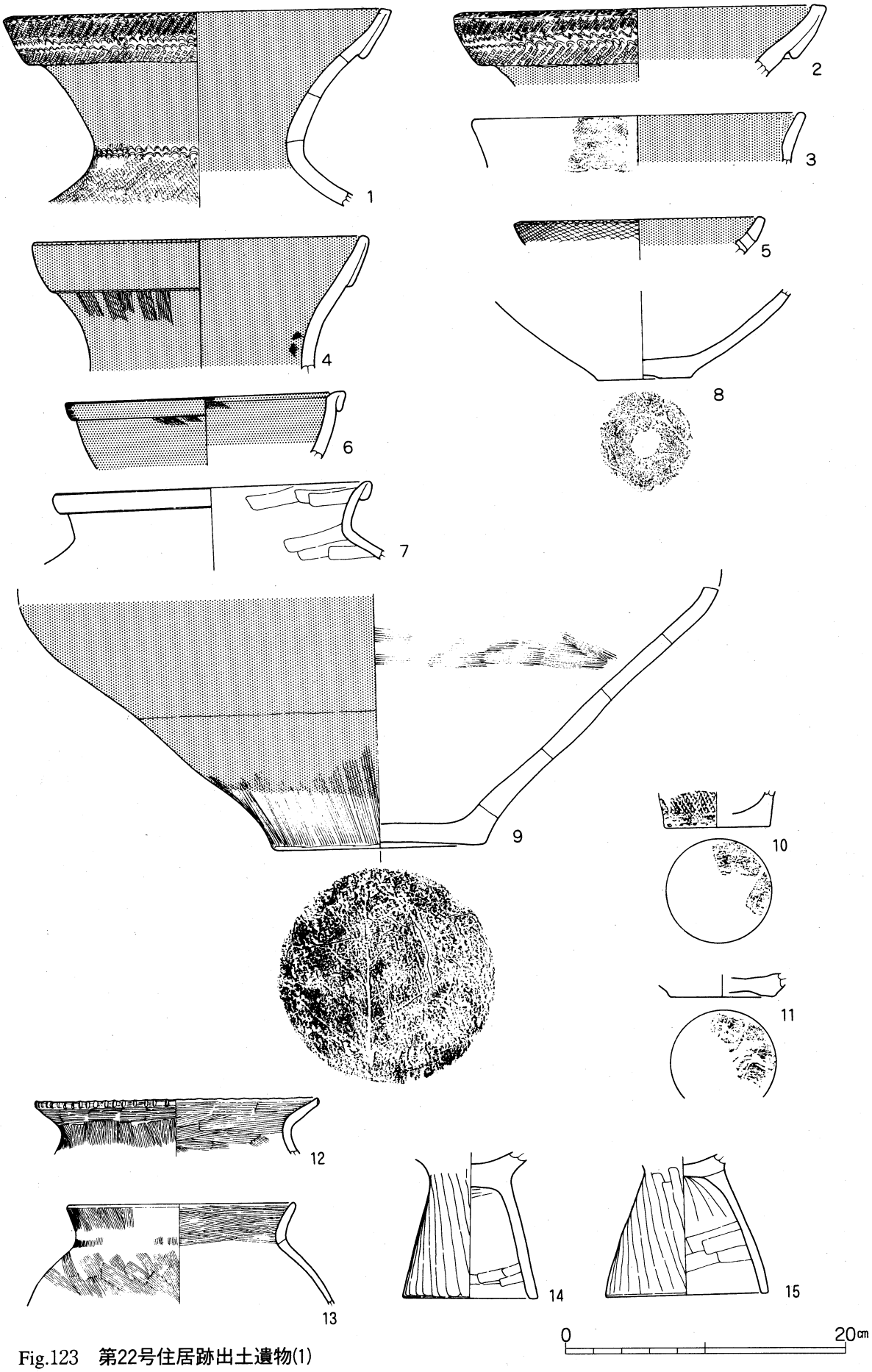


Fig.123　第22号住居跡出土遺物(1)

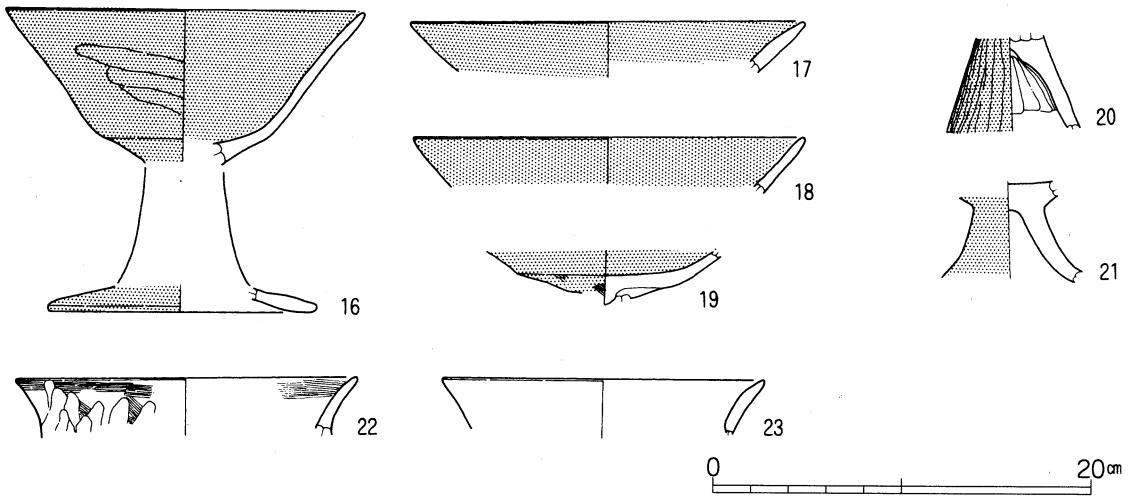


Fig.124　第22号住居跡出土遺物(2)

は単節LR縄紋を巡らし、さらに口縁部外面上部にはやはり単節LR縄紋を施文し、下位に２段のS字状結節文を施す。内面はミガキが加えられ、赤彩されている。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。４は口縁部1/6程度を遺存する。口縁は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、推定口径24.０cmを測る。口縁部は内湾気味に開く形態をもつ。口縁部外面は横ナデ、頸部は縦位のハケメ調整後、ナデが加えられて、赤彩されている。内面も横ナデの後、赤彩されている。焼成は良好である。５は口縁部上位のみの小破片。推定口径18.０cmを測る。口唇部および口縁部外面は網目状撚糸文が施文され、内面はナデの後、赤彩が施されている。なお、補修孔と思われる円孔が穿っている。焼成は良好である。６は口縁部のみ遺存する小破片である。甕の形態に近似しているが、ここでは広口壺に分類した。口縁は幅の狭い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、内湾気味に外方へ開く。内外面ともナデ整形が施され、赤彩されている。焼成は良好である。７は口縁部から頸部にかけて約2/3程度遺存する。口縁部は「く」の字状に外反する甕の形態に近似する広口壺である。口縁部は細い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部外面は横ナデ、頸部もナデ整形。内面も横ナデによって仕上げられている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。８～11は壺底部破片である。８は底径6.8cmを測り、体部は大きく外方へ開く。底面の周縁に粘土帯を貼り合わせて高まりをもつ。内外面ともナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好。色調はにぶい赤褐色を呈する。９は大型の壺形土器の胴下半部が完存する。やや平底の底部から内湾気味に胴部中位へ移行する。底径15cm、現器高18.３cm、胴部最大径は50cmを測る。体部外面は丁寧なナデが施されているが、底部近くでは縦位のハケメ調整が残置している。全面赤彩されている。底面は木葉痕が認められる。内面は横位のハケメ調整痕がみられる。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。10は底部約1/2程度が遺存する。推定底径は7.8cmを測る。また底部周縁には附加条第１種の縄紋と底面には木葉痕を残置している。内面はナデ整形。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。11は底部のみ1/2を残置する。推定底径7.8cmを測る。内外面ともナデ整形で仕上げられている。底面には木葉痕を残置している。焼成は良好で、明褐色を呈する。12～15は台付甕である。12は口縁部のみ3/4強遺存し、口径20.４cmを測る。頸部のくびれは強く、口縁部が比較的短い形態をもつ。口唇部にはハケメ具による刻みが巡り、外面には横・縦位、内面には横位のハケメ整形が施されている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。13は口縁部から胴部上半部にかけて1/4程度遺存する。口縁部は短く外反し、胴部が球形をもつ形態の甕である。推定口径16.４cmを測る。外面は口縁部が縦位、胴部が斜めのハケメ調整痕を残し、内面は口縁部が横位のハケメ調整が施され、体部はナデ整形が施されている。焼成は良好で、明褐色を呈する。14は

脚部のみ完存する。脚底径9.8cmを測る。脚部はほぼ直線的に小さく開き、端部は平坦に仕上げられている。外面は縦位のヘラケズリ、内面はナデ整形と脚端部付近は横位のヘラケズリが施されている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。15も脚部のみ完存する。脚底径10.0cmを測る。脚部は内湾気味に開き、やはり端部は平坦に仕上げられている。外面は縦位のヘラケズリ、内面はナデ整形が施され、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。16～21は高坏形土器である。16は坏部と脚の裾部約1/8程度遺存する。坏部底部と口縁部には比較的明瞭な稜をもち、裾部は低く開く。坏部内外面とも丁寧なナデ整形が施された後、赤彩されている。脚部外面もナデ整形の後、赤彩が施されている。内面もナデ整形である。焼成は良好である。17・18は高坏の坏部破片である。いずれも内外面ともナデ整形で仕上げられており、赤彩されている。焼成は良好である。19は高坏の坏部底部破片である。坏部底部と口縁部との境界に稜をもつ。また脚柱部の接ぎ目にはホゾがみられる。内外面ともミガキが施され、赤彩されている。なお、坏部底部にはハケメ調整痕が残置している。焼成は良好である。20は柱状部破片。1/2程度を遺存する。外面は縦位方向のケズリで面取りされ、内面はヘラ状工具により抉りとっている。外面は赤彩されている。焼成は良好。21は坏と脚の接合部を完存する。脚部は中空で、透孔が3個認められる。器面の粗れが著しく明瞭な整形を観察できない。焼成はやや不良。にぶい赤褐色を呈する。22・23は甕の口縁部破片と考える。しかし、いずれも1/12以下の小破片である。22の外面は横位と斜位のハケメ調整され、ナデ整形が部分的に施される。内面も横位のハケメ調整が残置する。焼成は良好で、灰褐色を呈する。23も外反する口縁部破片で、内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。

第32号住居跡（SI32）（Fig.125～132）

位置　本跡は、調査区東部にあたり、9-M、9-N区の標高22.80m～22.93mに位置し、北側に第34号住居跡（SI34）が、北東側に第33号住居跡（SI33）が、南西側には第31号住居跡（SI31）が隣接する。

形態　平面形は隅丸長方形を呈する。長軸6.72m、短軸6.08mを測り、長軸方位はN-31°-Wを指し、やや大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、北辺はほぼ垂直に、南辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦でほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　7層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層	7.5YR3/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
2層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
3層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
4層	7.5YR2/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
5層	7.5YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
6層	7.5YR3/4	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
7層	7.5YR4/6	褐色土	多量のロームブロックを含み、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴5本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認する。

主柱穴はP1～P4で、P1は西側に位置し、上面が24×32cmの楕円形、深さ60cm。P2は北側で38×48cmの楕円形で、深さ67cm。なお、本跡には径14cmの炭化した柱材が残存しており、床面上から約5cmほど突き出ていたものの、柱穴内では約30cmほど炭化状態で残置されていた。この柱材の状態を観察するため、P2のみ断ち割り調査を実施した。柱穴は大きく穿り、柱材を埋めた後、まず北側（外側）からロームブロックを詰め固め、さらに柱材を固定するため黒褐色土で撞き固める。また床面上はローム

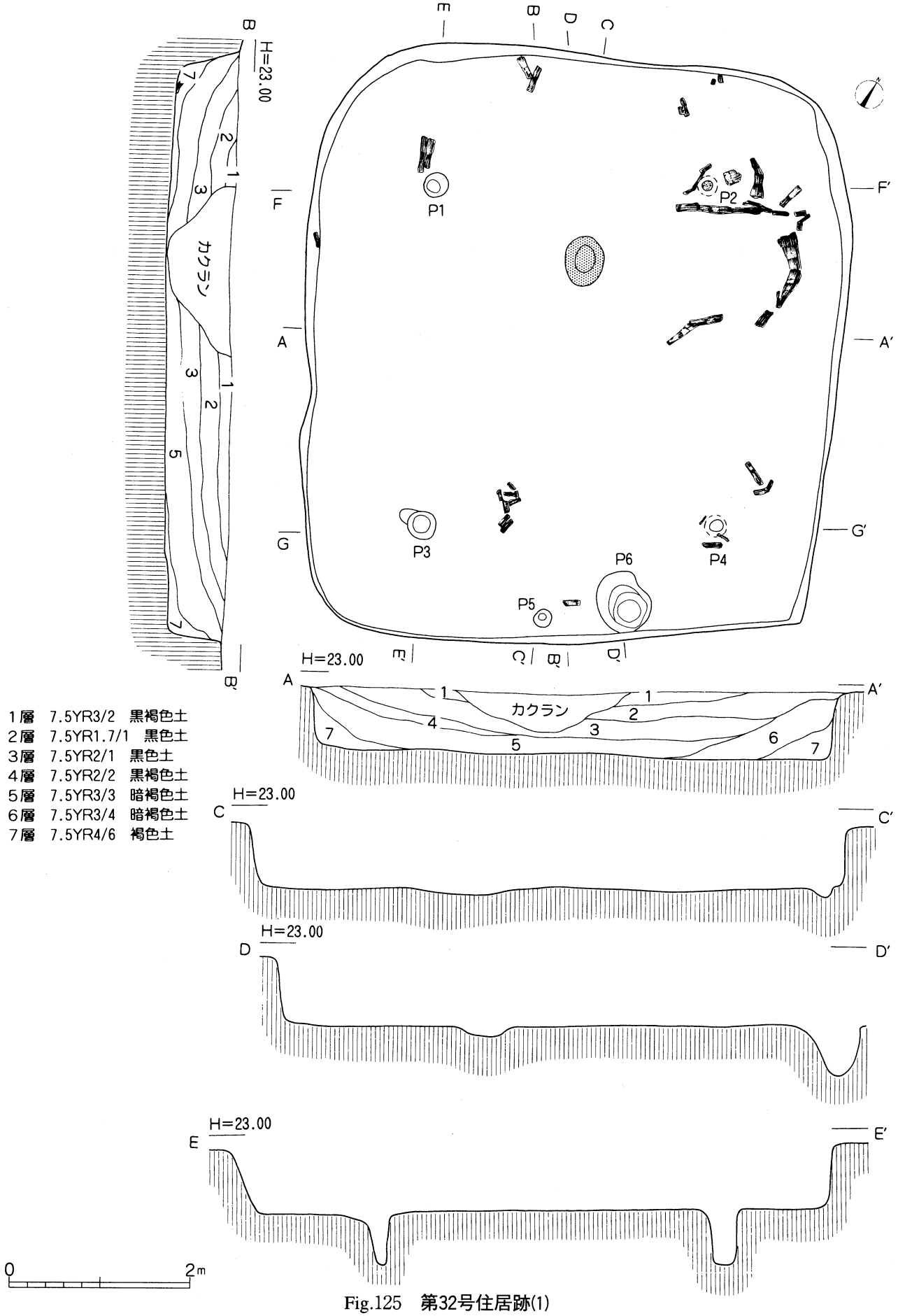


Fig.125　第32号住居跡(1)

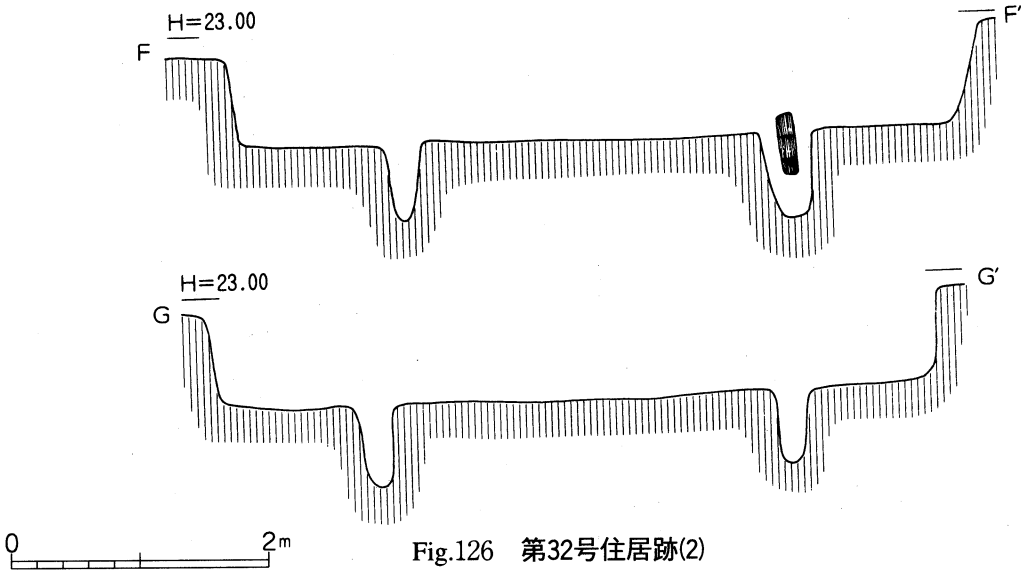


Fig.126　第32号住居跡(2)

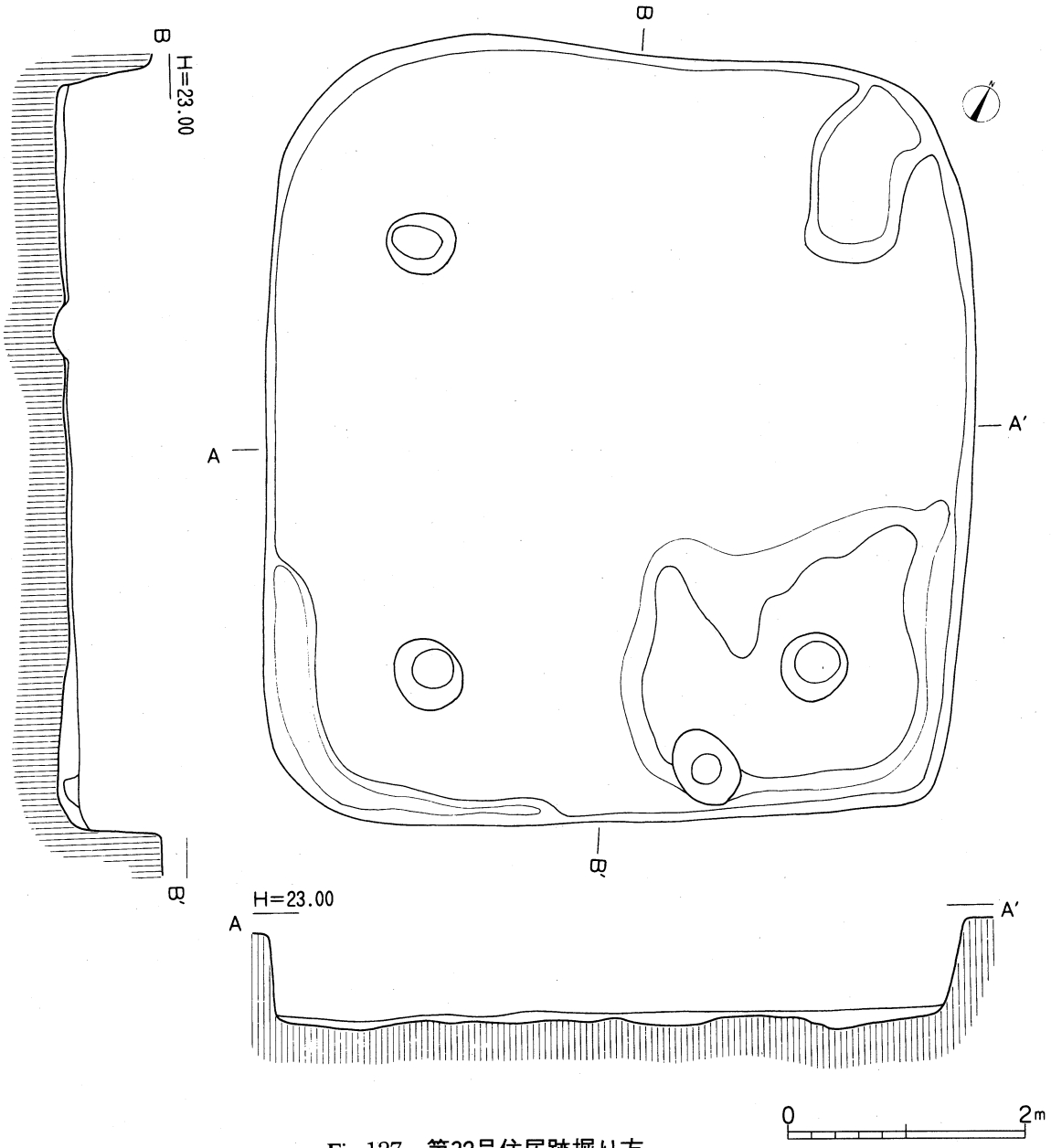


Fig.127　第32号住居跡掘り方

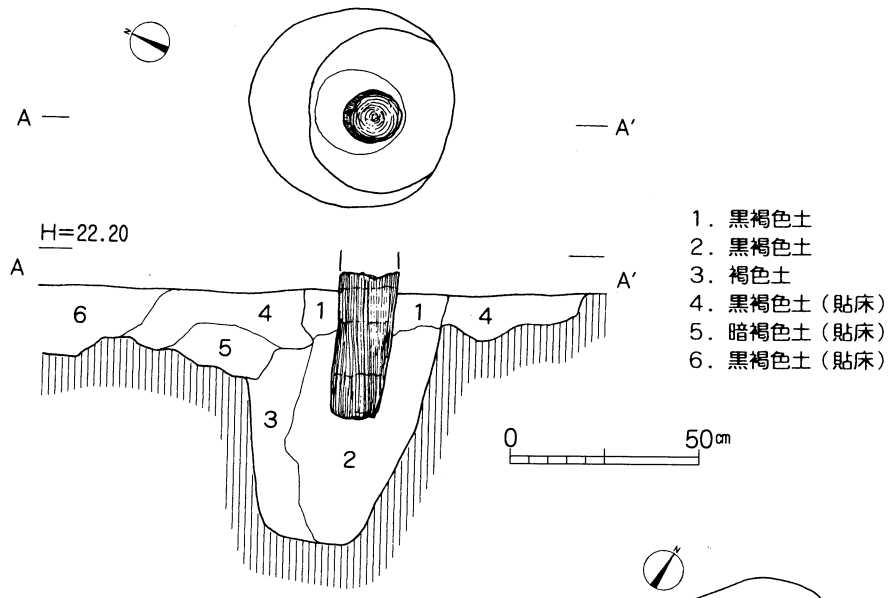


Fig.128　第32号住居跡柱穴(P2)断面図

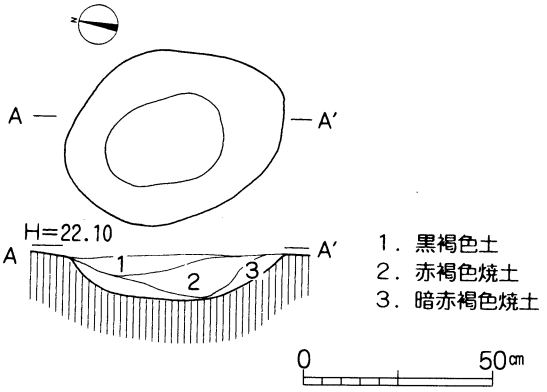


Fig.129　第32号住居跡炉

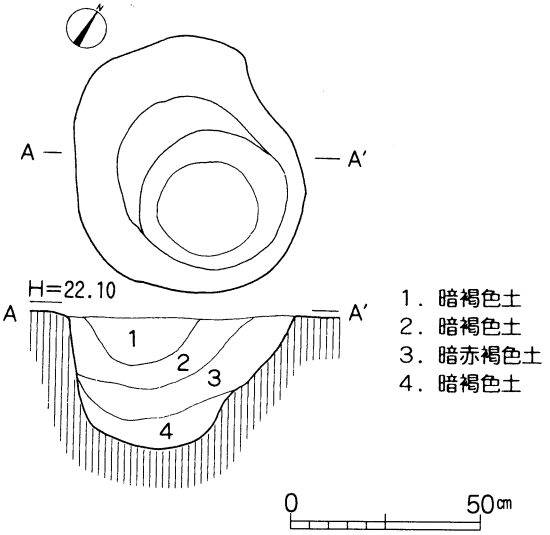


Fig.130　第32号住居跡貯蔵穴

ブロックと黒褐色土の混合土によって貼床にし、塞ぐ（Fig.128）。P３は南側に位置し、上面が32×44cmの楕円形で、深さ64cm。P４は東側で、24×26cmのほぼ円形、深さ57cmを測る。また南壁中央部に上面が22×24cmのほぼ円形で、深さ13cmと浅い深度の入口部施設の梯子穴P５が確認された。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに設置され、長径58cm、短径46cm、深さ11cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層と第３層が焼土層で、とくに第２層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子が含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁際中央部からやや東寄りに構築され、楕円形を呈する。二段掘りで、上面は長径70cm、短径60cm、深さ54cmを測り、底面は丸底状をなし、壁は急傾して立ち上がる。覆土は４層に分層できる。なお、P２で炭化した柱材が検出されたように、本跡は火災住居で、P２周辺からP４にかけて、その他柱穴周辺に炭化物が検出されている。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに東壁際のP４から貯蔵穴周辺や北壁際周辺には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに貯蔵穴周辺および炉跡周辺に集中する。その内、

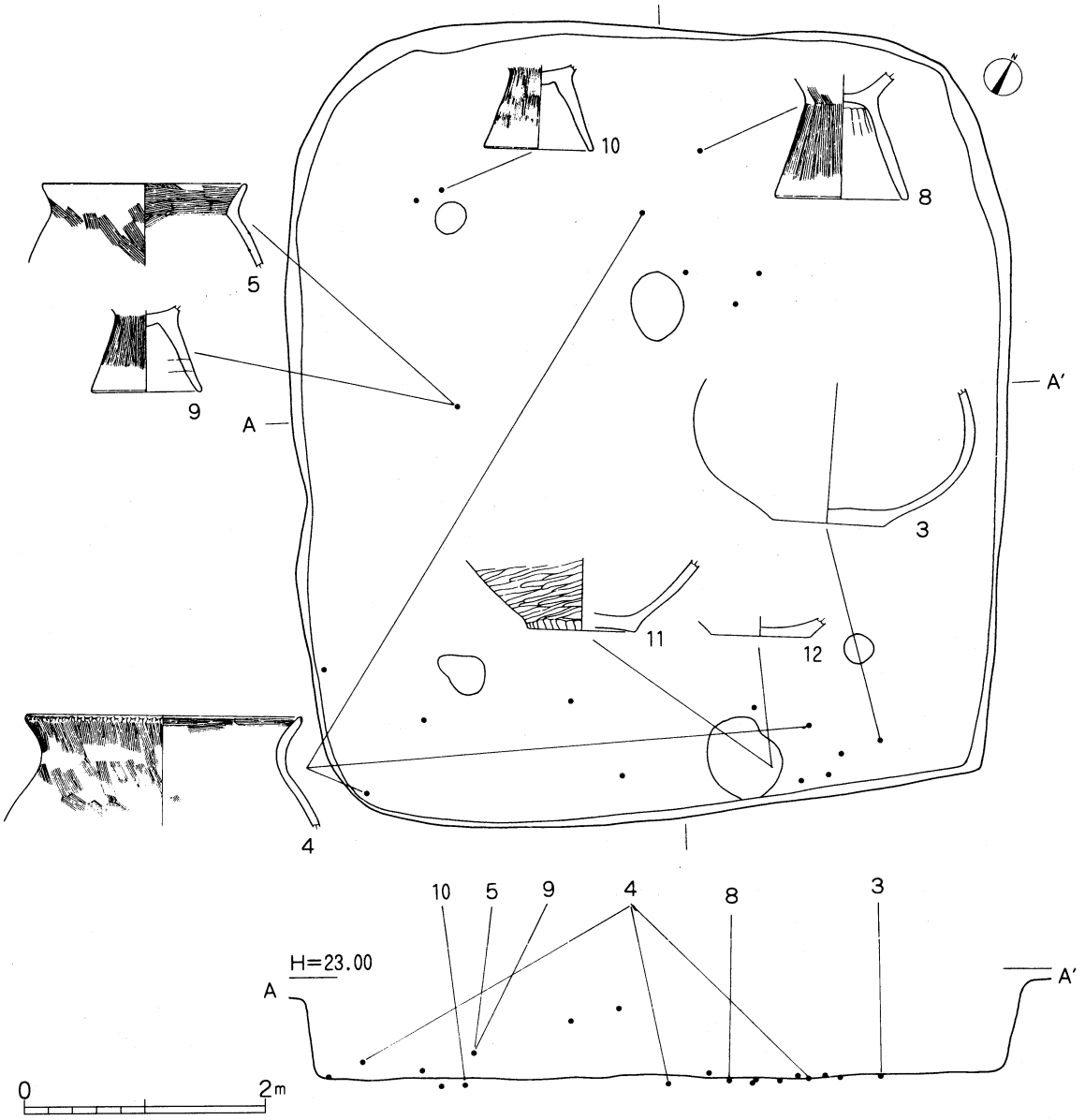


Fig.131　第32号住居跡遺物分布図

個体として図示しうる資料は、壺７点、甕10点である。

遺物　１～３は壺形土器である。１は口縁部破片1/8を遺存する。推定口径16.６㎝を測る。口縁部はやや内湾気味に開く。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は若干平坦面をもつ。口唇部外面は斜行するミガキ、頸部は縦位のミガキ整形の後、赤彩される。内面も横位のナデ整形の後、赤彩が施される。焼成は良好。２は口縁部から頸部にかけて1/8程度を遺存する。推定口径12.０㎝を測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は平坦に成形させている。口縁部外面は横ナデ、頸部は縦位のハケメ調整の後、ナデ整形で一部ハケメ痕を消失させている。内面はナデ整形を施し、内外面とも赤彩されている。焼成は良好である。３は胴部上位を欠損し、胴部下位1/2程度を遺存する。胴部最大径は13.6㎝、底径9.6㎝を測る。胴部下位がやや脹る形態である。外面と底面は丁寧なナデ整形。内面もナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、褐色を呈する。４は台付甕の口縁部破片。口縁部から頸部にかけて2/3程度を遺存する。口径は23.２㎝を測る。口

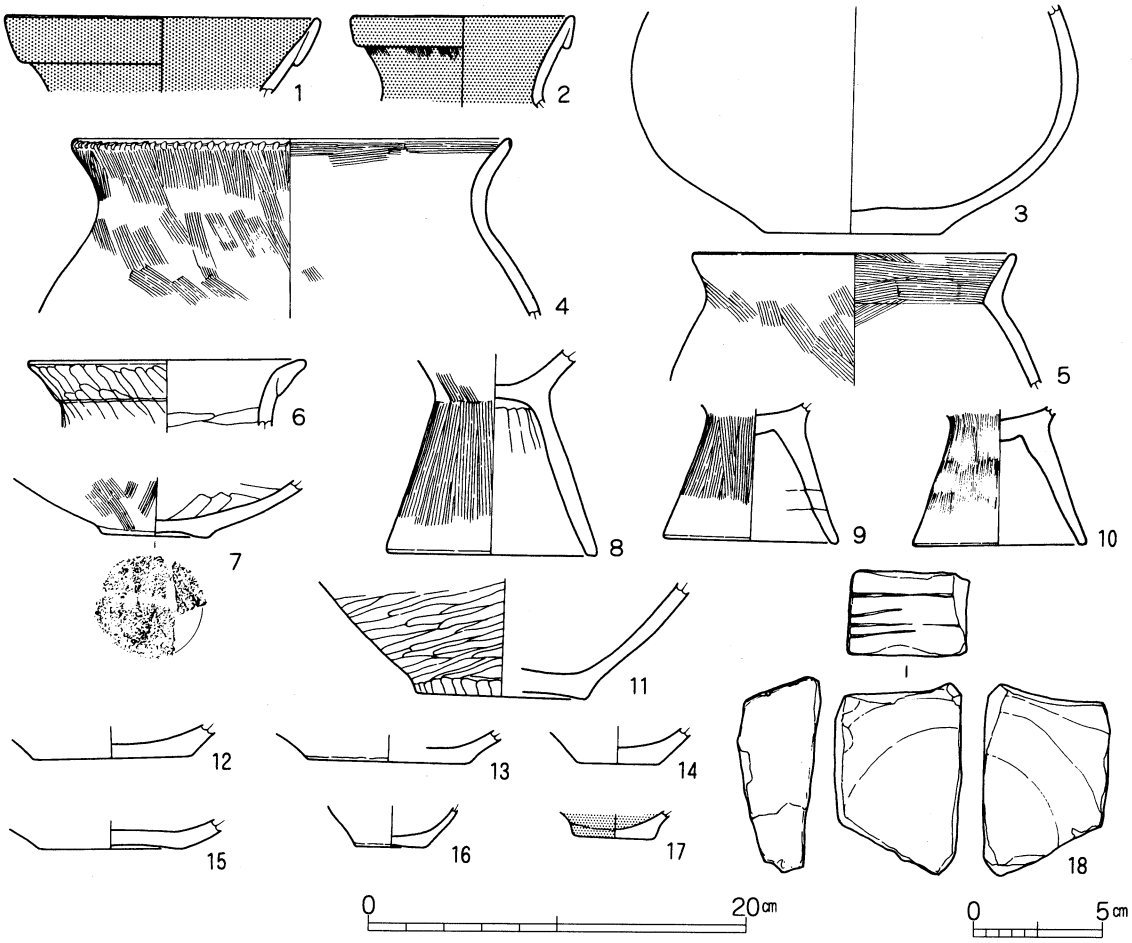


Fig.132　第32号住居跡出土遺物

縁部は「く」の字状に外反する。口唇部はハケメ具による密接した刻みが巡る。口縁部から頸部にかけての外面には縦・斜めのごく細かいハケメ調整が施され、内面は横位のナデ整形が施されているものの、口唇部付近やくびれ部の一部に横位のハケメ調整痕を残している。焼成は良好で、明褐色を呈する。５は口縁部から頸部にかけて1/6程度を遺存する。口径は17.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、外面は口縁部が横ナデ、頸部が斜行のハケメ調整を加える。内面は口縁部が横位のハケメ調整。体部がナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。明褐色を呈する。６は口縁部から頸部にかけて約1/2程遺存する。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、大きく外反する。外面は指頭によるナデ整形が施され、内面は横位の丁寧なナデ整形が加えられている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。７は甕底部破片で、底面は完存し、底径は5.7cmを測る。底面は周縁を粘土紐を貼り付け輪状に高めている。外面は縦・斜め方向のハケメ調整を施し、内面はナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。赤褐色を呈する。８～10は台付甕である。８は脚のみ完存する。裾径11.4cm、現器高10.８cmを測る。甕の脚としては大型の部類に入るであろう。外面には縦位のハケメ調整が施され、炭化状のススが部分的に残置する。内面はヘラ状工具によるナデ整形が行なわれている。焼成は良好。明褐色を呈する。９は脚部の1/2程度を遺存する。推定裾径9.4cm、現脚器高7.3cmでやや短い脚部はほぼ直線的に開く。外面は縦位の細いハケメ調整が施され、内面はナデ整形で仕上げられている。焼成は良好。褐色を呈する。11～17は壺・甕底部片を一括する。11は壺底部であろう。やや上げ底状で、底径9.2cmを測る。底部と外面は横位の丁寧なナデが施されているものの、内面は器面の粗れが目立ち、整形は不詳である。焼成は良好で、明褐色を呈する。12～13は底部小破片であり、平底で、外面は比較的丁寧なナデ整形、内面もナデ整形に

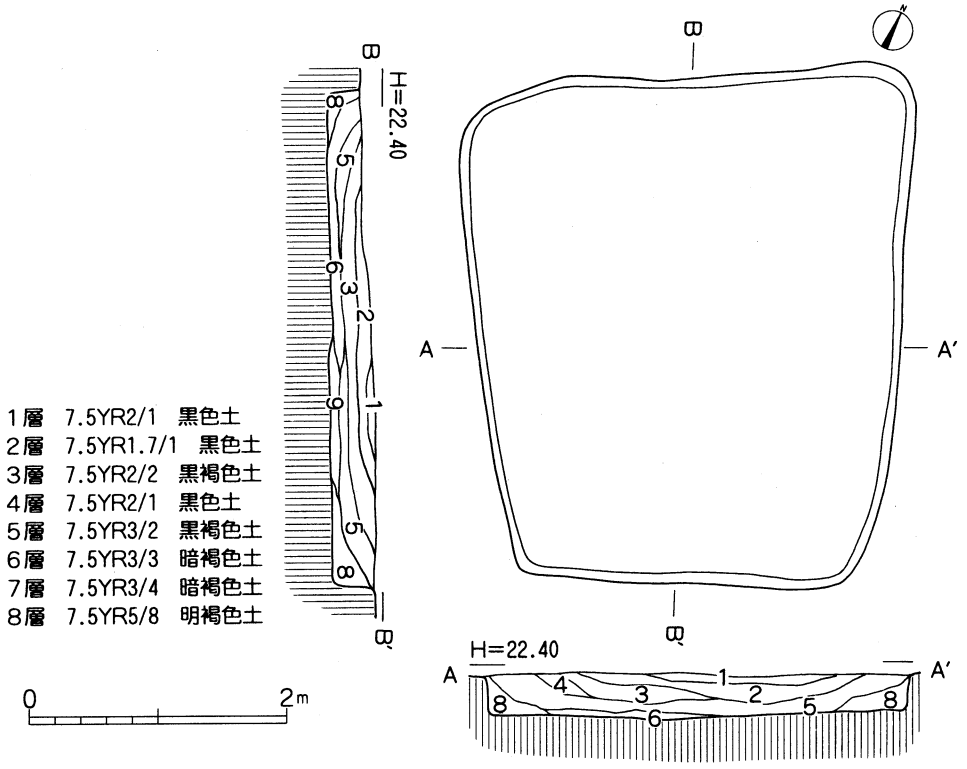


Fig.133　第40号住居跡

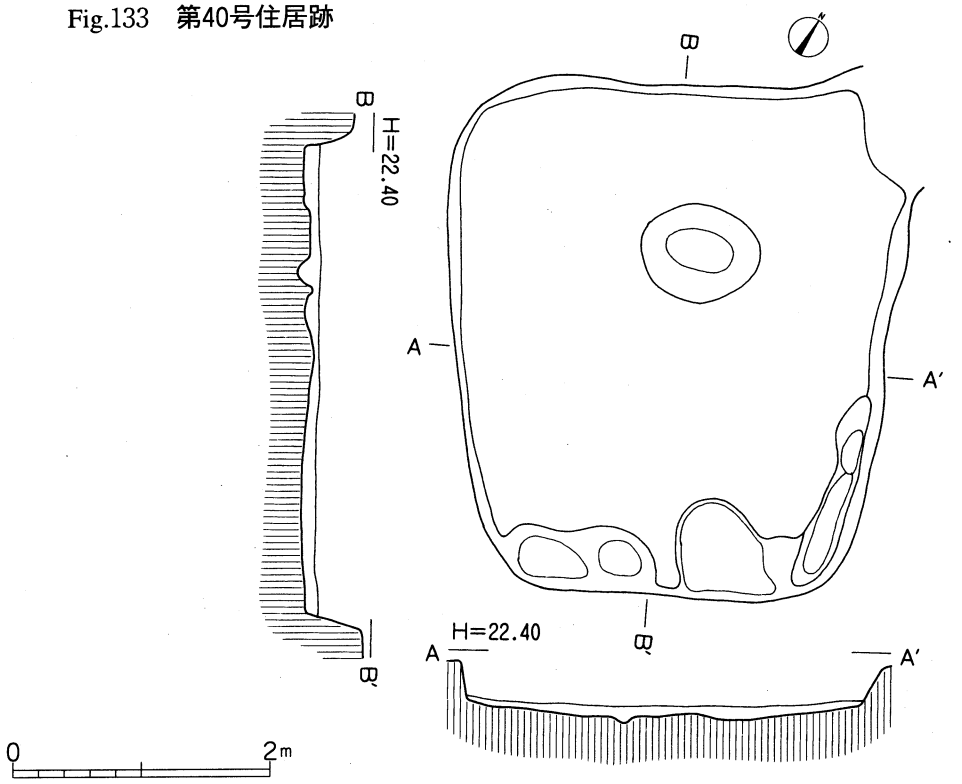


Fig.134　第40号住居跡掘り方

よって仕上げられている。15は底部が完存で、やや上げ底気味をなす。底径7.6cmを測る。外面は丁寧なナデ整形。内面は器面の粗れが著しい。暗赤褐色を呈する。16・17は小型の鉢もしくは壺の底部としてよいようである。いずれも底部のみ完存する。16は底径4.4cm、17は底径4.6cmを測る。17は内外面に赤彩されている。18は砂岩製の砥石。長さ7.58cm、幅4.70cm、厚さ3.21cmを測る。表裏側面とも磨滅が

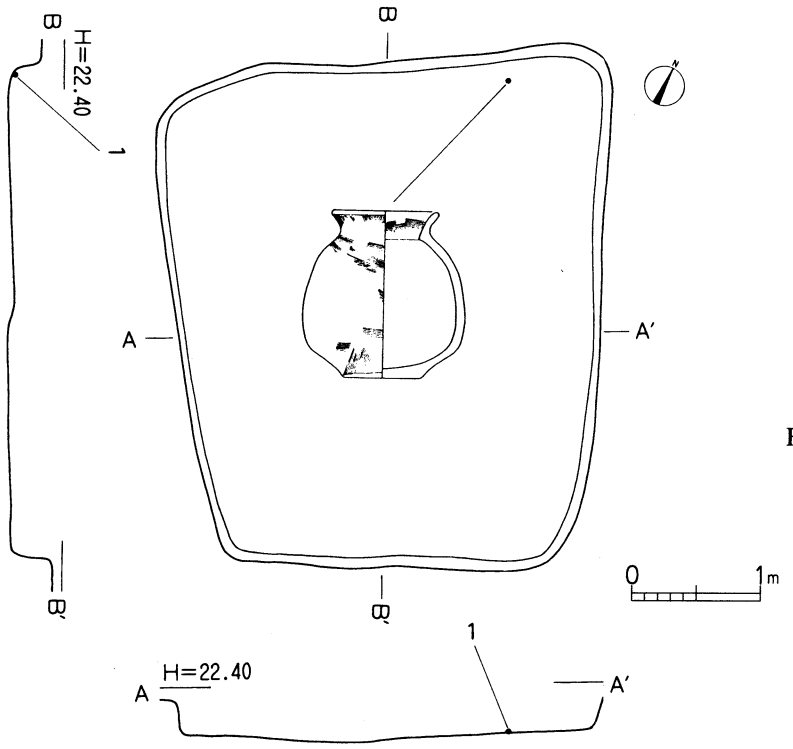


Fig.135　第40号住居跡遺物分布図

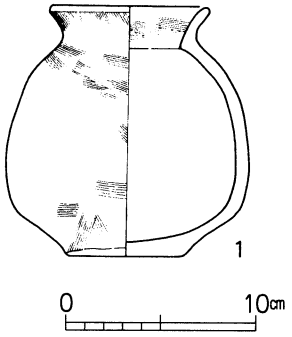


Fig.136　第40号住居跡出土遺物

顕著で、上端面には溝状の研磨筋がある。

第40号住居跡（SI40）（Fig.133～136）

位置　本跡は、調査区北端で、3-K区の標高22.22m～22.33mに位置する。本跡は住居跡群の北端にあたる。なお東側に第41号住居跡（SI41）が構築されている。

形態　平面形は隅丸台形を呈する。長軸４.04m、短軸３.34mを測り、長軸方位はN-29°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦でほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で全面にわたって硬化している。

覆土　８層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR2/1	黒色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
２層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
３層	7.5YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
４層	7.5YR2/1	黒色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層	7.5YR3/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
６層	7.5YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
７層	7.5YR3/4	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
８層	7.5YR5/8	明褐色土	多量のロームブロックを含み、締まりがある。

住居施設　住居残存部に柱穴や炉、周溝等の施設は確認できなかった。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに南壁際を中心に雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居北壁際に壺形土器（ほぼ完形）１点のみ床面上より出土している。

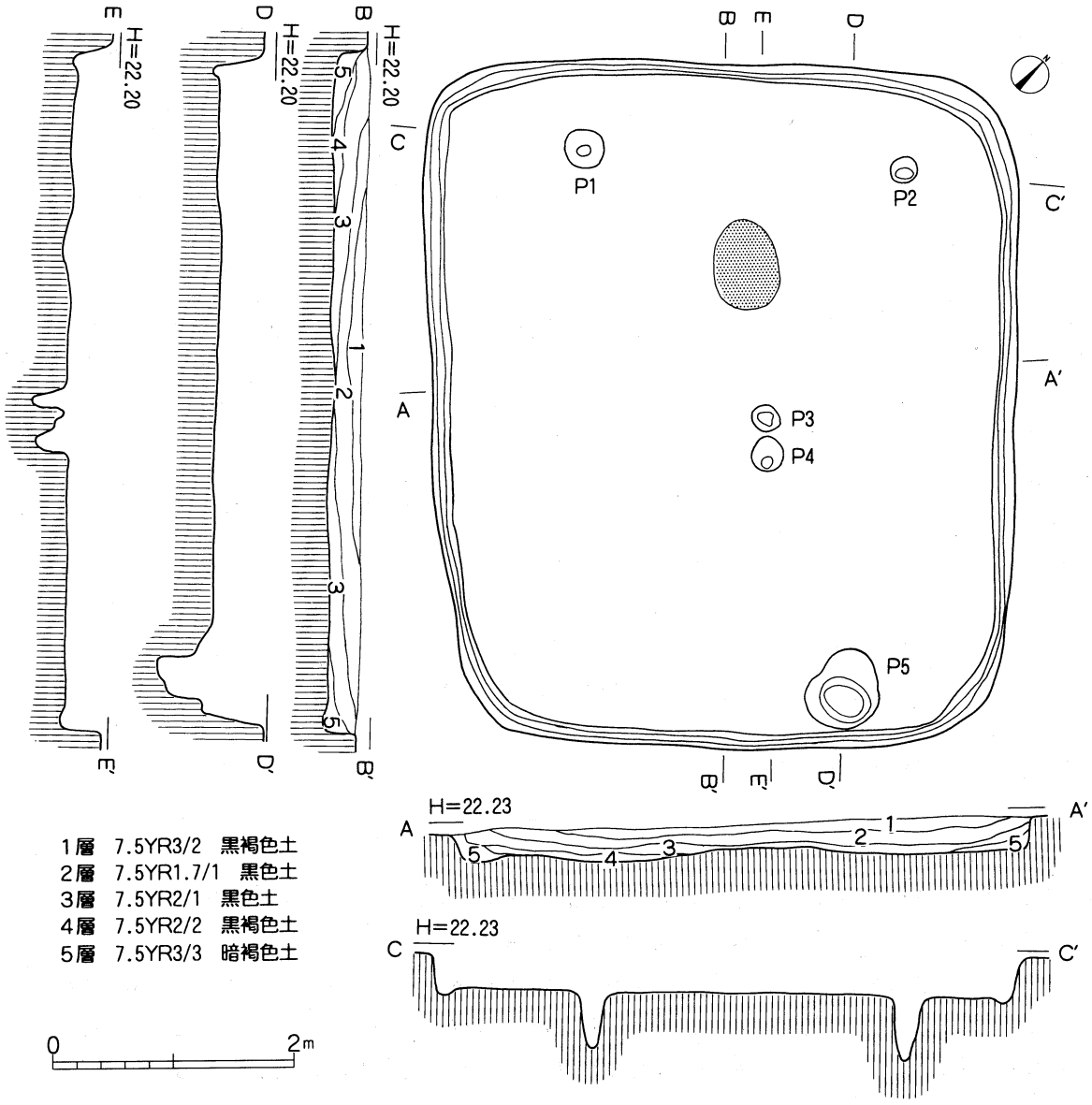


Fig.137　第48号住居跡

遺物　口唇部の二ヶ所に欠損部分がみられる他、ほぼ完存する。器高13.2㎝、口径8.6㎝、胴部最大径12.8㎝、底径6.4㎝を測る。胴部下位に最大径をもち、この最大径の境界部には明瞭な稜をもつ。胴部上位はほぼ球形を呈しているが、最大径から下位は抉り状のカーブを描きながら底部へ移行する。口縁部は短く「く」の字状に外方へ開く。底面は周縁を粘土紐によって貼り合わせ、輪状の高まりみせる。口唇部は丸みもちながら稜を有する。外面の口縁部は斜めのハケメ調整で、胴部は入念なナデ調整が施されているが、肩部では斜め、底部付近では横位および斜位のハケメ調整痕を残置する。内面は口縁部が斜位のハケメ調整痕がみられ、体部はナデ整形で仕上げられている。焼成は良好で、明褐色を呈する。

第48号住居跡（SI48）（Fig.137～141）

位置　本跡は、調査区東部にあたり、9-H、9-I、10-I区の標高22.12m～22.27mに位置する。なお本跡

に隣接する住居跡はないが、北西方向に第47号住居跡（SI47）が構築されている。

形態　平面形は隅丸長方形を呈する。長軸５.82m、短軸４.94mを測り、長軸方位はN-44°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺はほぼ垂直に、北辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦でほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で全面にわたって硬化している。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR3/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
２層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
３層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
４層	7.5YR2/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層	7.5YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本と地床炉１基および貯蔵穴１基を確認する。

柱穴は４本検出されているものの、主柱穴として確認できるのはP１とP２の２本である。まずP１は西側に位置し、上面が36×36cmの円形、深さ43cm。P２は北側で上面が22×24cmの楕円形で、深さ52cmを測る。またP３およびP４は炉跡の南側に位置し、しかも互いに隣接している。北側のP３は、22×22cmの円形で、深さ37cmである。P４は南側で、26×26cmの円形、深さ30cmを測る。このP３とP４は支柱穴か炉施設に伴うものか不明である。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに設置され、長径76cm、短径54cm、深さ12cmを測る。断面は若干の起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第１層と第３層が焼土層で、とくに第３層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁際中央部からやや東寄りに構築され楕円形を呈する。二段掘りで、上面は長径68cm、短径54cm、深さ45cmを測り、底面は丸底状をなし、壁は急傾して立ち上がる。

周溝は全周し、幅10～16cm、深さ２～６cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。なお、入口部施設は確認できなかった。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに住居西側半分に粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居東半分に偏り、とくに貯蔵穴周辺および炉跡周辺に集中する傾向が認められる。その内、個体として図示しうる資料は、壺２点、甕２点、坩２点、高坏１点である。

遺物　１・２は壺形土器である。１は口縁部から頸部にかけて1/4強遺存する壺で、内湾気味に外方へ開く。推定口径17.８cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部および口縁部外面にはRL単節縄紋を施文し、口縁部下端にはハケメ具による刻みを巡らす。頸部は縦位のハケメ調整後、入念なナデ整形によってハケメ痕を消失させ、赤彩させている。内面は横位のミガキを施し、やはり赤彩している。焼成は良好である。２は口縁部から頸部にかけて完存する。口径は16.４cmのやや小型の壺であるが、口縁部は大きく外反する。口唇部は単節RL縄紋を巡らし、口縁部外面は横位のハケメ調整の後、口唇部と同様単節RL縄紋を施文する。頸部も縦位のハケメ調整を加え、頸部下半部からミガキを施し、ハケメ痕を消失させ、赤彩している。内面も口縁部上位には横位のハケメ調整を施した後、ミガキによりハケメ痕を消失させ、赤彩している。焼成は良好である。３は坩形の壺で、口縁部の一部と胴部の1/3を欠損している。器高18.4cm、口径10.0cm、胴部最大径15.6cm、底径3.8cmを測る。胴部最大径はやや下位に位置し、最大径の境界部に稜をもつ。最大径の上位ではやや上下に押しつぶされたような偏球形で、下位では抉り状を呈する。口縁部はやや内湾気味に外方へ立ち上がる。底部は小さく、幾

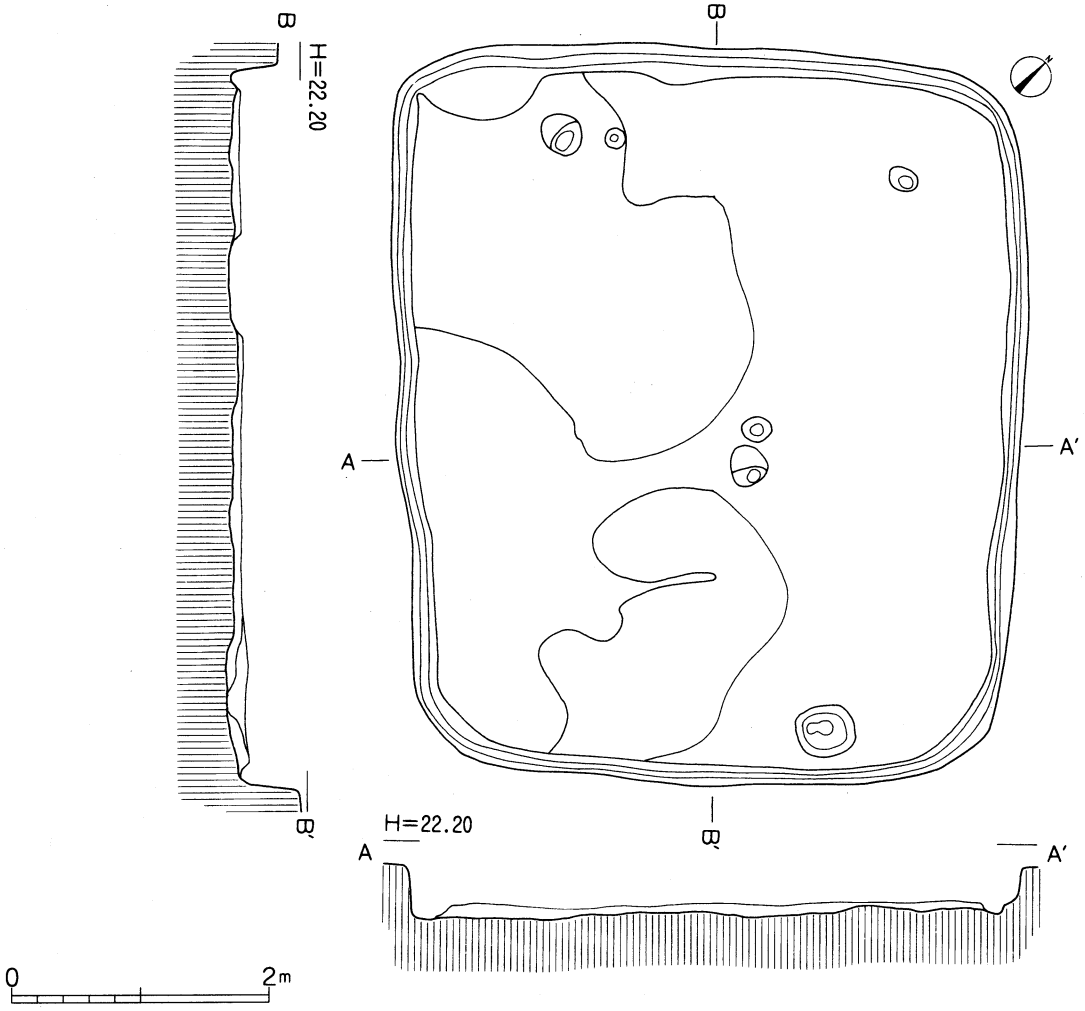


Fig.138　第48号住居跡掘り方

分上げ底状になっている。口唇部は若干内削状を呈し、口縁部および体部は全面入念なミガキが加えられ、赤彩されている。内面も口縁部では縦位方向のミガキを施し、赤彩している。体部はナデ整形が施されている。焼成は良好である。4も坩形をもつ壺である。口縁部のみ完存する。口径14.2cmを測り、若干内湾気味に立ち上がる。口唇部はほぼ平坦で、口縁部外面は斜めのハケメ調整の後、縦位のミガキ整形、赤彩されている。内面も横位のナデの後、縦位のミガキが加わる。さらに赤彩が施されている。5は脚部はないが台付甕と考えたい。口縁部と胴部の一部および脚部を欠損する。口径18.6cm、胴部最大径21.2cm、現器高17.6cmを測る。最大径が胴部中位に位置し、胴部は上下で押しつぶしたような偏円形を呈する。口縁部は短く「く」の字状に外反する。口唇部はヘラ状工具により刻みを巡らし、口縁部から胴部外面は細かなハケメ具による調整した後、ハケメ痕を消失させるように丁寧なナデ整形を施す。なお、部分的

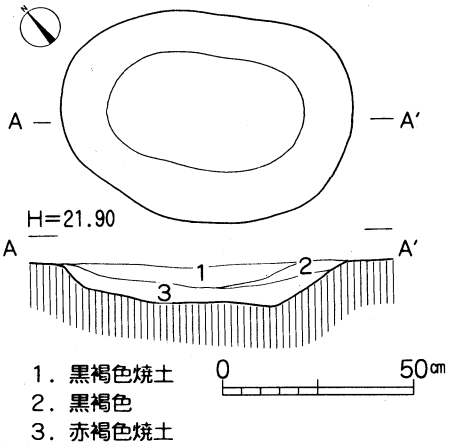


Fig.139　第48号住居跡炉

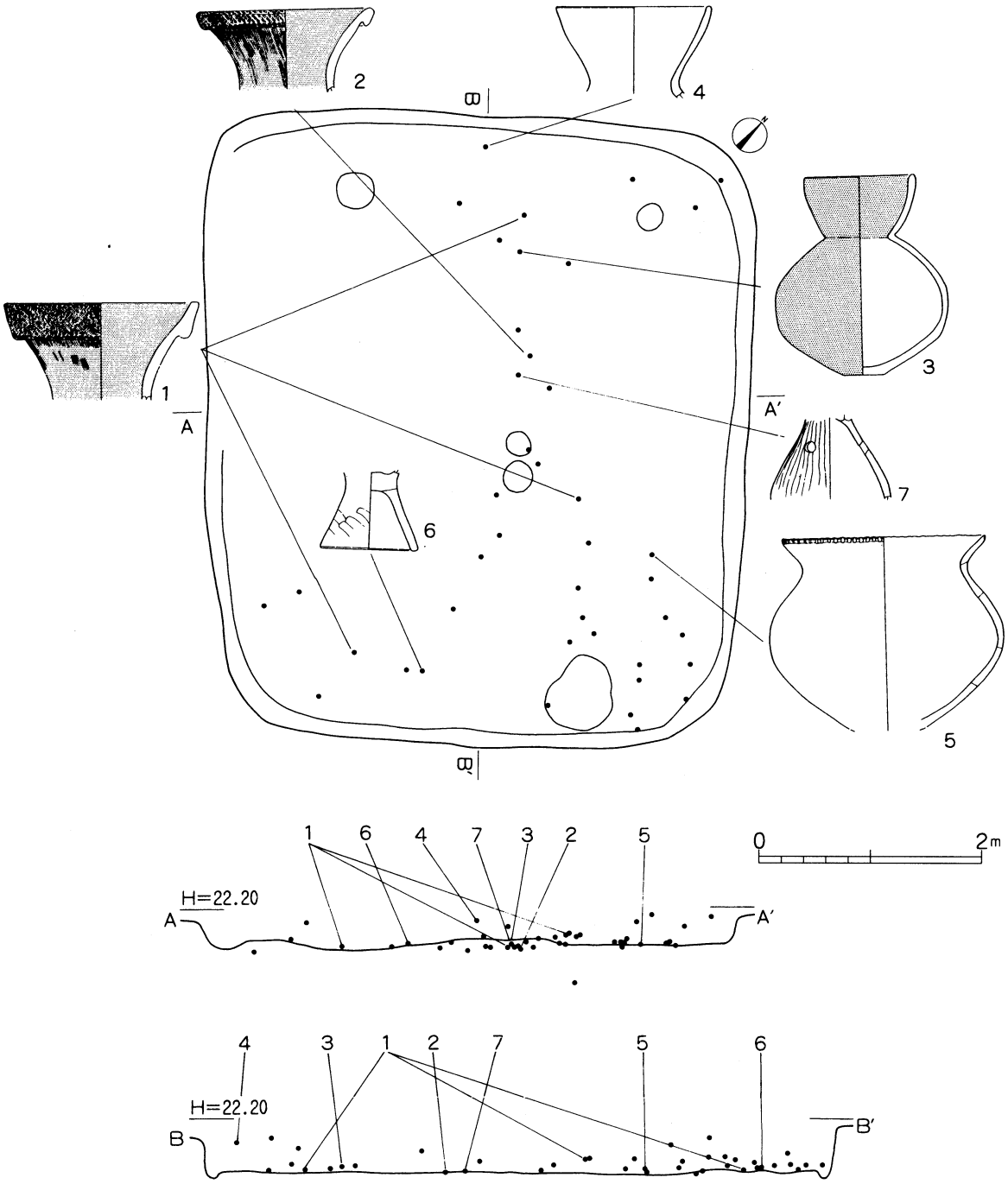


Fig.140　第48号住居跡遺物分布図

にハケメ痕を残置させている。内面は口縁部、体部とも横位のナデ整形で仕上げている。外面全体に炭化状のススの付着が認められる。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。６は脚部のみ完存する。裾径9.0cmを測る。甕の脚部としてはやや小型の部類に入る。外面はナデ整形、内面もナデ整形で仕上げている。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。７は高坏の脚をほぼ完存する。脚部は内湾気味に外方へ開く。透孔は３個である。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面はナデによって仕上げられている。焼成は良好である。

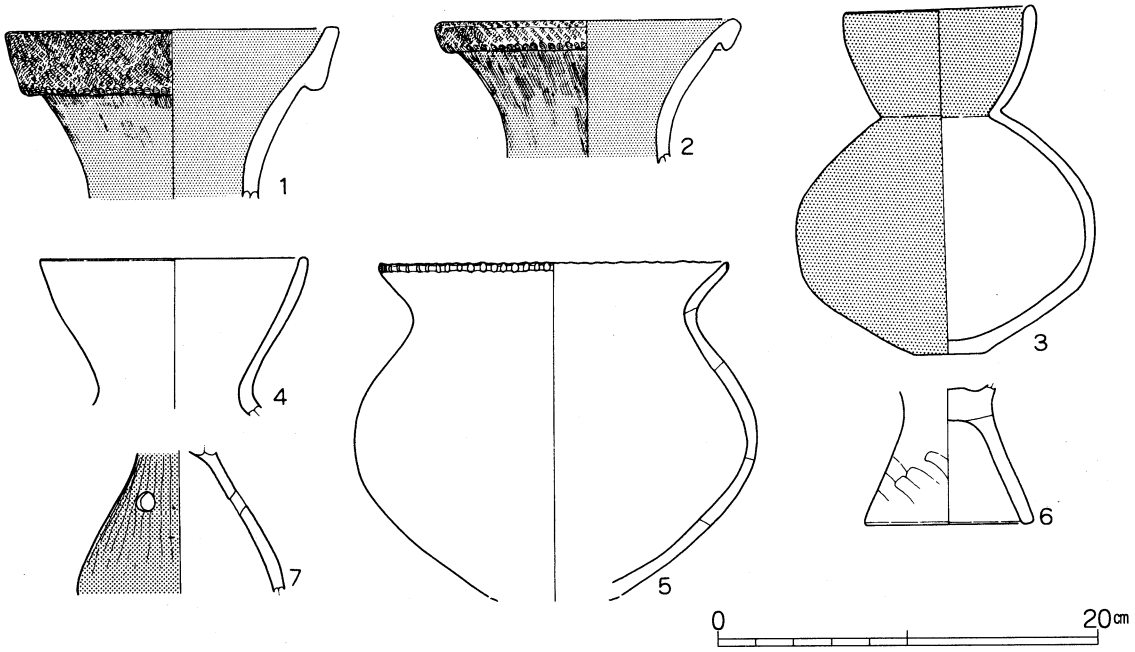


Fig.141　第48号住居跡出土遺物

第51号住居跡（SI51）（Fig.142～145）

位置　本跡は、調査区南西側にあたり、16-H区の標高22.00m～22.20mに位置し、若干離れるが、北側に第04号住居跡（SI04）が、北東側には第06号住居跡（SI06）が隣接する。

形態　平面形は隅丸方形を呈する。長軸4.82m、短軸4.80mを測り、長軸方位はN-45°-Eを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦でほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　5層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
2層	7.5YR3/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
3層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
4層	7.5YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
5層	7.5YR5/8	明褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認する。

柱穴は4本検出されており、P1～P4が主柱穴である。P1は西側に位置し、上面が24×30cmの楕円形、深さ11cm。P2は北側で上面が26×26cmの円形で、深さ12cmを測る。またP3は南側に位置し、径81×61cmの楕円形ピット内に、21×19cmの柱穴が穿っている。深さは床面上より25cmである。P4は東側に位置し、上面が32×26cmの楕円形、深さ8cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央より北西寄りに設置されている。形状は楕円形を呈するものの、北側半分が破壊されている。現存する規模は長径34cm、短径24cm、深さ8cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が南側に残存している。覆土は赤褐色焼土層1層のみで、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁際中央部からやや東寄りに構築され楕円形を呈する。上面では長径60cm、短径56cm、深さ40cmを測り、底面は丸底状をなし、壁は急傾して立ち上がる。

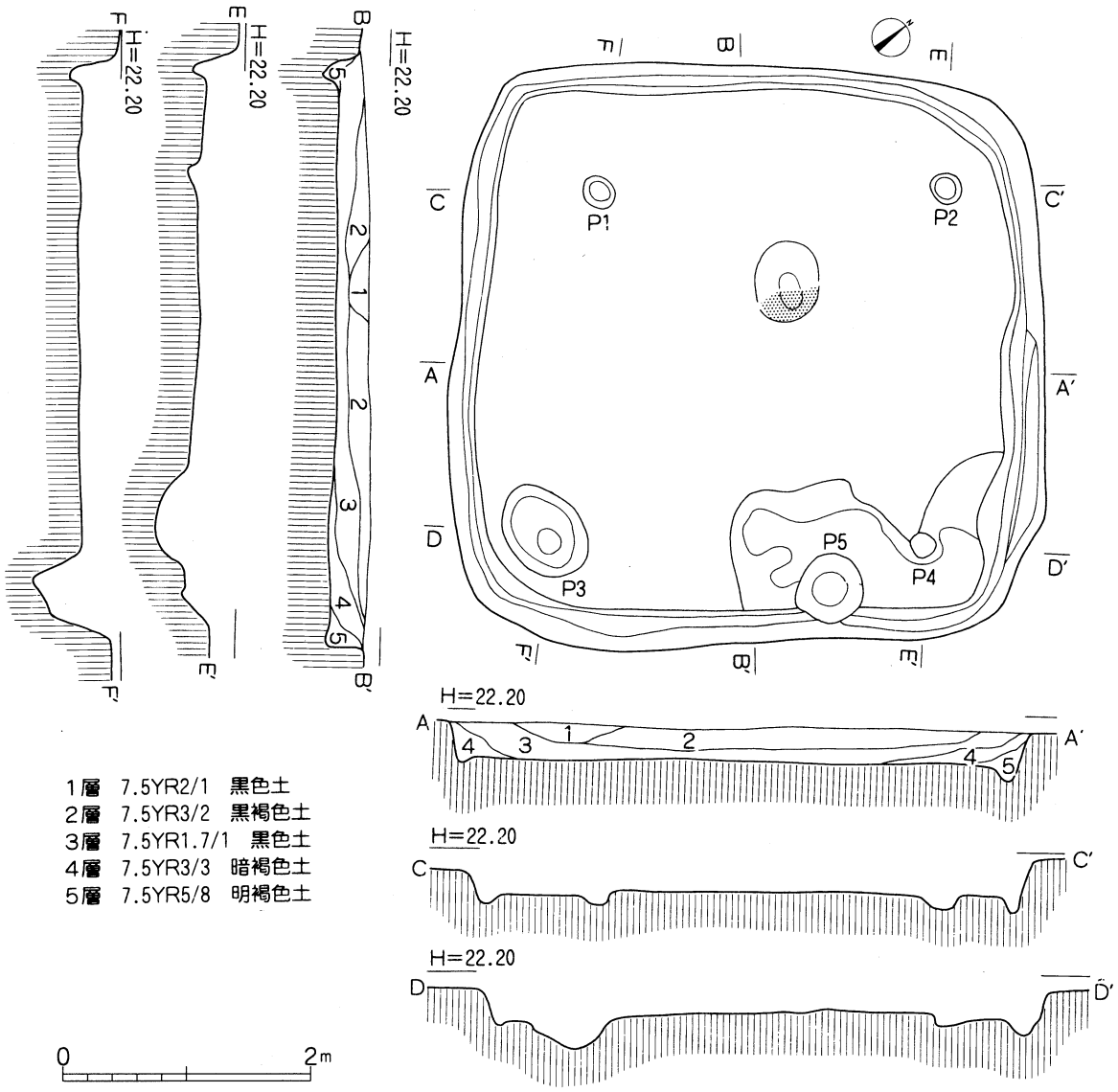


Fig.142　第51号住居跡

周溝は全周し、幅10～26cm、深さ４～12cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。なお、入口部施設は確認できなかった。

掘り方　掘り方は、床下全面におよび、とくに東壁際は雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全面におよび、とくに偏りは認められない。個体として図示しうる資料は壺１点、甕２点、鉢５点である。

遺物　１は壺形土器口縁部破片。1/4程度を遺存している。推定口径22.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は磨耗が著しく調整は判別できないが、口縁部外面はRLの単節縄紋を施文し、口縁部下端はハケメ具による刻みが巡る。頸部は斜位のハケメ調整の後、縦位の丁寧なミガキが施され、複合口縁部分のみハケメ痕を残置させ、赤彩を施す。内面は横位と縦位のミガキの後、赤彩している。焼成は良好である。２は台付甕の口縁部破片である。口縁部から頸部にかけて1/6程度を遺存する。口縁部が大きく開く形態をもつ甕で、推定口径は20.6cmを測る。口唇部はハケメ具による刻みを比較的密に巡らし、口縁部外面は縦位の細かいハケメ調整、内面は比較的粗いハケメ調整を施す。焼成は良好で、橙色を呈する。３～７は小型の鉢形土器である。3は、体部の一部欠損するものの完存

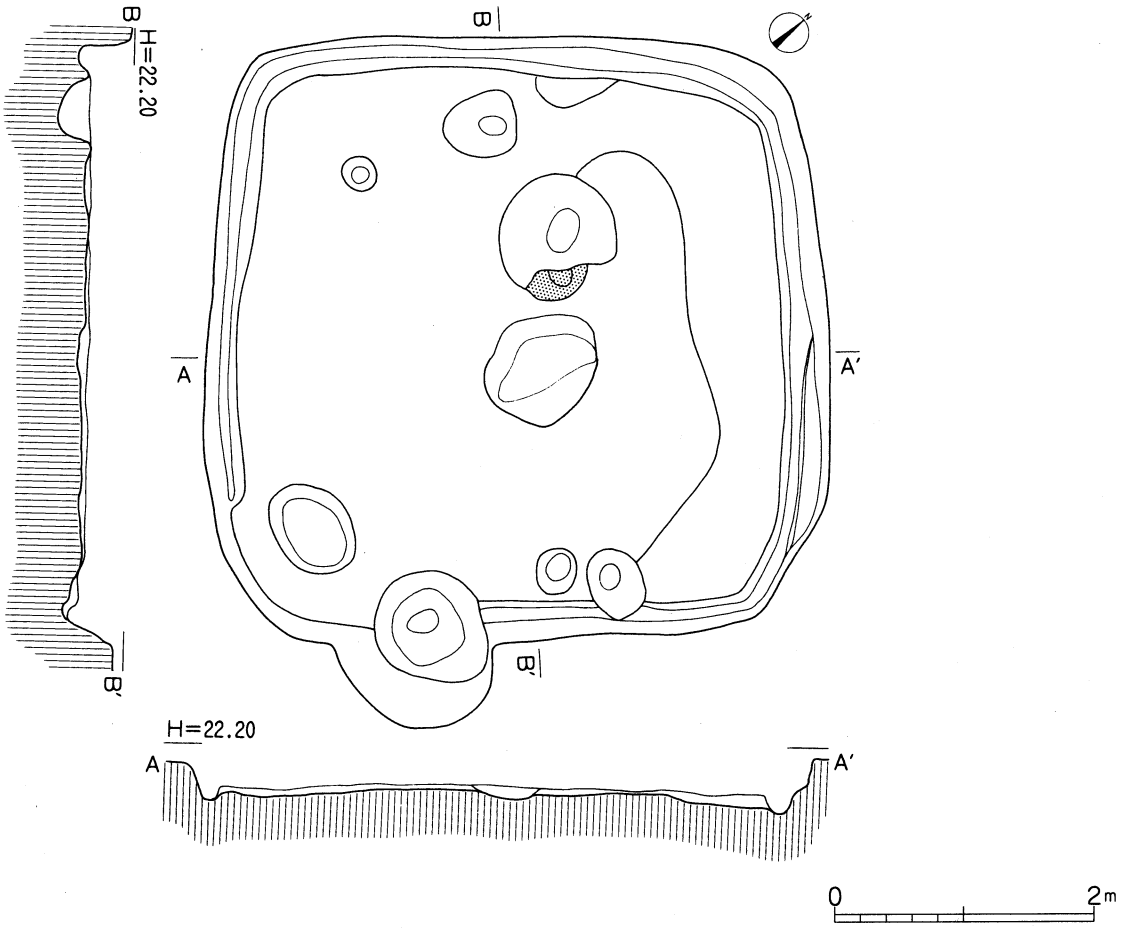


Fig.143　第51号住居跡掘り方

する。器高5.3cm、口径11.2cm、底径3.7cmを測る。底部は周縁が輪状に高まり、中央が窪む。体部はやや内湾気味に立ち上がるが、体部下半で稜をもつ。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面は上端が横位のハケメ調整後ナデ整形が加わり、赤彩される。焼成は良好である。4は体部の約1/2程度を欠損する。器高7.2cm、口径9.8cm、底径4.2cmを測る。底部は周縁が輪状に高まる形態をもつが、器面の剥落が著しく明瞭ではない。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で「く」の字状に小さく外反する。したがって内面に稜をもつ。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面は口縁部が横位のハケメ調整の後、ナデ整形。体部もナデ整形の後赤彩される。焼成は良好である。5も体部の一部を欠損する。器高5.5cm、口径11.8cm、底径4.0cmを測る。底部は平底で、体部はやや内湾気味に立ち上がり、中位から外方へ大きく開く。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面は上位が横位のハケメ調整の後、ナデ整形を施し、ハケメ痕を消失させる。さらに赤彩されている。焼成は良好である。6は底部破片で、底部のみ完存。底径3.7cmを測る。平底で、外面はナデ整形、内面もナデ整形を施している。焼成は良好で、橙色を呈する。7も同様、底径3.6cmを測る。外面・内面ともナデ整形で仕上げられている。8は甕の底部破片で、底部のみ完存する。底径8.1cmを測る。底面はナデ整形が施され、内面も細かなナデによって仕上げられている。焼成は良好。赤褐色を呈する。

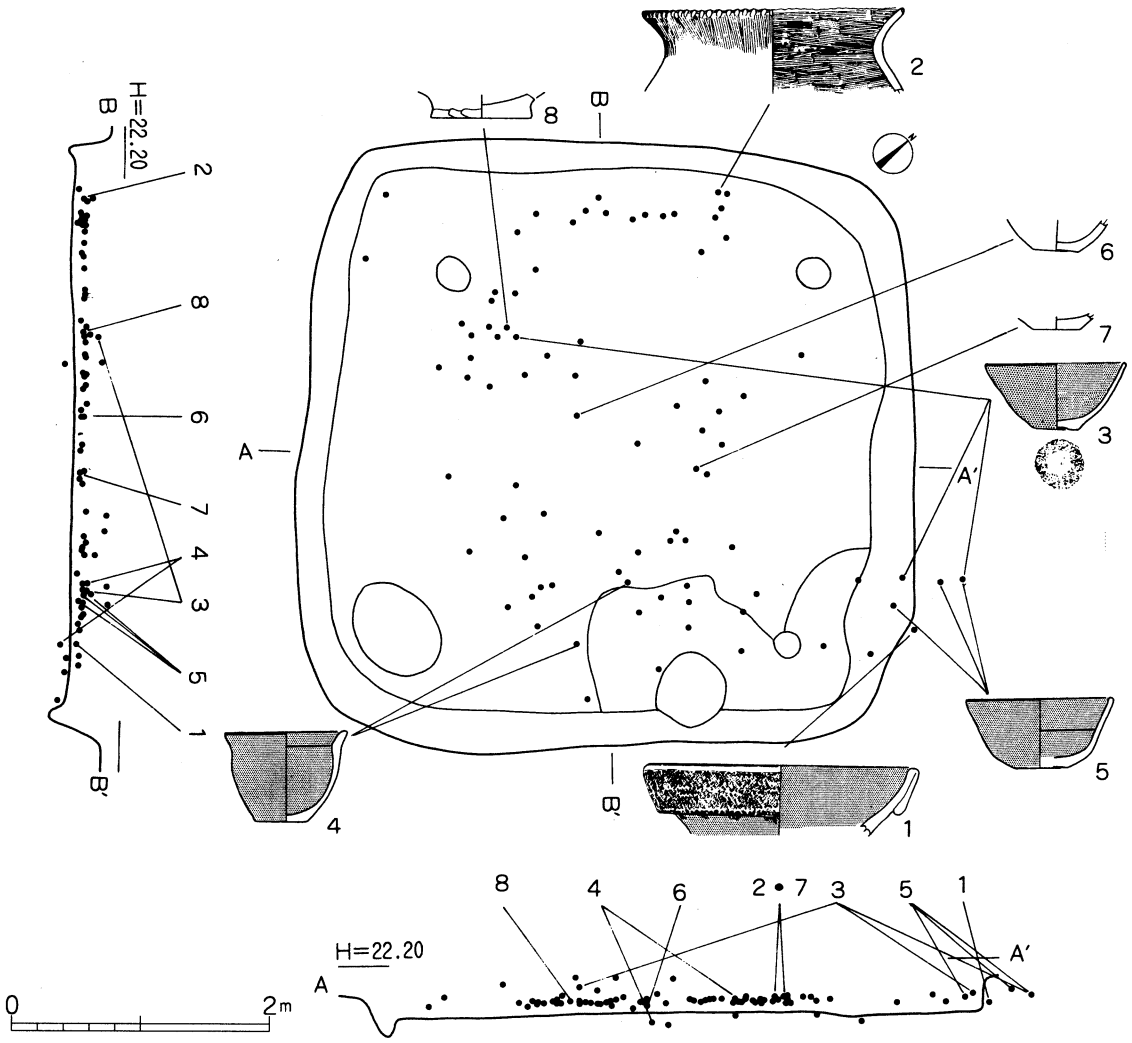


Fig.144　第51号住居跡遺物分布図

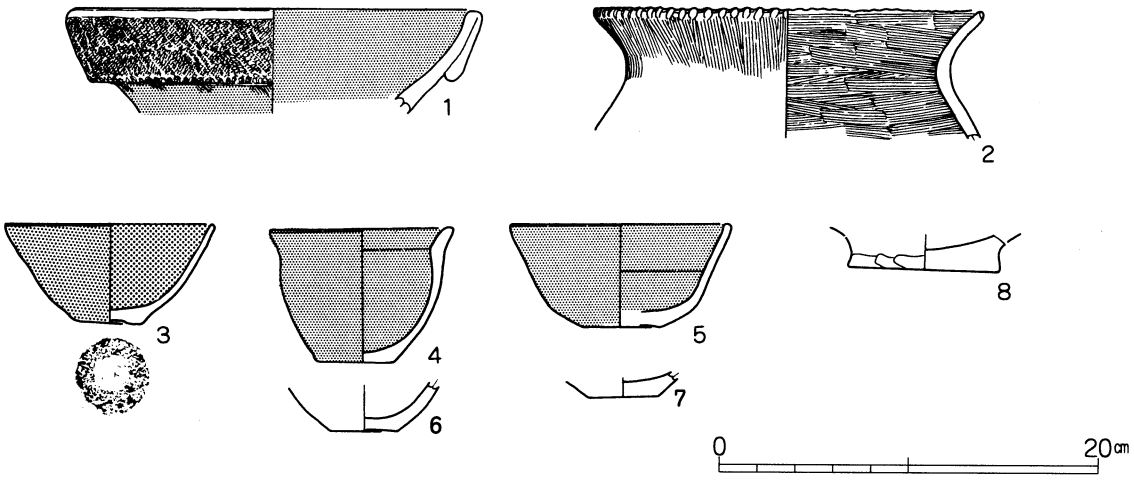


Fig.145　第51号住居跡出土遺物

第３節　川崎山Ⅲ期集落の遺構と遺物

1. 第Ⅲ期の概要（Fig.146）

本遺跡の集落形成第Ⅲ期とされるのは、古墳時代中期のいわゆる「和泉式土器」に属する段階で、本遺跡において最もまとまりを表す住居跡群である。第01、02、03、07、09、10、12、13、16、18、19、20、21、24、26、28、31、33、34、41、44、46、49、50号住居跡の24軒が検出されている。ここで第01号住居跡と第10号住居跡には重複の痕跡が認められる。第01号住居跡は若干方位を振って拡張し、旧住居を貼床によって塞いでいる。また逆に第10号住居跡は北西側を埋め戻し、一方向に縮小させている。これら住居群の配置はⅠ期およびⅡ期よりも拡張して構築している。以前の北側の調査でも当該期の住居跡が確認されており、当遺跡の中核をなす時期であることに誤りない。今回の調査から判断しても住居群は東側と北側の限界を把握したものの、さらに西および南方に広がることだけは確かである。なお、この第Ⅲ期の特徴として、高坏と坩形土器が目立つ。とくに第33号住居跡や第34号住居跡では貯蔵穴周辺を中心に多量の完形土器の廃棄が行なわれている。また住居跡の形態は方形もしくは長方形を呈し、第19号住居跡は南西側約1/3程度床面の高まりをみせるいわゆる「ベッド状遺構」である。規模もバラツキがみられ、大きく２期に分けることも可能である。いずれも五世紀前半に比定される。

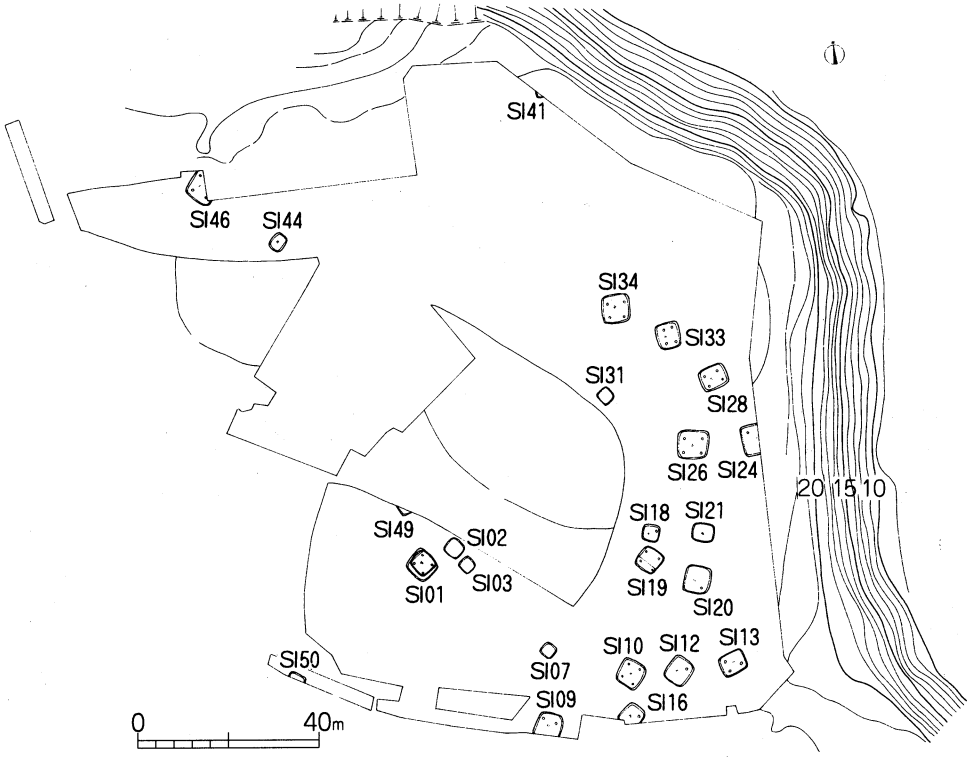


Fig.146　川崎山Ⅲ期集落

2. 第Ⅲ期の住居跡

第01号ＡおよびＢ住居跡（SI01-A･B）　（Fig. 147～158）

位置　本跡は、調査区南西部、12-I、13-I区の標高22.32m～22.50mに位置する。南側に第04号住居跡（SI04）が、北東側に第02号住居跡（SI02）が隣接する。相重複した住居跡である。当初表土層除去段階では１軒のみ単独で存在するものと考えていた。しかし、調査をすすめていく段階で、北東壁がわずかに膨らみ、さらに床面検出時では北東張り出し部に連続するような周溝がまわり、２軒重複住居跡であることが判明した。床面の高さはほぼ同じレベルであるが、新期住居跡は火災住居であり、炭化物や焼土の出土状態からみて、外側の大きな住居跡が新しく、北東側がわずかに突出する小さい住居が古期に相当する。したがって、古期住居跡（SI01-B）は北東壁の張り出し部と周溝のみ残存し、大半は新規住居跡（SI01-A）によって切られ、覆土を観察することはできなかった。

第01号Ａ住居跡（SI01-A）（新期住居跡）

形態　平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸５.84m、短軸５.30mを測り、長軸方位はN-43°-Wを指す中型の住居跡である。壁は南東辺、南西辺、北西辺、北東辺がともにほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。火災住居で、とくに北西壁隅や北壁隅には焼土塊や炭化物が集中して検出されている。なお、北西壁中央付近では大きな撹乱を受けている。

覆土　11層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR2/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
２層	7.5YR3/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層	7.5YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層	2.5YR5/8	明赤褐色土	多量の焼土粒子、ローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
５層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
６層	.5YR3/1	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
７層	.5YR3/4	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
８層	7.5YR3/3	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
９層	7.5YR4/6	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
10層	7.5YR3/4	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
11層	7.5YR3/1	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴３本と入口部施設１本、地床炉１基および貯蔵穴１基が確認された。

柱穴P１～P３は貼床されていない新期住居跡の主柱穴で、北側は未確認である。まずP１は西側に位置し、上面が13×14cmのほぼ円形で、深さ32cm。P２は南側で26×28cmの楕円形で、深さ38cm。P３は東側で、上面が12×14cmの円形で、深さ11cmをはかる。入口部施設として梯子穴が南東壁中央から東寄りに穿っている。P４では上面が30×34cmの楕円形、深さ45cmを測る。

炉は２基検出されているが、新期の炉跡は西側にある大型の地床炉（炉１）で、不整楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径100cm、短径60cm、深さ16cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第１層～第３層まで焼土粒子を含むが、第２層と第３層が焼土層で、とくに第２層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

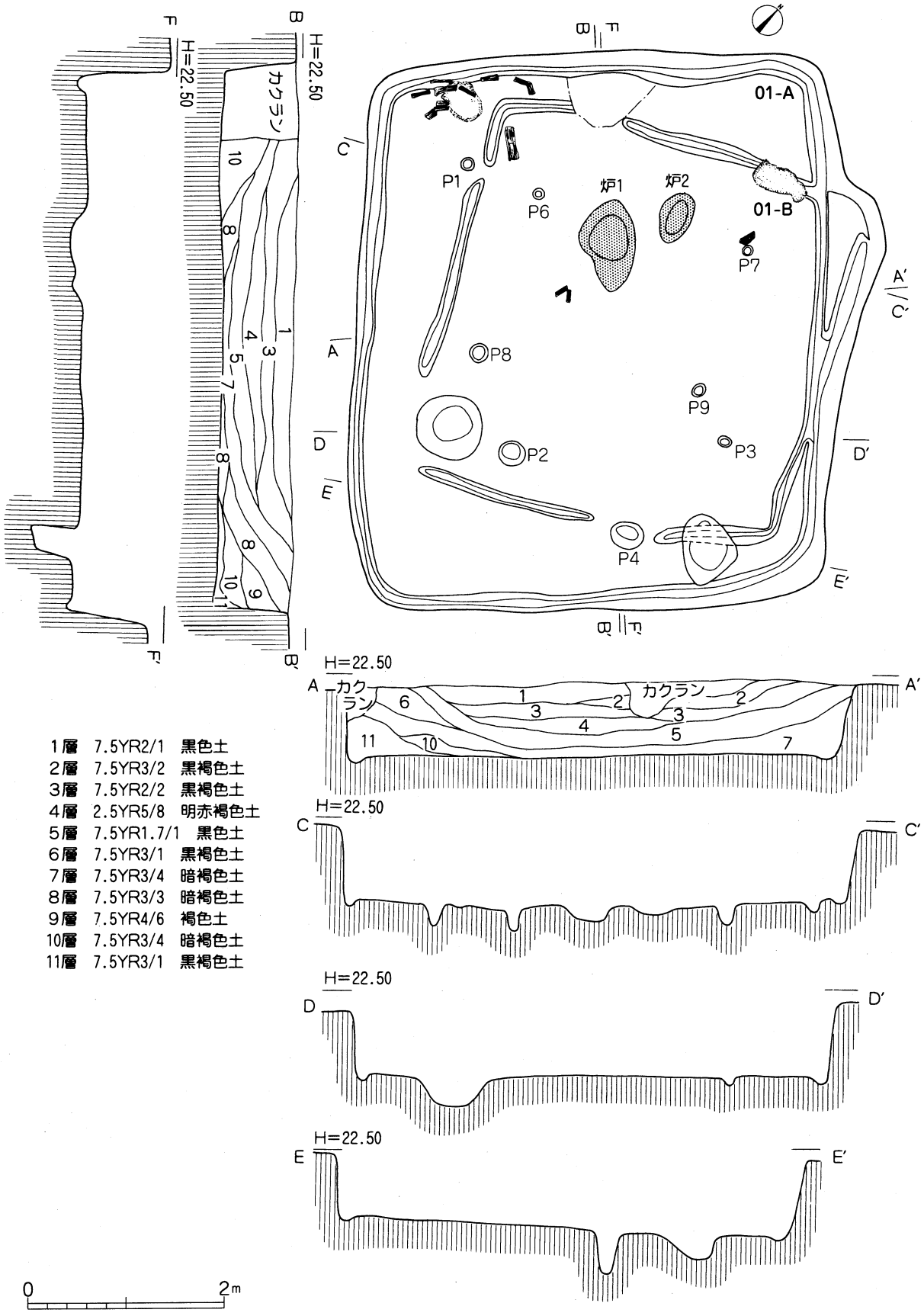


Fig.147　第01号A・B住居跡

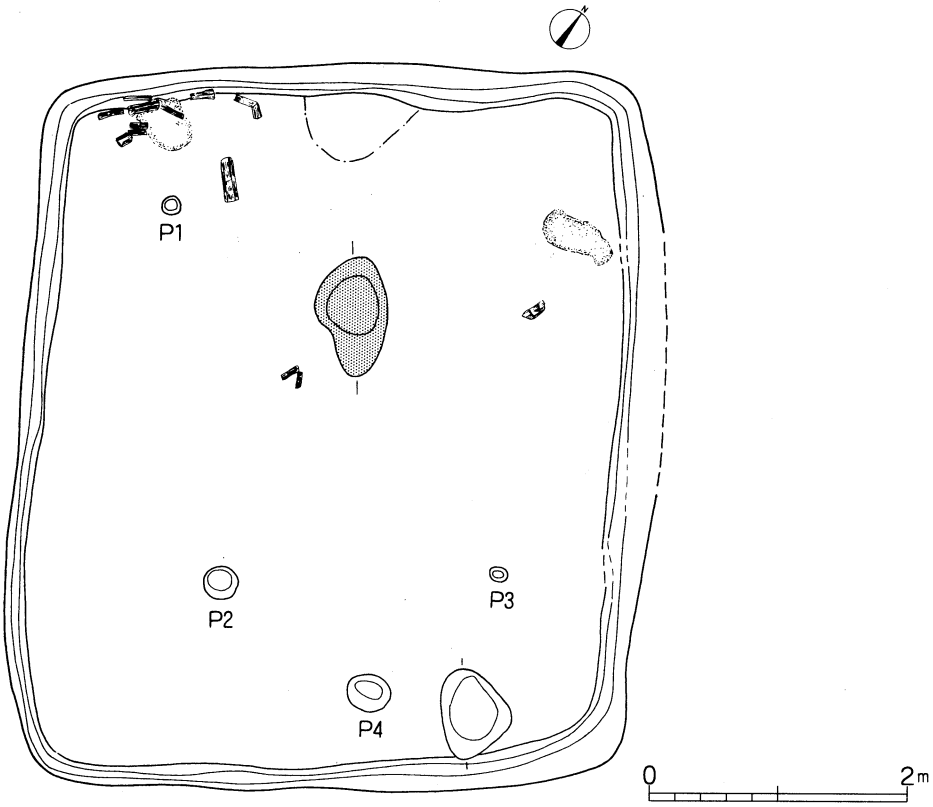


Fig.148　第01号Ａ住居跡

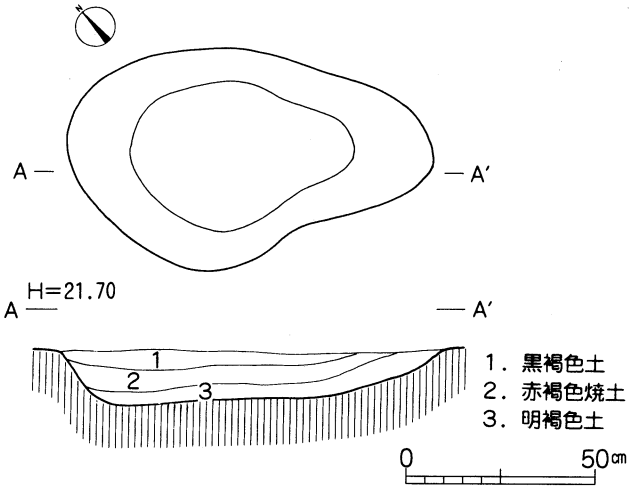


Fig.149　第01号Ａ住居跡炉

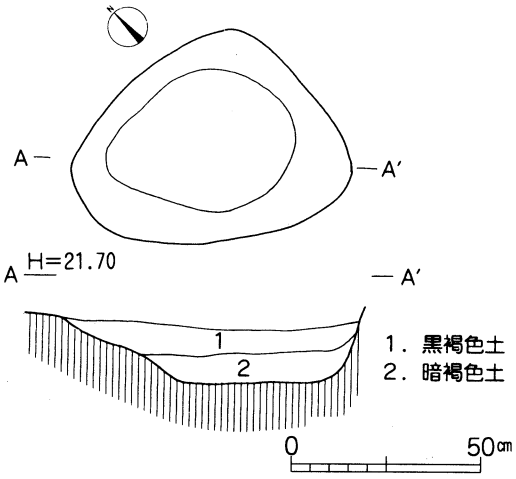


Fig.150　第01号Ａ住居跡貯蔵穴

貯蔵穴は南東壁隅寄りに位置する。長径76cm、短径54cm、深さ30cmを測り、略三角形を呈する。覆土は２層に分層でき、１層黒色土（7.5YR2/1）少量のローム粒子を含み、締まりがある。２層暗褐色土（7.5YR3/3）少量のローム粒子を含み、締まりがある。

周溝は全周し、幅８～12cm、深さ４～10cmを測る。11層黒褐色土の単層である。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、炉周辺およびP１付近には不整形や柱穴状の掘り込みがみられる。

遺物出土状況　遺物は、住居内の西側に集中するが、南西から西側にかけて、および貯蔵穴周辺にまとまって出土している。壷１点、甕５点、高坏５点、坩４点、石製模造品１点がある。

遺物　１は甕の口縁部破片。口縁部1/8程度を遺存するのみである。推定口径17.2cmを測る。口縁部は

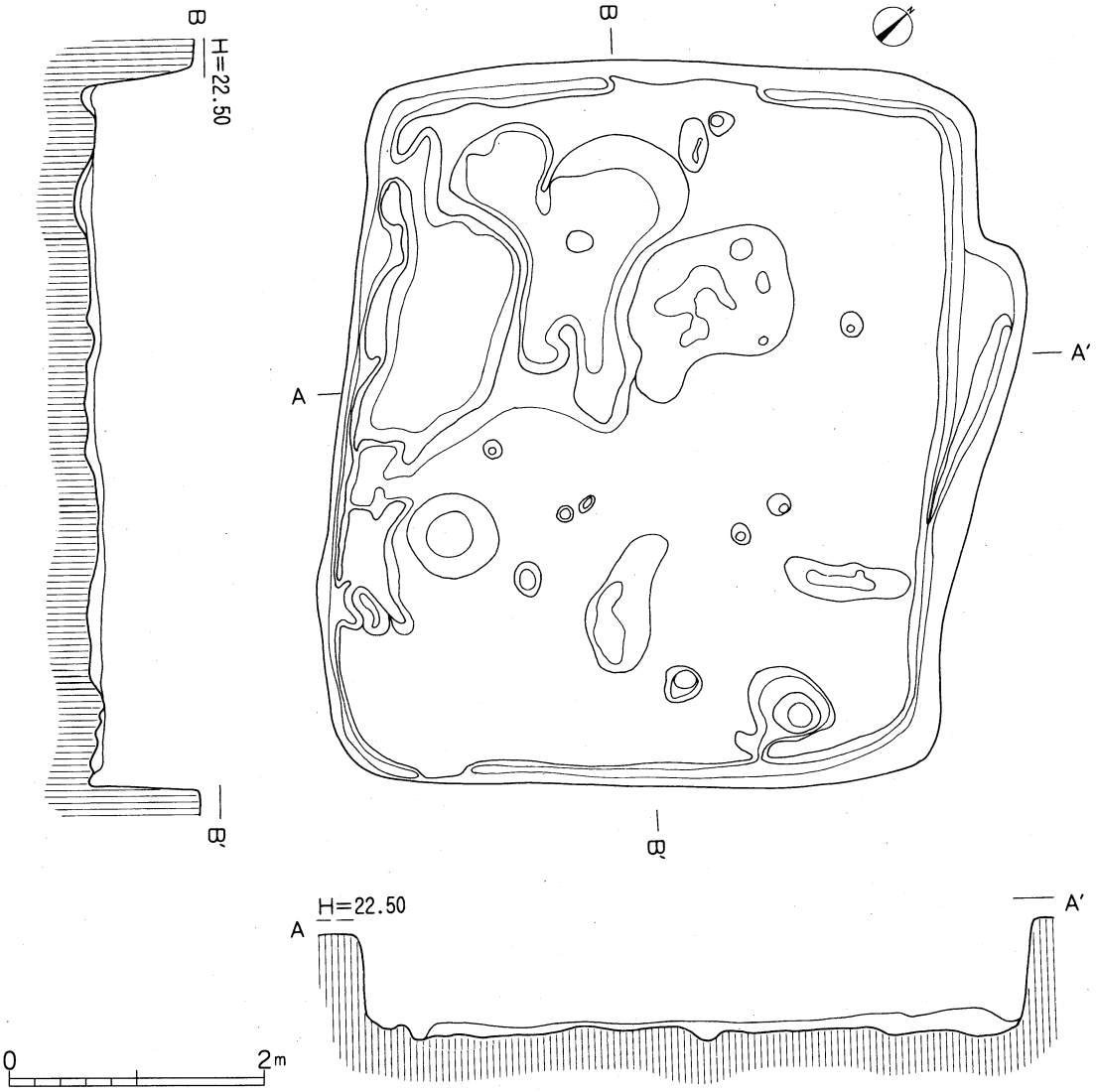


Fig.151　第01号Ａ住居跡掘り方

「く」の字状に外反する。外面は木板状の木口部分を利用し、斜行するナデ整形。内面は横ナデを施す。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。２も口縁部破片。口縁部約1/10以下を遺存する。推定口径16.8cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、くびれ部は肉厚になっている。外面口縁部は横ナデ、頸部から肩部にかけて縦位のハケメ調整を施す。内面は口縁部上端は横ナデ、下位は横位のハケメ調整。肩部は横位のヘラナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。３は壺の肩部から胴部上半部の破片。ほぼ球形の胴部を呈するものと思われる。外面は縦位の丁寧なヘラミガキの後、赤彩される。内面はナデ整形で、肩部付近に粘土帯の積み上痕が１段残る。焼成は良好である。４は台付甕の接合部破片。脚部は直線的に開く。現器高3.8cmを測る。外面は縦位のハケメ調整。内面はナデ整形を施す。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。５も台付甕の脚部破片。脚部は完存する。裾径12.0cm、現器高8.8cmを測る。甕底部は丸みをもち、脚部はやや中膨らみで外方へ開く。甕との接合部は粘土帯を貼付け指頭による圧痕を巡らす。脚部は木板状の木口によるナデを縦位に施し、裾底面はナデ整形。内面は上半部がナデ、下半部がヘラナデによって仕上げてある。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。６～９は高坏である。６は裾部の一部が欠損するものの、口縁部から脚部にかけて完存する高坏で、器高12.1cm、口径14.2cm、裾径21.7cmを測る。坏部はほぼ直線的に外方へ開き、口縁部上部でさらに小さく外方へ屈曲する。脚部

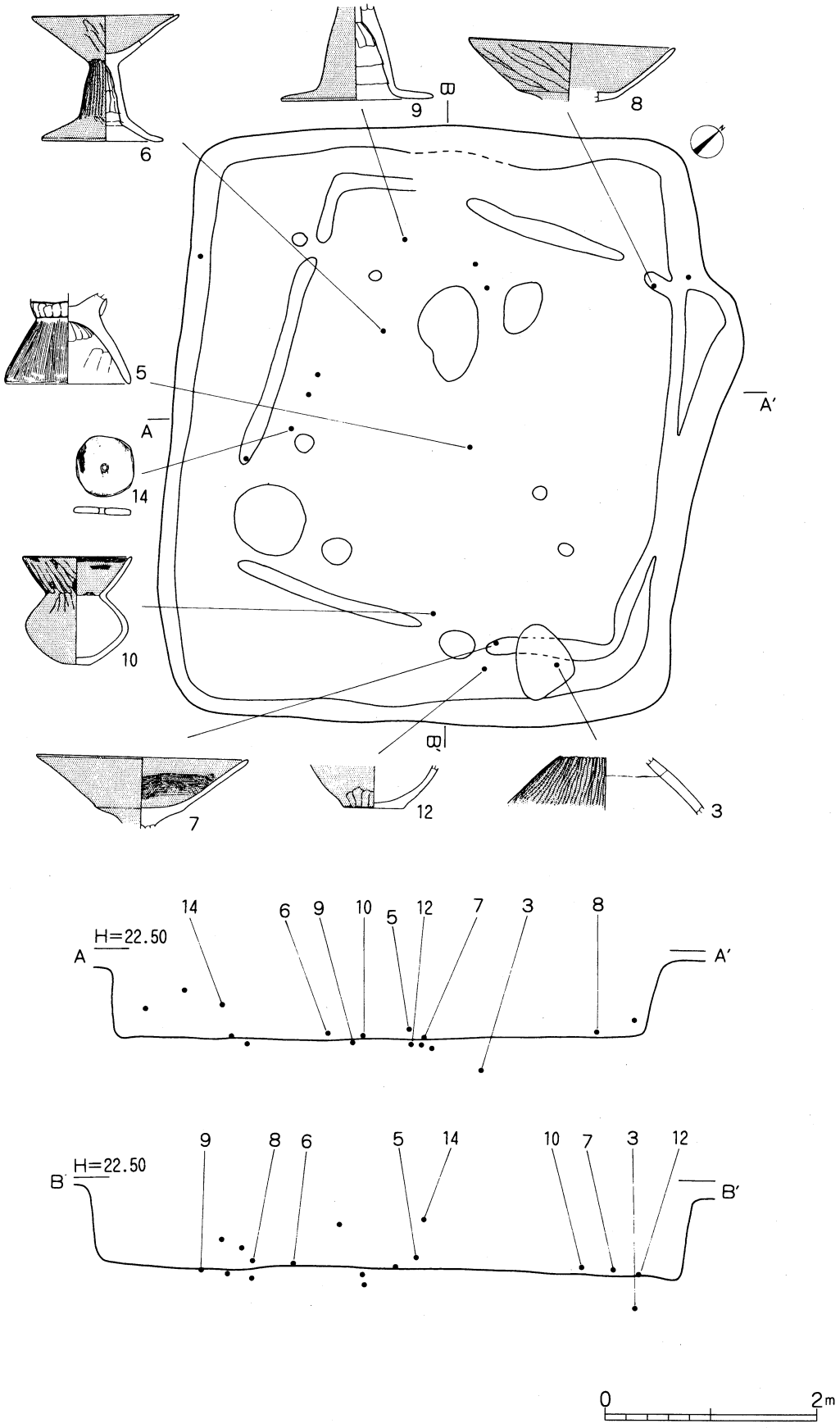


Fig.152　第01号A住居跡遺物分布図

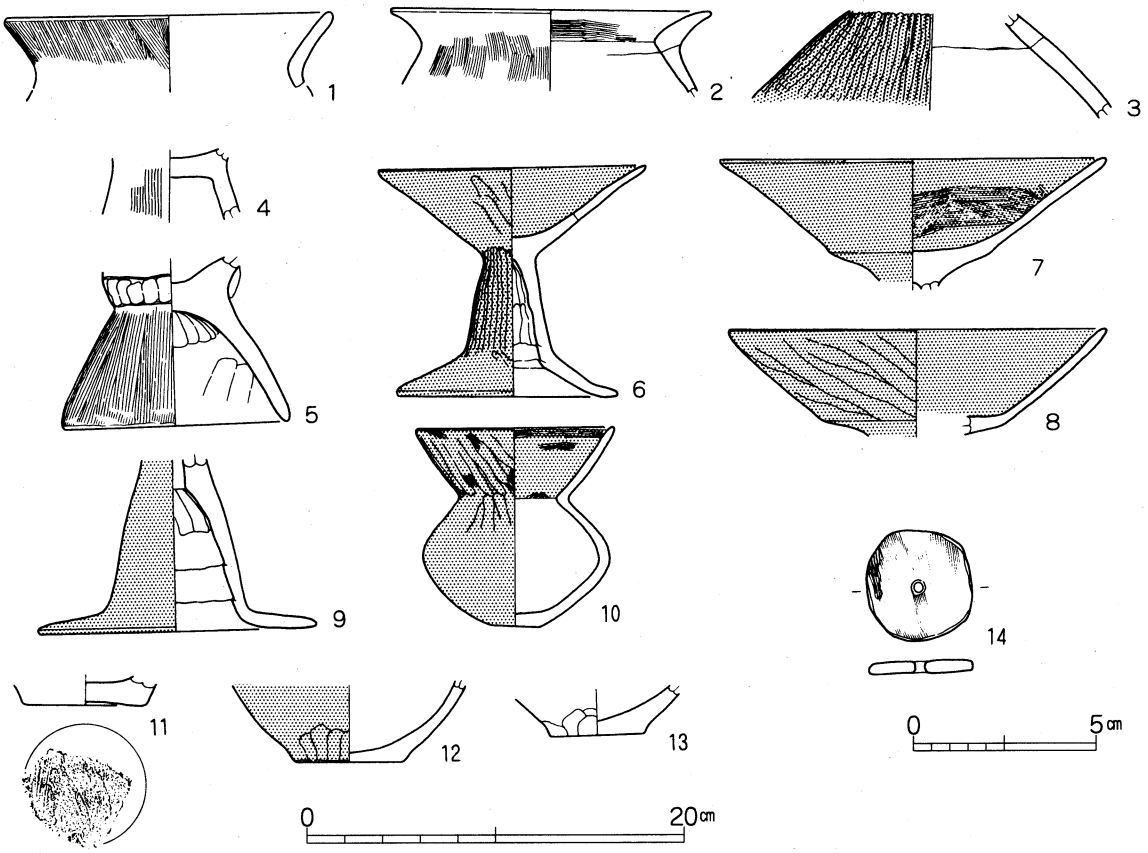


Fig.153　第01号Ａ住居跡出土遺物

は柱状部がやや中膨らみを呈し、裾部は直線的に外方へ張りだす。外面は坏部口縁部上端が横ナデ。体部がヘラナデ。脚部は柱状部が縦位のヘラナデ。裾部がナデ。内面は坏部が入念なナデ、脚部は上部がシボリ目を残し、粘土帯の接ぎ目を残置する。裾部は横ナデ。外面と内面坏部が赤彩され、焼成は良好である。７は坏部の1/3程度を欠損する。口径20.2cm、現器高6.8cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な段をもち、口縁部は外反気味に外方へ開く。外面は口縁部上端は横ナデ、下半部はナデ整形を加え、底面もナデ。内面は口縁部は横ナデ。体部はハケメ調整、底部はナデ整形で仕上げている。赤彩され、焼成は良好である。８は坏部の一部を欠損する。口径19.8cm、現器高5.7cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部は外反気味に外方へ開く。底面にはほぞ穴がみられ、抜けている。外面はケズリ成形の後、入念なナデ整形を加え、内面も入念なミガキが施され、底部はナデ整形で仕上げている。赤彩され、焼成は良好である。９は脚部破片で、柱状部は完存し、裾部が1/10以下の遺存である。推定裾径14.6cm、現器高8.1cmを測る。柱状部は中膨らみで、裾部はほぼ底面に接するように外方へ張り出す。外面は柱状部は縦位のヘラナデ、裾部はナデ。内面は上部がシボリ目を残し、粘土帯の接ぎ目が残置する。裾部は横位のナデ成形を施す。10は口縁部と胴部の一部を欠損するものの、口縁部から底部まで完存する坩形土器。器高10.4cm、口径10.6cm、底径2.4cm、胴部最大径9.2cm測る。小さな底部から扁球形の胴部へ移行し、口縁部はやや内湾気味に外方へ立ち上がる。外面は口縁部がハケメ調整の後、ミガキ整形。胴部はナデ整形。内面は口縁部が横位のハケメ調整の後、ナデ整形。胴部もナデ整形。外面と内面口縁部に赤彩される。11は甕底部破片。底径6.4cmを測る。底面はやや上げ底気味を呈し、外面はナデ、底面はヘラケズリ。内面はナデ整形を施す。焼成は良好、にぶい赤褐色を呈

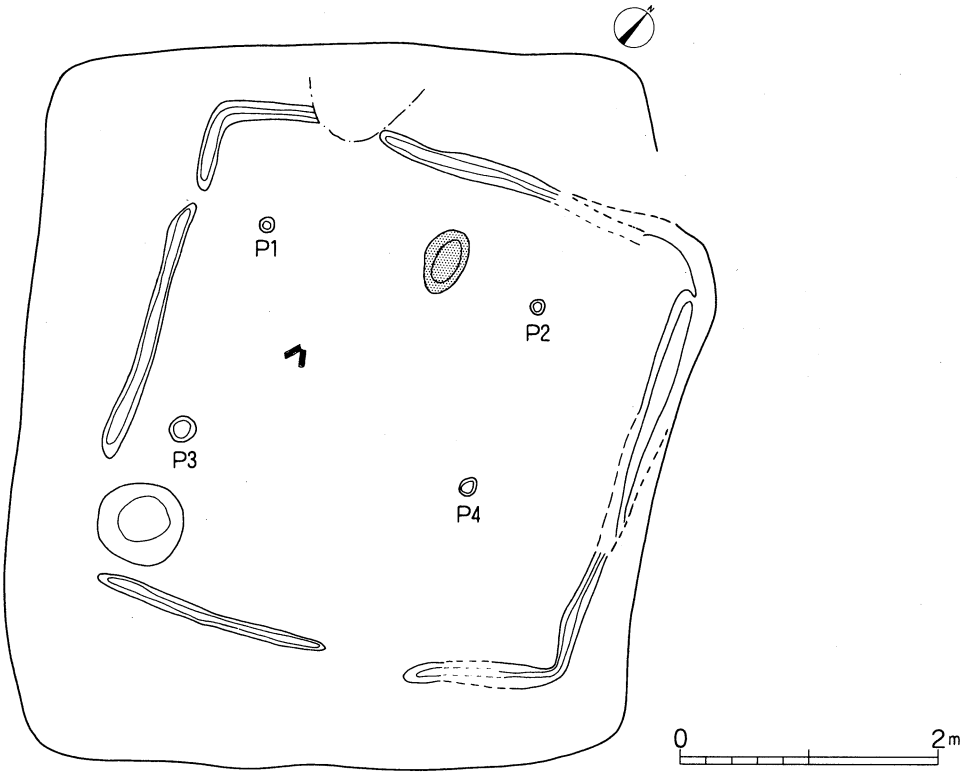


Fig.154　第01号Ｂ住居跡

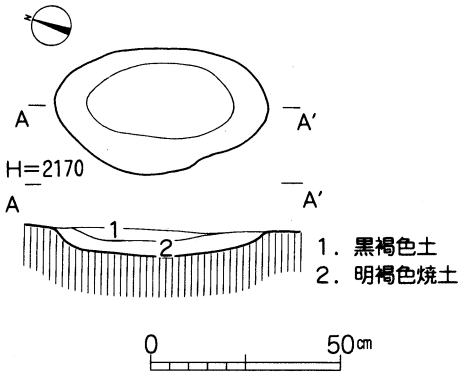


Fig.155　第01号Ｂ住居跡炉

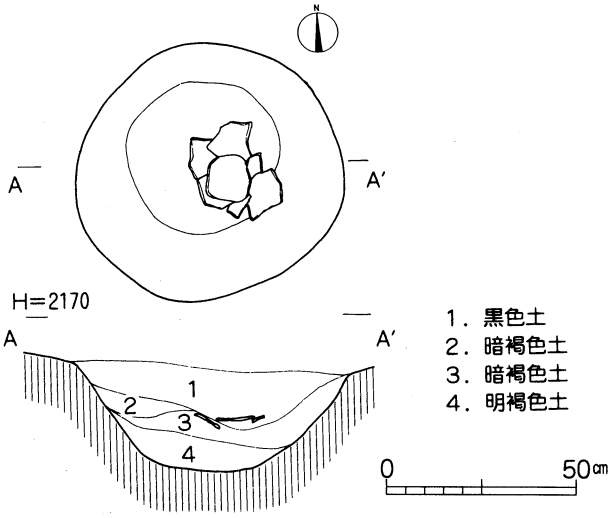


Fig.156　第01号Ｂ住居跡貯蔵穴

する。12は坩の胴下半部を完存する。底径5.8cm、現器高4.3cmを測る。平底の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。外面はナデ、内面もナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。13は甕底部破片。約1/4程度を遺存する。底径5.0cmを測る。平底から胴部が外方へ立ち上がる。外面へラケズリ、底面もへラケズリ。内面はナデ整形。焼成は良好で、褐色を呈する。14は円盤形の石製模造品である。ほぼ円形を呈し、扁平に磨き仕上げられている。中央に１個所穿孔され、側縁部も研磨されている。長径2.90cm、短径2.86cm、厚さ0.28cm、中央孔径0.30cm、重量10.6ｇを測る。滑石製である。

第01号住居跡（SI01-B）（古期住居跡）

形態　平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸4.22m、短軸4.14mを測り、長軸方位はN-28°-Wを指す

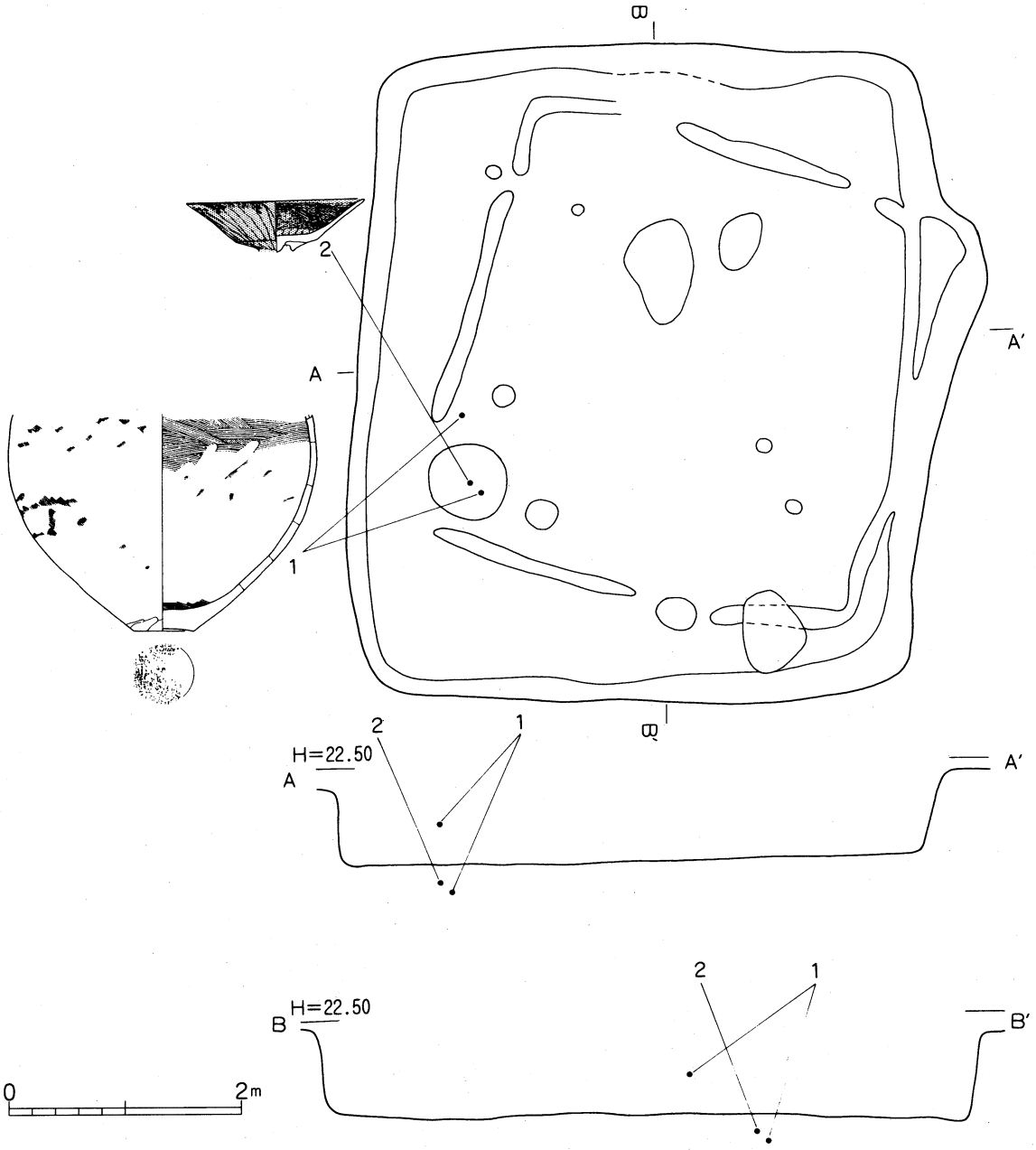


Fig.157　第01号Ｂ住居跡遺物分布図

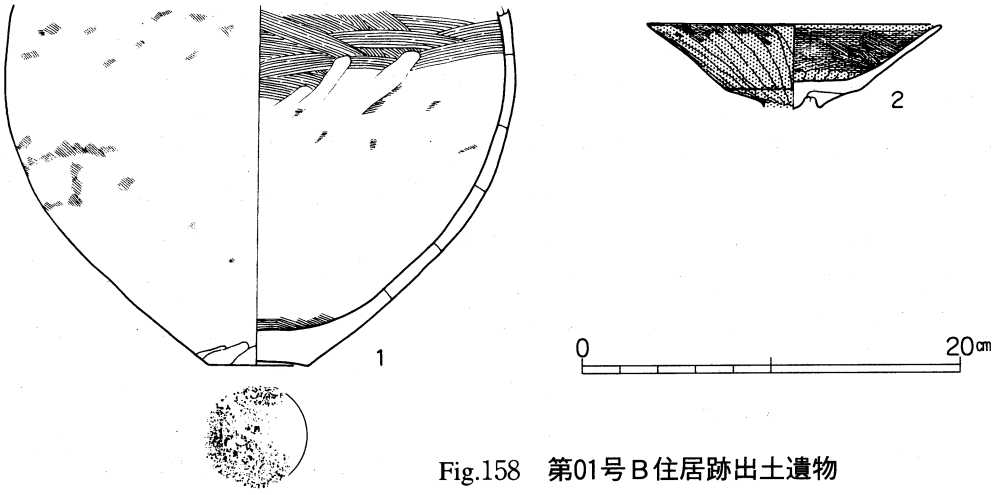


Fig.158　第01号Ｂ住居跡出土遺物

やや小型の住居跡である。壁は東辺を除き、周溝のみ検出であるが、東辺はほぼ垂直に立ち上がる。床面はSI01-A住居跡によって既に削平され、往時の状態は不明である。

覆土　覆土は北東壁隅で確認できたはずであったが、層位を確認しないまま発掘調査を実施したため、不明である。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本と地床炉１基および貯蔵穴１基が確認された。

柱穴P６～P９は新期住居跡によって貼床されており、SI01-A住居跡の掘り方調査の際検出したものである。主柱穴はP６～P９が相当する。まずP６は西側に位置し、上面が12×12cmの円形で、深さ23cm。P７は北側で10×10cmの円形で、深さ23cm。P８は南側で、上面が10×10cmの円形で、深さ23cmを測る。P９は東側で上面が12×12cmの楕円形、深さ22cmを測る。

炉は２基検出されているが、古期の炉跡は北側にあるやや小型の地床炉（炉２）で、楕円形を呈し住居中央から北寄りに長径56cm、短径36cm、深さ９cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は２層に分層でき、いずれも焼土粒子を含むが、第２層赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁隅寄りに位置する。上層は明褐色ロームによって貼床されている。長径70cm、短径68cm、深さ29cmを測り、円形を呈し、覆土は５層に分層でき、１層明褐色ローム層(7.5YR5/8）貼床で締まりがある。２層黒色土（7.5YR2/1）少量のローム粒子を含み、締まりがある。３層暗褐色土（7.5YR3/3）少量のローム粒子を含み、締まりがある。４層暗褐色土（7.5YR3/4）少量のローム粒子や炭化物や焼土粒を含み、甕と高坏を包含していた。５層明褐色土（7.5YR5/8）ローム粒子を多量に含み、締まりがある。周溝は全周し、幅８～19cm、深さ３～８cmを測る。黒褐色土（7.5YR3/1）で覆われている。

遺物出土状況　遺物は、住居内の南壁隅に構築された貯蔵穴から甕と高坏が出土している。

遺物　１は甕の胴部下半部の破片である。底部は完存し、胴部が約1/3程度遺存する。底径5.4cm、現器高18.7cm、胴部最大径26.9cmを測る。外面は横位のヘラナデ。底部もナデ整形。内面は胴部中位が横位のハケメ調整。以下ナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。２は坏部のみ完存する。口径15.6cm、現器高4.4cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部は外反気味に外方へ開く。底面にはほぞの突出部が残置する。外面はハケメ調整の後、ナデ整形を加え、内面は口縁部は横位のハケメ調整し、底部はナデ整形で仕上げている。赤彩され、焼成は良好である。

第02号住居跡（SI02）（Fig.159～162）

位置　本跡は、調査区南西部、12-I、12-G、13-I、13-G区の標高22.32m～22.40mに位置する。なお、南西側に第01号住居跡（SI01）が、南東側には第03号住居跡（SI03）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸3.56m、短軸3.36mを測り、長軸方位はN-46°-Wを指す、小型の住居跡である。壁は浅く、東辺、西辺、南辺、北辺とも緩やかに立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR3/1　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
２層　7.5YR2/2　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
３層　7.5YR6/8　明黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層　7.5YR4/4　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

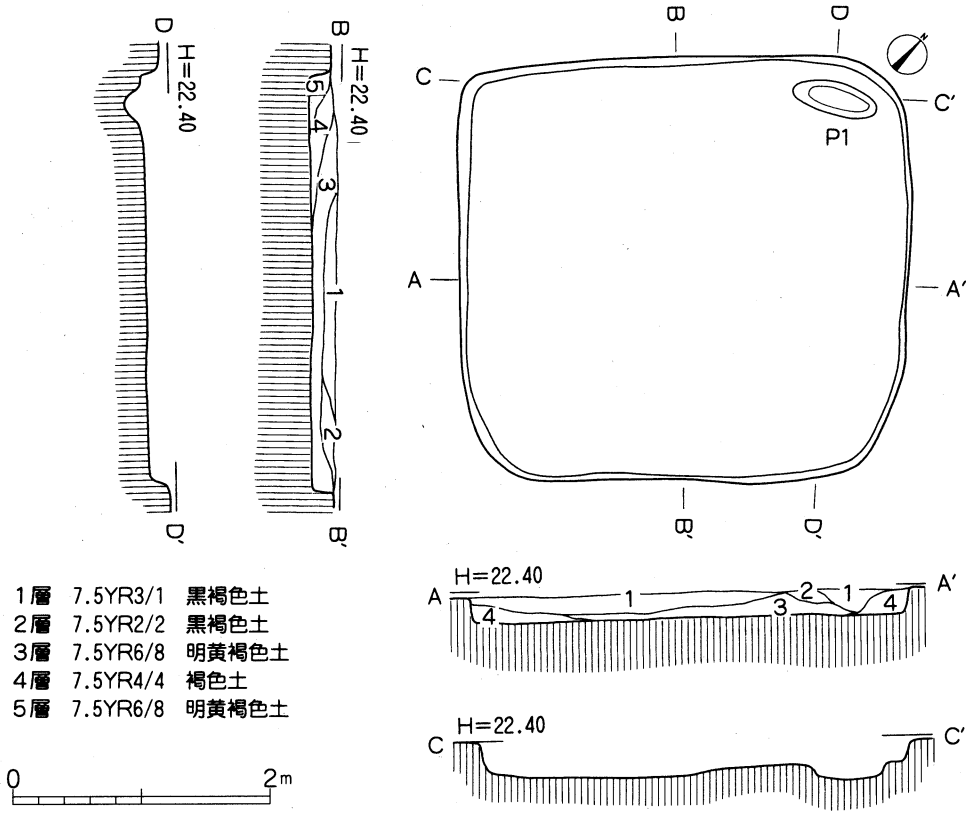


Fig.159　第02号住居跡

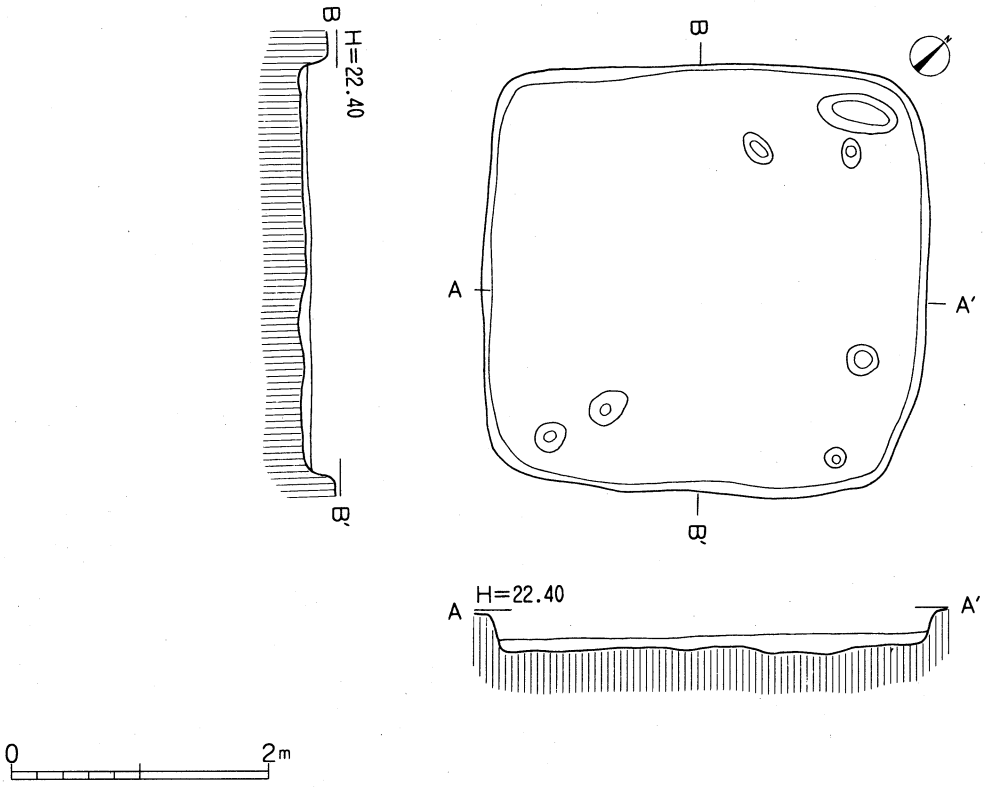


Fig.160　第02号住居跡掘り方

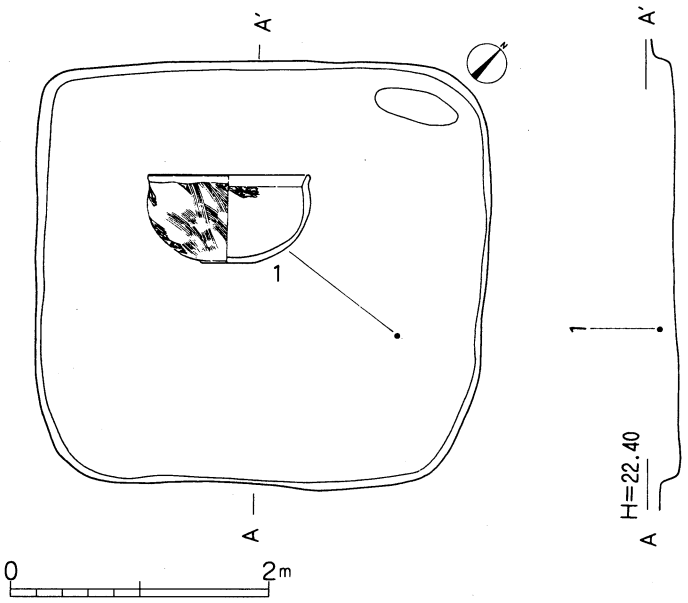


Fig.161　第02号住居跡遺物分布図

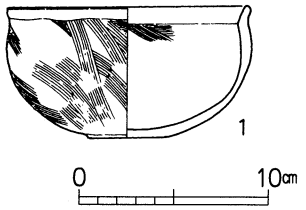


Fig.162　第02号住居跡出土遺物

５層　7.5YR6/8　明黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、長楕円形ピット１基のみ確認された。

主柱穴は確認できず、北隅壁際に楕円形を呈するピット１基が穿ってある。規模は、上面が26×68cm深さ68cmを測る。機能は不明である。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもつが、小規模なピット状の掘り込みをいくつも観察できる。

遺物出土状況　遺物は、住居の南東側、床面上より若干浮いて椀形土器１点のみ出土している。

遺物　１は椀で口縁部から底部にかけて1/4程度を遺存する。器高7.0cm、口径12.8cm、底径4.0cmを測る。体部最大径と口径がほぼ等しく、口縁端部が短くわずかに外反する。内面にわずかな稜がみられる。体部はやや上位に最大径をもち、内湾気味に立ち上がる。底部は小さく、平底である。短い口縁部は横ナデ、体部は斜行するハケメ調整。底面はナデ。内面は口縁部が横ナデ、肩部付近は斜行するハケメ調整が施され、それを消失させるようにナデ整形を施す。焼成は良好。色調は橙色を呈する。

第03号住居跡（SI03）（Fig.163～166）

位置　本跡は、調査区南西部で、13－Ｇ区の標高22.32m～22.38mに位置する。北西側は第02号住居跡（SI02）が、南東側は第05号住居跡（SI05）が隣接する。

形態　平面形は、楕円形を呈する。長軸3.40m、短軸2.68mを測り、長軸方位はN-43°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は全体的に浅く、東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ緩やかに立ち上がる。床面は若干起伏にとむが、ほぼ水平に平坦面が広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　４層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　10YR2/1　黒色土　　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

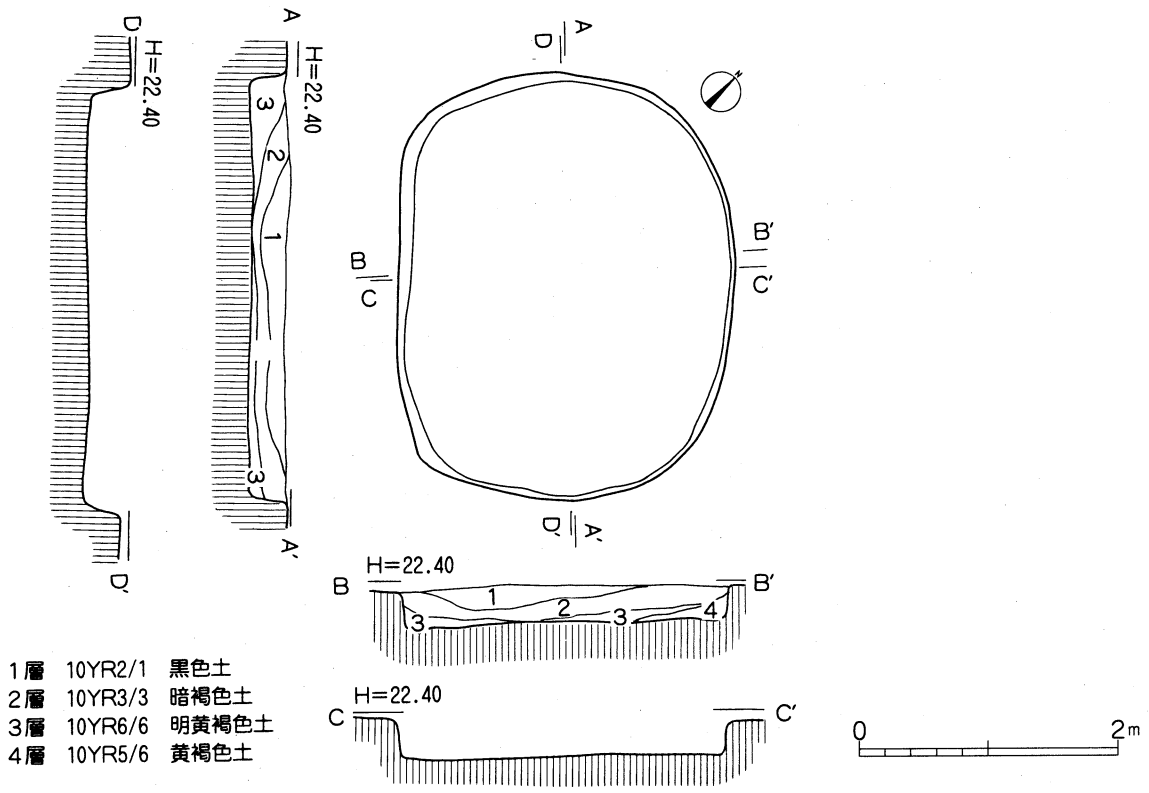


Fig.163　第03号住居跡

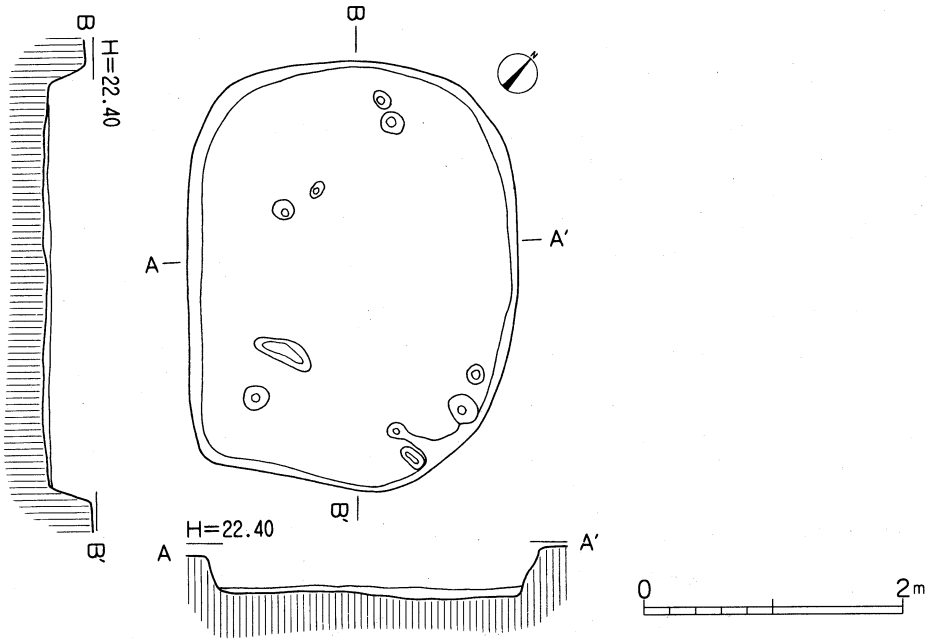


Fig.164　第03号住居跡掘り方

2層　10YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
3層　10YR6/6　明黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
4層　10YR5/6　黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。

住居施設　住居内部には施設としてなにも確認されなかった。

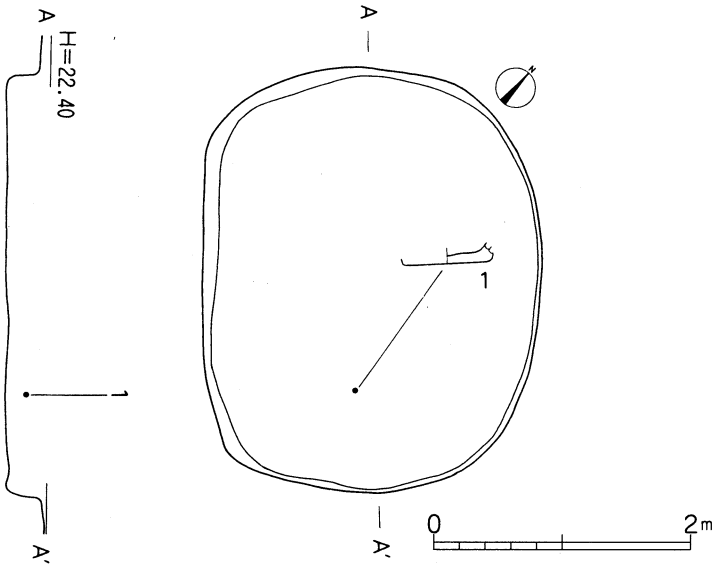


Fig.165　第03号住居跡遺物分布図

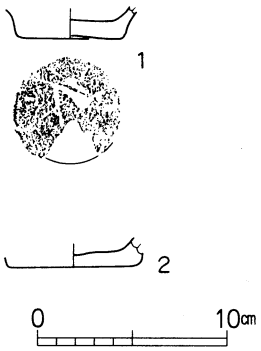


Fig.166　第03号住居跡出土遺物

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、とくに全体的に柱穴にはならない規模のピット状の掘り込みが数多くみられる。

遺物出土状況　遺物は、わずかに２点のみ出土している。

遺物　１・２とも底部破片である。１はやや上げ底状を呈する甕形土器の底部破片。底面で約1/4程を欠損する。底部側面は緩く開きながら外傾する。底部側面は内外面ともナデ整形。底面は木葉痕を残す。焼成は良好。にぶい黄褐色を呈する。２は1/4程度を遺存する甕の底部破片。底面ともナデ整形で仕上げられている。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。

第07号住居跡（SI07）（Fig.167～171）

位置　本跡は、調査区南部にあたり、15-K区の標高21.94m～21.98mに位置し、西側に第06号住居跡（SI06）が、南東側に第08号住居跡（SI08）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸3.00m、短軸2.96mを測り、長軸方位はN-31°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺とも垂直気味に立上がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　９層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　10YR4/4　褐色土　　少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

２層　10YR5/8　黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

３層　10YR3/4　暗褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりもある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴２本と地床炉１基を確認した。P１は西部に位置し、上面が30×36cmの楕円形、深さ15cm。P２は東南部で26×40cmの楕円形で、深さ32cm。P１とP２の２本は開口部が広く、深度は浅いため主柱穴としての機能を果たしていたかは疑問の残るところである。住居そのものが小型のことから柱以外の用途をもっていたものと考えられる。地床炉は住居中央から北西寄りに設置され、楕円形を呈し、長径56cm、短径38cm、深さ９cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。

覆土は３層に分層でき、第２層と第３層が焼土粒子を含む焼土層で、とくに第３層は赤褐色焼土層で、

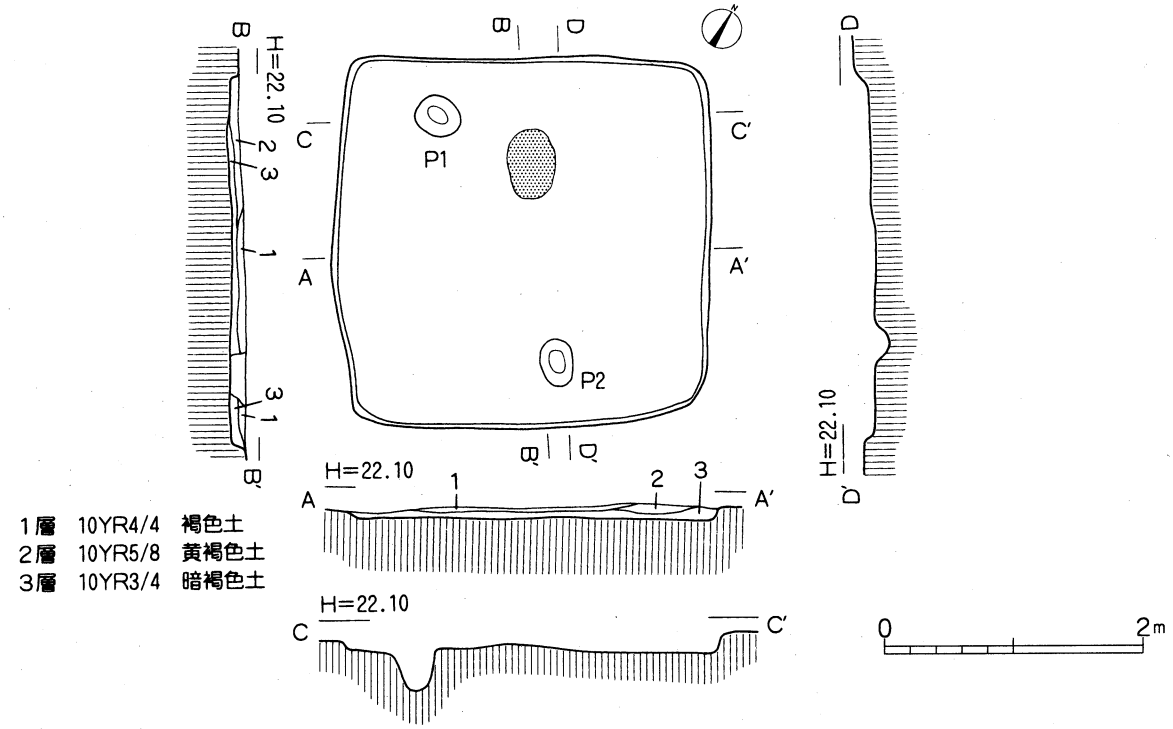


Fig.167　第07号住居跡

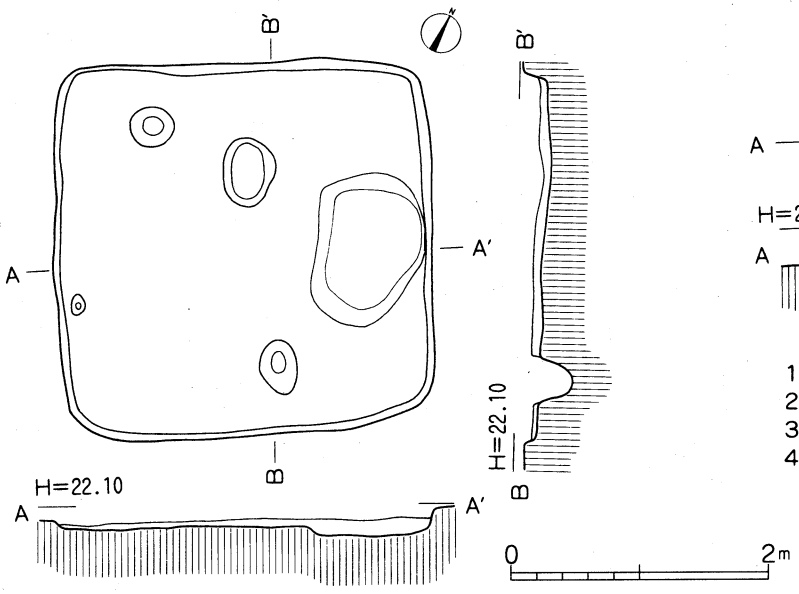


Fig.168　第07号住居跡掘り方

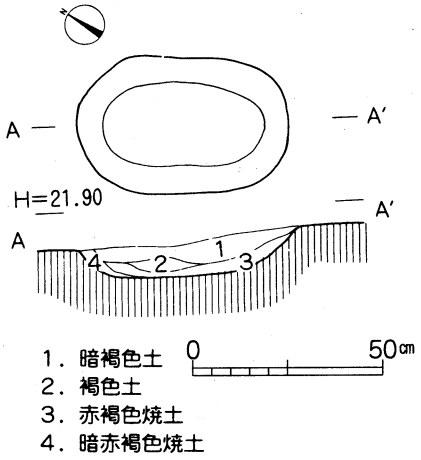


Fig.169　第07号住居跡炉

多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築されていない。

掘り方　掘り方は床下全面におよぶが、とくに東壁際には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居南側に集中するものの、大半は小破片のみで、とくに１個体の高坏形土器が小破片となって散在していた。個体として図示しうる資料は、高坏１点、壺底部１点である。

遺物　高坏は脚部1/3程度遺存する。坏部底面から接合部下に短い柱状部分があり、そこから中だるみのカーブを描いて外へ張り出し、端部が短く水平方向に伸びる。坏部内面および脚外面は入念なミガキ

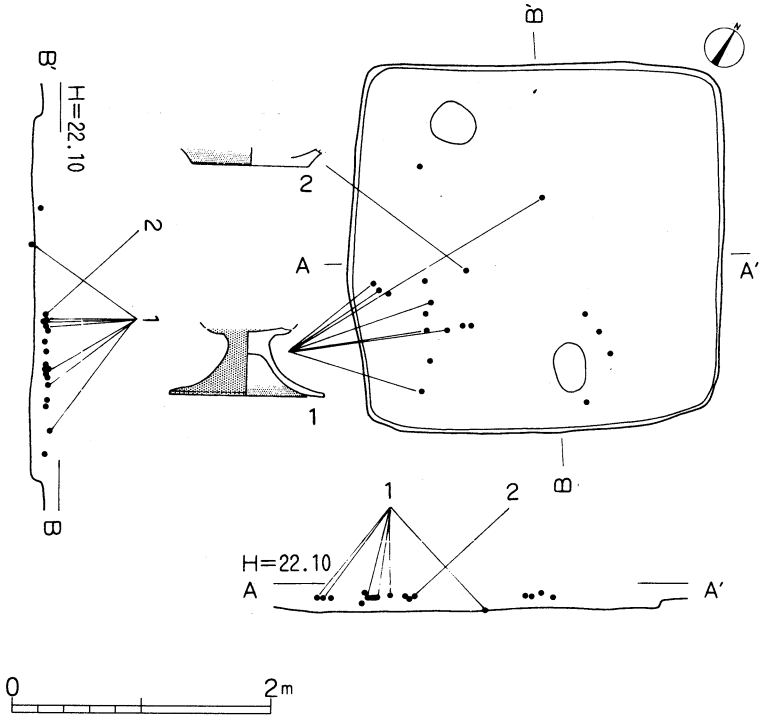


Fig.170　第07号住居跡遺物分布図

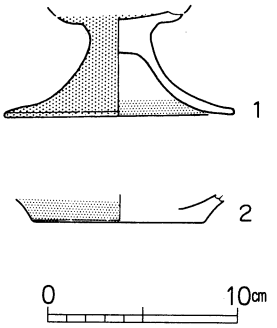


Fig.171　第07号住居跡出土遺物

が施され、脚部は縦位方向のミガキが行なわれている。脚内面はナデ調整が施されている。また坏部、脚部および脚内面裾部には赤彩が施されている。焼成は良好である。２は壷の底部でわずか1/10程度を遺存するのみである。外面はハケメ調整が施され、赤彩が認められる。内面はナデ調整が施されている。焼成は良好である。

第09号住居跡（SI09）（Fig.172～177）

位置　本跡は、調査区南端部、16-K、17-K区の標高21.54m～22.02mに位置する。住居跡群の南端に位置する。北東側に第08号住居跡（SI08）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈するが、南側約1/3は調査区域外にあたるため、2/3の検出を行なった。したがって、長軸は5.34mであるものの、短軸は現存で3.60mを測る。住居の向きとして、長軸方位はN-62°-Wを指し、中型の住居跡である。確認された壁は南辺が全面観察できなかった以外東辺および西辺とも部分確認である。いずれも確認された３辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏が認められるが、ほぼ水平に平坦面が広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　７層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	10YR3/3	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
２層	10YR3/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
３層	10YR2/3	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
４層	10YR2/1	黒色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
５層	10YR4/6	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
６層	10YR4/4	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

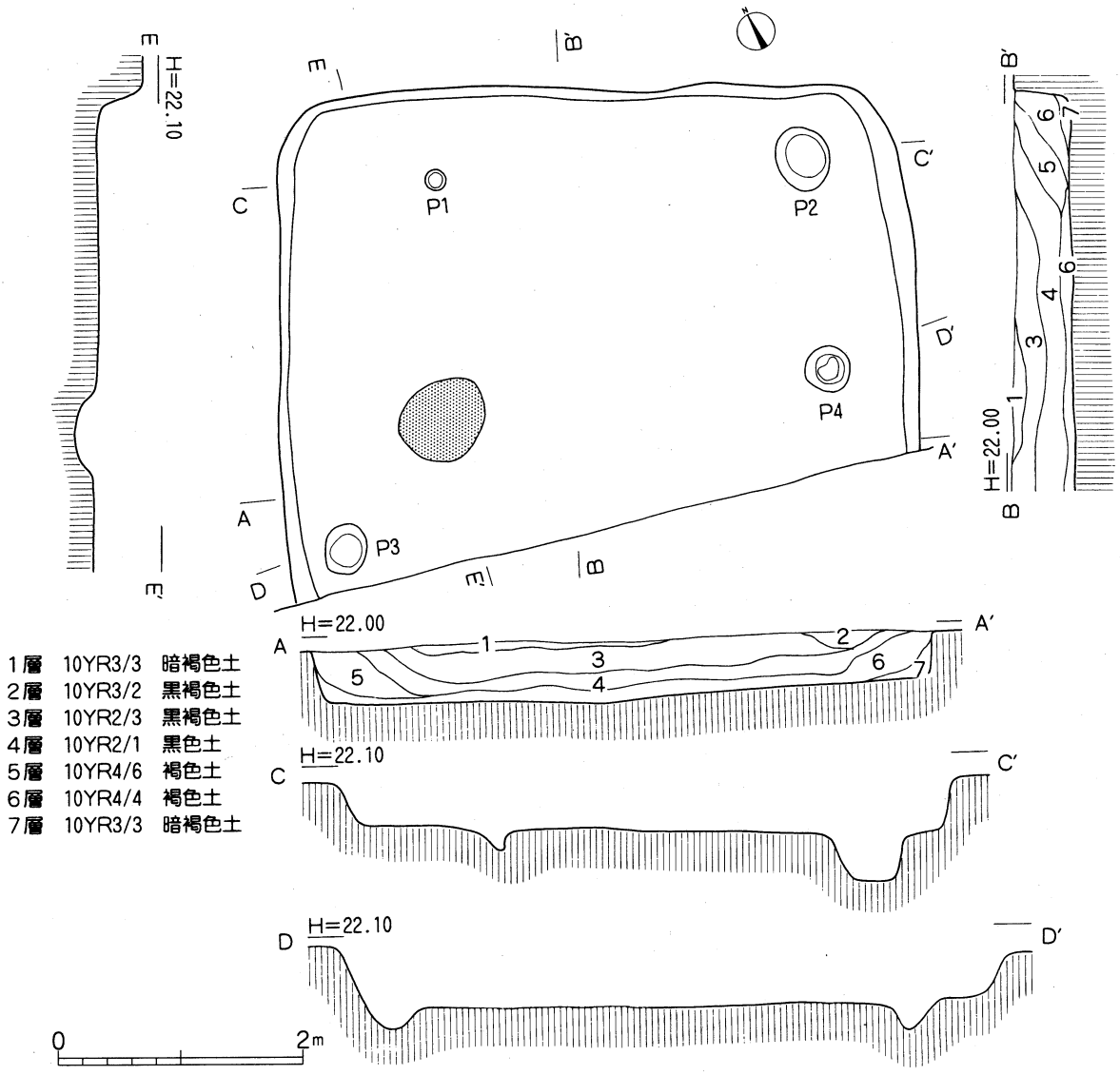


Fig.172　第09号住居跡

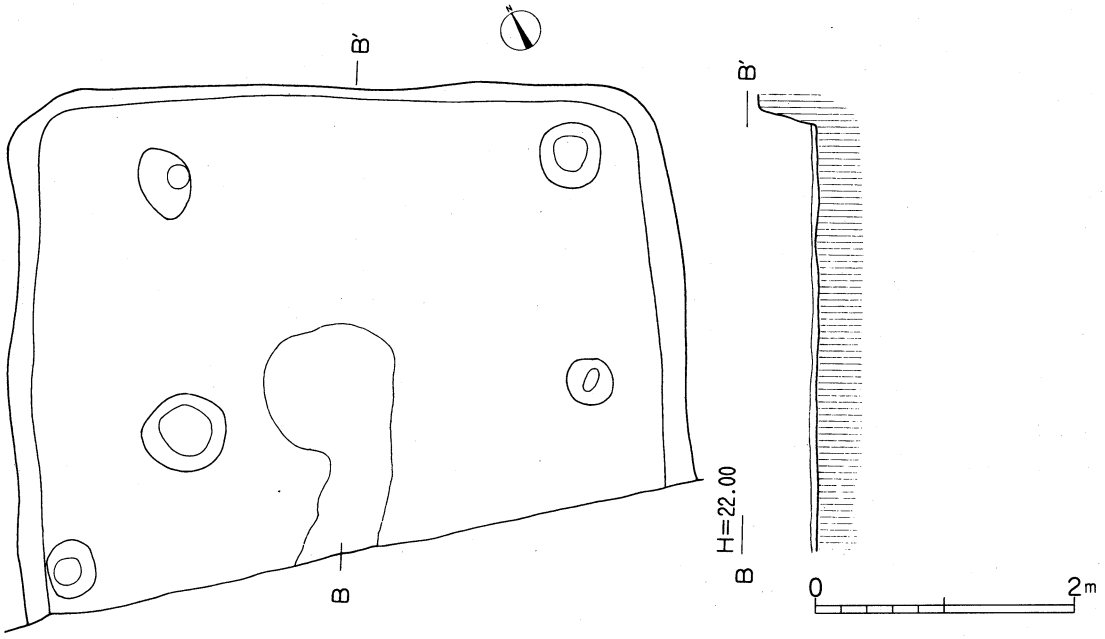


Fig.173　第09号住居跡掘り方

７層　10YR3/3　暗褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本と地床炉１基が確認された。

柱穴はP１～P４であるが、主柱穴はP１とP２の２本確認できる。P１は北側に位置し、上面が18×18cmの円形、深さ13cm。P２は東側で46×54cmの楕円形で、深さ43cm。P３は炉の西側に位置し、上面が38×42cmの楕円形で、深さ25cmを測り、支柱穴かどうか用途は不明。P４は南東壁中央に配置され、上面が38×38cmの円形、深さ25cmを測る入口部施設の梯子穴と考えられる。

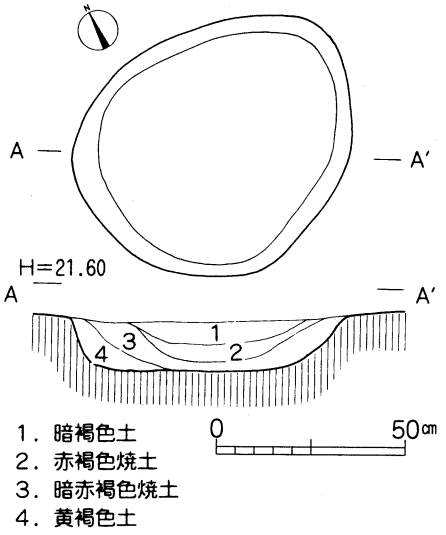


Fig.174　第09号住居跡炉

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径78cm、短径64cm、深さ19cmを測る。断面は若干の起伏はあるものの、ほぼ平坦な平底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は４層に分層でき、第２層と第３層が焼土粒子を含む土層で、とくに第３層が焼土層で、多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築しない。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに住居中央部の南北方向に細く浅い溝状の掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に広がっているが、とくに坩形土器は北西壁際に集中している。

遺物　１は壺の口縁部破片で、1/4程を遺存する。推定口径15.6cmを測る。口縁部は緩く外方へ開く。内外面ともナデ整形の後、赤彩される。焼成は良好。2は甕の口縁部から頸部にかけての破片で、1/3程度欠損する。口径16.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。内外面ともナデ整形で仕上げられている。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。３は壺の胴部破片で1/6程を遺存する。ほぼ球形の形態をもち、最大径が胴部中位にあり、23.0cmを測る。内外面ともナデ整形が施され、外面の中位および内面下位にスス状の炭化物を付着する。焼成は良好で、外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。４～10は高坏である。４は坏部2/3程を遺存する。口径19.6cm、坏部現器高6.3cmを測る。坏部底部と口縁部との境界に明瞭な稜をもつ。口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。内面の底部は平坦である。外面口縁部はナデ整形。底部はハケメ調整の後、ケズリを加える。全面赤彩される。内面は口縁部上端でハケメ調整を残置し、下位はナデ整形を施す。赤彩されている。焼成は良好である。５も同じく坏部破片で、1/3程欠損する。口径17.6cm、坏部現器高7.5cmを測る。坏部底部と口縁部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部とは若干内湾気味に立ち上がる。また脚部との接合のため坏部にほぞが付けられている。外面はナデ整形。底部はハケメ調整の後、ケズリが施されている。全面赤彩されている。内面はナデ整形の後、赤彩されている。焼成は良好である。６～８はいずれも脚部のみ完存。６は裾部径14.5cmを測る。脚部はやや中膨らみの柱状部と外方へ直線的に張りだす裾部とからなる。外面柱状部は縦方向のナデ、内面は上端にしぼり目が残り、また下位は横位のナデ、裾部は横ナデで仕上げられている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。７も裾径14.4cmを測る。脚部はほぼ直線的な柱部と外方へ短く張りだす裾部とからなる。脚柱状部は縦位のナデ整形。裾部もナデ整形後、赤彩されている。内面は上位はシボリ目、下位は縦位のナデ整形。裾部は横ナデ整形を施す。焼成は良好。８は裾径15.4cmを測る。脚部はやや中膨らみの柱状部

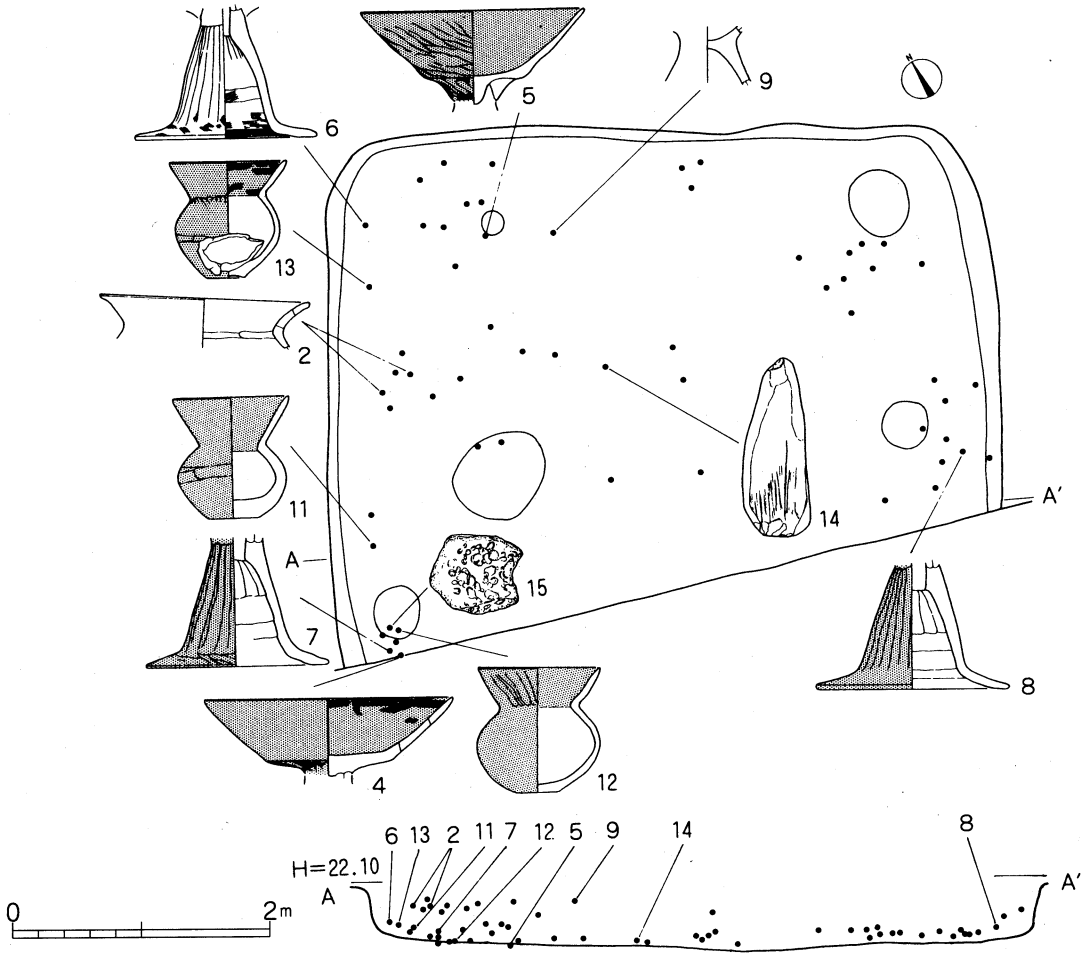


Fig.175　第09号住居跡遺物分布図

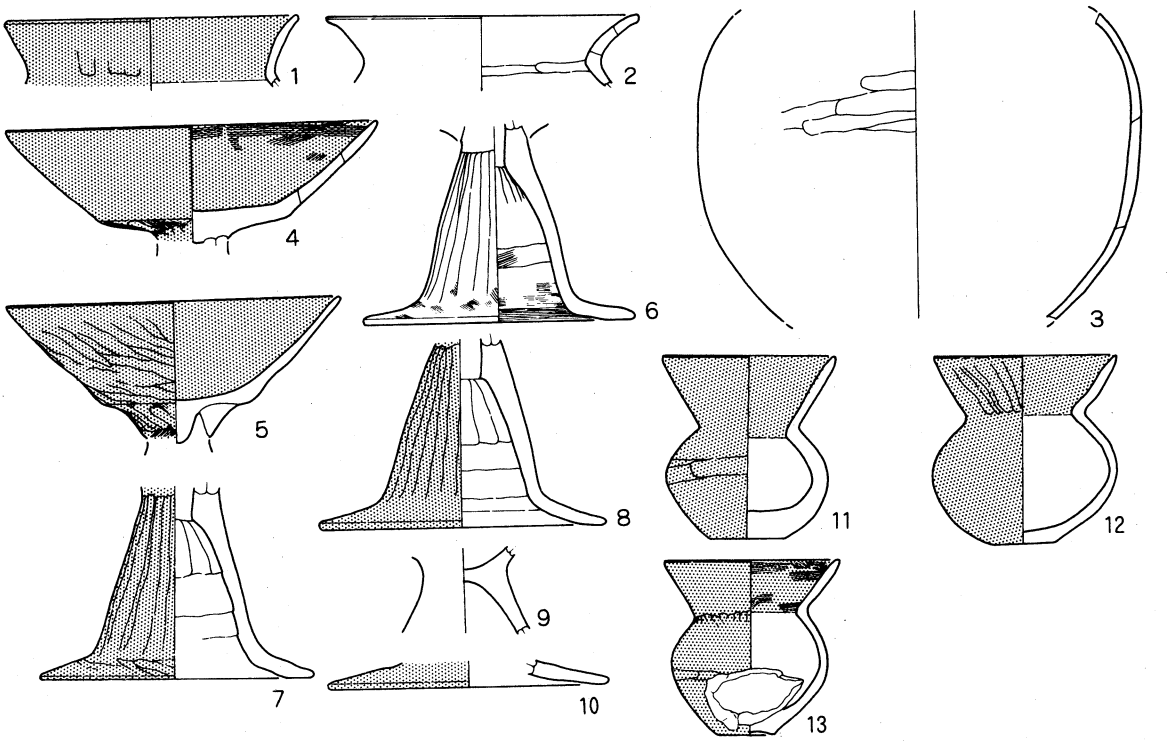


Fig.176　第09号住居跡出土遺物(1)

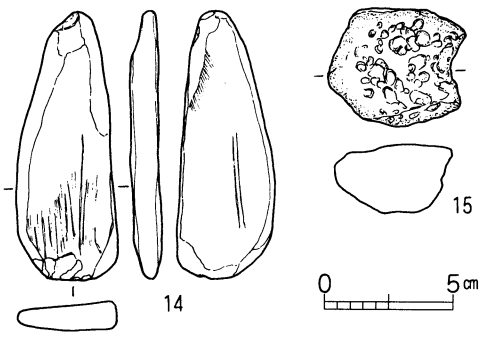


Fig.177　第09号住居跡出土遺物(2)

と外方へ直線的に張りだす裾部とからなる。外面柱状部は縦方向のナデ整形の後、赤彩されている。内面は上端にしぼり目が残り、また下位は横位のナデ、裾部は横ナデで仕上げられている。焼成は良好である。９は高坏の柱状部破片。1/5程度の遺存である。中実で、坏部と脚部の接合部の薄い柱状部である。外面は縦位のヘラケズリされ、ケズリ面を残置している。10は高坏裾部破片。1/4程度を遺存し、推定裾径15.0cmを測る。内外面ともナデ整形によって仕上げられている。外面に赤彩される。焼成は良好である。11～13は坩形土器である。11は口縁部を1/2程を欠損する。器高9.7cm、口径9.2cm、底径4.2cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ大きく開き、体部は最大径を中位に位置し、球形を呈している。外面は全面入念にミガキが施され、赤彩される。内面はナデ調整され、口縁部に赤彩している。焼成は良好である。12は口縁部から底部にかけて1/3程度欠損する。器高9.9cm、口径9.6cm、底径3.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、体部は球形を呈する。底面は平底である。外面は全面入念なミガキが施され、赤彩されている。内面はナデ整形され、口縁部は赤彩されている。焼成は良好である。13は完存品である。器高9.3cm、口径9.4cm、底径3.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、体部はほぼ球形を呈する。外面は全面入念なミガキが施されている。口縁部は横位に、体部は縦位に仕上げられている。内面口縁部は横位のハケメ調整され、体部はナデ整形で、外面全体と口縁部内面は赤彩されている。なお、体部下半部には人為的な穿孔が認められる。この穿孔行為は焼成後行なわれている。焼成は良好である。

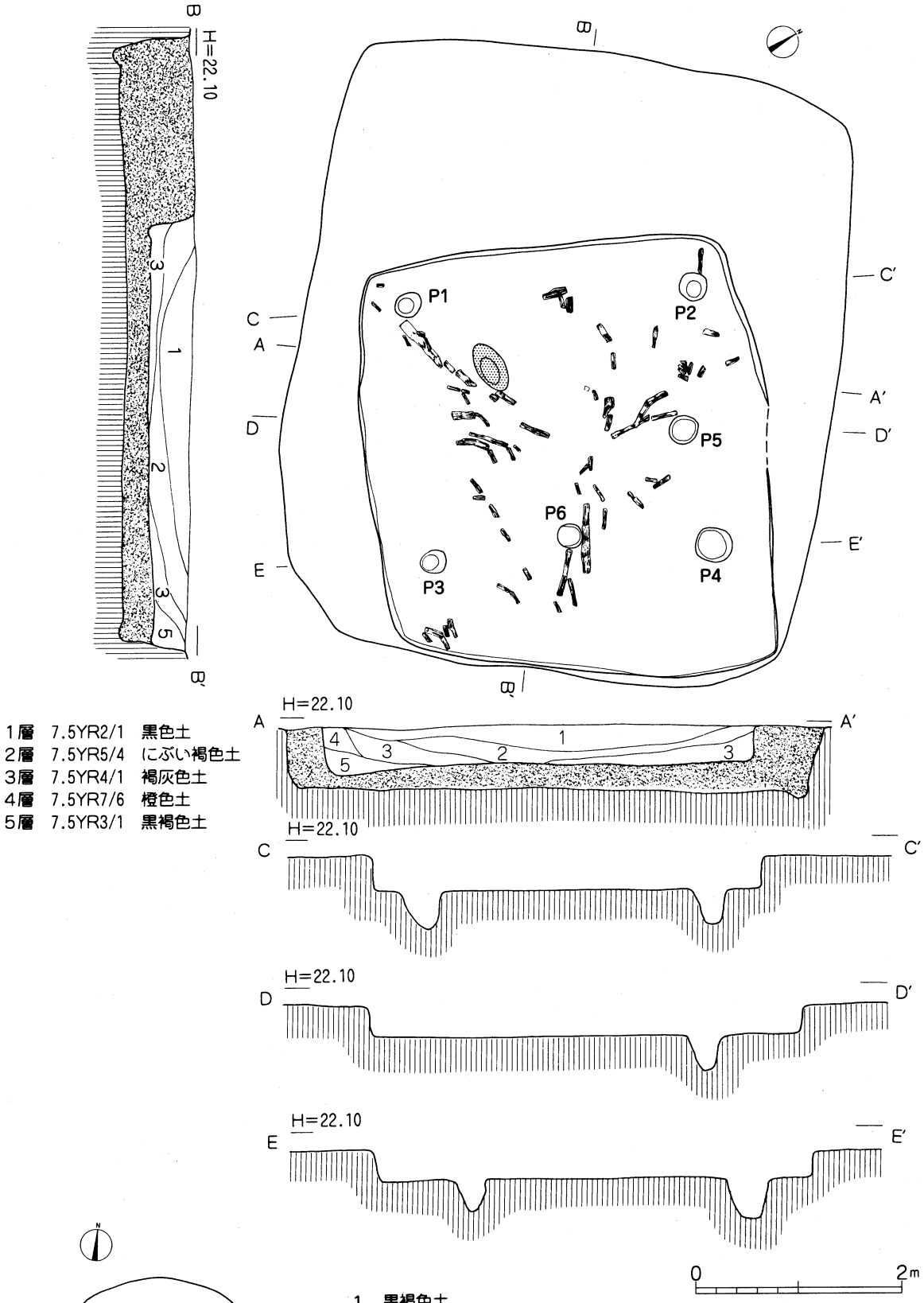
14は滑石製の砥石である。完存で手持ち砥石と考えられる。長さ10.58cm、幅3.65cm、厚さ1.02cm、重さ89.5ｇを測る。長楕円形を呈し、表裏面と側縁面に顕著な磨耗痕が認められ、表面は凹面をなし、下半部には細かな筋状の研磨痕が一方向に集中し、裏面には右上端部に同様の筋状の研磨痕が残置している。また溝状の研磨痕もみられる。15は軽石である。一部を欠損しているものの、扁平な楕円形を呈している。表面はきわめて滑らかに磨滅している。研磨具ないし磨石であろう。長さ4.84cm、幅5.47cm、厚さ2.80cm、重さ18.7ｇを測る。

第10号ＡおよびＢ住居跡（SI10-A、B）（Fig.178～186）

位置　本跡は、調査区東南部、15-M、16-M区の標高21.75～21.88mに位置する。北東側に第14号住居跡（SI14）が、東側に第12号住居跡（SI12）が、南側に第16号住居跡（SI16）が隣接する。相重複した住居跡で一方向（東方向）に縮小している。当初表土層除去段階では１号住居跡と同じく１軒のみの単独住居として調査をすすめていたため、部分的に掘り過ぎた箇所もあるが、埋め戻し土が比較的堅緻であったため、縮小住居であることは、容易に判断することができた。とくに新期（SI10-A）の床面は貼床であることから柱穴や炉跡の位置は明瞭であった。しかし、壁については西壁が堅緻であった以外３辺ともやや軟弱でとくに北壁から東壁にかけて不明確で、正確な壁として把握できず、不十分であったことは否めない。なお旧住居（SI10-B）を埋め戻し、新住居（SI10-A）に建て替えた縮小率はおよそ半分の52％であった。

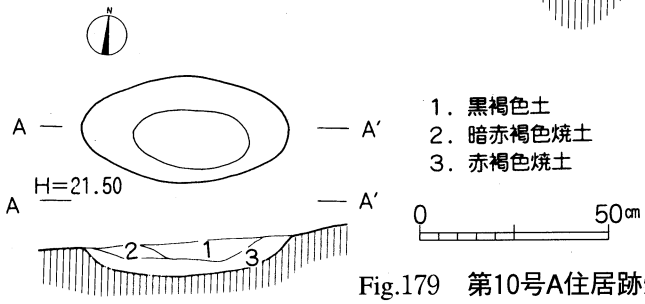
第10号A住居跡（SI10-A）（新期住居跡）（Fig.178～181）

形態　古期住居跡（SI10-B）の東壁を共有する平面形は、隅丸方形を呈する。長軸4.34m、短軸4.00mを測り、長軸方位はN-68°-Wを指す。中型の住居跡である。壁は東辺が古期住居とほぼ共有する以外



1層　7.5YR2/1　黒色土
2層　7.5YR5/4　にぶい褐色土
3層　7.5YR4/1　褐灰色土
4層　7.5YR7/6　橙色土
5層　7.5YR3/1　黒褐色土

Fig.178　第10号A住居跡



1．黒褐色土
2．暗赤褐色焼土
3．赤褐色焼土

Fig.179　第10号A住居跡炉

３辺とも貼壁で、明褐色ロームを主とする土によって堅く築き固められている。とくに西壁は堅緻で、地山であるハードローム層そのものであった。したがって、全辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がるが、全面貼床で、旧住居全面に20～24cm程度均一に埋め戻した上、さらに壁を構築したものと考える。火災住居で、床面全体に炭化物と焼土の堆積がみられるが、とくに住居西寄りに集中するようである。

覆土　５層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR2/1	黒色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
２層	7.5YR5/4	にぶい褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層	7.5YR4/1	褐灰色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
４層	7.5YR7/6	橙色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
５層	7.5YR3/1	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴６本と地床炉１基が確認された。

柱穴はP１～P６のうち、P１～P４が主柱穴と考える。まずP１は南西隅に位置し、上面が24×30cmの楕円形、深さ24cm。P２は北西隅で上面が26×26cmの円形で、深さ26cm。P３は南東隅に位置し、上面が24×26cmの楕円形で、深さ19cm。P４は北東隅に位置し、上面が38×38cmの円形で、深さ27cmを測る。またP５はP２とP４のほぼ中央に設置されており、支柱穴と考えられ、上面が26×30cmの楕円形で、深さは23cm。P６もP３とP４のほぼ中央に設置された支柱穴であろう。上面が24×26cmの楕円形で、深さは18cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から西寄りに長径54cm、短径28cm、深さ14cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第２層と第３層が焼土粒を含む土層で、とくに第３層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築しない。

掘り方　埋め戻し土によって壁・床面が構築されており、貼壁・貼床構築処理である。

遺物出土状況　遺物は、住居全体にまとまって出土している。とくに炉跡東側に集中している。図示できた遺物はすべて土器で、壷１点、高坏４点、坩３点、甕１点である。

遺物　１は壷口縁部破片。口縁部1/4程度遺存する。推定口径14.6cmを測る。口縁部は外反しながら立ち上がる。外面縦位のヘラナデ、内面横ナデ。赤彩され、焼成は良好である。２は高坏で、口縁部から脚部にかけて2/3程遺存する。現器高15.1cm、推定口径17.4cmを測る。坏部は口縁部と底部との境界は明瞭な稜をもち、脚部は中膨らみで、裾部で強く屈曲し、外方へ張りだす。外面は全面ナデ整形で仕上げられ、赤彩される。内面坏部はナデ整形され、赤彩が施される。脚部は柱状部上半部はシボリ目が残り、下半部は横位のナデ。粘土帯の積み上痕が２段残置している。裾部はヘラナデ。焼成は良好である。３は高坏の坏部が完存する。口径19.8cm、現器高6.3cmを測る。口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部は外反気味に立ち上がる。外面口縁部は横位のハケメ調整の後、入念なナデ整形。底部もナデ整形。内面は横位のハケメ調整の後、ナデが加わる。全面赤彩され、焼成は良好である。４は高坏の脚部破片。脚部の柱状部のみ完存する。柱状部の中膨らみは弱く、ほぼ直線的に外方へ開く。外面は縦位のヘラナデ整形の後、赤彩される。内面は上半部にシボリ目が残置する。焼成は良好である。５は高坏の脚部破片。裾部のみ1/8程度遺存する。推定裾径13.6cmを測る。裾部全体が低く、底面に接する。内外面ともナデ整形。外面に赤彩される。焼成は良好である。６は口縁部と胴部の一部を欠損するものの、口縁部から底部までほぼ完存する坩形土器。器高11.2cm、口径10.4cm、底径2.6cm、胴部最大径9.6cm測

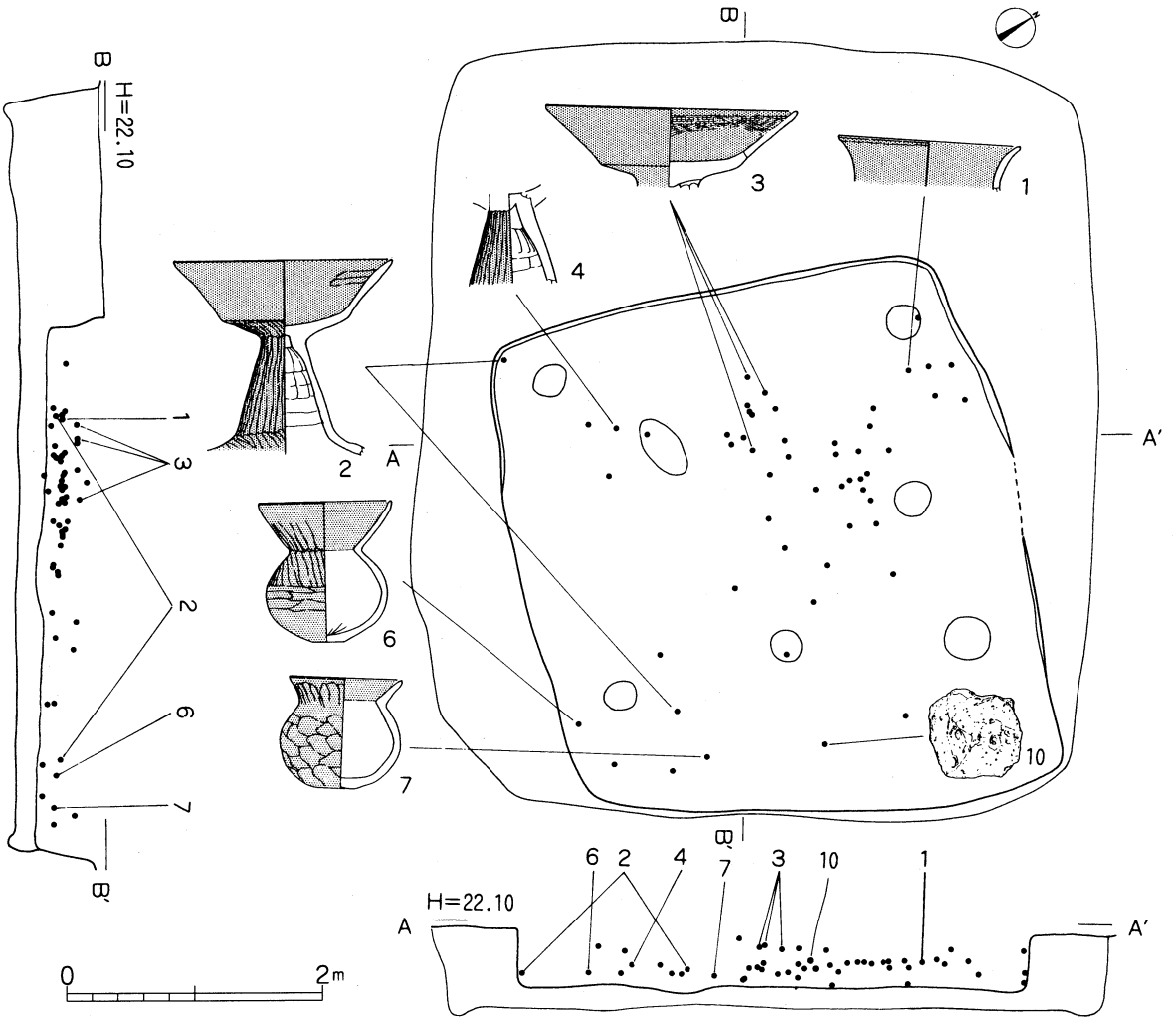


Fig.180　第10号A住居跡遺物分布図

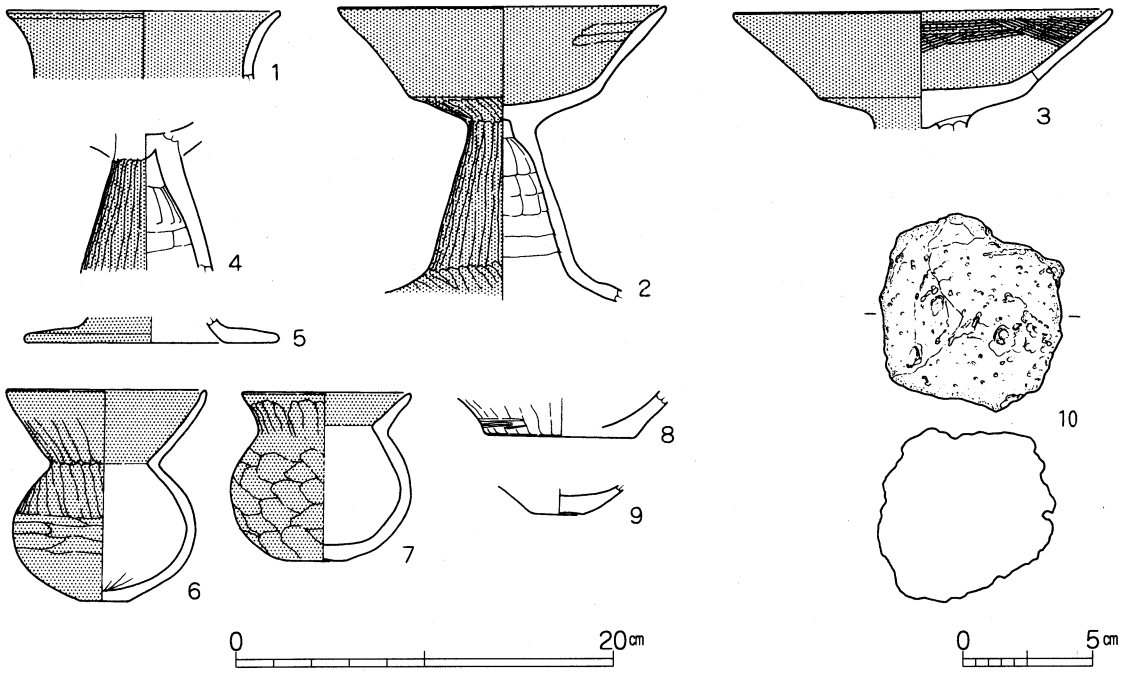


Fig.181　第10号A住居跡出土遺物

る。平底の小さな底部から球形の胴部へ移行し、口縁部は内湾気味に大きく開く。外面口縁部上端は横ナデ、口縁部下半部から底部にかけて入念なナデ整形し、全面赤彩される。内面はナデ整形によって仕上げられている。口縁部のみ赤彩される。焼成は良好である。７も口縁部の一部を欠損するものの、口縁部から底部にかけて完存する小型壺。器高8.9cm、口径9.0cm、底径3.0cm、最大径が胴部中位に位置し9.4cmを測る。上げ底の小さな底部から球形の胴部へ移行し、口縁部は短く「く」の字状に外反する。外面は口縁部上端が横位のヘラケズリ、口縁部下半部から底部は斜行するヘラケズリ。内面は口縁部が斜行のヘラナデ。胴部もナデ整形で仕上げられている。外面と内面口縁部に赤彩され、焼成は良好である。８は甕底部破片。底部約1/4程度遺存する。推定底径7.8cmを測る。平底の底部から外反気味に胴部が立ち上がる。全面ナデ整形。焼成は良好。にぶい黄褐色を呈する。９は坩の底部破片。底部のみ完存する。底径2.6cmを測る。やや上げ底気味の底部から球形の胴部へ移行する。全面ナデ整形。焼成は良好。明褐色を呈する。

10は軽石である。略球形を呈し、全面滑らかに磨耗しているが、気孔のある面はやや起伏がはげしい。長さ7.93cm、幅7.28cm、厚さ6.89cm、重さ21.0ｇを測る。

第10号Ｂ住居跡（SI10-B）（Fig.182～186）

形態　SI10-Aの下層で検出された住居跡で、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸６.25m、短軸５.34mを測り、長軸方位はN-38°-Eを指す。中型の住居跡である。壁は北西辺・南西辺・南東辺がほぼ垂直に、北東辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。

覆土　７層に分層可能である。すべて埋め戻し土層である。

１層　7.5YR4/2　灰褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。堅緻である。
２層　7.5YR7/8　黄橙色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。
３層　7.5YR5/8　明褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。
４層　7.5YR2/1　黒色土　少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。堅緻である。
５層　7.5YR2/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。
６層　7.5YR3/2　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。
７層　7.5YR3/3　暗褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

住居内部の施設として、柱穴５本と地床炉１基および貯蔵穴２基が確認された。

柱穴はP７～P11で、P７～P10が主柱穴と考える。まずP７は北隅側に位置し、上面が22×26cmの楕円形、深さ48cm。P８は東隅側で上面が18×24cmの楕円形で、深さ49cm。P９は西隅側に位置し、上面が26×32cmの楕円形で、深さ51cm。P10は南隅側に位置し、上面は20×38cm、深さ53cmを測る。またP11はP９とP10の中間に位置する支柱穴と考えられ、上面が19×22cmの楕円形で、深さは15cmを測る。炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北東寄りの北東壁よりに構築されている。長径96cm、短軸48cm、深さ４cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は単層で、第１層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

貯蔵穴と思われるピットが２ヵ所確認される。貯蔵穴１は南東壁際の南寄りに構築されている楕円形のピットで、長径50cm、短径42cm、深さ21cmを測る。覆土中より鉢１点が出土している。貯蔵穴２はやはり南東壁際北寄りで、不整楕円形を呈する。長径82cm、短径66cm、深さ21cmを測る。遺物の出土はみられなかった。なお、住居跡長軸線上には炭化物が堆積し、周辺には焼土塊が検出されている。焼失家屋である。

周溝は幅10～20cm、深さ４～12cmを測る。７層暗褐色土が堆積している。

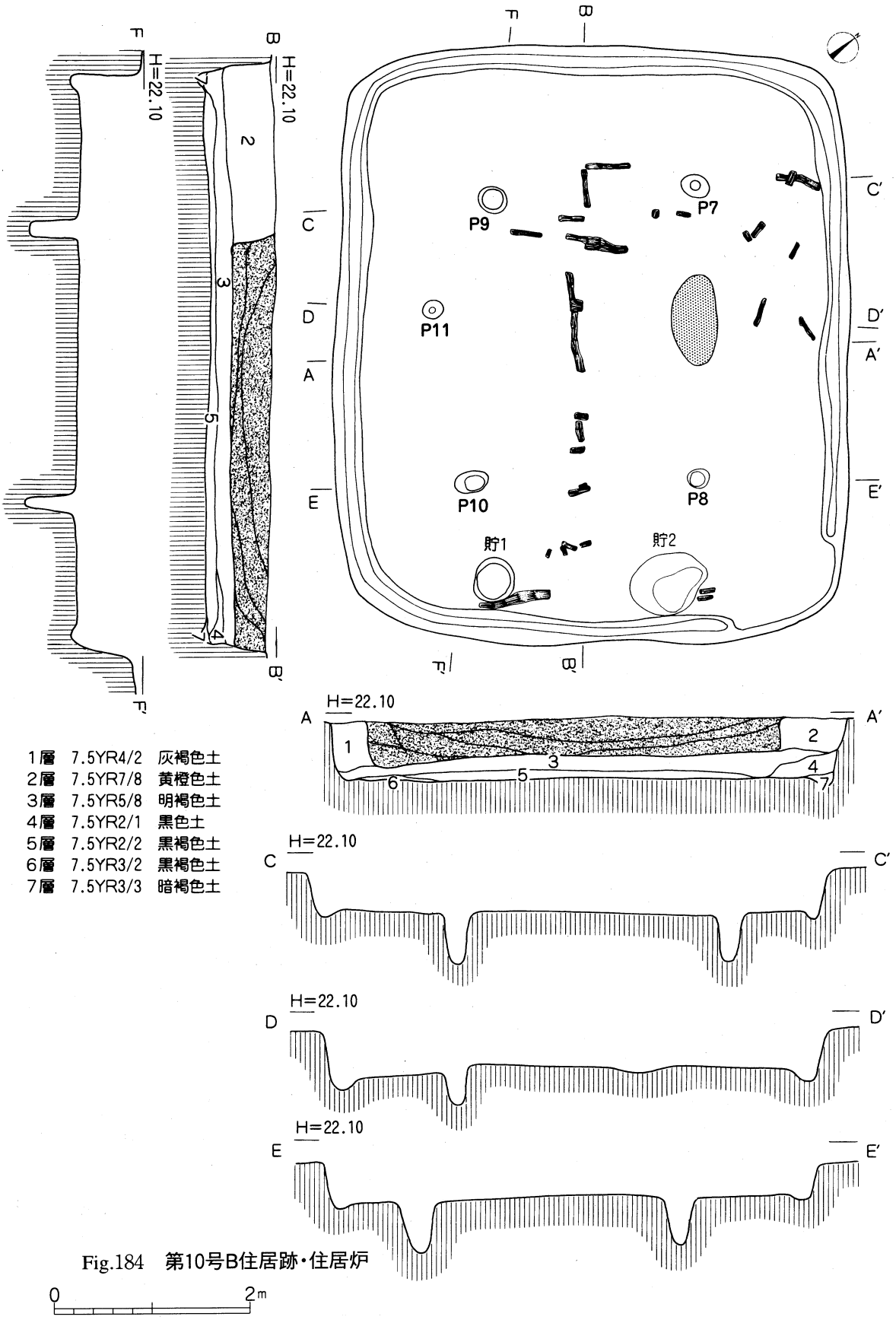


Fig.184　第10号B住居跡・住居炉

Fig.182　第10号B住居跡

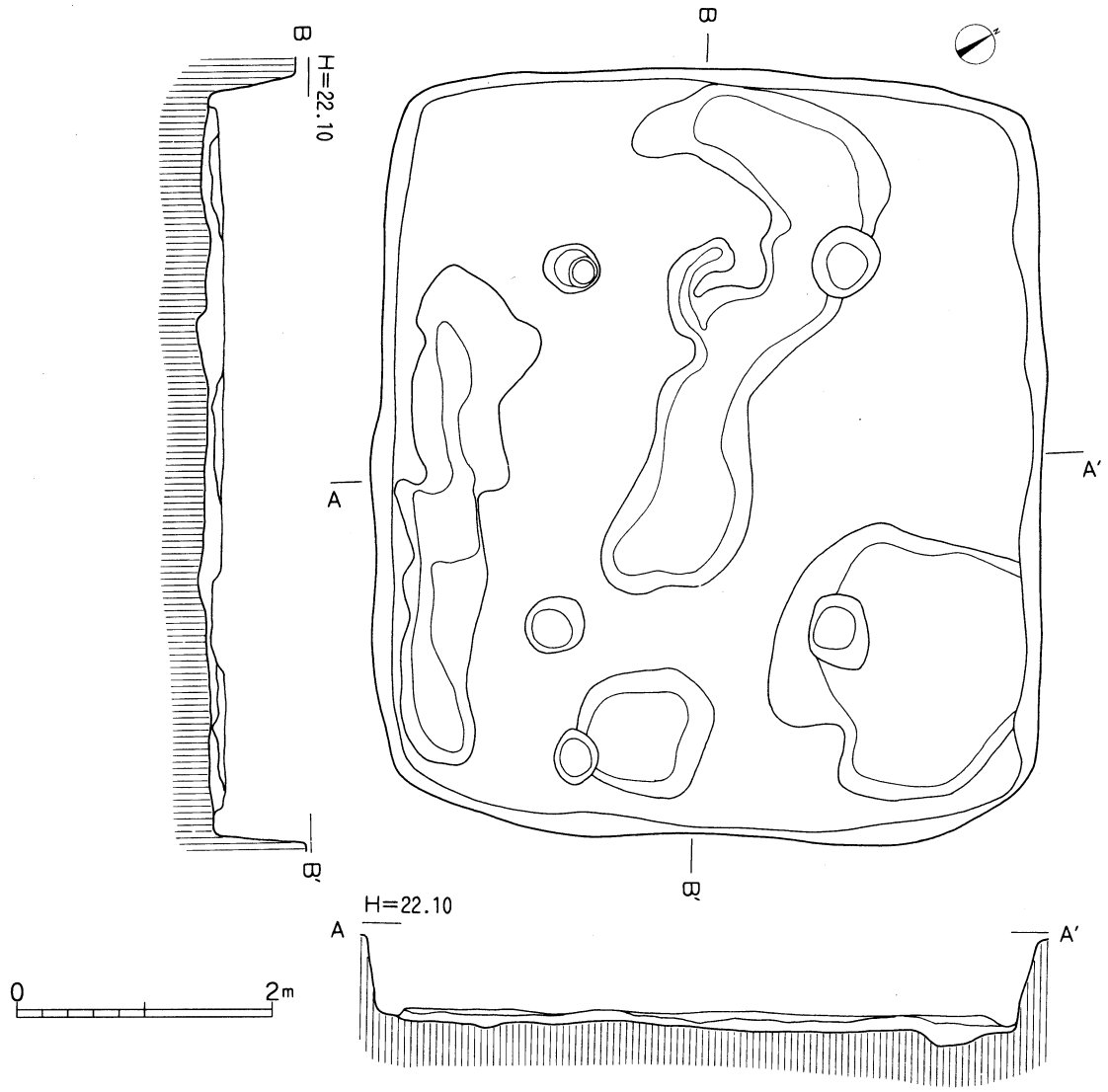


Fig.183　第10号B住居跡掘り方

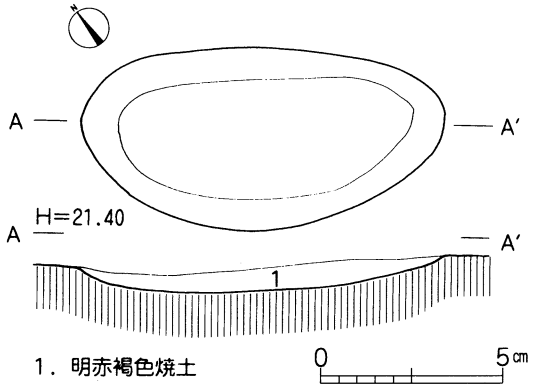


Fig.184　第10号B住居跡炉

掘り方　掘り方は、素掘り状態で床面構築されており、全面貼床処理が施されている。

遺物出土状況　遺物は、貯蔵穴および北東壁際周囲にわずかに散在するのみである。ただし、床面上より土製垂飾が２点出土している。

遺物　１は壷口縁部破片である。口縁部から肩部にかけてほぼ遺存する。推定口径19.6cmを測る。口縁部は短く垂直気味に立ち上がる。肩部の張りは弱い。外面は口縁部上端は横位のハケメ調整、口縁部下半部は縦位のハケメ調整の後、ナデ整形され、さらに赤彩される。内面はナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好である。２は甕口縁部破片。口縁部約1/2程度遺存する。推定口径19.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は縦位と横位のハケメ調整の後、ナデ整形。内面もナデ整形。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。３は坩の口縁部破片。口縁部1/6程度遺存する。推定口径11.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に

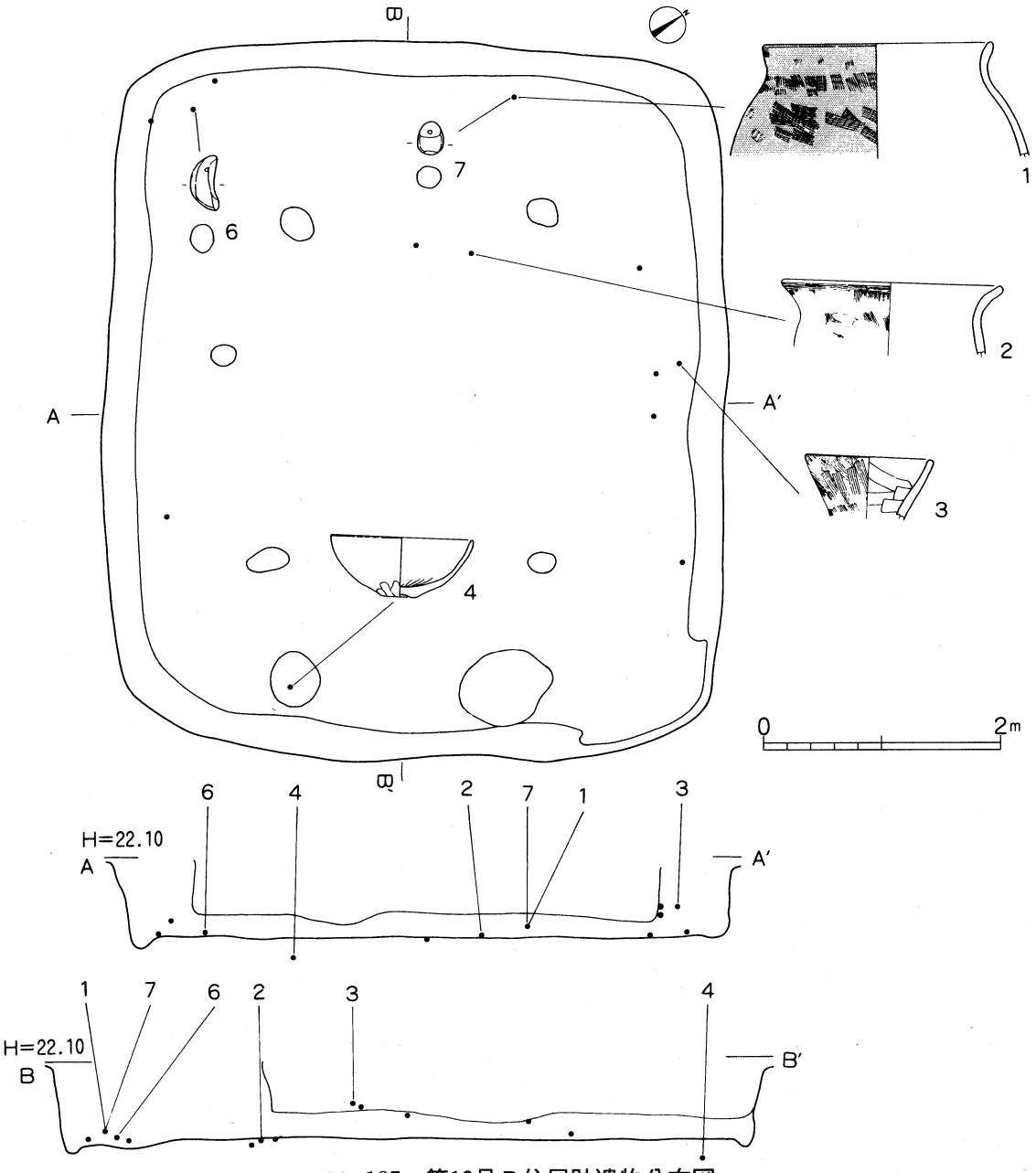


Fig.185　第10号Ｂ住居跡遺物分布図

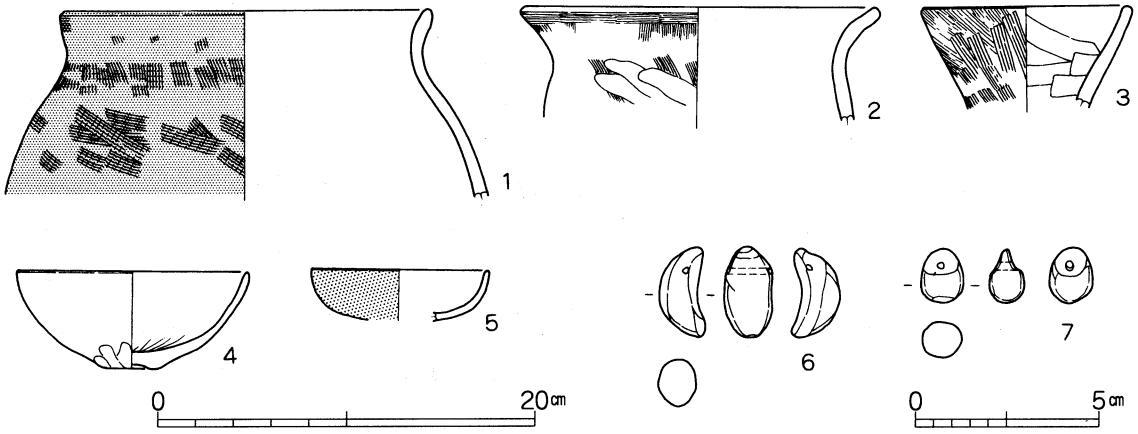


Fig.186　第10号Ｂ住居跡出土遺物

上方へ立ち上がる。外面は縦位のハケメ調整。内面はナデ整形を丁寧に施す。焼成は良好で、明褐色を呈する。４は椀形土器で、口縁部から底部にかけて約1/2程度遺存する。器高5.1cm、推定口径12.4cm、底径2.8cmを測る。上げ底状の小さな底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は多少の歪みがみられる。外面体部上半部はナデ、下半部はケズリが加えられ、内面入念なナデ整形で仕上げている。５は坏形土器で、体部約1/4程度の遺存である。体部は内湾気味に立ち上がる。内外面とも丁寧なナデ整形を施す。外面は赤彩され、焼成は良好である。

６・７は土製垂飾である。６は小型の勾玉状を呈し、長さ2.41cm、幅1.03cm、厚さ1.27cm、重さ7.15ｇを測る。緩いＣ形を呈し、全体に丸みをもつ。頭部に径0.20cmの穿孔がみられ、一方向から穿孔されているようである。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。７は小型の土球状を呈し、長さ1.41cm、幅1.07cm、厚さ0.94cm、重さ2.50ｇを測る。球状の丸玉の上端を指頭で押し潰し扁平にし、そこに径0.18cmの円孔を一方向から穿つ。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

第12号住居跡（SI12）（Fig.187～192）

位置　本跡は、調査区南東部、15-N、16-N区の標高21.64～21.72ｍに位置する。東側に第13号住居跡（SI13）が、西側に第10号住居跡（SI10）、北側に第14号住居跡（SI14）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸５.72ｍ、短軸５.16ｍを測り、長軸方位はN-42°-Wを指す。中型の住居跡である。壁は北辺および東辺、西辺、南辺ともが緩やかに立ち上がる。床面は若干起伏を伴うが、ほぼ平坦で水平に広がる。床はロームを主体とする貼床で、硬化面が壁際を除き全体に広がる。

覆土　６層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR2/1　黒色土　　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
２層　7.5YR2/2　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
３層　7.5YR4/6　褐色土　　少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
４層　7.5YR4/3　褐色土　　多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
５層　7.5YR5/8　明褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりにやや欠ける。
６層　7.5YR4/2　灰褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴１本と地床炉１基、貯蔵穴１基が確認された。

柱穴はＰ１のみで、西壁際に設置されている。上面が20×28cmの楕円形、深さ15cmを測る。

炉は地床炉で、ほぼ円形を呈し、住居中央から北西寄りに径52×54cm、深さ12cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は２層に分層でき、第１層と第２層ともが焼土粒を含む土層で、とくに第１層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

貯蔵穴は東隅壁際に設置され、楕円形を呈する。規模は長径72cm、短径68cmで、深さは52cmを測り、二段構築である。底面はやや鍋底で、壁は直線的に外方へ開口する。覆土は５層に分層でき、１層黒褐色土（7.5YR3/2）少量のローム粒子を含み、締まりがある。２層暗褐色土（7.5YR3/4）多量のローム粒子を含み、締まりがある。３層褐色土（7.5YR4/4）少量のローム粒子を含み、締まりがある。４層極暗褐色土（7.5YR2/3）少量のローム粒子を含み、締まりがある。５層褐色土（7.5YR4/6）多量のローム粒子を含み、締まりがある。覆土中より甕形土器が出土している。

周溝として北隅壁を中心に北西辺、北東辺と南隅壁を中心にに南西辺と南東辺に幅が広く周溝を構築している。ただし、通常みられる周溝の形態をもたず、住居の拡張等改築に伴う施設の残存とも考えられる。

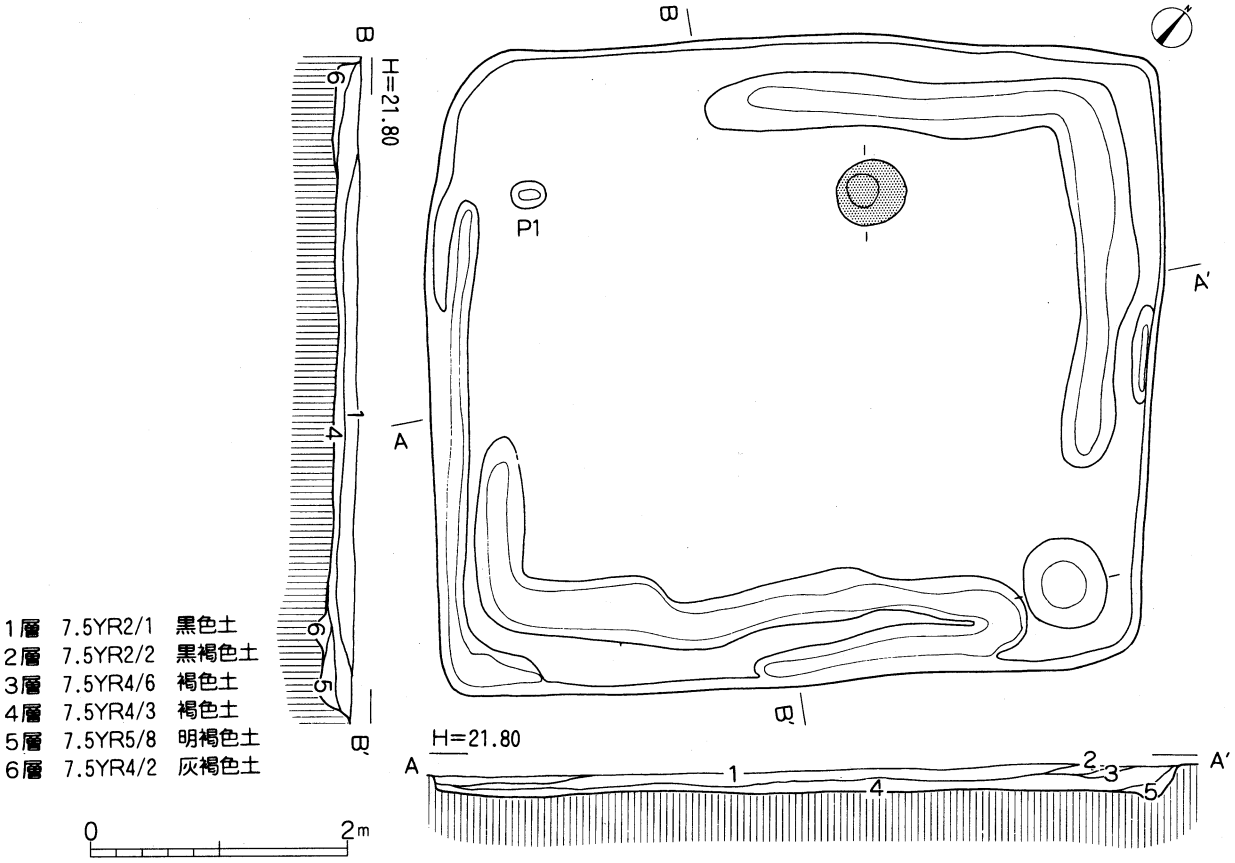


Fig.187　第12号住居跡

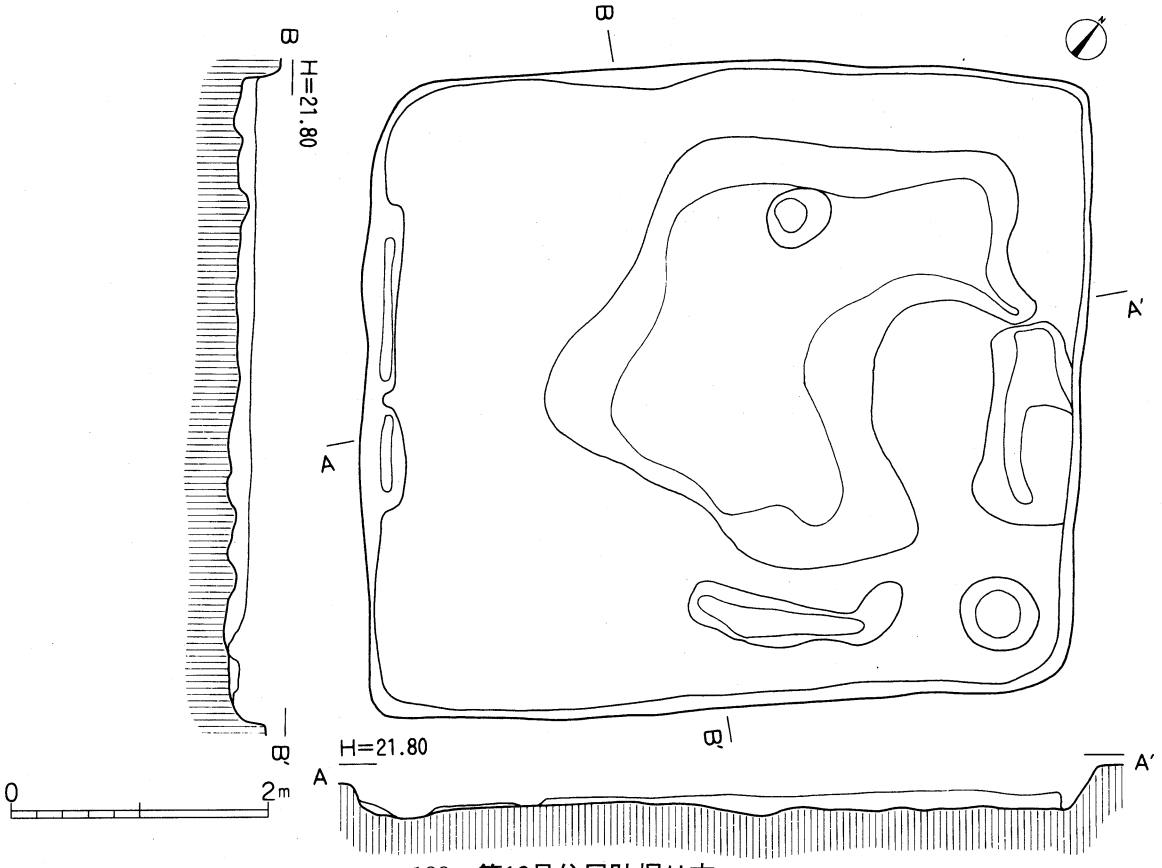


Fig.188　第12号住居跡掘り方

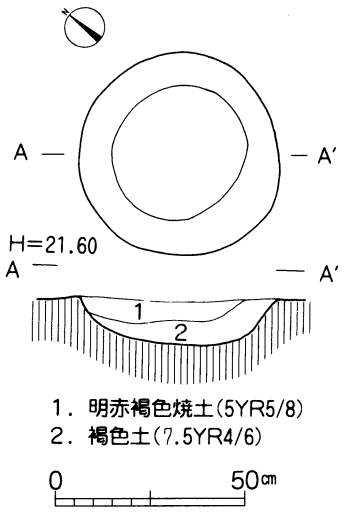


Fig.189　第12号住居跡炉

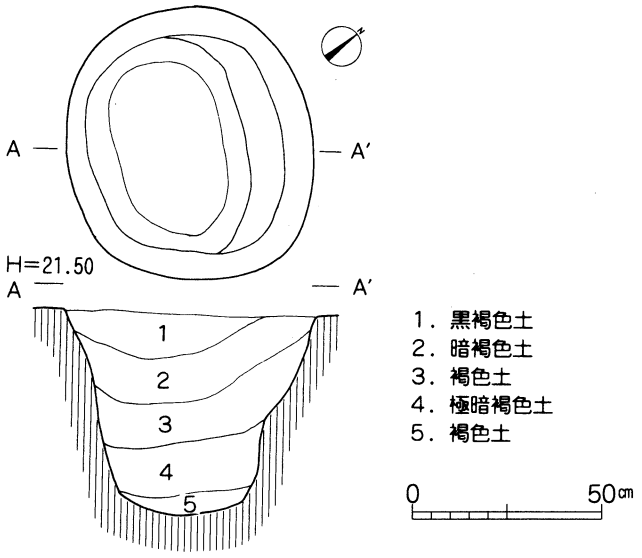


Fig.190　第12号住居跡貯蔵穴

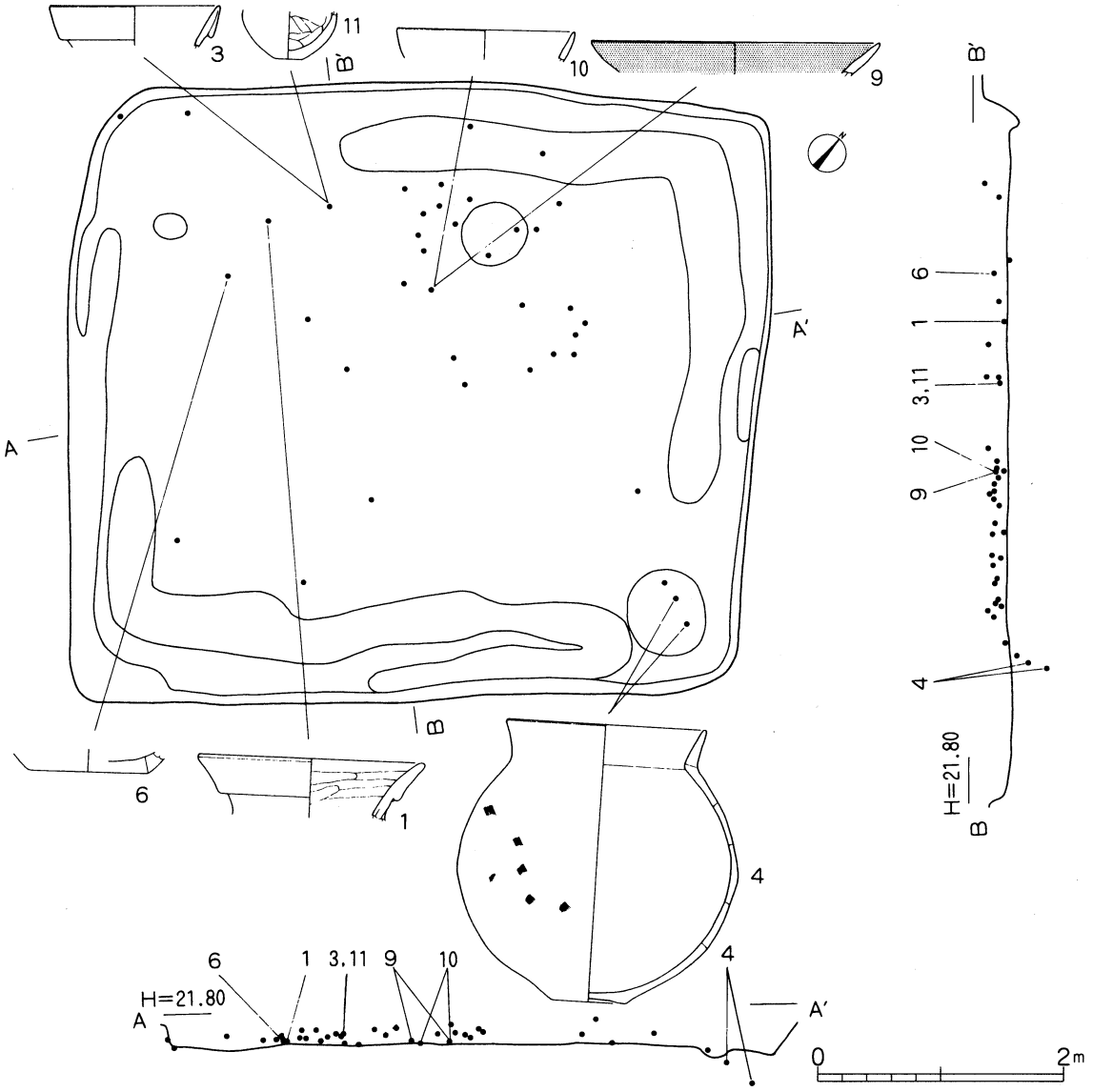


Fig.191　第12号住居跡遺物分布図

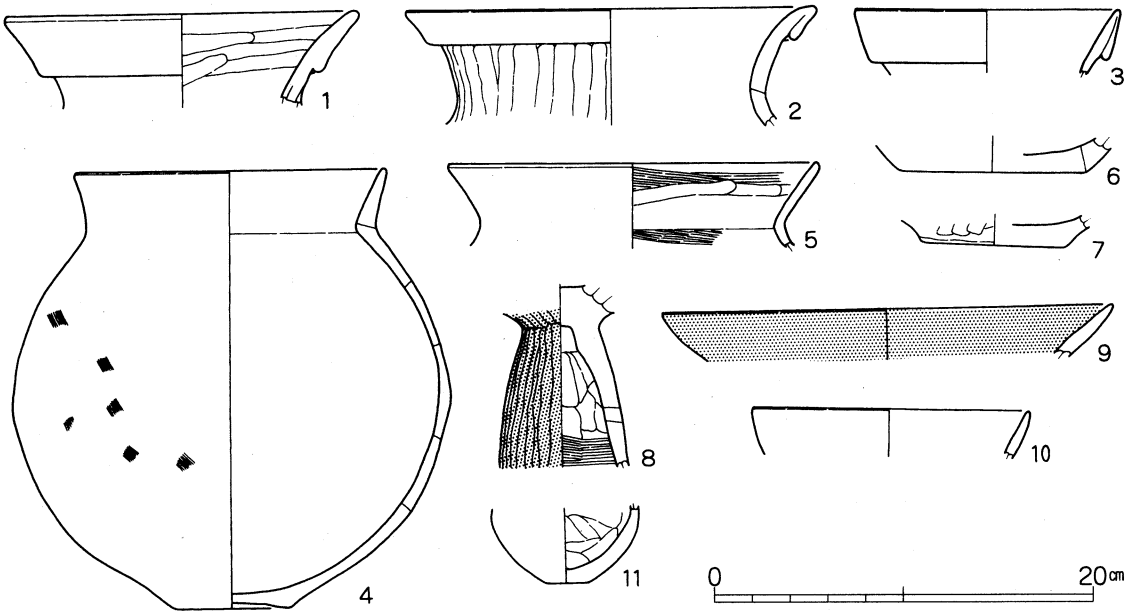


Fig.192　第12号住居跡出土遺物

掘り方　掘り方は、住居中心部に浅い広い掘り込みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに炉跡を中心にまとまって出土している。図示した資料は壺３点、甕４点、高坏２点、坩２点である。

遺物　１～３は壷形土器である。１は壷の口縁部破片。口縁部約1/4程度を遺存する。推定口径18.8cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、ゆるやかに外反する。外面口縁部は縦位の入念なヘラミガキ。頸部は横位のナデ整形。内面は横位のミガキが施されている。明瞭ではないが赤彩されている。焼成は良好である。２も口縁部から頸部にかけて約1/5程度を遺存する。口径は21.8cmを測る。口縁部は幅狭い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部は大きく外反気味に外方へ開く。外面口縁部は横ナデ、頸部は縦位のヘラナデ。内面は入念な横位のナデ。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。３も口縁部破片で、1/10以下の小破片である。推定口径14.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、直線的に外方へ開く。外面口縁部は横位のナデ。内面も横位のナデ。焼成は良好で、橙色を呈する。４は口縁部から底部にかけて約1/2程度遺存する甕形土器である。器高24.0cm、口径16.6cm、底径6.2cm、最大径が胴部中位に位置し23.0cmを測る。やや上げ底気味の底部から球形の胴部へ移行し、口縁部は短く直線的に上方へ立ち上がる。外面口縁部から底部にかけてナデ整形。内面も口縁部は横ナデ。胴部はナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。５は甕の口縁部破片。口縁部約1/10以下の遺存である。口径19.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部はハケメ調整の後、ナデ整形。内面は横位のハケメ調整を施す。焼成は良好で黒褐色を呈する。６は甕底部破片。底部約1/10以下の遺存である。推定底径10.2cmを測る。平底の底部で、ナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。７も甕底部破片。底部約1/3程の遺存である。推定底径7.8cmを測る。平底の底部で、ナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。８は高坏の脚部破片。柱状部のみ2/3程度遺存し、現器高9.5cmを測る。柱状部は中膨らみし、下半部付近に透孔がある。外面は縦位のナデ整形。内面は上半部はシボリ目が残り、指頭による粗いナデが施され、下半部は横位のハケメ調整。焼成は良好でにぶい赤褐色を呈する。９は高坏もしくは鉢形土器の口縁部破片。口縁部のみ1/16

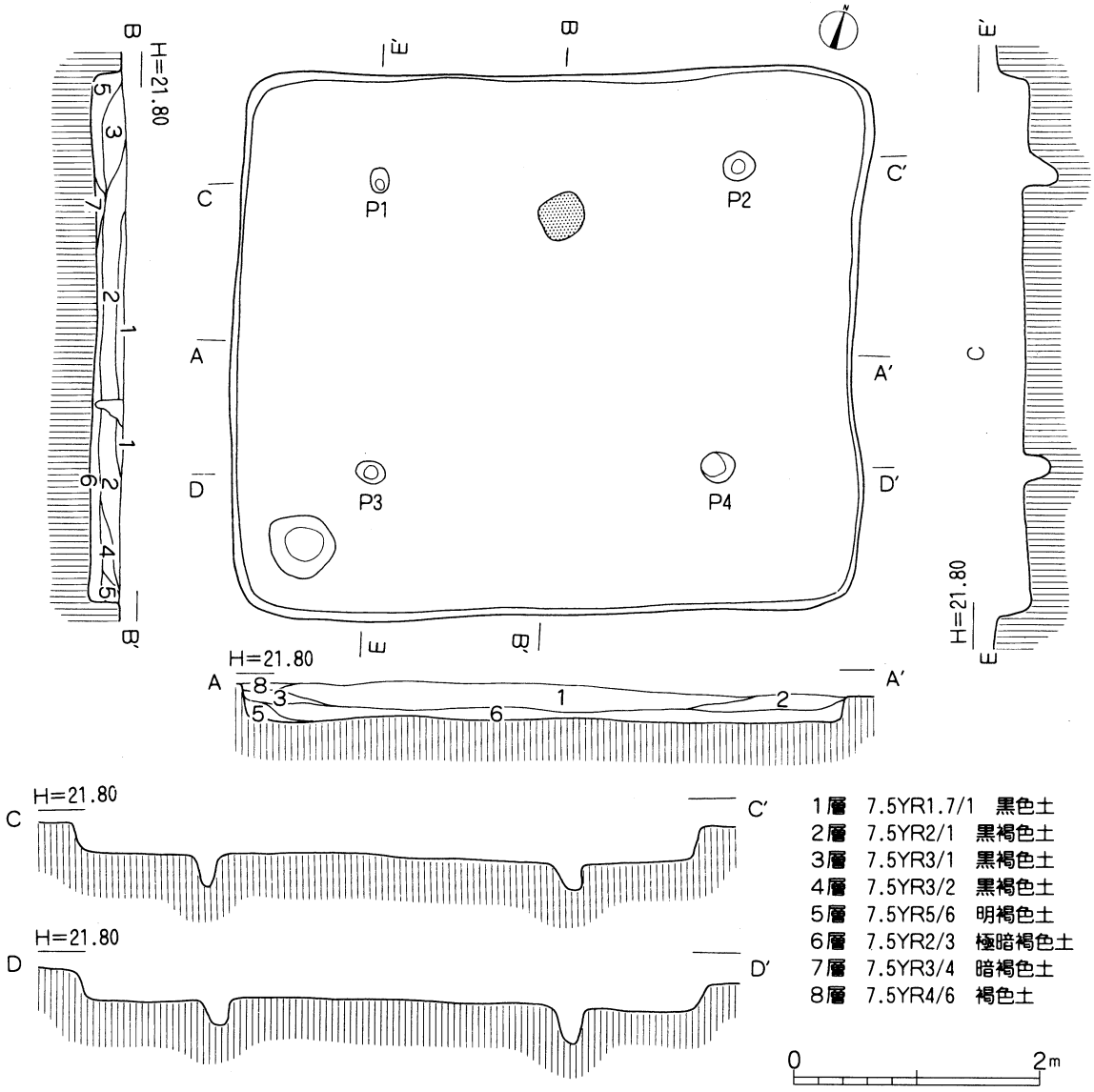


Fig.193　第13号住居跡

以下の小破片。推定口径23.8cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開く。内外面も入念なナデ整形後、赤彩される。焼成は良好である。10は坩の口縁部破片。口縁部は1/16以下の小破片。推定口径14.6cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。12は坩の底部破片。胴下半部1/3程度を遺存する。底径2.0cm、現器高4.0cmを測る。平底で小さな底部から球形の胴部へ移行する。内外面とも比較的粗いヘラナデが施されている。焼成は良好で橙色を呈する。

第13号住居跡（SI13）（Fig.193～199）

位置　本跡は、調査区南東部にあたり、15-O、16-O区の標高21.56m～21.72mに位置し、住居跡群の南東端にあたる。西側に第12号住居跡（SI12）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.18m、短軸4.50mを測り、長軸方位はN-12°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかな傾斜をもって立ち上がる。床面は

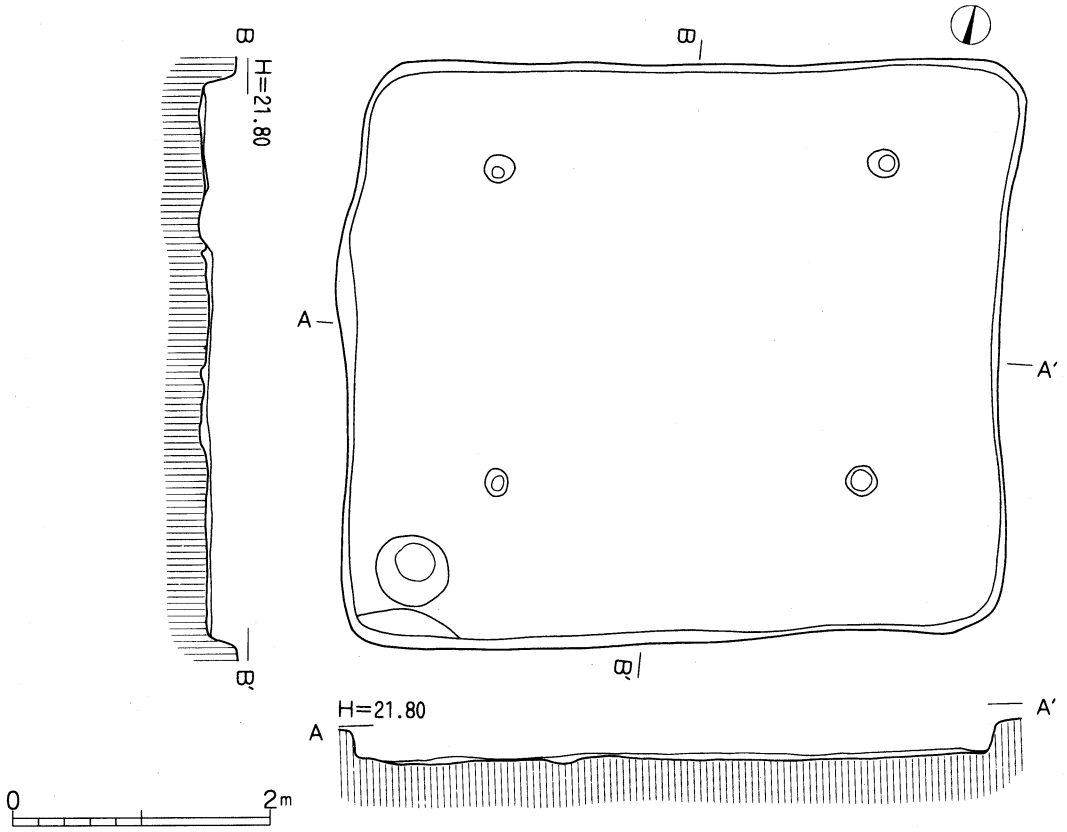


Fig.194　第13号住居跡掘り方

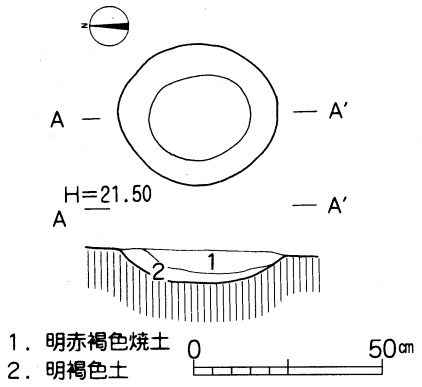


Fig.195　第13号住居跡炉

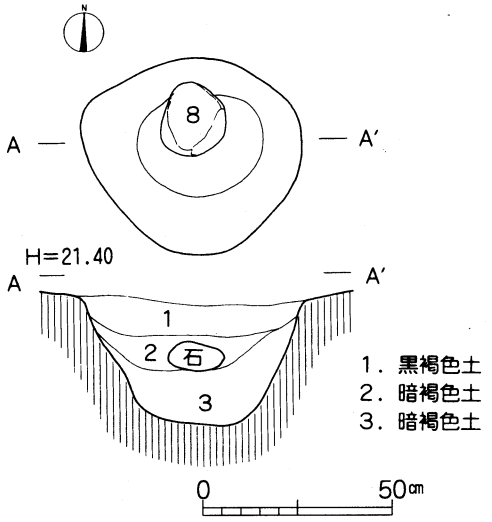


Fig.196　第13号住居跡貯蔵穴

若干の起伏をもつが、平坦面がほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　8層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層　7.5YR1.7/1　黒色土　少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層　7.5YR2/1　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

3層　7.5YR3/1　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

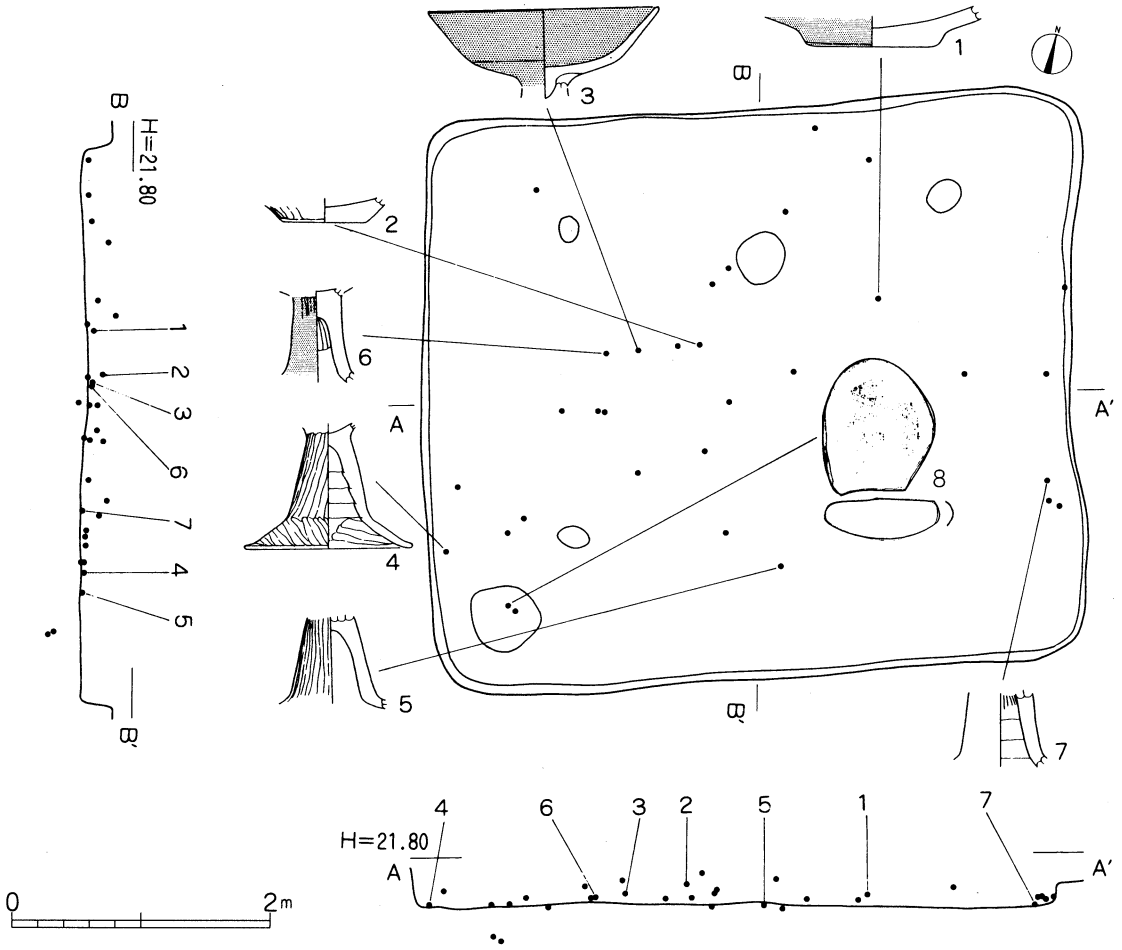


Fig.197　第13号住居跡遺物分布図

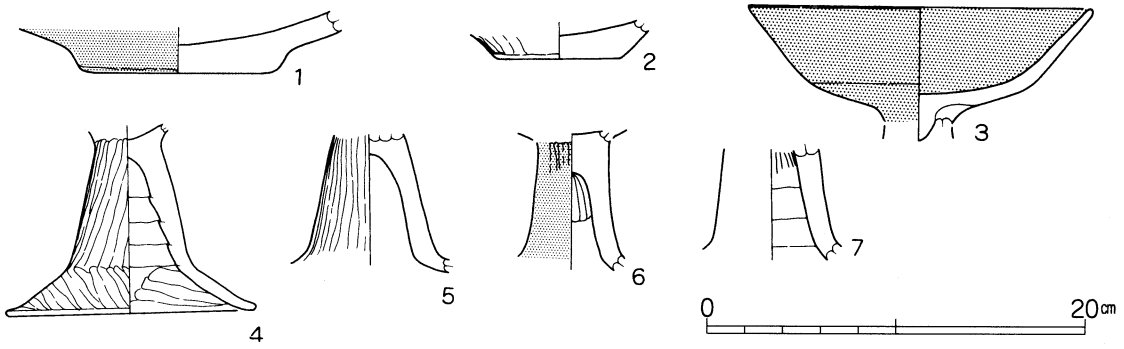


Fig.198　第13号住居跡出土遺物(1)

４層	7.5YR3/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
５層	7.5YR5/6	明褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
６層	7.5YR2/3	極暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
７層	7.5YR3/4	暗褐色土	多量のロームブロックを含み、締まりがある。
８層	7.5YR4/6	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本と地床炉１基および貯蔵穴１基確認された。

主柱穴はP１～P４で、P１は北西部に位置し、上面が16×22cmの楕円形、深さ26cm。P２は北東部で

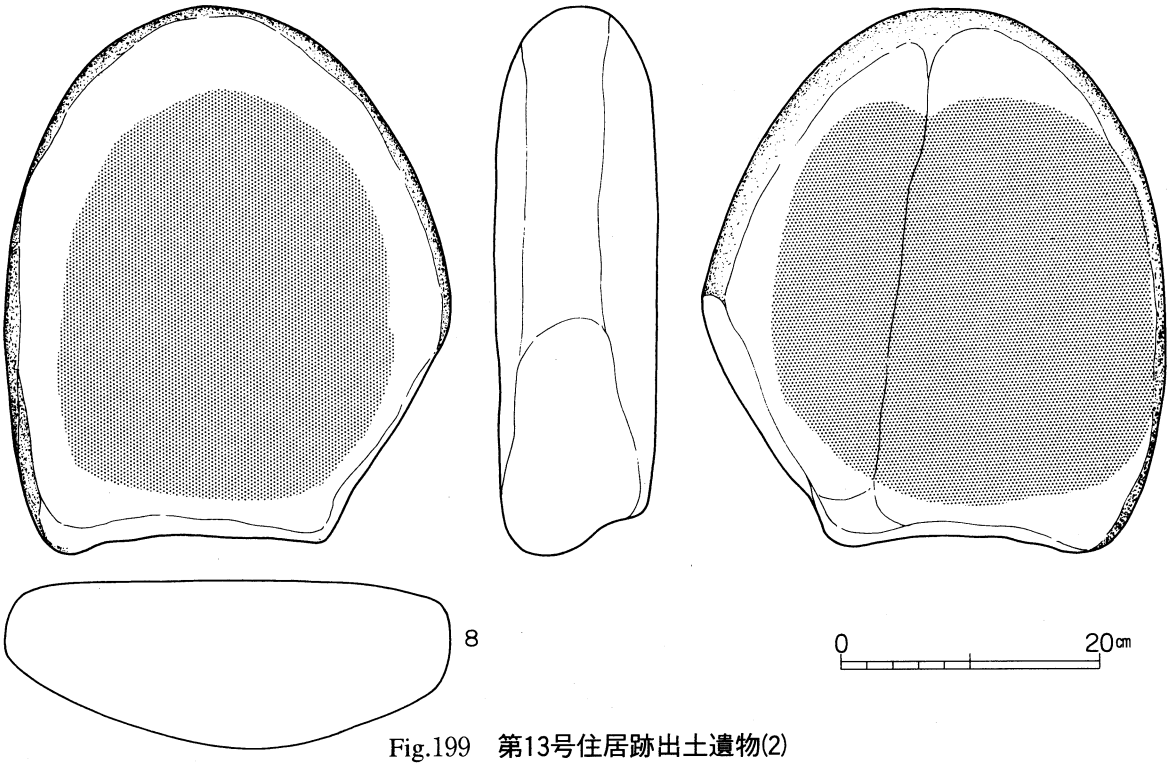


Fig.199　第13号住居跡出土遺物(2)

26×26㎝の円形で、深さ24㎝。P3は南西部に位置し、上面が18×28㎝の楕円形で、深さ20㎝。P4は南東部で、28×28㎝の円形、深さ33㎝を測る。

炉は地床炉で、住居中央から北寄りに設置され、平面形は楕円形を呈し、長径44㎝、短径38㎝、深さ10㎝を測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層が焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南西隅壁際に設置、形状は楕円形を呈し、上面は長径58㎝、短径52㎝、深さ37㎝を測る。底面はやや鍋底状をなし、壁は緩やかな傾斜をもって外方へ開口する。覆土は3層に分層でき、第1層黒褐色土（7.5YR3/1）少量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層暗褐色土（7.5YR3/4）多量のローム粒子を含み、締まりがあり、河原石が包含されていた。第3層暗褐色土（7.5YR2/3）少量のロームを含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は、床下全面におよび、平坦面が広がる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに住居西側に集中する傾向がある。その中で個体として図示しうる資料は、壺及び甕底部各1点、高坏5点である。

遺物　1は壺底部破片。底部完存する。底径11.0㎝を測る。平底の底部から体部は大きく開く。内外面ともナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。明赤褐色を呈する。2は甕底部破片。底部1/2程度を遺存する。推定底径6.6㎝を測る。平底で、底部側面は縦位のヘラケズリが施され、内面はナデ整形である。焼成は良好で、褐色を呈する。3～7は高坏である。3は坏部1/3程度を遺存する。推定口径18.2㎝、現器高7.0㎝を測る。底部と口縁部の境界は比較的明瞭で、口縁部の立ち上がりはほぼ直線的である。外面はナデ整形に加えミガキが施され、さらに底部にあたる稜より下位にはヘラケズリ痕がわずかに残る。内面はナデ整形に、やはりミガキが加わる。焼成は良好。全面赤彩されている。4は高坏柱状部から裾部にかけて完存する。裾径13.2㎝、現器高9.6㎝を測る。柱状部はほぼ直線的に開き、裾部は高く外方へ広がる。外面はヘラケズリの後、ナデ整形によって仕上げられ、内面上端はシボリ目痕

を指頭によるナデで整形し、中位には４段の粘土帯の積み上げによる接ぎ目が明瞭に残り、裾部はナデ整形される。焼成は良好で、橙色を呈する。５は柱状部のみ完存する。現器高7.3cmを測る。柱状部は直線的に広がる。外面は縦位のナデ。内面上端はシボリ痕を指頭によりナデによって整形し、中位もナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。６も柱状部のみ完存。柱状部は中膨らみの弱い細長い円筒形で、外面は縦位のナデ、内面上位はシボリ目がみられ、下位はナデ整形で仕上げている。焼成は良好。色調は明赤褐色を呈する。７は柱状部約1/2程を遺存する。中膨らみが弱く、やや太め柱状部で、外面は縦位のナデ、内面上位はシボリ目が残り、下位は粘土帯の積み上げによる接ぎ目がみられる。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。

８は砂岩製の台石である。河原石をそのまま使用している。略楕円形を呈し、表面はほぼ平坦で、起伏は全くみらず、滑らかに磨耗している。また裏面も中央左側に稜をもつが、磨耗痕がみられる。長さ20.7cm、幅18.4cm、厚さ6.5cm、重さ287.5ｇを測る。

第16号住居跡（SI16）（Fig.200～205）

位置　本跡は、調査区の南部、16-M、17-M区の標高22.06m～22.15mに位置し、南側約1/3が保存区域にかかるため、調査不能であった。なお、北側に第10号住居跡（SI10）が、北東側に第12号住居跡（SI12）が隣接する。

形態　本跡は、南側が保存区域にかかっているため、住居全体の調査は不能であるが、平面形は三壁隅から判断して隅丸方形である。規模は長軸4.64m、短軸4.12mを測り、長軸方位はN-32°-Wを指し、やや中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的で垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　３層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　10YR2/1　黒色土　　少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

２層　10YR3/3　暗褐色土　　少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

３層　10YR3/3　明黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴１本と地床炉１基および貯蔵穴１基が確認された。

主柱穴はP１のみで、P１は北隅壁際に位置し、上面が22×24cmのほぼ円形、深さ29cmを測る。

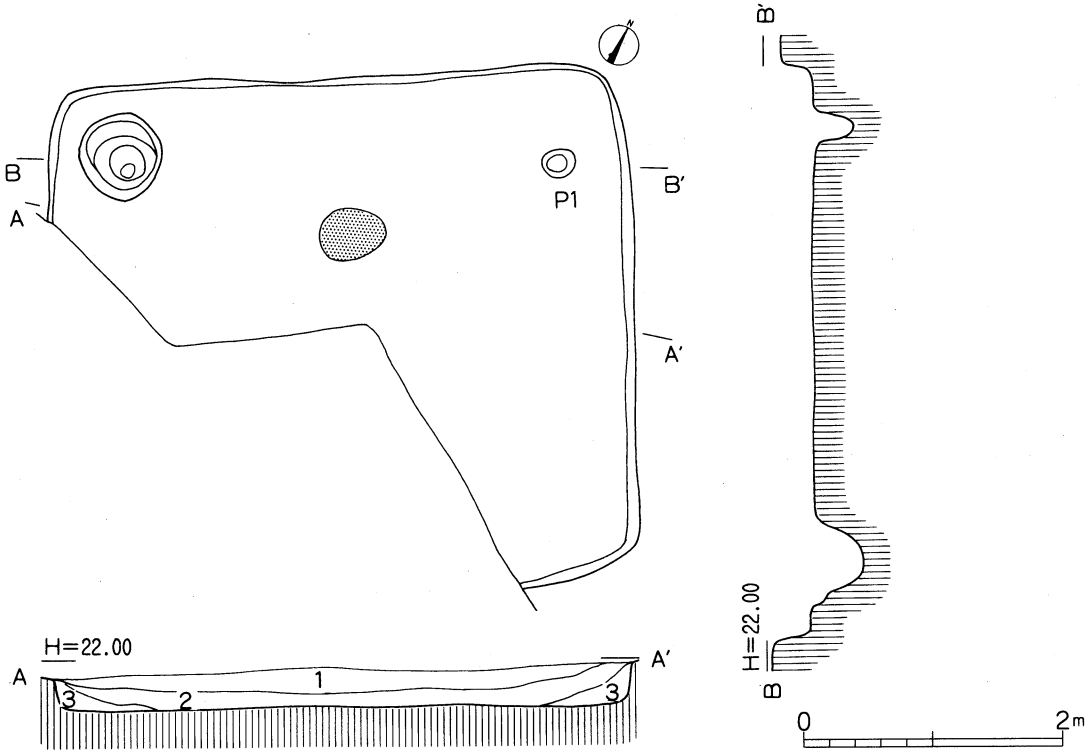
炉は地床炉で、住居中央から北西寄りに配され、その平面形は楕円形を呈し、長径52cm、短径40cm、深さ13cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は２層に分層でき、第１層が焼土層にあたる赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は西隅壁際に設置され、楕円形を呈し、上面は長径68cm、短径64cm、深さ42cmを測る。二段構築で、底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかな傾斜をもって外方へ開口する。覆土は３層に分層でき、第１層黒褐色土（7.5YR3/1）ローム粒子をわずかに含み、締まりがある。２層暗褐色土（7.5YR3/3）ローム粒子をわずかに含み、締まりがある。３層褐色土（7.5YR4/6）ローム粒子をわずかに含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、東壁際や西壁際側に浅いピット状の掘り込みを呈している。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに炉跡周辺と東壁周辺にまとまりをみせている。図示した資料は、壺１点、甕３点、坩１点、高坏３点である。

遺物　１は壺口縁部破片。約1/5程を遺存する。推定口径19.8cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外傾し



1層　10YR2/1　黒色土
2層　10YR3/3　暗褐色土
3層　10YR3/3　明黄褐色土

Fig.200　第16号住居跡

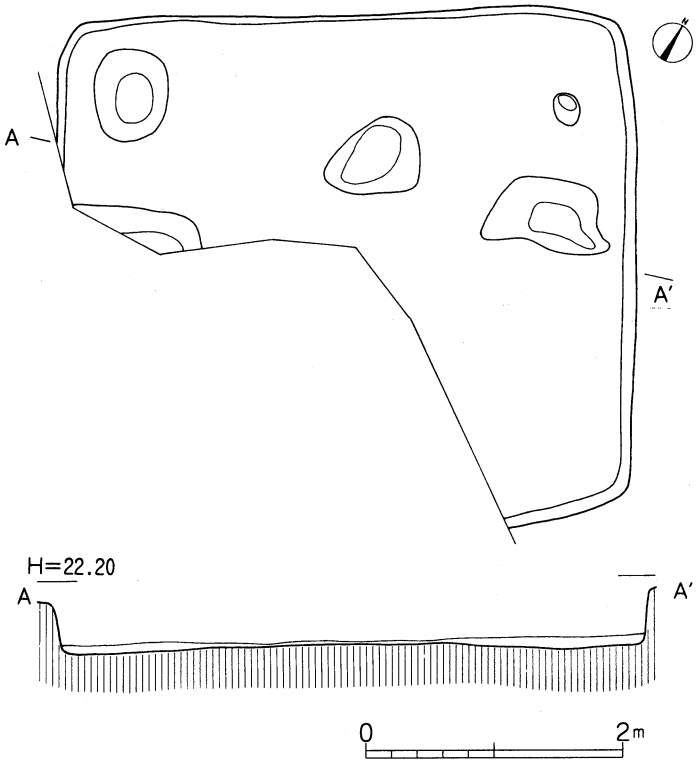
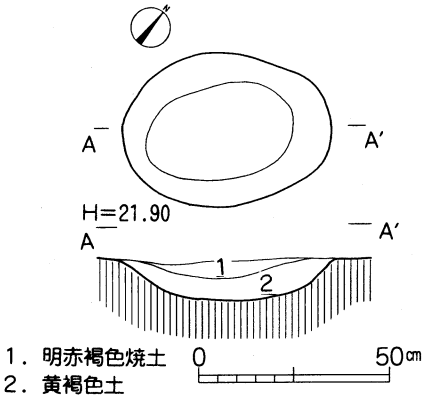
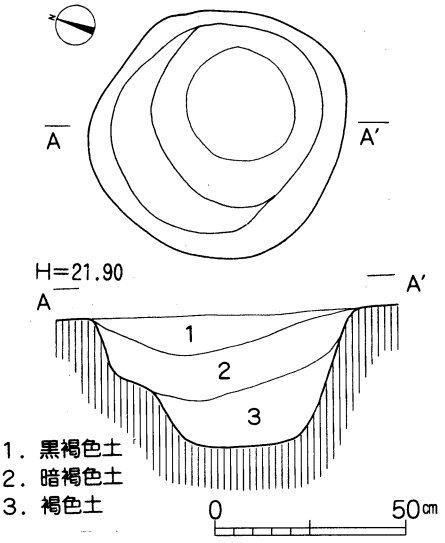


Fig.201　第16号住居跡掘り方



1．明赤褐色焼土
2．黄褐色土

Fig.202　第16号住居跡炉



1．黒褐色土
2．暗褐色土
3．褐色土

Fig.203　第16号住居跡貯蔵穴

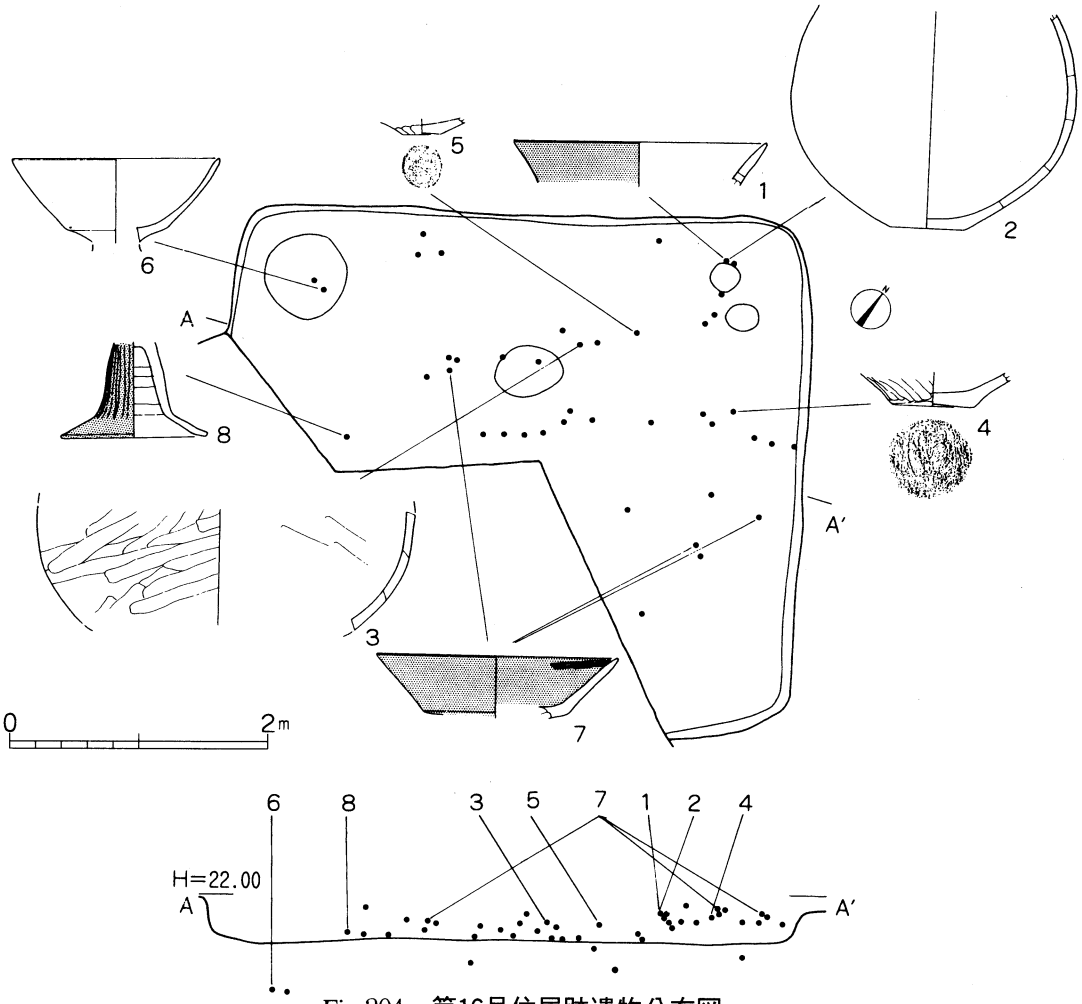


Fig.204　第16号住居跡遺物分布図

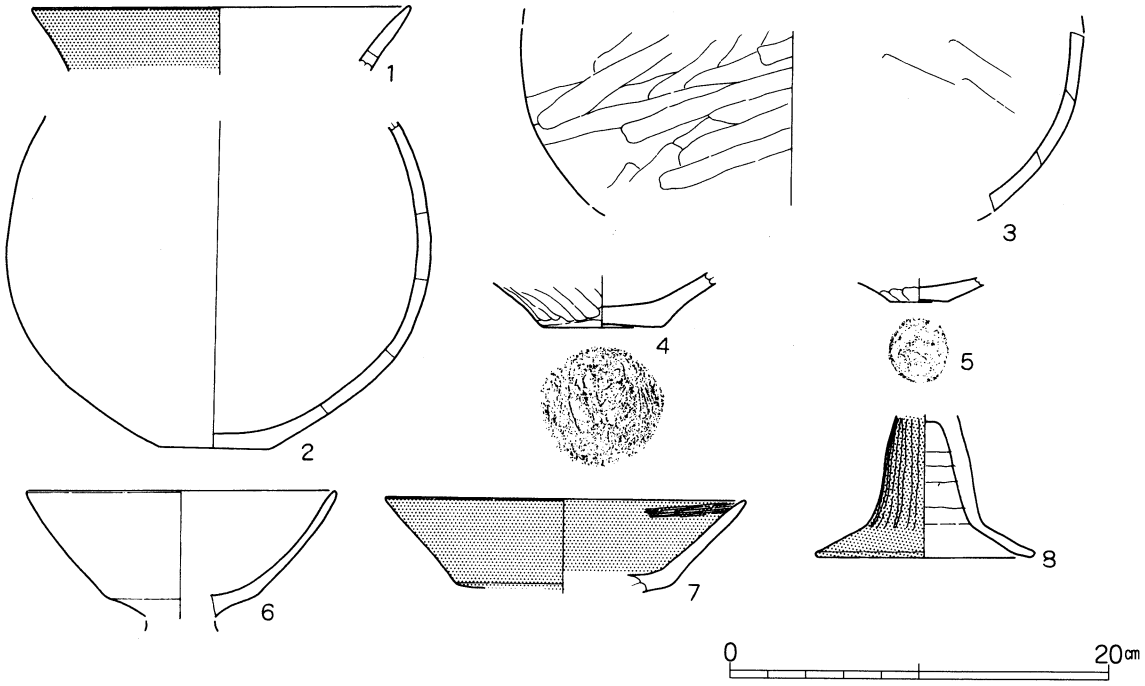


Fig.205　第16号住居跡出土遺物

て立ち上がる。内外面とも横位のナデ整形が施され、外面のみ赤彩されている。焼成は良好である。2は甕の胴部破片で、肩部から口縁部にかけて欠損している。現器高17.3cm、底径5.8cm、胴部最大径22.0cmを測る。小さく平底の底部から球形の胴部をもつ。外面はナデ整形で、下半部にはスス状の炭化物が付着している。内面はナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、褐色を呈する。3は甕の胴部破片。胴部下半部1/2程度遺存している。胴部最大径は29.4cmを測る。外面は横位、斜めのヘラナデ、内面は斜行ナデ整形で、下半部にはスス状の炭化物が付着している。焼成は良好で、黒褐色を呈する。4は甕底部破片。底部のみ完存する。底径は6.4cmを測る。やや上げ底気味の底面から緩く外方へ開く。外面は縦位のヘラケズリ、底面はナデ、内面もナデ整形によって仕上げている。5は坩形土器の底部破片。底部のみ完存する。底径は3.2cmを測る。外面は縦位のナデ、内面もナデ調整である。底面は周縁が輪状に高まる底部をもつ。焼成は良好で褐色を呈する。6～8は高坏である。6は坏部のみ1/3程度欠損する。口径16.2cm、現器高6.8cmを測る。口縁部と底部の境界は明瞭で、口縁部はやや内湾気味に大きく開く。底部は短く脚部へ接合する。内外面ともナデ整形で、外面底部にはケズリ痕をわずかに残す。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。7は坏部のみ1/6程度遺存するのみである。推定口径19.0cm、現器高4.3cmを測る。口縁部と底部の境界には明瞭な稜をもち、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面の口縁部はナデ整形。底部はケズリ痕をわずかに残す。内面は口縁部上位に横位のハケメ調整が施され、下位はナデ整形によって仕上げられる。焼成は良好。全面赤彩が認められる。8は脚部のみ1/4程を欠損する。裾径11.6cm、現器高7.5cmを測る。柱状部は中膨らみが弱く、裾部はほぼ直線的に張り出す。外面の柱状部は縦位のナデ整形、内面は粘土の積み上げによる5段の接ぎ目がみれる。焼成は良好である。

第18号住居跡（SI18）（Fig.206～210）

位置　本跡は、調査区東部で、13-Nの標高22.24m～22.38mに位置する。南側に第19号住居跡（SI19）が、南西側に第17号住居跡（SI17）が、東側に第21号住居跡（SI21）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸3.60m、短軸3.26mを測り、長軸方位はN-73°-Wで、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的に延び、垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏はみられるが、平坦面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。なお、床面には焼土や炭化物が散在しており、とくに南壁付近に集中していた。火災住居であろう。

覆土　4層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層	10YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
2層	10YR4/6	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
3層	10YR3/4	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
4層	10YR3/2	褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基を確認された。

P1～P4は主柱穴であるが、いずれも各壁隅際に配されている。P1は北西側に位置し、上面が12×20cmと楕円形を呈し、深さは12cm。P2は北東側で上面が44×44cmの円形で、深さ24cm。P3は南西側に位置し上面が20×26cmの楕円形で、深さ23cm。P4は南東側で、上面が34×46cmの楕円形、深さ25cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から北西寄りで楕円形に浅く掘り込まている。規模は長径56cm、短径32cm、深さ8cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央

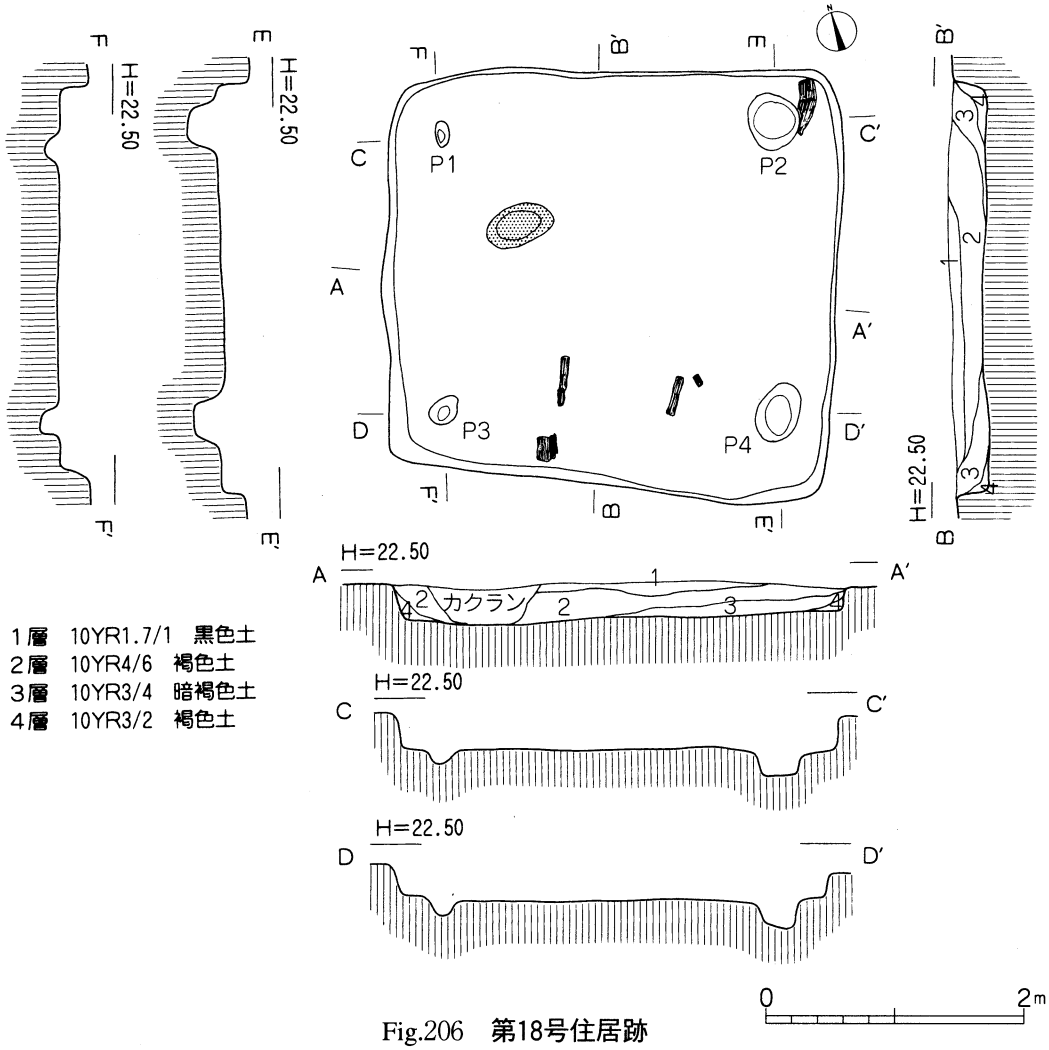


Fig.206　第18号住居跡

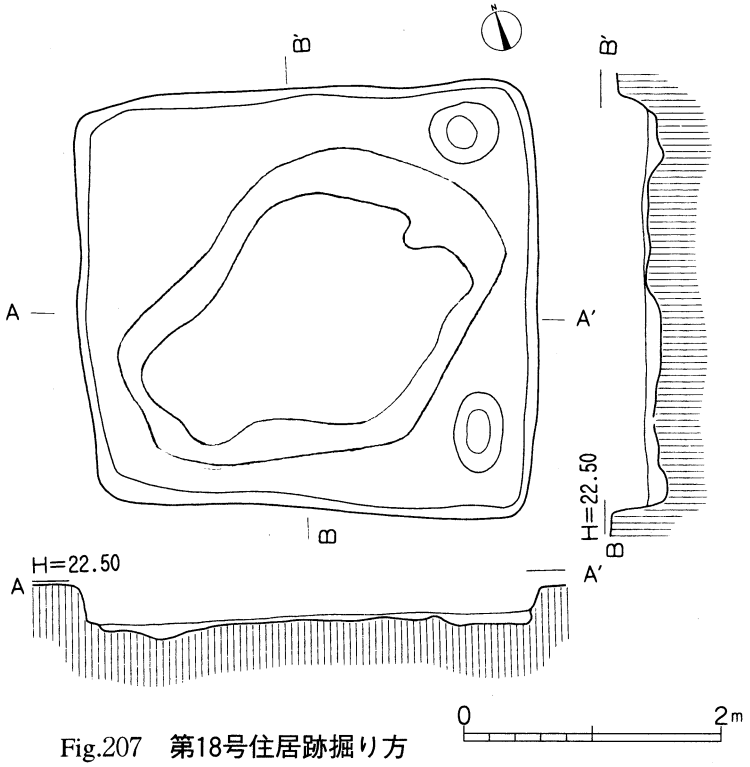
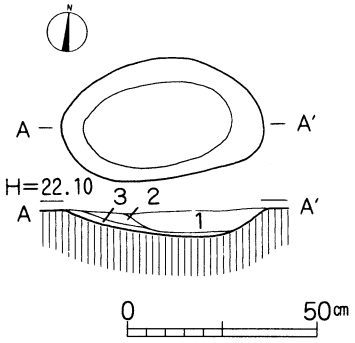


Fig.207　第18号住居跡掘り方



1．明赤褐色焼土
2．黒褐色土
3．明褐色土

Fig.208　第18号住居跡炉

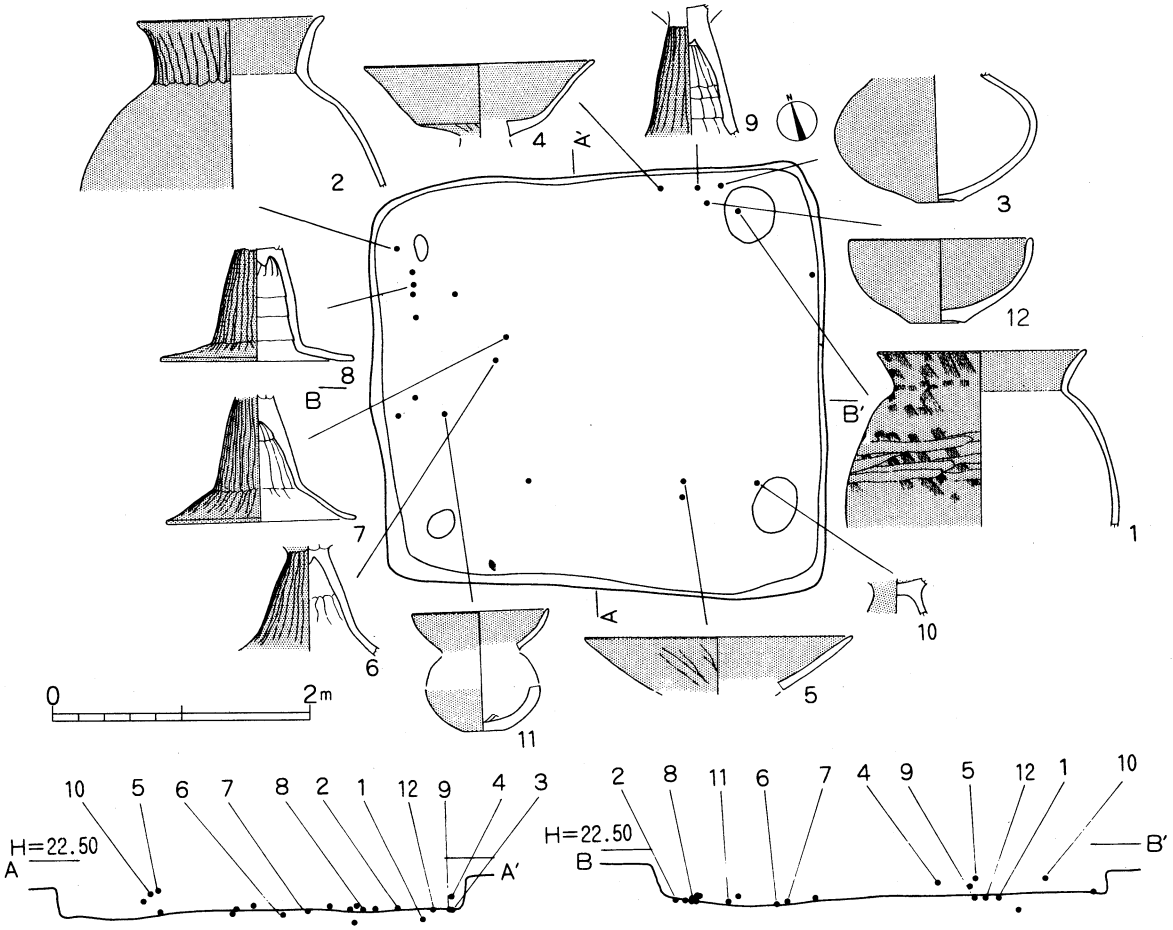


Fig.209　第18号住居跡遺物分布図

部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。なお、北西隅壁際および南壁周辺には炭化材が出土しており、焼失家屋である。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、壁際はとくに浅い掘り方がみられる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに西壁側と北東隅の貯蔵穴付近に集中する。その内、個体として図示しうる資料は、壺3点、高坏7点、坩1点、椀1点である。

遺物　1は壺で、胴部下半部と上半部1/2程を欠損し、口縁部は全周する。口径16.4㎝、現器高14.0㎝、胴部最大径21.2㎝を測る。胴部は胴長を呈し、口縁部は外反気味に立ち上がる。外面の口縁部は縦位のハケメ調整。胴部はハケメ調整の後、ナデ整形によってハケメ痕を消失させている。全面赤彩している。内面は口縁部が横ナデ、胴部もナデ整形によって仕上げている。焼成は良好である。2も壺で、口縁部から胴部中位にかけて1/3程を遺存する。推定口径14.6㎝、現器高13.6㎝、胴部最大径23.8㎝を測る。ほぼ球形の胴部から垂直気味に立ち上がる口縁部は、さらに端部において小さく外反する。外面は口縁部上端部が横ナデ、以下縦位のナデ整形。胴部もナデの後、全面赤彩している。内面は口縁部が横ナデ、胴部もナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。3は壺で、口縁部を欠損する。胴部はやや上下に押しつけたような扁球形を呈し、小さな底部をもつ。底部は上げ底状をなす。外面はナデ、内面もナデ整形を施す。焼成は良好。外面に赤彩されている。4～10は高坏である。4は坏部のみ完存し、口径18.2㎝、現器高5.9㎝を測る。口縁部と底部の境界には明瞭な稜をもち、口縁部は

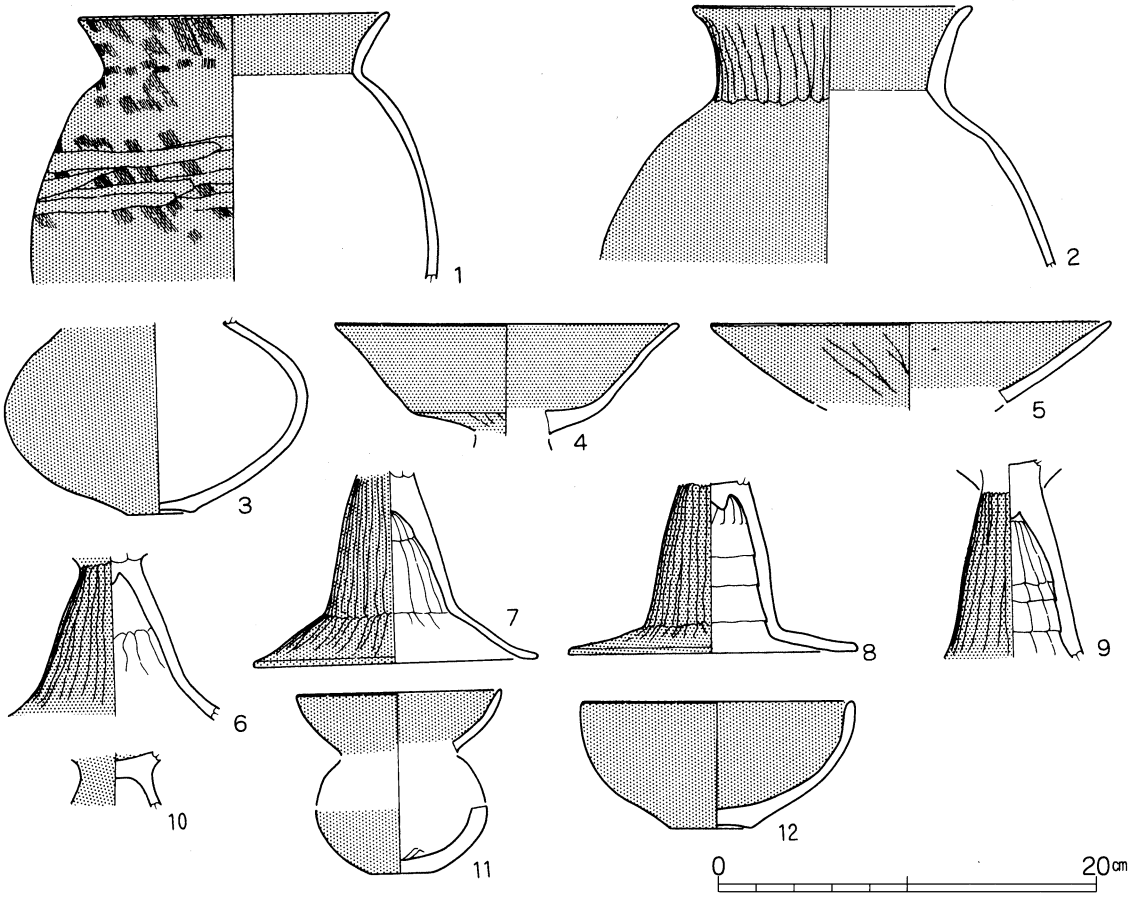


Fig.210　第18号住居跡出土遺物

やや外反しながら開く。外面の口縁部はミガキ、底部はケズリの痕が残る。内面もミガキが施されている。内外面とも赤彩されている。焼成は良好である。５も坏部のみ1/6程度を遺存する。推定口径は11.2cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外傾して開く。内外面ともナデが施され、赤彩されている。焼成は良好である。６は脚柱状部のみ完存する。現器高8.5cmを測る。柱状部はほぼ直線的に開き、裾部でさらに広がりをみせる。外面は縦位のナデ。内面はヘラの回転によるケズリがみられる。外面全面赤彩される。焼成は良好である。７は脚部のみ完存する。裾径15.9cm、現器高10.0cmを測る。柱状部は中膨らみが弱く、裾部はほぼ直線的に高く張り出し、端部で折れる。外面の柱状部は縦位のナデ整形し、赤彩している。内面は上位にはシボリ目が残り、下半はヘラの回転によるケズリを施している。裾部はナデ整形。焼成は良好である。８は脚部のみ完存する。裾径15.3cm、現器高9.3cmを測る。柱状部は中膨らみが弱く、裾部はほぼ直線的に低く張り出す。外面の柱状部は縦位のナデ整形し、赤彩している。内面は上位にシボリ目を残し、以下粘土の積み上げによる３段の接ぎ目がみられる。焼成は良好である。９は脚柱状部のみ完存する。現器高15.5cmを測る。筒状の柱状部はほぼ直線的に細長く開く。外面は縦位のナデ整形の後、赤彩している。内面は上位はシボリ目を残し、以下粘土の積み上げによる３段の接ぎ目がみられる。焼成は良好である。10は坏部脚部の接合部破片で、1/6程度遺存する。内外面ともナデ整形が施され、坏部底部と脚部には赤彩している。焼成は良好である。11は坩形土器である。口縁部1/8、胴下半部1/4程度遺存する。推定口径10.8cm、底径3.4cm、胴部最大径9.0cmを測る。平底の底部から球形の胴部へ移行し、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。外面は全面ミガキが加えられ、赤彩する。内面はナデ整形の後、口縁部に赤彩を施す。焼成は良好である。12は椀形土器。完存品である。器高6.8

cm、口径14.4cm、底径4.2cmを測る。やや上げ底状の底部から大きく内湾気味に立ち上がり、口唇部は内削状を呈する。内外面とも丁寧なナデ整形を施し、赤彩している。焼成は良好である。

第19号住居跡（SI19）（Fig.211～216）

位置　本跡は、調査区東部で、13-M、13-N、14-Nの標高22.00m～22.22mに位置する。南西側に第11号住居跡（SI11）が、北西側に第14号住居跡（SI14）が、北側に第18号住居跡（SI18）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.24m、短軸5.18mを測り、長軸方位はN-48°-Wで、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的に延び、垂直に立ち上がる。床面は北西側約1/4が高床状となるいわゆる「ベット」状を呈し、全体に若干の起伏はみられるが、平坦面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。なお、床面には焼土や炭化物が散在しており、とくに炉跡から西側にかけて集中していた。焼失家屋である。

覆土　4層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層　10YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
2層　10YR3/2　黒褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
3層　10YR5/6　黄褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
4層　10YR4/4　褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基、入口部施設および高床施設が確認された。

主柱穴はP1～P4の4本である。P1は高床部上で西側に位置し、上面が11×12cmの楕円形を呈し、深さは13cm。P2は北側で上面が10×22cmの楕円形で、深さ45cm。P3は高床部上の南側に位置し上面が12×14cmの楕円形で、深さ13cm。P4は東側で、上面が16×16cmの円形、深さ19cmを測る。

P5は南東壁際のほぼ中央に位置し、長径52cm、短径24cmの長楕円形を呈し、深さは6cmを測る。底面はほぼ平坦で、入口部施設と考えられる。

炉は地床炉で、住居中央から西寄りで楕円形に掘り込まている。規模は長径68cm、短径56cm、深さ15cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼き締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第2層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南東壁際に位置し、主柱穴P4および入口部施設P5に接して構築されている。楕円形を呈し、規模は長径80cm、短径63cm、深さ28cmを測る。断面底部は鍋底状を呈し、壁は緩やかに外方へ開口する。覆土は3層に分層でき、第1層黒褐色土（10YR3/1）多量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層黒褐色土（10YR3/2）少量のローム粒子を含み、締まりがある。第3層黒色土（10YR2/1）多量の炭化物、少量のローム粒子を含み、締まりがある。ここより埦形土器1点が出土している。

本跡はいわゆる「ベッド状遺構」と呼称されている高床部を伴う住居跡で、高床面は住居北西側約1/4ほどを平均10cm前後高く床を削り出している。貼床はこの削り出しの調整を行いながら、高くしている。

周溝は高床部の北西壁の南西寄りから南西壁の北側半分に構築されている。幅10～20cm、深さ6～8cmを測り、底面は平坦で、壁はやや急傾して開口する。

掘り方　掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、北隅壁際はとくに浅く複雑な掘り方がみられる。

遺物出土状況　遺物は、住居東隅壁際と西側の低位床面上付近に集中する。その内、個体として図示し

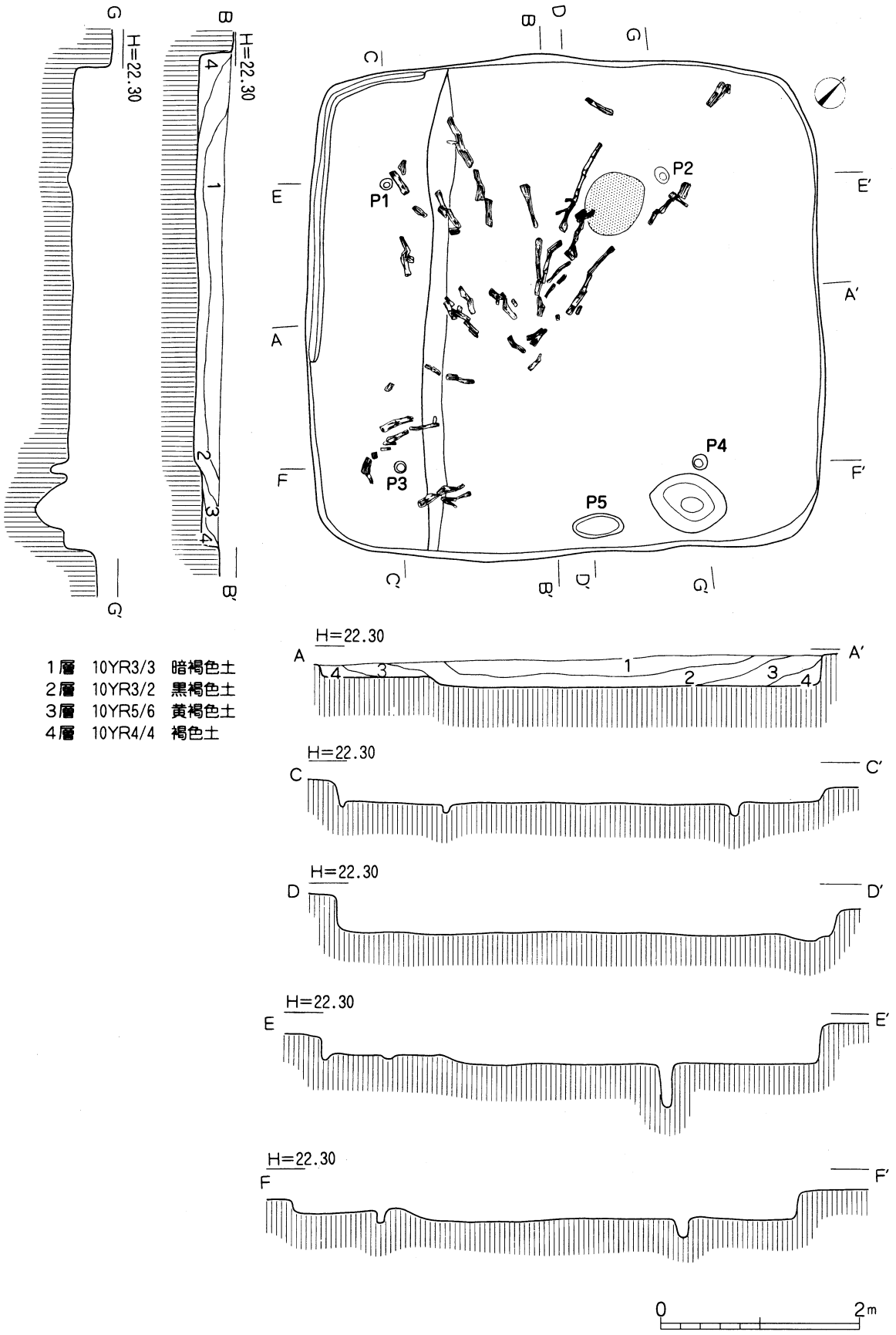


Fig.211　第19号住居跡

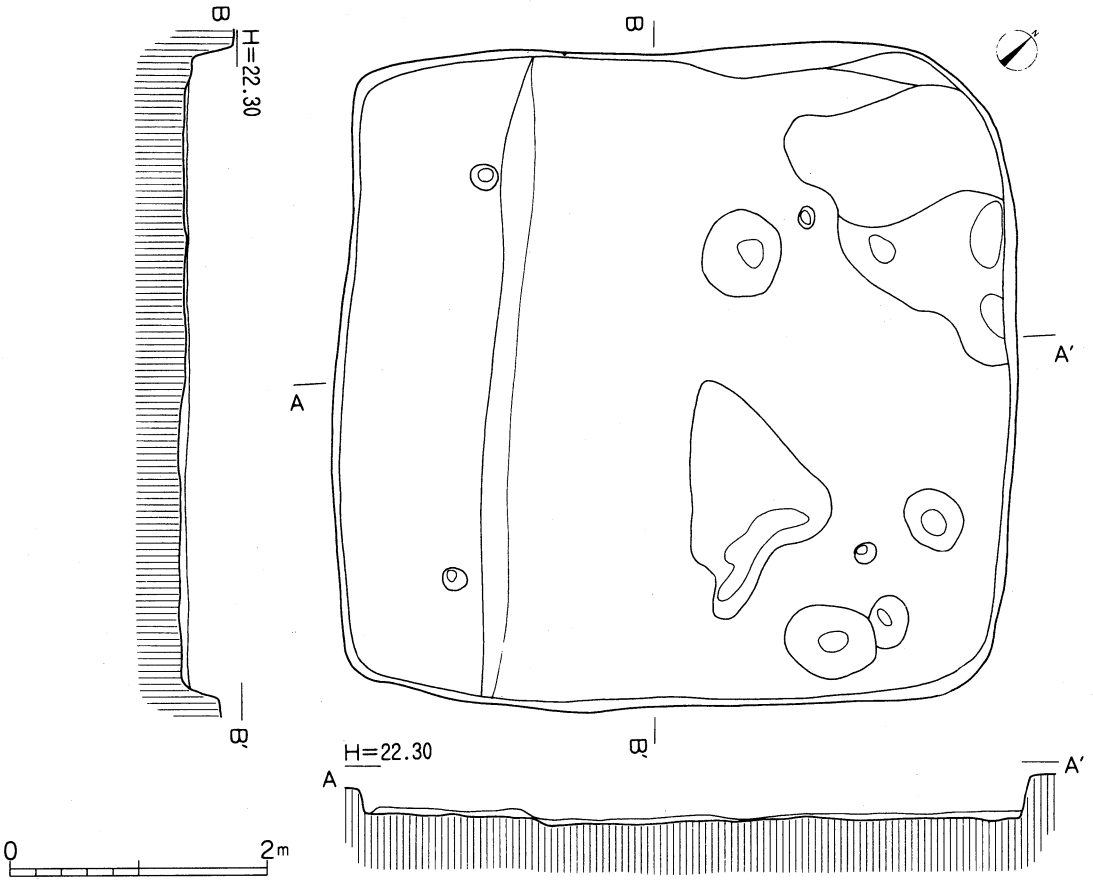


Fig.212　第19号住居跡掘り方

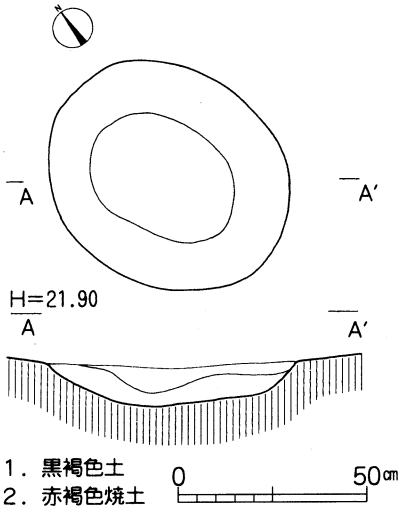


Fig.213　第19号住居跡炉

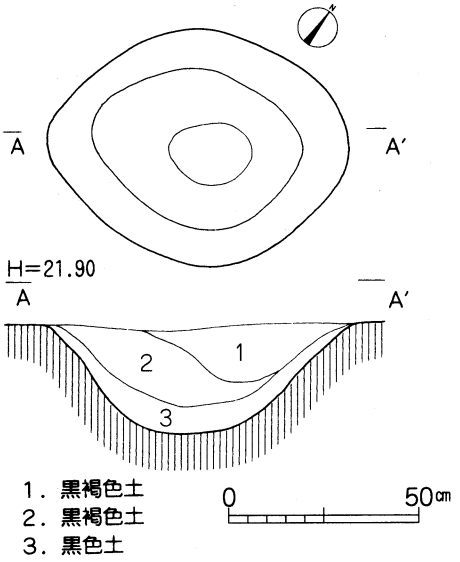


Fig.214　第19号住居跡貯蔵穴

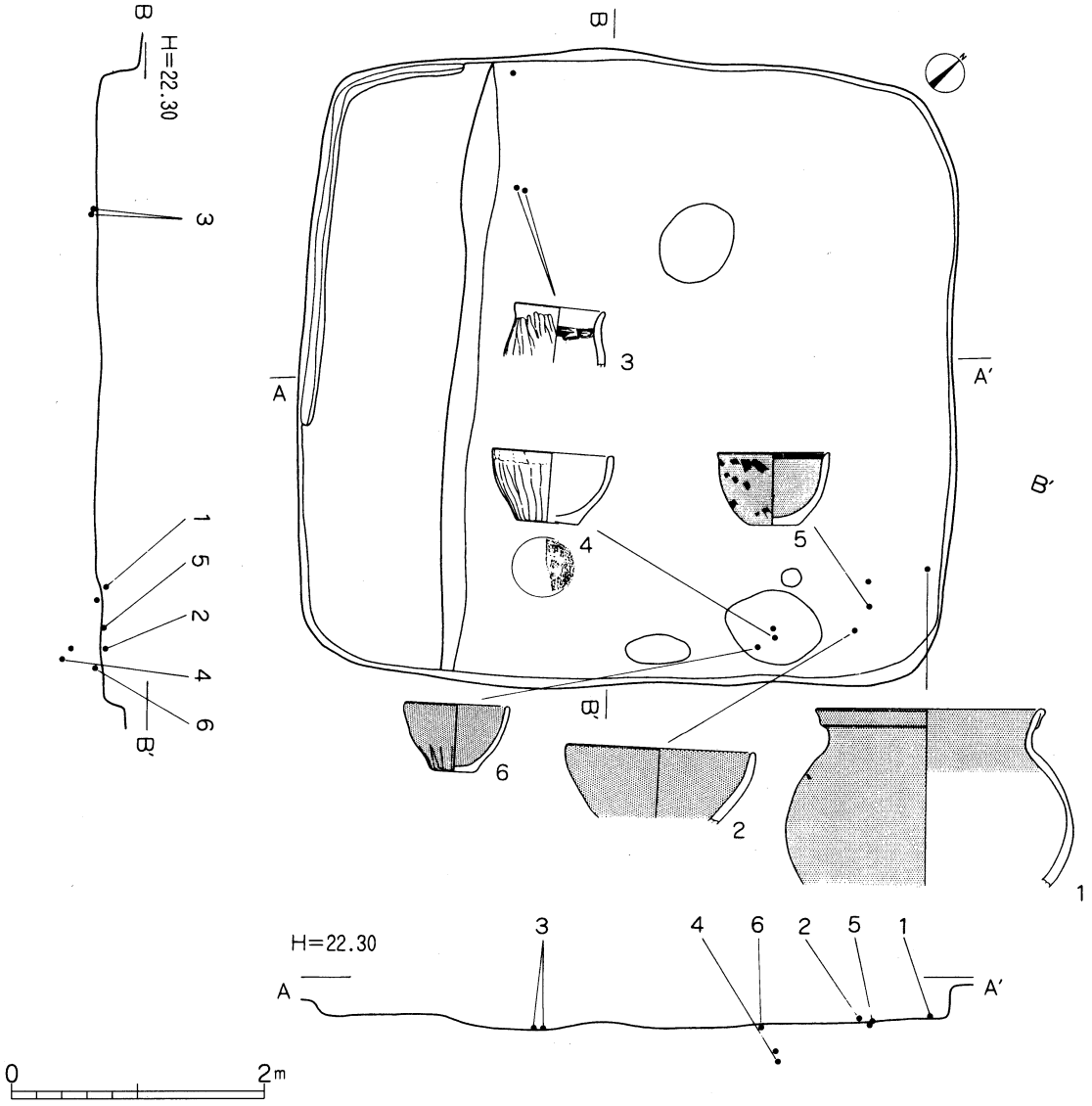


Fig.215　第19号住居跡遺物分布図

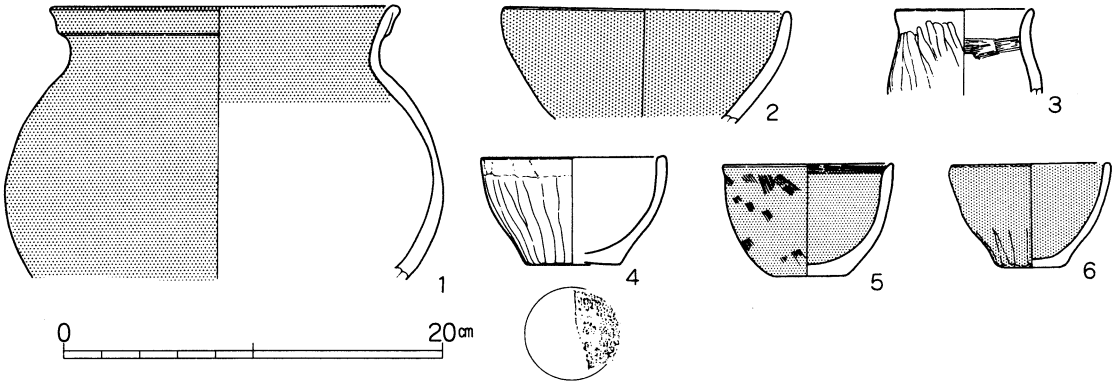


Fig.216　第19号住居跡出土遺物

うる資料は、壺３点、埦２点である。

遺物　１は壺で、胴部下半部から口縁部にかけて約1/4程を遺存する。推定口径18.4cm、現器高14.5cm、胴部最大径23.0cmを測る。胴部は上下押しつぶされた球形を呈し、口縁部は緩く外反する。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は微妙な丸みをもつ。外面口縁部は横ナデ、頸部から胴部下半部は丁寧なミガキが施され、赤彩されている。内面は口縁部がミガキ、体部はナデ整形で、口縁部から肩部にかけて赤彩されている。焼成は良好である。２は埦の口縁部破片。1/6程度の遺存で、推定口径は15.2cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともナデ整形後、全面赤彩されている。焼成は良好である。３は小型甕の胴部中位から口縁部にかけての破片。約1/3程を欠損しており、口径7.3cm、現器高3.5cmを測る。胴部はやや長めで、頸部の括れは浅く、短く外反する口縁部がつく。口縁部上位横ナデ、頸部から胴部はナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、肩部付近は横位のハケメ調整し、以下ナデによって仕上げている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。４は埦で、1/2程を欠損する。推定口径9.8cm、器高5.7cm、底径5.0cmを測る。底面は周縁が高まる輪状の底部で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。外面は縦位のナデ整形。内面もナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好。褐色を呈する。５もほぼ同様の形態をもつ埦で完存する。器高5.4cm、口径8.6cm、底径4.0cmを測る。平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸みをもつ。外面は縦位のナデ整形の後、赤彩を施し、内面もナデ整形の後、赤彩している。焼成は良好である。６も埦の完存品である。器高6.0cm、口径9.0cm、底径4.0cmを測る。平底の底部からやや内湾気味に体部が立ち上がり、口唇部は内削状を呈する。外面はハケメ調整の後、ナデ整形されている。内面は口縁部上端部が横位のハケメ調整を施し、以下体部はナデ整形。焼成は良好である。

第20号住居跡（SI20）（Fig.218～222）

位置　本跡は、調査区南東部にあたり、14-N、14-O区の標高21.86m～22.2mに位置し、西側に第11号住居跡（SI11）が、北西側に第19号住居跡（SI19）が、北側に第21号住居跡（SI21）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.48m、短軸5.22mを測り、長軸方位はN-73°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は低いが、東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　４層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
２層	7.5YR3/1	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
３層	10YR6/8	明黄褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりもある。
４層	10YR3/4	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりもある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本と地床炉１基および貯蔵穴１基を確認した。

Ｐ１は南西部に位置し、上面が24×26cmの楕円形、深さ61cm。Ｐ２は北西部で18×26cmの楕円形で、深さ58cm。Ｐ３は南東部で上面が32×32cmの円形で、深さ81cm。Ｐ４は北東側で、上面が30×32cmの楕円形、深さ60cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から西寄りに設置され、楕円形を呈し、長径66cm、短径48cm、深さ11cmを測る。断面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は２層に分層でき、第２層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。貯蔵穴は南東隅壁際に設置され、楕円形を呈し、長径76cm、短径64cm、深さ52cmを測り、断面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がり、大きく開口する。覆土は５層に分層でき、第１層黒褐色土

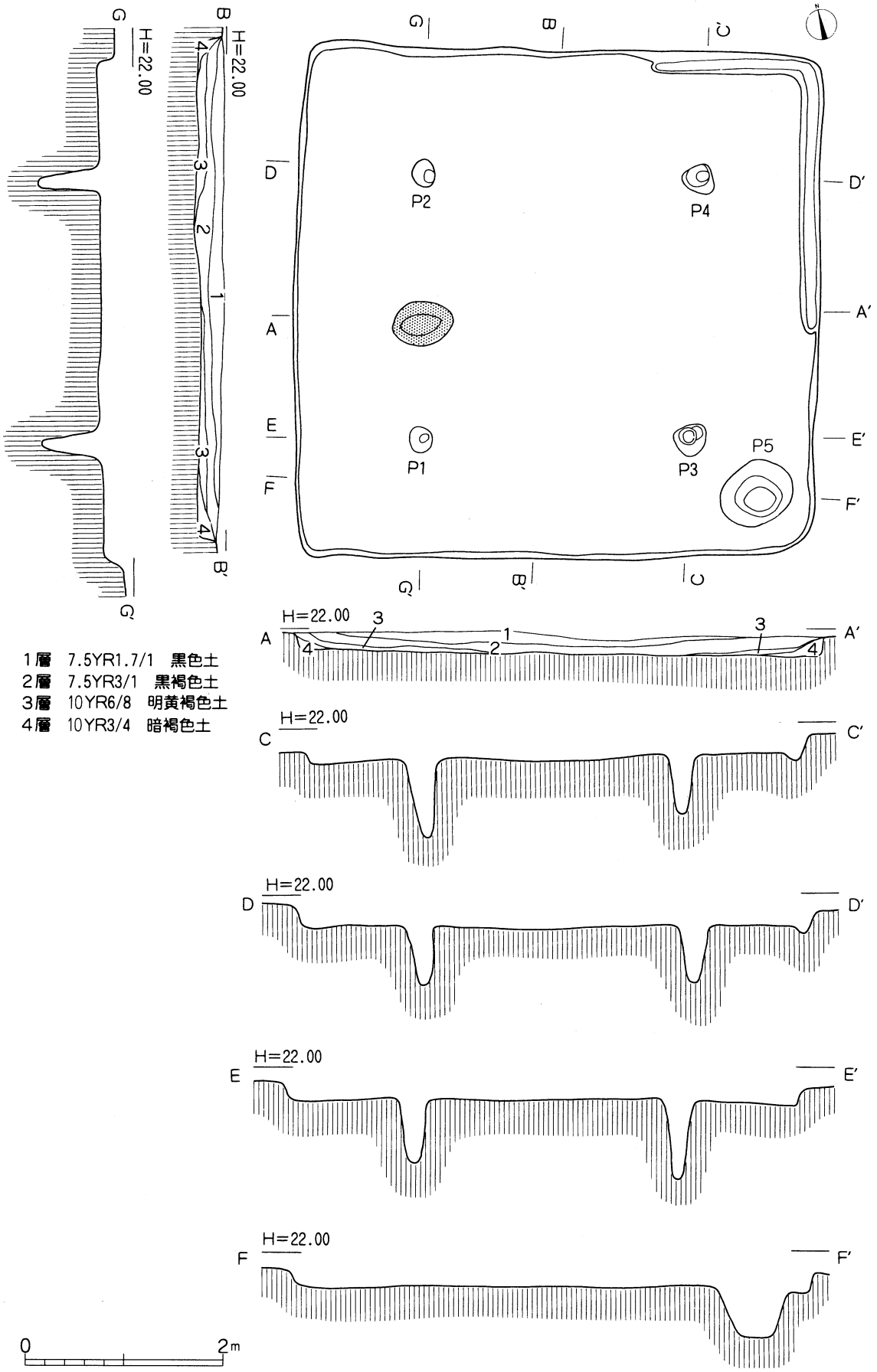


Fig.217　第20号住居跡

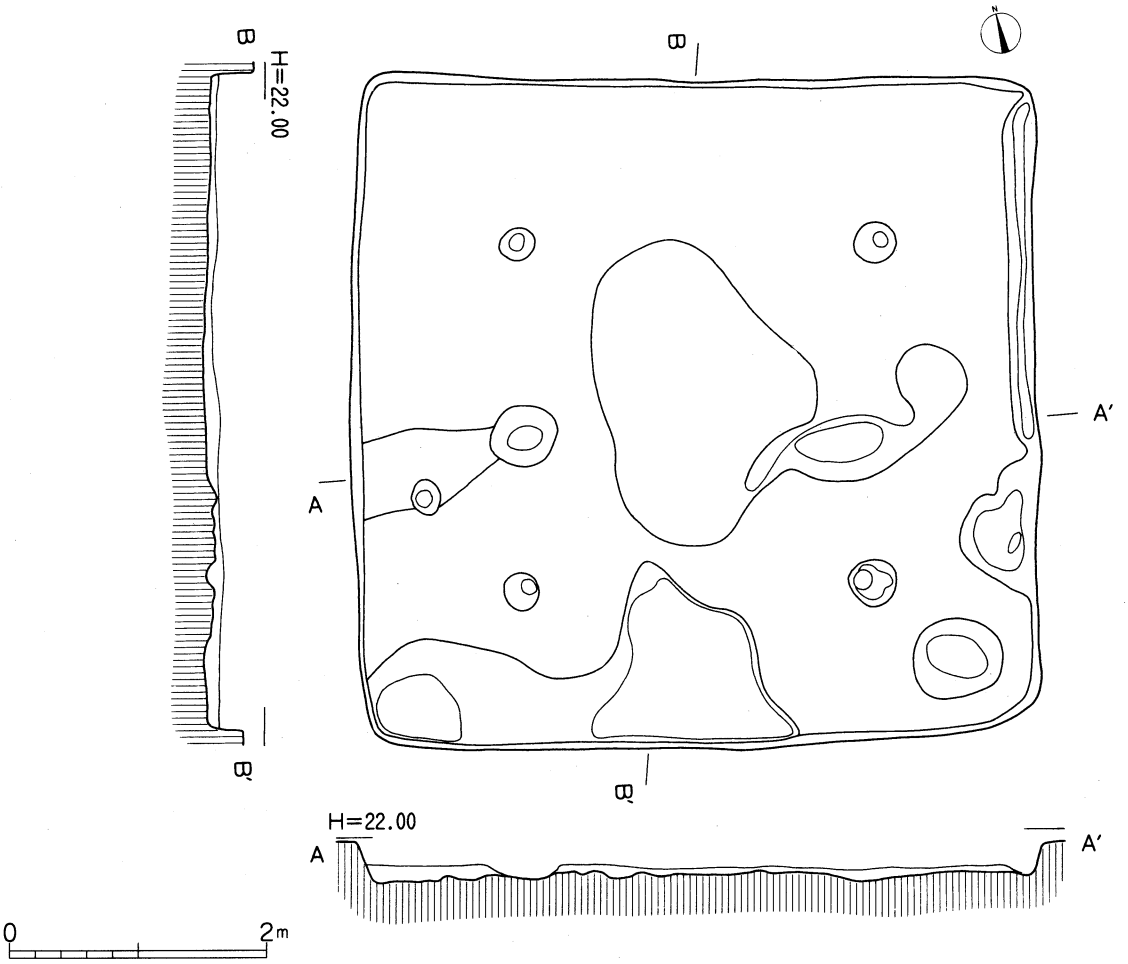


Fig.218　第20号住居跡掘り方

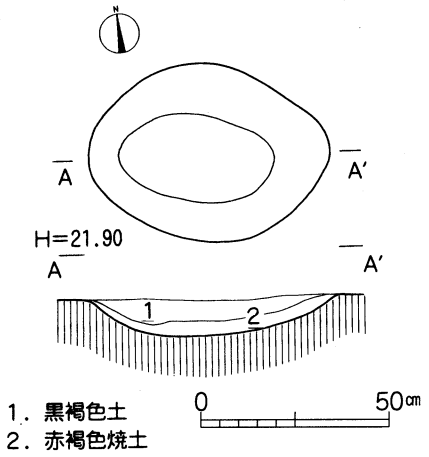


Fig.219　第20号住居跡炉

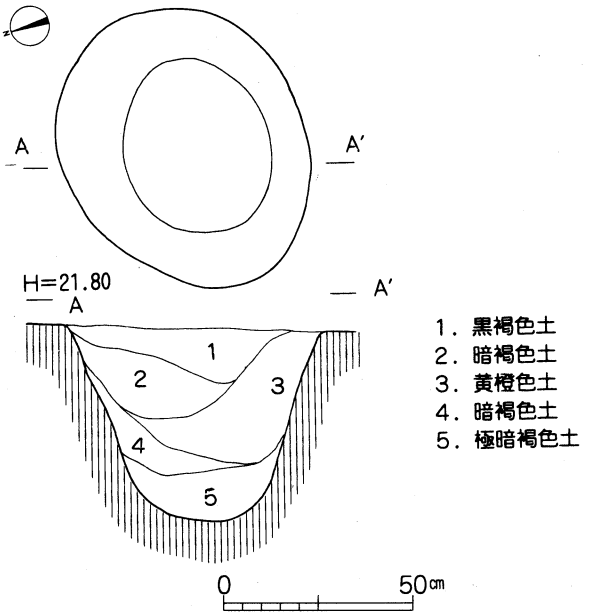


Fig.220　第20号住居跡貯蔵穴

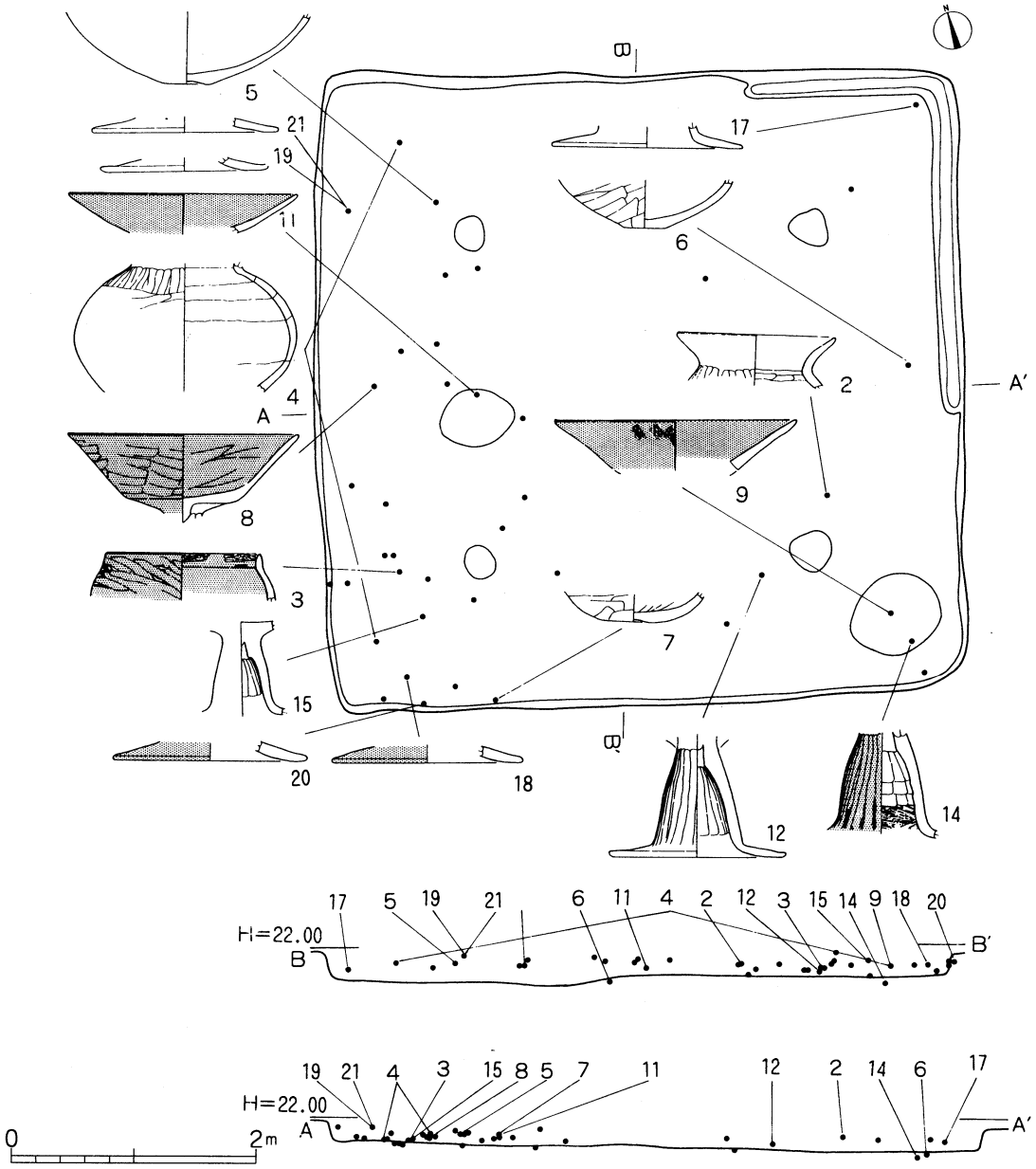


Fig.221　第20号住居跡遺物分布図

（7.5YR3/2）多量のローム粒子を含み、締まりがある。第２層暗褐色土（7.5YR3/3）多量のローム粒子を含む、締まりにやや欠ける。第３層黄橙色土（10YR6/8）ロームブロックを多量に含み、締まりにやや欠ける。第４層暗褐色土（7.5YR3/4）多量のローム粒子を含み、締まりがある。第５層極暗褐色土（7.5YR2/3）少量のローム粒子を含み、締まりがある。

周溝は北壁東寄りから東壁南寄りにかけてのみ、構築されている。幅14～16cm、深さ６cmを測る。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに南側半分は複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は高坏を中心に、住居全体に分布しているが、とくに西側半分に集中している。個体として図示しうる資料は、壺７点、高坏16点である。

遺物　１は壺で、頸部から口縁部にかけて1/4程遺存する。推定口径16.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、「く」の字状に大きく外反する。外面口縁部は横ナデ、頸部は斜めハケメ調

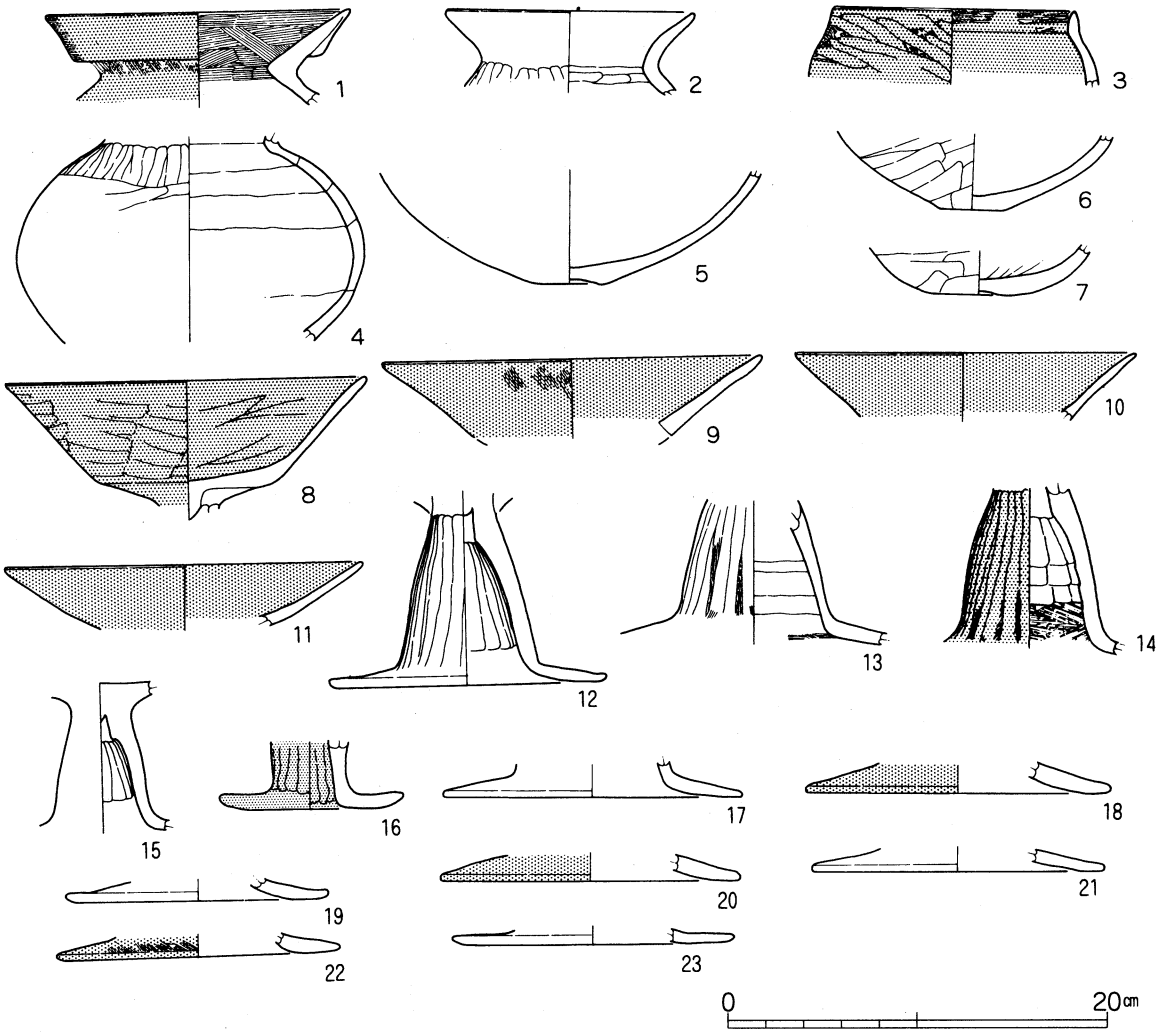


Fig.222　第20号住居跡出土遺物

整を施し、赤彩されている。内面は横位、斜位のハケメ調整が加わる。焼成は良好。２は口縁部から頸部にかけて1/6程遺存。推定口径13.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ、頸部は縦位のケズリが施され、内面口縁部は横ナデ、頸部は横位のナデ整形で仕上げられている。焼成は良好。黒褐色を呈する。３は広口壺。口縁部から肩部にかけて約1/4程を遺存する。推定口径12.6cmを測る。球形の体部から短い口縁部が垂直気味に立ち上がる。外面は斜行のハケメ調整の後、ナデ整形が部分的に施され、内面は口縁部が横ナデ、体部はナデ整形である。全面に赤彩されている。焼成は良好である。４は壺の胴部破片で、1/3程度を遺存する。扁球形の形態をもつもので、最大径18.4cmを測る。外面は縦位もしくは横位のナデ整形。内面もナデが施され、粘土帯の接ぎ目が見える。焼成は良好で、赤褐色を呈する。５～７は底部破片である。５は甕で、底部のみ完存する。底径3.2cmを測る。底部は上げ底気味で、球形に近い胴部をもつ。外面はナデ整形で、全面にスス状の炭化物が付着している。内面もナデ整形。焼成は良好で、黒褐色を呈する。６も甕で、底部のみ完存する。底径3.4cmを測る。底部は平底で、球形の胴部をもつ。外面はナデ整形で、内面もナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。７は甘で、底部のみ完存する。底径3.2cmを測る。底部は上げ底気味で、球形に近い胴部をもつ。外面はナデ整形で、内面もナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。８～23は高坏である。８～11は坏部破片。８は坏部1/2程を遺存する。口径19.0cm、現器高7.4cmを測る。底部と口縁部の境界

に明瞭な稜をもち、口縁部は若干外反気味に外方へ開く。外面背部は横位のナデ整形。内面もナデ整形後、赤彩されている。焼成は良好である。９は口縁部1/4程度を遺存する。推定口径20.0cmを測る。外面はハケメ調整の後、ナデ整形を施し、内面はナデ整形し、全面赤彩される。10は口縁部が1/10以下遺存の小破片。推定口径17.8cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。内外面ともナデ整形後、赤彩される。11は口縁部1/8程度遺存。推定口径19.1cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面もナデ整形後、赤彩される。焼成は良好。12～23は高坏脚部破片である。12は脚部完存である。裾径14.8cm、現器高10.3cmを測る。中膨らみの比較的弱い柱状部に低い裾部が広がる。外面は縦位のナデ整形。内面は横方向のナデで、ナデ痕が残る。焼成は良好。褐色を呈する。13は柱状部と裾部の一部が約1/3程度遺存する。柱状部はやや太めで、中膨らみがあり、裾部は大きく屈曲する。外面は縦位ナデ整形。内面は粘土帯の接ぎ目が４段残る。焼成は良好。にぶい黄橙色を呈する。14も同様、柱状部のみ完存する。柱部はやや太めで、中膨らみを呈する。外面は縦位のナデ、内面はシボリ目が残り、粘土帯の接ぎ目が４段残置する。柱状部下半部に横位のハケメ調整が施されている。外面に赤彩されている。焼成は良好。15は坏部底部と柱状部が完存する。柱状部はやや中膨らみを呈する。外面は縦位のナデ、内面はシボリ目が残り、横位のナデがみられる。焼成は良好で、明褐色を呈する。16は柱状部下半部から裾部にかけて1/4程度遺存する。裾径は9.8cmを測る。裾部は90°に近い角度で屈曲して延びる。外面は縦位のナデ整形後、赤彩される。内面もナデ整形で仕上げている。焼成は良好。17～23は裾部破片。いずれも遺存度が1/4以下の小破片で、大半は1/6程度である。18・20・22は赤彩されている。

第21号住居跡（SI21）（Fig.223～226）

位置　本跡は、調査区南西部にあたり、13-O区の標高21.16m～22.22mに位置し、北東側に第22号住居跡（SI22）が、南西側に第20号住居跡（SI20）が、西側に第18号住居跡（SI18）と第19号住居跡（SI19）が隣接する。

形態　平面形は、隅丸方形を呈する。長軸4.22m、短軸4.20mを測り、長軸方位はN-13°-Eを指し、中形の住居跡である。壁は全体的に低く、東辺、西辺、南辺、北辺とも緩やかに立ち上りる。床面は若干の起伏を呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　４層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層	7.5YR1.7/1	黒色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
２層	7.5YR3/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
３層	7.5YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
４層	7.5YR2/3	極暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴４本が確認された。

Ｐ１～Ｐ４は不規則な配列をもつピット群であるが、Ｐ２とＰ３はそれぞれ北東隅壁際と南西隅壁際と対峙する位置関係をもつ柱穴である。他の２本は支柱穴もしくは入口部構築ピットである可能性が高い。まず柱穴と思われるＰ２とＰ３のうち、まずＰ２は北東隅に位置し、上面は26×28cmの楕円形を呈し、深さは12cm。Ｐ３は南西隅に位置し、上面は34×38cmで、深さ８cmである。Ｐ１は西側で上面は22×22cmの円形で、深さ71cmを測る。Ｐ４は南壁際やや西寄りに位置し、上面が22×24cmの楕円形で深さは６cmを測る。

炉および周溝は確認できなかった。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、住居の北東約半分は粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

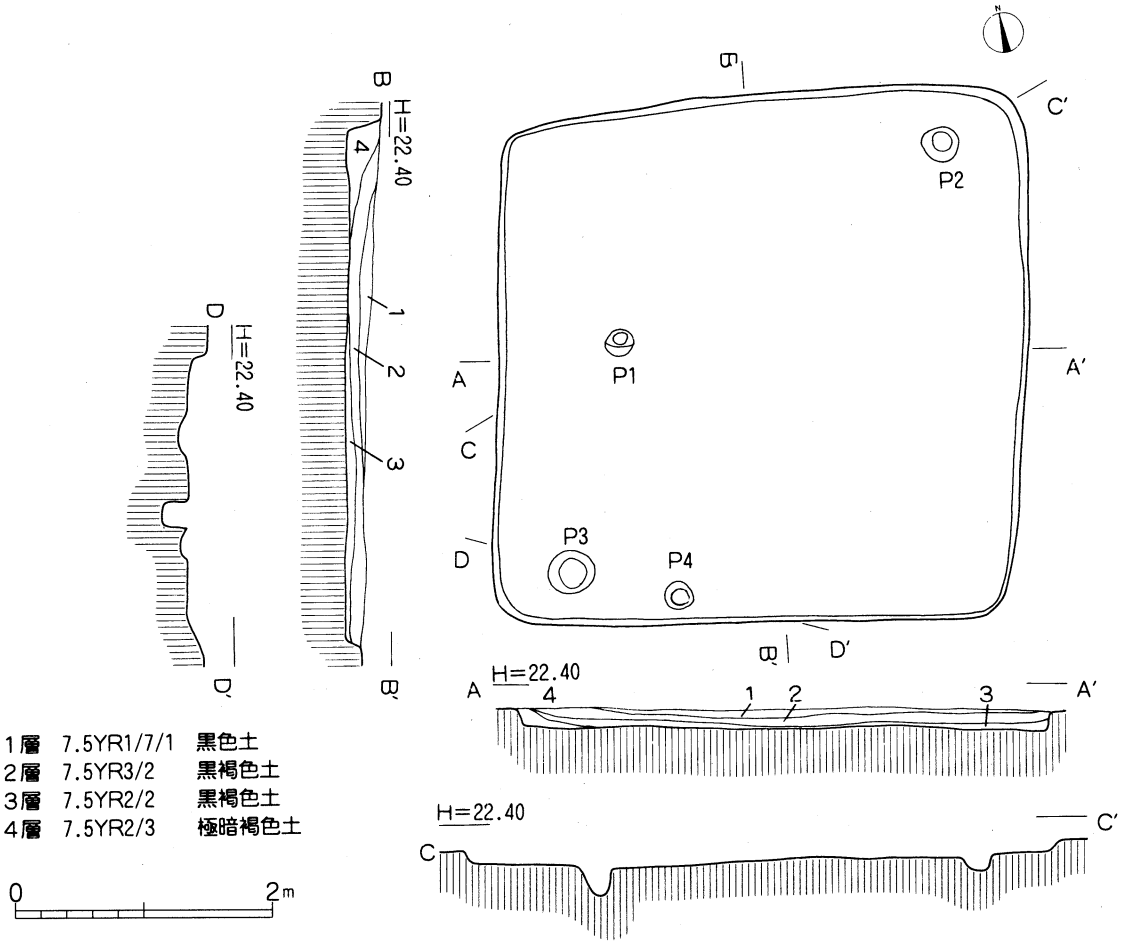


Fig.223　第21号住居跡

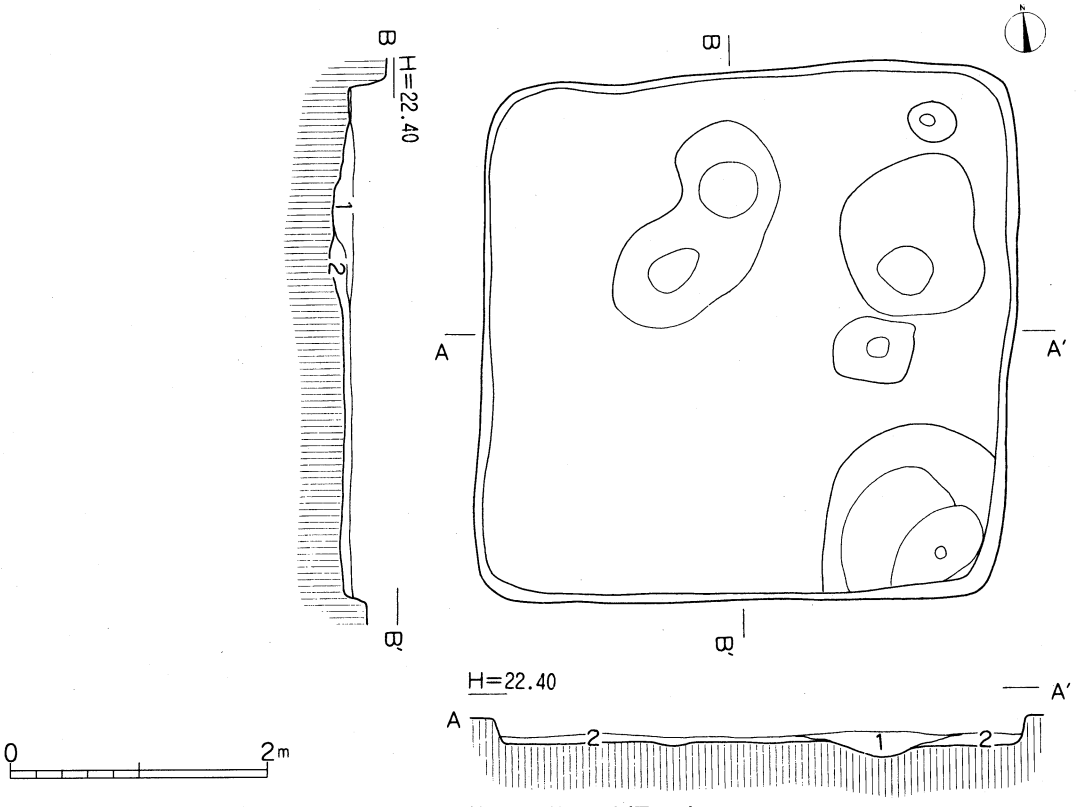


Fig.224　第21号住居跡掘り方

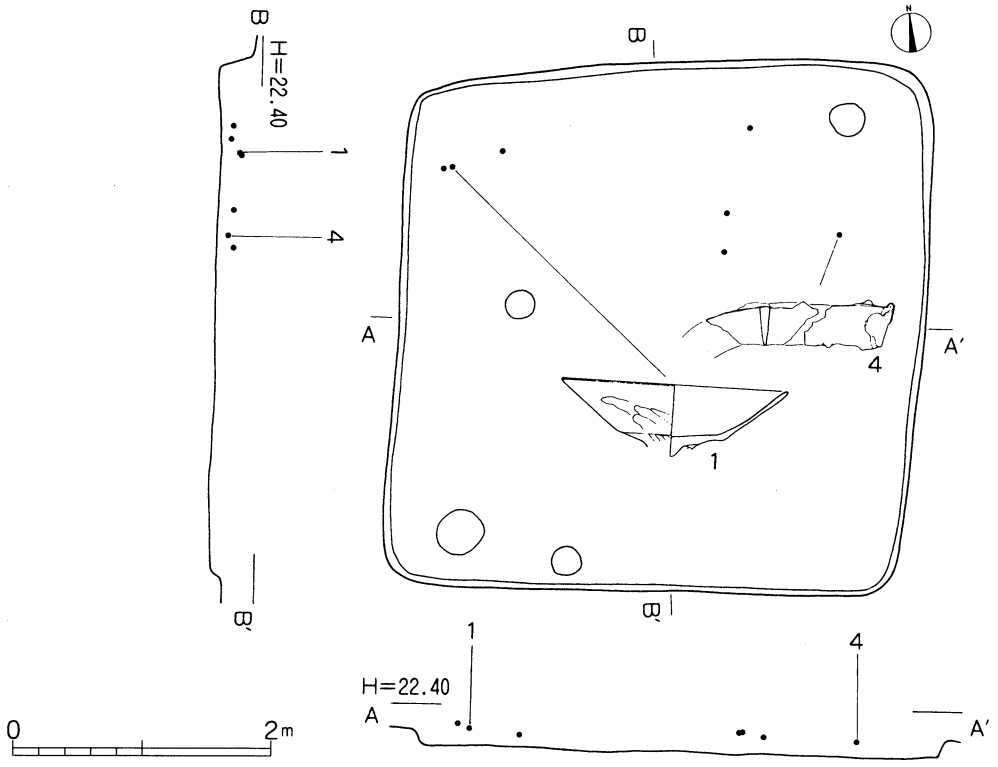


Fig.225　第21号住居跡遺物分布図

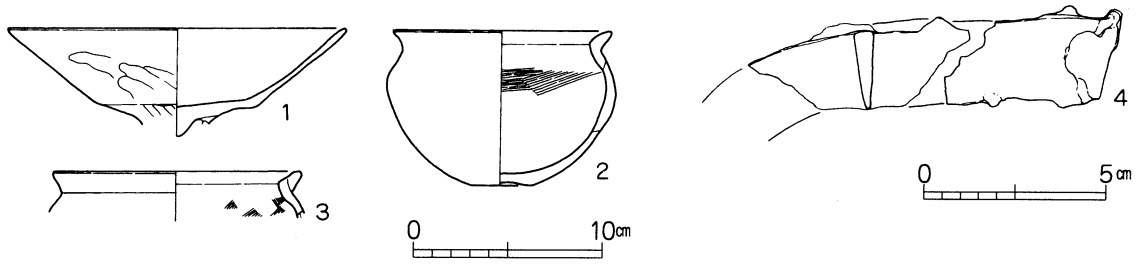


Fig.226　第21号住居跡出土遺物

遺物出土状況　遺物は、住居北側の半分に散在するが、出土数は少ない。

遺物　１は高坏の坏部破片。約1/2程を遺存する。推定口径18.0cm、現器高5.8cmを測る。底部と口縁部との境界に明瞭な稜をもち、口縁部は直線的に外方へ開く。外面口縁部はナデ整形。底部はケズリあとを部分的に残す。内面はナデ整形で仕上げている。焼成は良好。橙色を呈する。２は椀で、口縁部から底部にかけて1/3程を遺存する。器高8.2cm、口径11.6cm、底径3.2cmを測る。最大径は胴部のやや上位に位置し、上げ底の小さい底部から扁球形の胴部をもち、口縁部は短く「く」の字状に外反する。外面はナデ整形。内面は頸部付近に斜めのハケメ調整の後、ナデ整形が施される。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。３は広口壺。口縁部のみ1/8程度の遺存。口縁部は小さく「く」の字状に外反する。外面は口縁部が横ナデ、頸部はナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、体部が斜めのハケメ調整の後、ナデが加わる。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。４は鉄製の鎌破片である。錆が著しく詳細な観察は不可能でであるが、柄部付近を残置している。残存している刃部の幅は最大2.25cm、背の厚さ0.48cm、現存部の長さ9.7cmを測る。床面より若干浮いて出土した。

第24号住居跡（SI24）（Fig. 227～231）

位置　本跡は、調査区東部にあたり、11-P区の標高21.90m～22.32mに位置し、南東側に第23号住居跡（SI23）が、北東側に第27号住居跡（SI27）が、また北側には第25号住居跡（SI25）が隣接する。

形態　本跡は東側約1/2が保存区域にあたるため、調査は西側約半分を実施したのみである。まず平面形は、隅丸方形を呈する。長軸6.70m、調査した現存短軸3.80mを測り、長軸方位はN-11°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は確認された西辺、北辺、南辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏は呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　住居内は4層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層　10YR3/4　暗褐色土　表土層
2層　10YR2/1　黒色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
3層　10YR3/3　暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
4層　10YR4/6　褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
5層　10YR5/6　黄褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴2本と地床炉1基を確認した。

主柱穴は確認できず、わずかに柱穴状のピット2本を検出したのみである。P1とP2とも南西側に位置し、まずP1は上面が18×18cmの円形、深さ14cm。P2は東寄りで上面が18×20cmの楕円形で、深さ17cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに設置され、長径70cm、短径40cm、深さ8cmを測る。断面は起伏をもちやや凸凹している底部で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の北側に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層が赤褐色焼土層で多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、南西壁際でピット状の掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、炉跡を中心にした周辺にまとまって出土している。また滑石製模造品（剣形）が住居中央南側から検出された。その他に図示しうる資料は、壺2点、甕4点、高坏1点である。

遺物　1は壺で、口縁部から胴部中位にかけて約1/2程を遺存する。推定口径14.0cm、現器高18.3cm、胴部最大径23.6cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、胴部は胴長の細身を呈する。外面の口縁部は斜めのナデ、頸部は横位のナデ、胴部は縦位の細かなナデ整形を施す。内面は口縁部の上位は横位のハケメ調整。頸部は横ナデ、肩部はハケメ調整の後、ナデ調整で仕上げる。焼成は良好。赤色を呈する。2は壺で、口縁部から肩部にかけて1/8程を遺存する。推定口径15.5cmを測る。口縁部は粘土帯を貼りあわせた複合口縁で、口縁部は緩く「く」の字状に外反する。外面はミガキの後、赤彩され、内面はナデ整形の後、赤彩される。焼成は良好。3は甕で、口縁部から肩部にかけて完存する。口径23.2cm、現器高6.7cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部はハケメ具による刻みが巡り、口縁部外面から肩部はハケメ調整の後、ナデ整形が加わる。内面はナデ整形が施されている。焼成は良好で、褐色を呈する。4は台付甕の胴部底部と脚部2/3程遺存する。裾径12.6cm、現器高14.3cmを測る。大型の台付甕の部類に入る。脚部はほぼ直線的に開く。外面は縦位方向のハケメ痕がそのまま残る。裾端面のみ横ナデ、内面はナデが施されている。焼成は良好。明赤褐色を呈する。5は甕底部で1/3程を遺存する。推定底径は10.2cmを測る。平底から外方へ体部が開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、暗赤色を呈する。6も甕底部破片で、底部は完存する。底径は8.4cmを測る。平底から体部は外方へ開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、黒褐色を呈する。7は坏口縁部破片で、口縁部は1/6

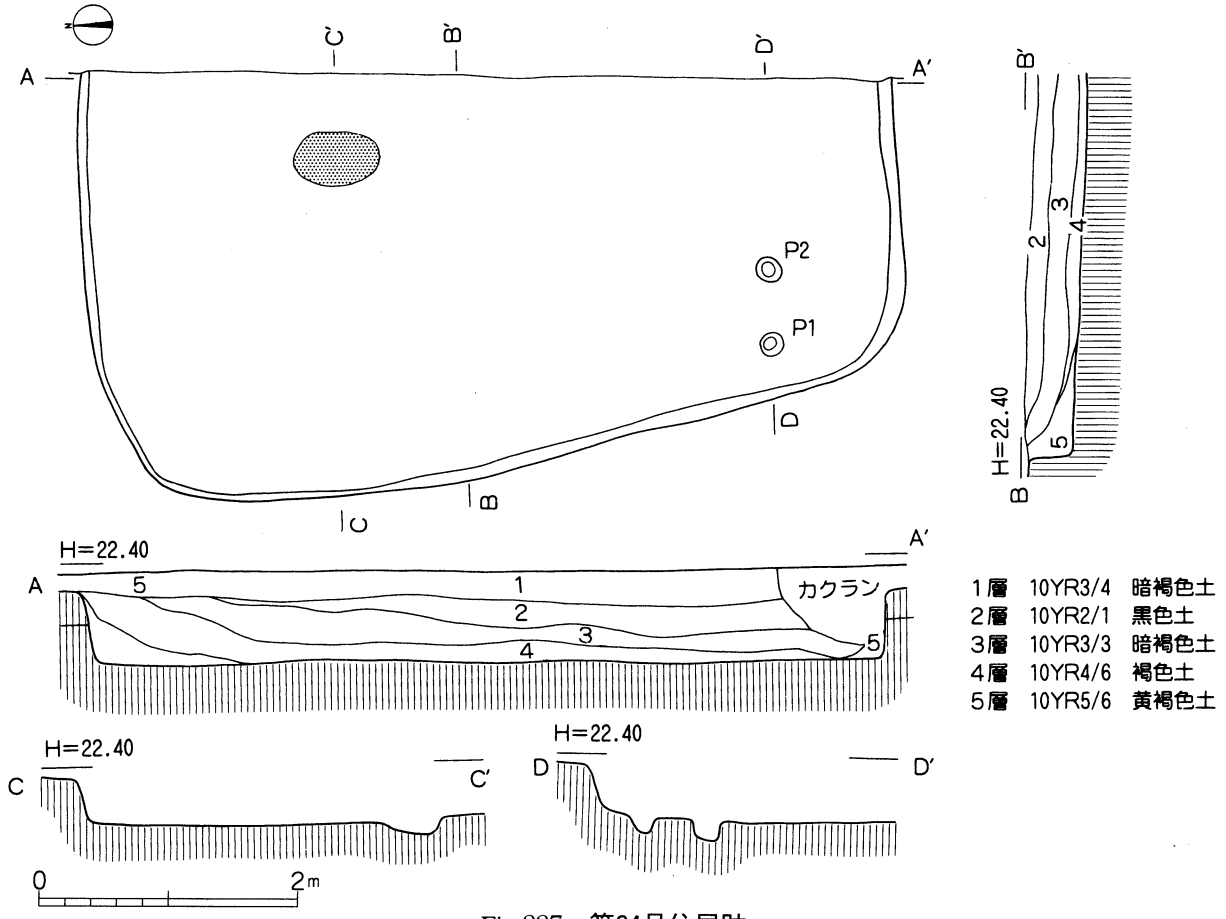


Fig.227　第24号住居跡

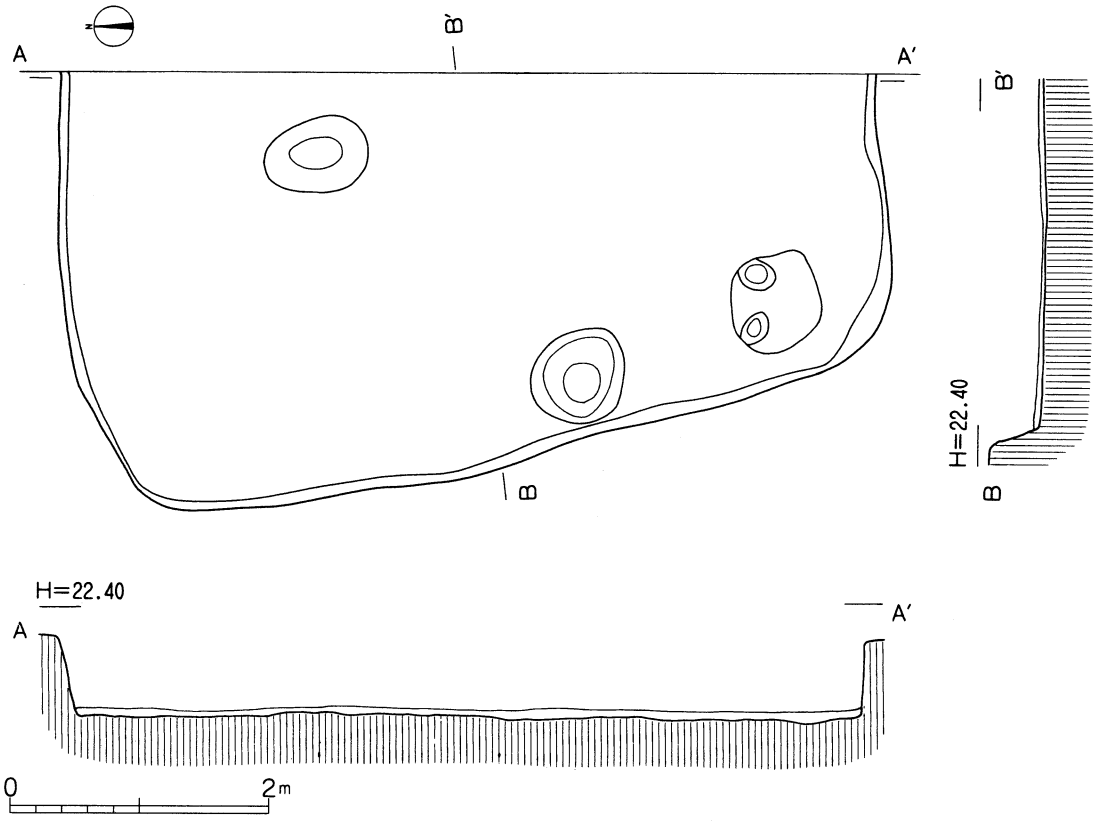


Fig.228　第24号住居跡掘り方

程遺存する。口径は18.0cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。８は剣形模造品である。滑石製で、表裏面および側縁に明瞭な研磨調整痕を残す。また表面の中央に稜をもち、上半部に１孔を穿つ。この穿孔は表面より一方向から施されている。長さ4.36cm、幅1.65cm、厚さ0.41cm、孔径0.32cm、重さ5.10ｇを測る。

第26号住居跡（SI26）（Fig.232～236）

位置　本跡は、調査区東部にあたり、11-O区の標高22.52m～22.66mに位置し、北東側に第27号住居跡（SI27）が、南東側に第23号住居跡（SI23）が隣接する。

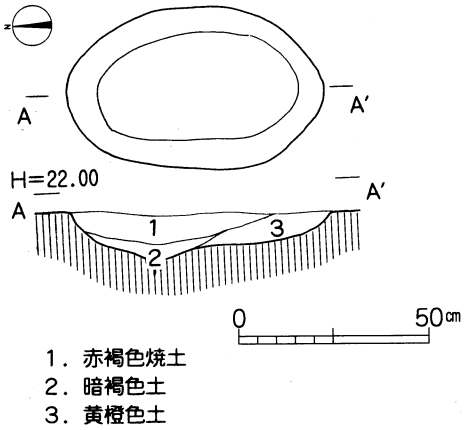


Fig.229　第24号住居跡炉

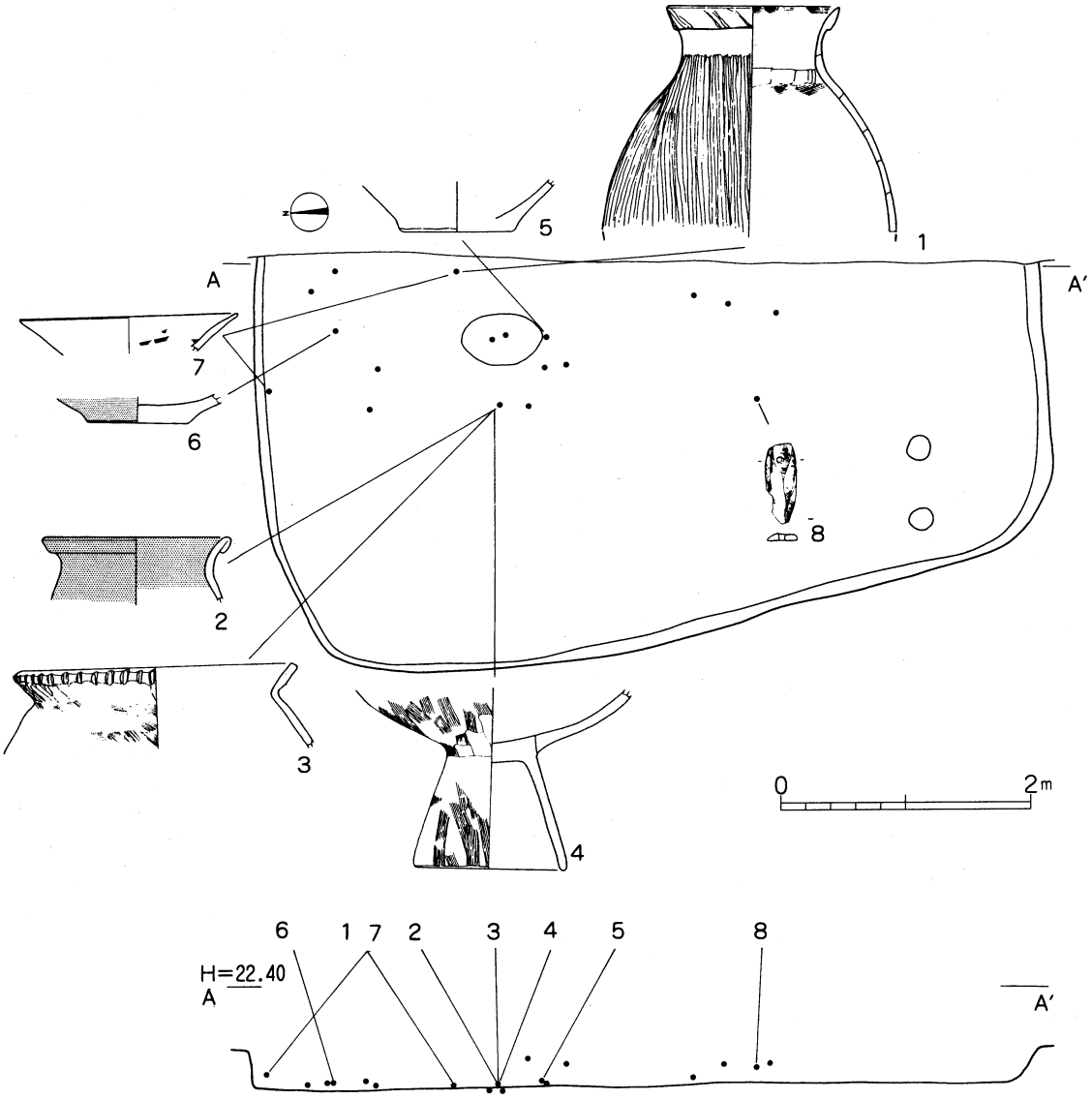


Fig.230　第24号住居跡遺物分布図

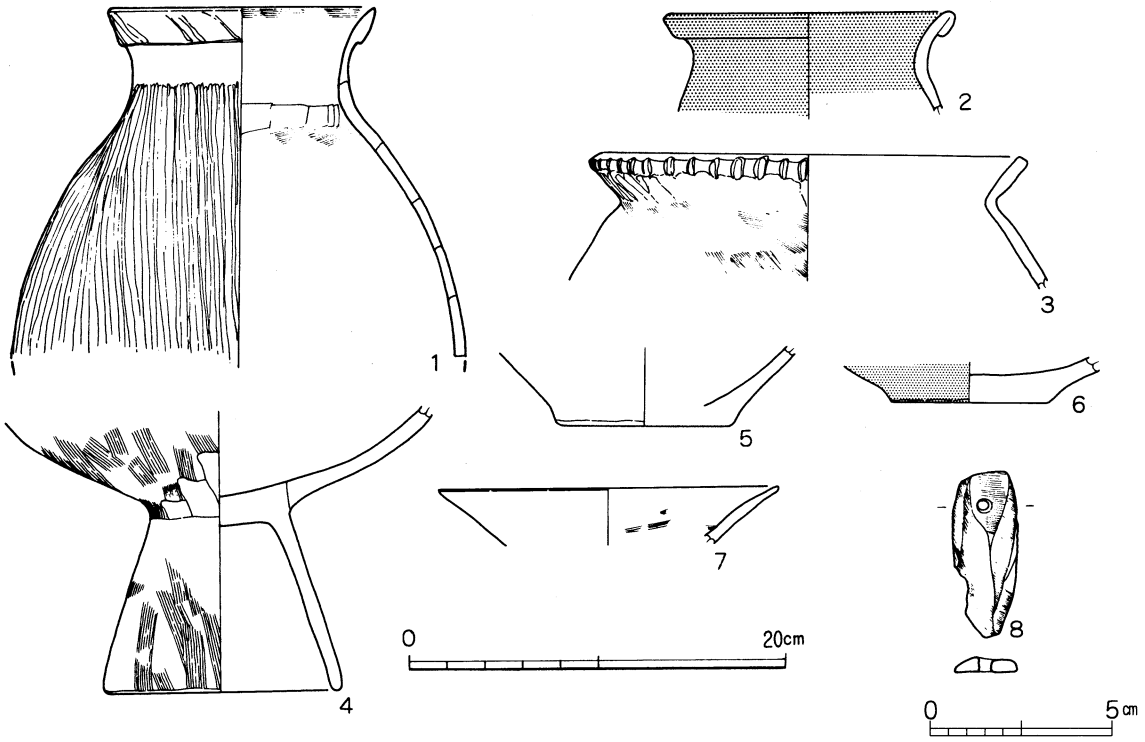


Fig.231　第24号住居跡出土遺物

形態　平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸6.60m、短軸5.30mを測り、長軸方位はN-９°-Eを指し、やや大型の住居跡である。壁は各壁浅いが、東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　２層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR2/2　黒褐色土　少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

２層　7.5YR5/6　明褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴３本と貯蔵穴１基が確認された。

主柱穴はP１～P３に相当するものと考える。まずP１は北西部に位置し、上面が22×24cmの楕円形、深さ38cm。P２は北東部で12×14cmの楕円形で、深さ６cm。P３は南西部に位置し、上面が36×46cmの楕円形で、深さ21cmを測る。

貯蔵穴P４は南東隅壁際に設置されており、円形を呈し、深さは27cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ直線的外方へ開口する。覆土は２層に分層でき、第１層極暗褐色土（7.5YR2/3）多量のローム粒子を含み、締まりがある。第２層黒褐色土（7.5YR3/2）小量のローム粒子を含み、締まりがある。

炉および周溝は確認できなかった。

掘り方　掘り方は、床下全面におよぶが、とくに各壁際に粗雑で複雑なピット状の掘り窪みが認められる。

遺物出土状況　遺物は、住居全体に散在するが、とくに住居西壁際とP４の貯蔵穴周辺に集中する。その内、個体として図示しうる資料は、壺４点、甕１点、高坏５点、坩３点、椀１点である。

遺物　１～４は壺形土器の口縁部破片である。１は口縁部1/4程遺存する。推定口径21.５cmを測る。い

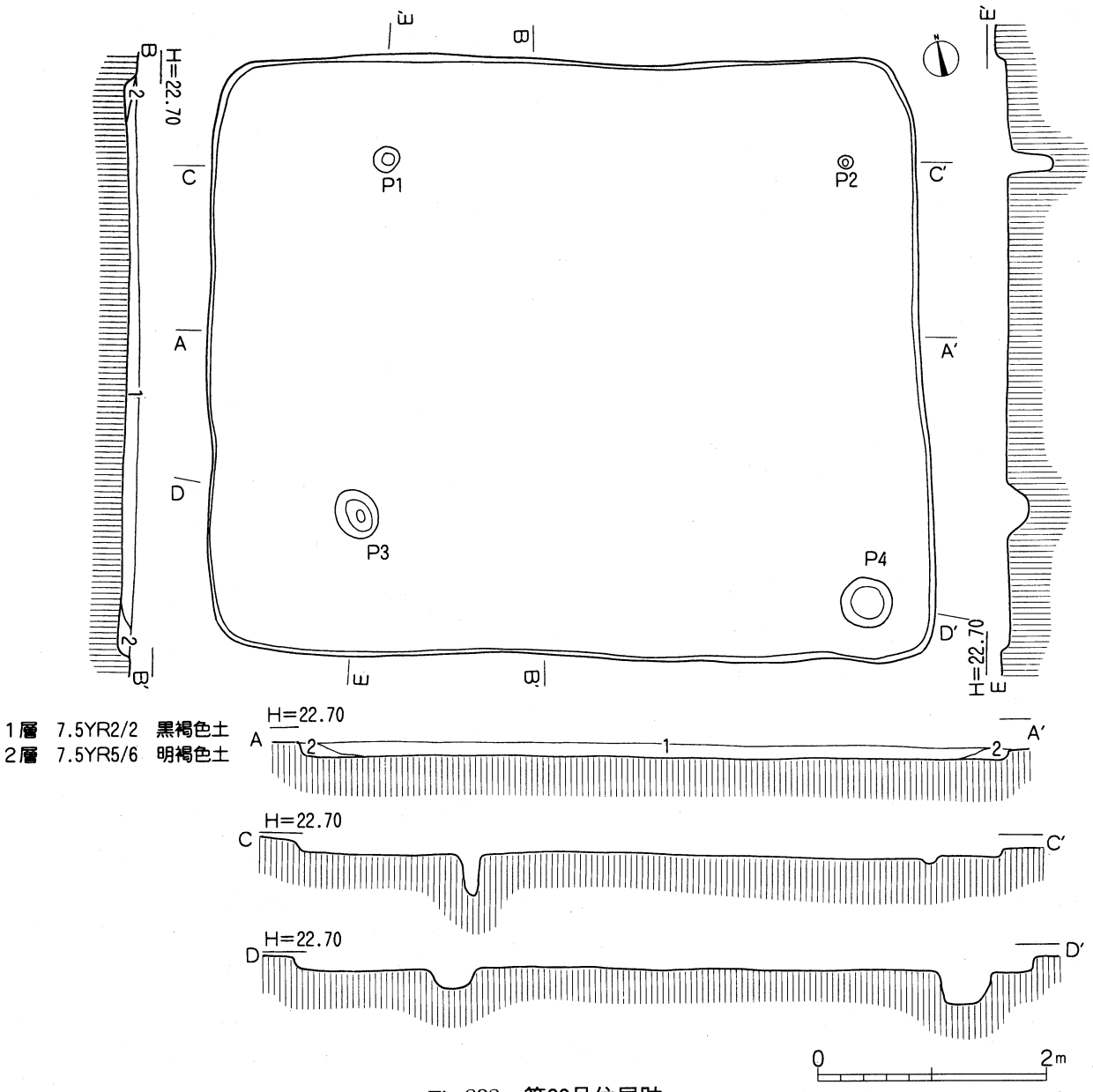


Fig.232　第26号住居跡

わゆる有段（二重）口縁をもつ壺である。内外面とも入念なナデ整形が施されている。焼成は良好で、全面赤彩される。2は口縁部から頸部にかけて1/6程遺存する。推定口径17.8cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、「く」の字状に大きく外反する。外面口縁部は横ナデ、頸部は斜行のハケメ調整を施し、赤彩される。内面は横位、斜位のハケメが顕著である。焼成は良好である。3は口縁部が1/6程度の遺存である。推定口径15.6cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、ほぼ直線的に外方へ開く。外面口縁部は横ナデ。頸部はハケメ調整後、ナデ整形を施す。内面は横位、斜位のハケメ調整を施す。焼成は良好。明赤褐色を呈する。4は口縁部が1/4程度の遺存である。推定口径15.6cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ。頸部はハケメ調整後、ナデ整形を施す。内面は横位、斜位のハケメ調整を施す。焼成は良好。明赤褐色を呈する。5は甕。口縁部から胴部下半部にかけて1/3程度遺存する。口径14.2cm、現器高13.9cm、胴部最大径18.2cmを測る。胴部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部上端

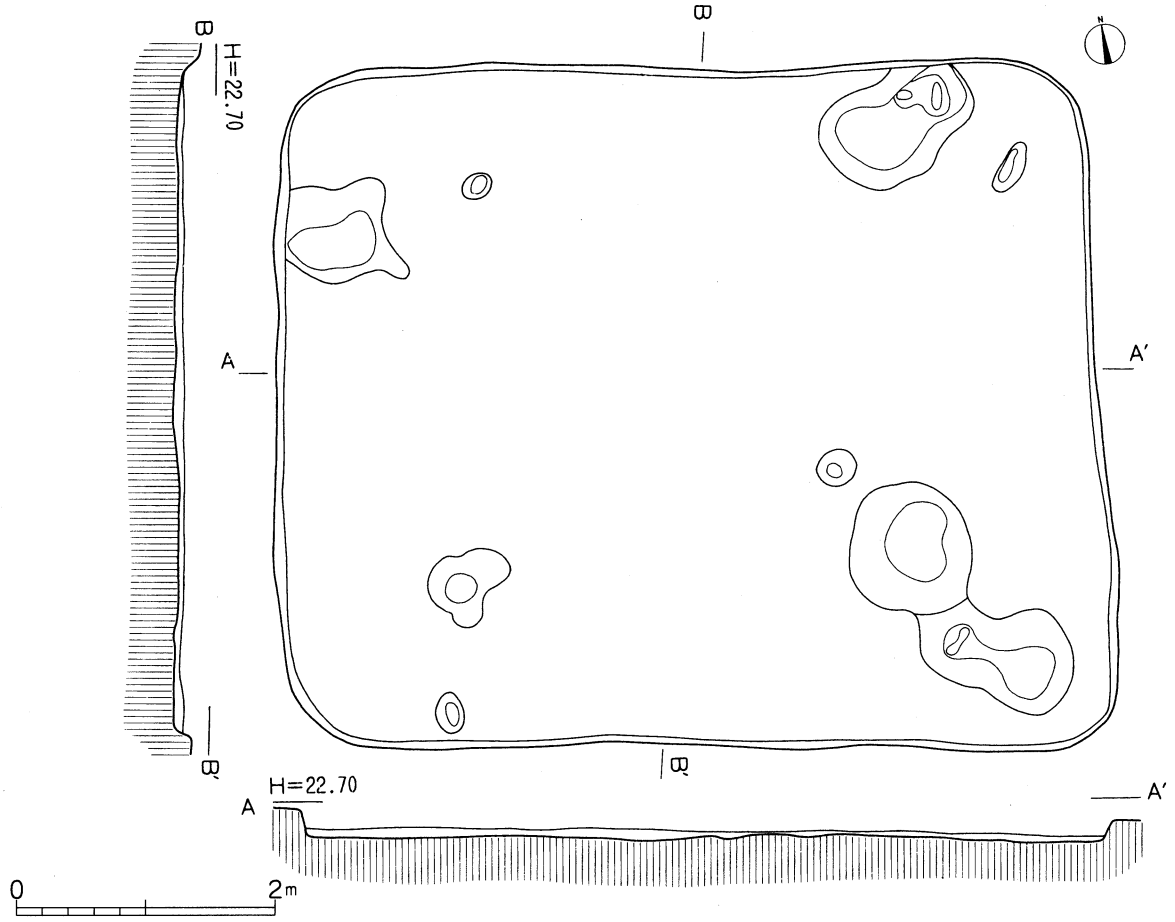


Fig.233　第26号住居跡掘り方

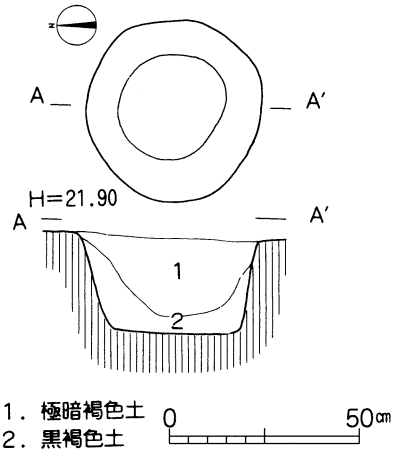


Fig.234　第26号住居跡貯蔵穴

は横ナデ、胴部上半部は縦位のハケメ調整、胴部下半部はナデ整形。内面はナデ整形。焼成は良好。赤褐色を呈する。６～10は高坏である。６は坏部のみ1/4程を欠損する。口径18.0cm、現器高6.6cmを測る。口縁部と底部との境界に張り出しがある。口縁部は緩いカーブを描きながら外反する。外面はナデ、内面はハケメ調整の後、ナデ整形。全面赤彩される。７は脚部破片。脚1/3程欠損する。中膨らみの柱状部から裾部は低く広がる。裾径13.4cm、現器高11.5cmを測る外面は縦位のナデ整形後、赤彩される。内面は上端はシボリ目が残り、下端部はハケメ調整後、ナデ整形を施す。焼成は良好。８は坏部は完存する。口径21.0cmを測る。口縁部と底部との境界に明瞭な稜をもつ。外面はナデ整形後、赤彩される。内面はナデ整形後、赤彩される。焼成は良好である。９は坏部は完存する。口径19.6cmを測る。口縁部と底部との境界に明瞭な稜をもつ。外面はハケメ調整し、ナデ整形後、赤彩される。内面もやはりハケメ調整し、ナデ整形後、赤彩される。焼成は良好である。10は裾部破片で、1/4程度を遺存する、推定裾径13.0cmを測る。外面はハケメ調整。内面は横ナデが施されている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。11は完存する坩形土器である。器高10.4cm、口径9.9cm、底径2.8cmを測る。胴部最大径は中位にあり、若干上げ底気味の底部から球形の胴部へ移行し、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面は丁寧なヘラミガキの後、赤彩され、内面は口縁部はミガキ、

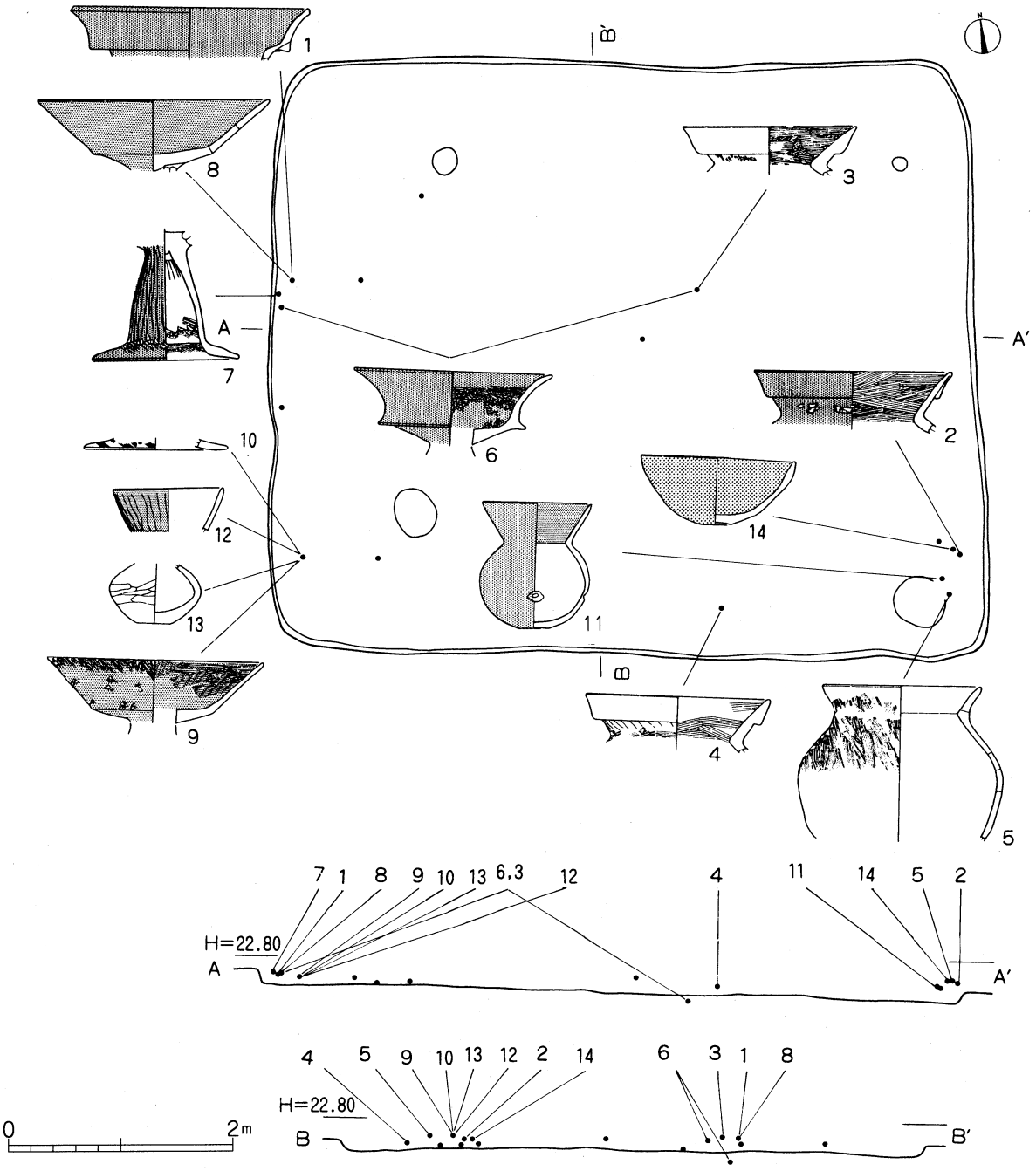


Fig.235　第26号住居跡遺物分布図

体部はナデによって仕上げられている。なお、胴部中位よりやや下方に下斜めより鋭利な器物により刺突孔がみられ(b)、また底部にも外方から同様な工具により穿孔されている(a)。12は口縁部約1/4を遺存する坩。推定口径10.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に外方へ開く。外面は縦位のミガキの後、赤彩される。内面も同様。焼成は良好である。13は坩の胴部破片。約1/2程度を遺存する。平底の底部からやや上下に押しつぶしたような扁球形を呈する。外面は横位のナデ整形。内面はナデによって仕上げている。焼成は良好。14は完存の椀形土器である。器高6.2cm、口径13.8cm、底径2.8cmを測る。上げ底状の底部から球形を呈する体部をもつ。口唇部は鋭い。内外面ともナデ整形。焼成は良好。明褐色を呈する。

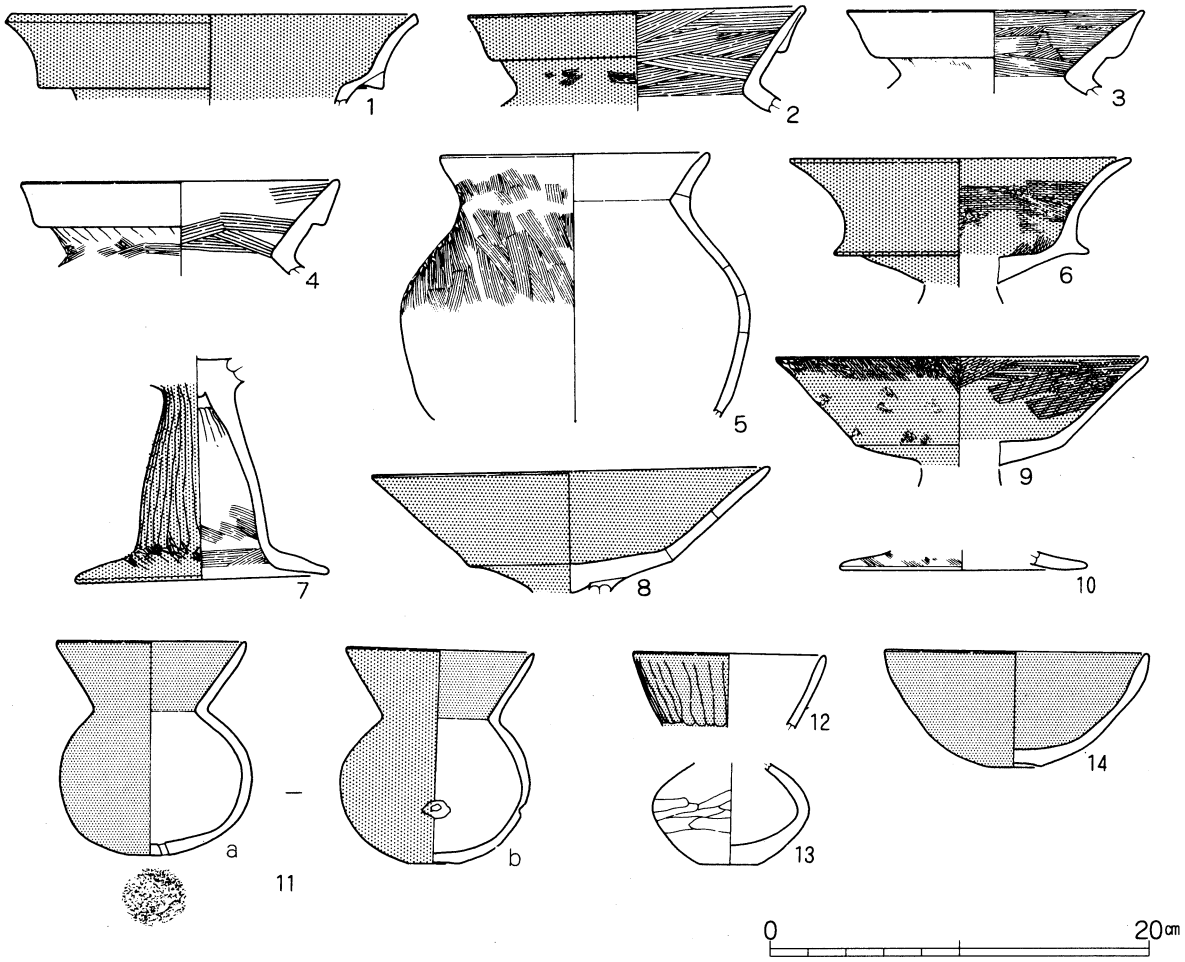


Fig.236　第26号住居跡出土遺物

第28号住居跡（Fig. 237～242）

位置　本跡は、調査区の東部、9-O、9-P、10-O、10-P区の標高22.00m～22.66mに位置する。南側に第27号住居跡（SI27）が、北側に第29号住居跡（SI29）が、北西側に第33号住居跡（SI33）が隣接する。

形態　平面形はほぼ隅丸方形を呈する。長軸5.44m、短軸5.44mを測り、長軸方位はN-62°-Eを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は起伏も認められるが、ほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土　４層に分層可能である。自然埋没土層である。

１層　7.5YR3/1　黒褐色土　　少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
２層　7.5YR3/4　暗褐色土　　少量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
３層　7.5YR2/3　極暗褐色土　多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
４層　7.5YR4/4　褐色土　　多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設　住居内部の施設として、柱穴５本と地床炉１基および貯蔵穴１基が確認された。

Ｐ１～Ｐ４が主柱穴である。Ｐ１は西部に位置し、上面が20×26cmの楕円形、深さ13cm。Ｐ２は北部で上面が20×28cmの楕円形で、深さ14cm。Ｐ３は南部に位置し上面が22×35cmの楕円形で、深さ14cm。Ｐ４は東部で上面が35×40cmの楕円形、深さ14cmを測る。また南東壁やや南寄りに上面が20×24cmの楕円形を呈した深さ９cmの支柱穴もしくは入口部施設の梯子穴を検出している。

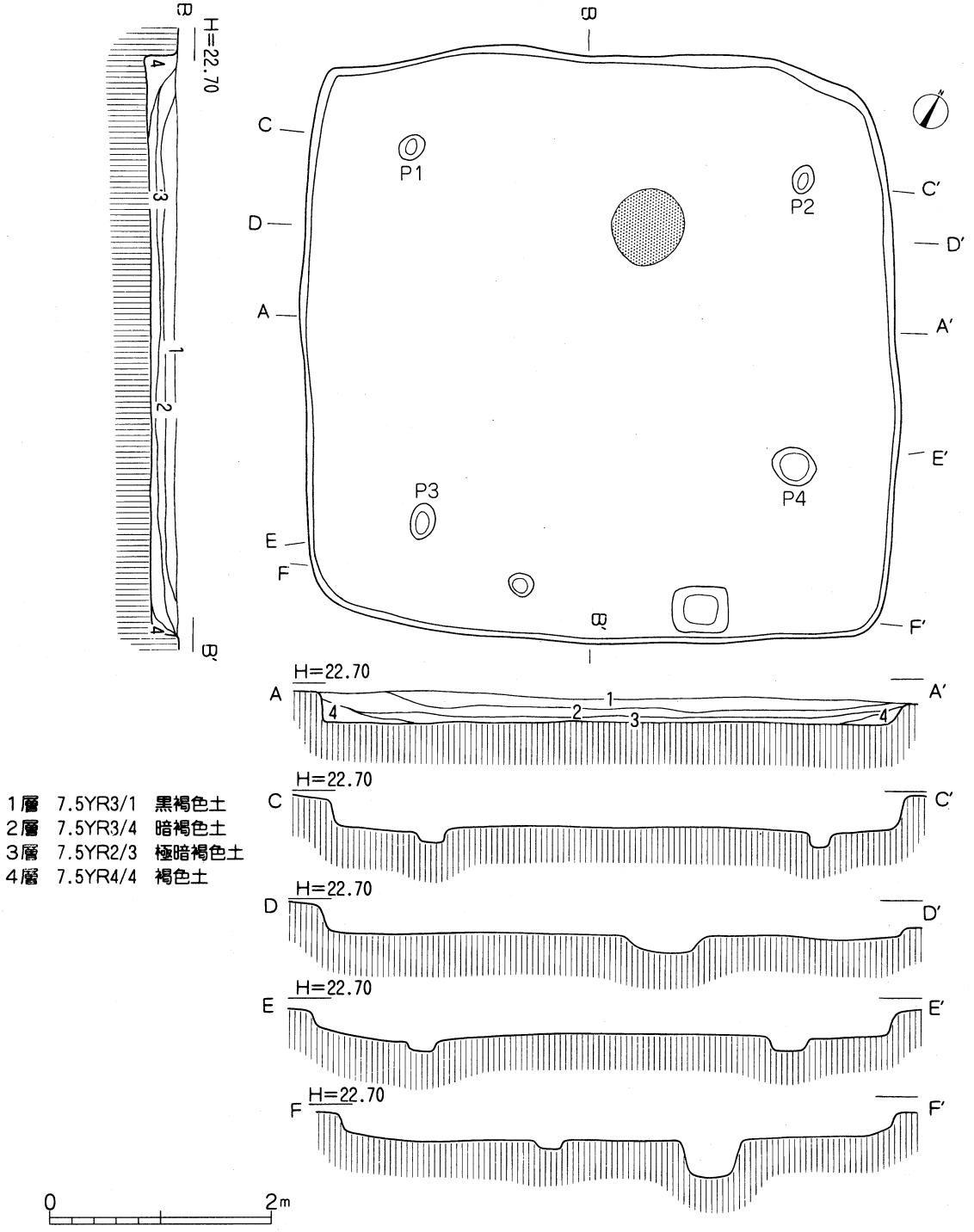


Fig.237　第28号住居跡

炉は地床炉で、住居中央から東寄りに設置され、その平面形は楕円形を呈し、長径74cm、短径64cm、深さ18cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は３層に分層でき、第１層と第２層が焼土層で、とくに第２層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南東壁際中央よりやや北寄りに構築されている。形状は長方形を呈し、規模は長軸52cm、短軸40cmで、深さは35cmを測る。断面は平底で、壁は急傾して外方へ開口する。覆土は２層に分層でき、

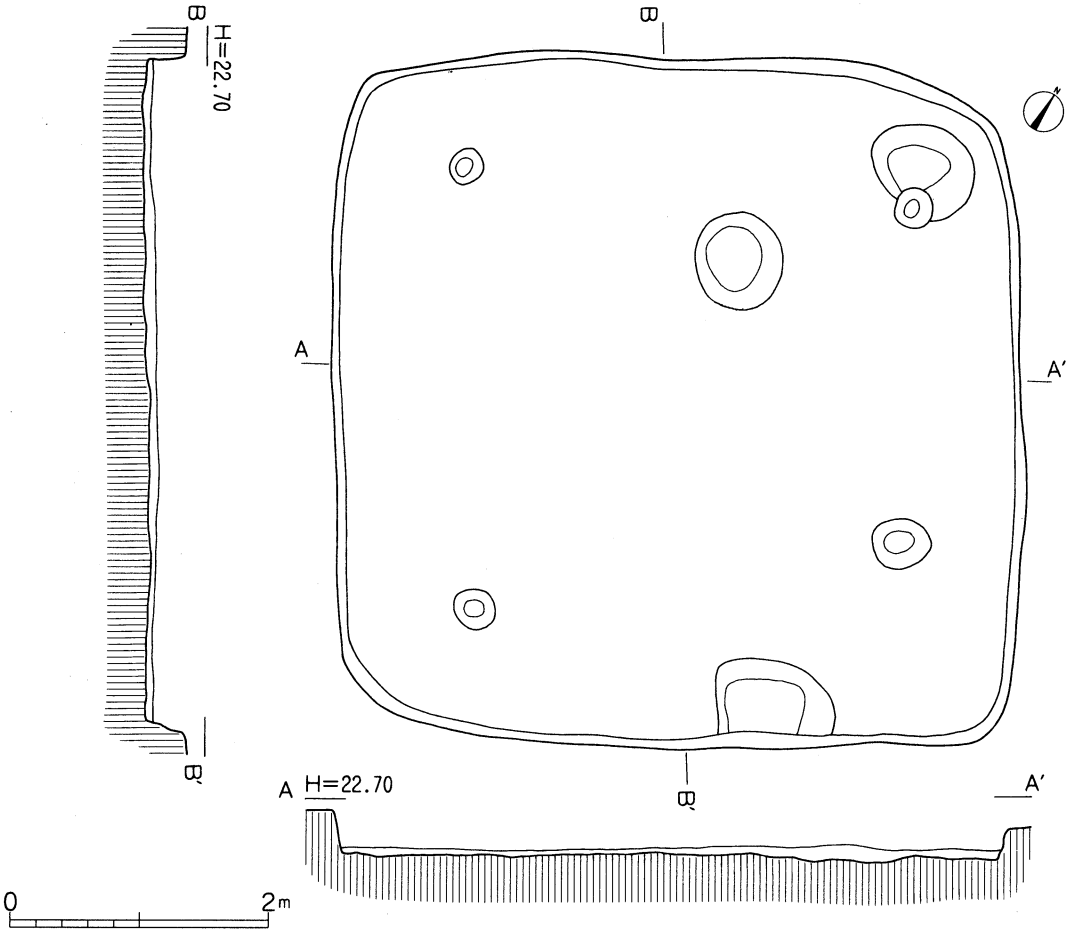
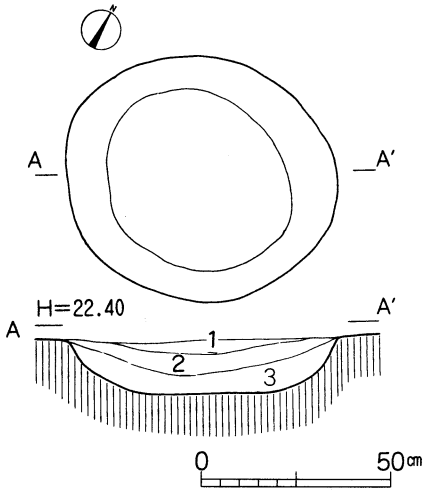
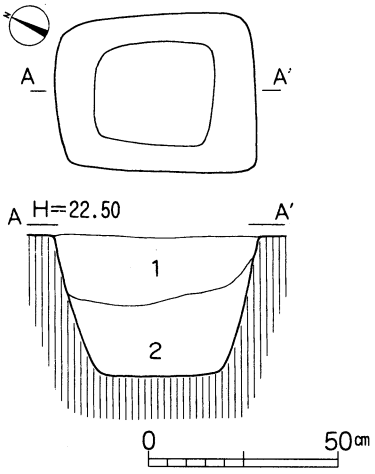


Fig.238　第28号住居跡掘り方



1．暗赤褐色焼土
2．赤褐色焼土
3．黄橙色土

Fig.239　第28号住居跡炉



1．黒褐色土
2．極暗褐色土

Fig.240　第28号住居跡貯蔵穴

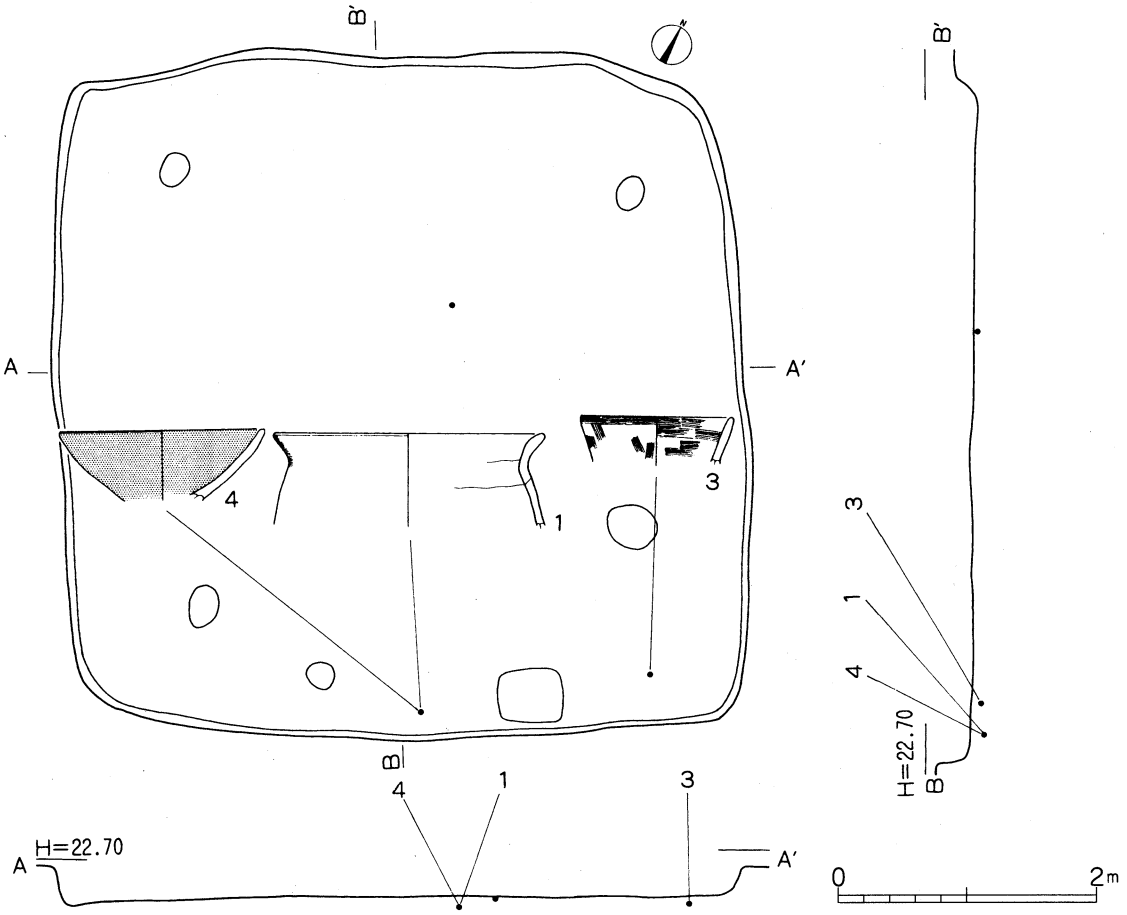


Fig.241　第28号住居跡遺物分布図

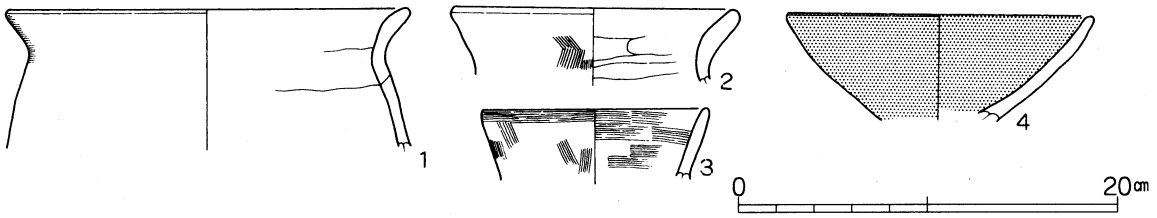


Fig.242　第28号住居跡出土遺物

第１層は黒褐色土（7.5YR3/2）少量のローム粒子を含み、締まりがある。第２層極暗褐色土（7.5YR2/3）少量のローム粒子を含み、締まりがある。

掘り方　掘り方は床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況　遺物は、わずか４点のみで、南壁際で出土している。甕２点、坩２点である。

遺物　１は甕口縁部破片。口縁部1/4程度を遺存する。推定口径21.2cmを測る。胴長の胴部から口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ、胴部は肩部から縦位のヘラケズリを施す。内面では口縁部は横ナデ、体部は横位のナデ整形。焼成は良好。黒褐色を呈する。２も甕の口縁部破片。1/10以下の小破片。推定口径15.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面は口縁部は横ナデ、頸部は縦位のハケメ調整を施す。内面は口縁部上端に横位のハケメ調整後、ナデ整形。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。３は小型壺の口縁部破片。口縁部1/6度遺存する。推定口径12.0cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面は口縁部上端は横位、下位は斜めのハケメ調整後、ナデ整形。内面は横位